

仙台市文化財調査報告書第58集

今泉城跡

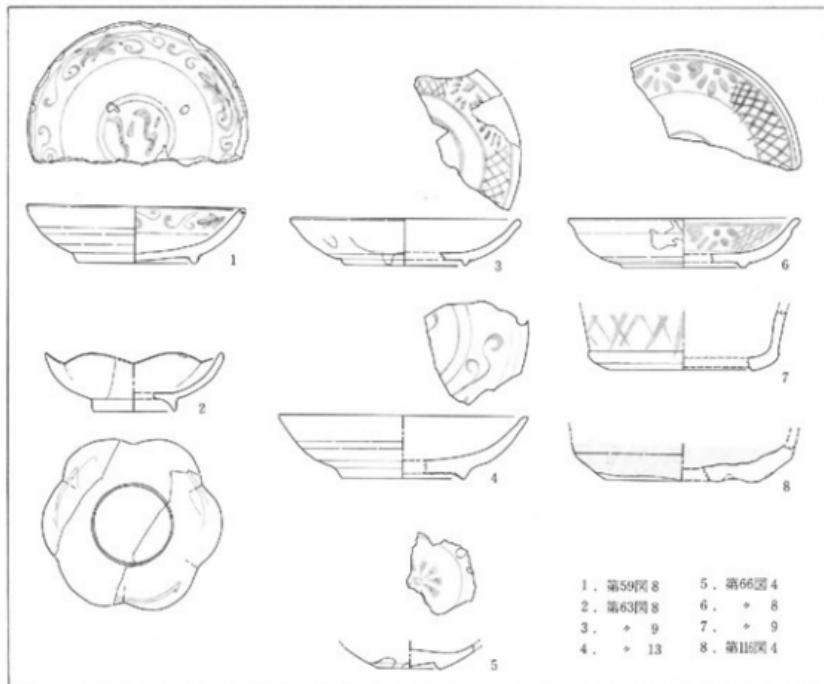
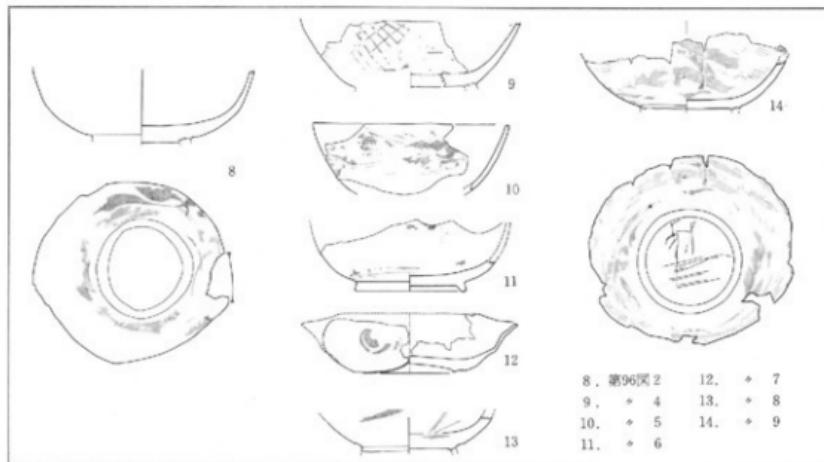
—名取川下流域における中世城館跡の調査—

1983年3月

仙台市教育委員会

今泉城跡正誤表

頁		調査体制 担当職員	調査体制 担当職員
P 23	第3表32の層位	佐藤	佐藤洋
P 79	第62図の表7	II層	2層
P 84	第64図の表3	7の長石軸? を6へ移動	V期?
P 86	第66図の表6	不明	I期
P 114	砥石・礫石器の実測 図表現法	△硬質の石 ○軟質の石	硬質の石△ ○軟質の石
P 199	20行 26行	1900	1982



仙台市文化財調査報告書第58集

今泉城跡

— 名取川下流域における中世城館跡の調査 —

1983年3月

仙台市教育委員会

序 文

本市六郷地区は肥沃な田園村落として、豊かな穀倉地帯の一画をなしてきた所であります。近年、とりわけここ久保田今泉地域は、市街化区域に編入されて以来、宅造計画が進み、いまでは良好な住環境として発展を遂げて來ております。

一方、この地は「須田玄蕃の居城…今泉城」があった所として周知され、開発の歴史が藩制以前に遡ることを古記は伝えております。

今回の発掘調査は、開発事業の計画に伴い、文化財保護について度重なる協議の結果、事前の記録保存の策として実施したものであります。この度の調査からは、中世～近世初頭にわたる貴重な考古資料が数多く発見され、仙台の中世史を解明する上で、大きな成果を得ることができました。

本書は、その調査の成果をあますところなく一般に公開するものであります。

仙台市には、こうした文化財、とくに埋蔵文化財の埋蔵地は約400ヶ所以上にわたっておりますが、これを愛護し、保存・継承していくことは、われわれに課せられた責務と考えます。したがって、本書が多くの方々に積極的に活用され、文化財全般にわたる保護・啓発に資することを切に希望してやみません。

最後に、発掘調査や本報告書の刊行にあたり多大の御指導・御協力をいただきました多くの方々に対し、心から感謝を申し上げます。

昭和58年3月

仙台市教育委員会

教育長 藤井 禱

例　　言

1. 本書は宅地造成に先立って行なった今泉城跡の発掘調査の報告書である。すでに公表された現地説明会等に優先するものである。
2. 今泉城跡は、1979年度調査において、弥生時代から江戸時代の複合遺跡であることが判明し、本来ならば今泉遺跡とすべきであるが、従来どおり「今泉城跡」を使用した。
3. 報告書作成のため、整理・編集は佐藤洋が担当した。
4. 本文の執筆は佐藤洋が、石製品・石器は東北大学院生山田しょうが行なった。また、平川南氏、木村中外氏、内藤俊彦氏、高橋理氏、庄子貞雄氏・山田一郎氏から玉稿を賜わった。
5. 作図・写真撮影等については、下記のとおり分担した。

造構トレース：大場拓俊、古川陸子、大友桂子、小島真弓、松岡敦子

造構写真：佐藤洋、齋野裕彦

遺物分類・集計：工藤久美子、吉田康子、渡辺修子

遺物実測・トレース

〈土器・土製品〉宍戸美智子、吉田康子、菅原恵美子、平照子、阿部多津子、白井美津子、金沢君代、小島真弓、佐藤洋

〈陶磁器〉大場拓俊、吉田康子、鈴木昇、阿部多津子、山田しょう、大友桂子、佐藤洋

〈木製品〉松岡敦子、佐藤幸子、山田しょう

〈石製品〉山田しょう、宍戸美智子、白井美津子、金沢君代、平照子

〈金属製品〉平照子、金沢君代、菅原恵美子、山田しょう、宍戸美智子、白井美津子

〈骨角器〉金沢君代

遺物拓影：阿部多津子、吉田康子

遺物写真：小島真弓

版組：佐藤幸子、松岡敦子、山田しょう、大場拓俊、平照子、熊谷信一

6. 発掘調査及び遺物整理において、下記の方々に助言・協力を賜わった。

伊東信雄（東北学院大学教授）、植崎彰一（名古屋大学教授）、芹沢長介（東北大学教授）、倉田芳郎（駒沢大学教授）、井上喜久男（愛知県陶磁資料館）、藤沼邦彦（東北歴史資料館）、平川南（国立歴史民俗博物館）、光谷拓実（国立奈良文化財研究所）、沢口滋（漆芸家）、佐藤則之・千葉孝弥（多賀城跡調査研究所）、三辻利一（奈良教育大学）、吉岡一雄（宮城県立図書館）、内藤俊彦（東北大学植物園）、木村中外（尙絅女学院短期大学教授）、星川清親（東北大学教授）、庄司駒男（東北大学文部技官）、林信太郎（東北大学理学部院生）、中川商（宮城県刀剣登録審査員）、高橋理・阿部朝衛（東北大学文学部院生）以上敬称略

特に、陶磁器類の鑑定は檜崎彰一氏・井上喜久男氏・藤沼邦彦氏、植物遺存体の同定は星川清親氏・庄司駒男氏、樹種の同定は木村中外氏・内藤俊彦氏・光谷拓実氏、木簡・物忌み札の判読は平川南氏・佐藤則之氏、石質鑑定は林信太郎氏、砥石・金属製品の鑑定は中川高氏、土器・陶器の胎土分析は三辻利一氏、火山灰の分析は庄子貞雄・山田一郎氏、漆器は沢口滋氏、文献関係は吉岡一男氏に御教示をお願いした。なお、胎土分析の結果は第52集南小泉遺跡第2次調査報告書に提載してある。

凡　　例

- 本書中の土色については、「新版標準土色帳」(小山・竹原:1973)を使用した。
- 本書に使用した地形図は、国土地理院発行の2万5千分の1「仙台東南部」である。また城館位置を示した地形図は2千5百分の1の仙台市都市計画図(昭和46年、55年を編集)である。
- 基本層位はローマ数字で示した。
- 図版中の水系レベルは海拔高を示す。
- I・II区のグリッドラインは、約N-6°20' - Eである。
- 本製品や金属製品等のうち、直接年代のわからないものは、遺構の年代や埋土の堆積年代を使用している。今後さらに検討が必要と考える。
- 土器や陶磁器類等で中心線が1点鎖線のものは図上復元実測図である。
- 陶磁器類の破片実測図は、石器実測図と同様の図示方法に統一した。すなわち、断面を境に左側は内面、右側は外面を示している。
- [] は実測図中、火山灰層を示す。
- [] は実測図中、ワラ灰層を示す。
- [] は実測図中、鉄軸を示す。
- 実測図中、炭化物・漆は黒塗りした。その区別は図版を参照されたい。
- 遺物の法量は極力、文中には記載していない。図・表を参照されたい。
- 出土遺物は、仙台市教育委員会が一括保管している。

本文目次

序 文
例 言
凡 例
目 次

第Ⅰ章 はじめに

1. 調査に至る経過.....(1)
2. 位置と環境.....(1)
3. 歴史的環境.....(3)

第Ⅱ章 基本層序

1. I・II区の層序.....(5)
2. III区の層序.....(8)

第Ⅲ章 I・II区検出した遺構と遺物

1. 繩文時代.....(11)
2. 弥生時代.....(13)
3. 古墳時代.....(17)
4. 平安時代の遺構と遺物
 - (1) 住居.....(26)
 - (2) 積穴遺構.....(32)
 - (3) 溝.....(34)
 - (4) 土壙.....(38)
5. 中・近世の検出遺構.....(48)
6. 中・近世の出土遺物
 - (1) 日本製陶磁器.....(66)
 - (2) 中国製陶磁器.....(87)
 - (3) 土師質土器.....(90)
 - (4) 瓦質土器.....(93)
 - (5) 瓦.....(93)
 - (6) 土製品.....(96)
 - (7) 石製品.....(99)
- (8) 木製品.....(123)
- (9) 金属製品(148)
- (10) 骨角製品(162)
- (11) 植物遺存体(164)
(樹種同定結果について)
- (12) 動物遺存体(165)

第Ⅳ章 III区の調査

1. はじめに(166)

2. 各トレンチの状況	(166)
3. Eトレンチの検出遺構	(166)
4. 遺物	(173)
5. まとめ	(179)

第V章 考 察

1. 平安時代の出土遺物について	(182)
2. 陶磁器について	(188)
3. 県内産無釉陶器について	(190)
4. 今泉城をめぐって	(192)
5. 遺構の変遷	(200)
6. まとめ	(204)

第IV章 付 編

1. 今泉城跡の木簡について	平川南	(204)
2. 今泉城跡から出土した木製品の素材	木村中外・内藤俊彦	(206)
3. 今泉城跡出土の動物遺存体	高橋理	(208)
4. 今泉城跡の灰白色火山灰	庄子貞雄・山田一郎	(211)

図 版 目 次

第1図 今泉城跡と周辺の道路	2	第16図 古墳時代以前の石器(1)	24
第2図 名取川下流域の地形分類図	3	第17図 古墳時代以前の石器(2)	25
第3図 今泉城跡周辺の地形図	4	第18図 平安時代土師器頻度分布図	26
第4図 基本層序模式図	6	第19図 1号住居跡実測図、出土遺物(1)	27
第5図 I・II区西壁実測図	7	第20図 1号住居跡出土遺物(2)	28
第6図 I・II区遺構配置図	9・10	第21図 2号住居跡実測図、出土遺物	30
第7図 繩文時代土器頻度分布図	11	第22図 3号住居跡実測図	31
第8図 I・II区出土繩文土器	12	第23図 3号住居跡出土遺物	32
第9図 弥生時代土器頻度分布図	14	第24図 2号豎穴遺構尖削図、出土遺物、32号 溝跡実測図	33
第10図 I・II区出土弥生土器(1)	15	第25図 8号溝跡出土遺物	35
第11図 I・II区出土弥生土器(2)	16	第26図 24号、33号溝跡出土遺物	35
第12図 古墳時代土器頻度分布図	18	第27図 30号溝跡出土遺物	36
第13図 I・II区出土古墳時代の土師器(1)	20	第28図 32号溝跡出土遺物	37
第14図 I・II区出土古墳時代の土師器(2)	21	第29図 平安時代の上塙	38
第15図 I・II区出土古墳時代の土師器(3)	22		

第30図	16号上塙、25号、28号井戸跡出土遺物	39	第58図	21号溝跡出土遺物(2)	75
第31図	18号土壙出土遺物	40	第59図	中・近世溝跡(12、16、9、29、25、 26号)、1号竪穴道構出土遺物	76
第32図	21号七塙出土遺物	41	第60図	15号溝跡出土遺物	77
第33図	49号土壙出土遺物	42	第61図	10号井戸跡出土遺物	78
第34図	平安時代の井戸跡	42	第62図	I・II区土壙、ピット出土遺物	79
第35図	Ⅲ層、Ⅳ層、出土遺物、表探遺物	44	第63図	1号溝跡出土遺物(1)	83
第36図	中世以後の造構出土土器	45	第64図	1号溝跡出土遺物(2)	84
第37図	平安時代の陶器	46	第65図	1号溝跡出土遺物(3)	85
第38図	時期不明のピット出土遺物	47	第66図	I・II区井戸跡出土遺物	86
第39図	基本層位、造構出土須恵器(1)	49	第67図	中国製陶磁器(1)	88
第40図	造構出土須恵器(2)	50	第68図	中国製陶磁器(2)	89
第41図	中・近世の溝跡(12、13、14、18、19号)、 1号竪穴道構実測図	51	第69図	11号、28号溝跡出土遺物	90
第42図	中・近世の溝跡(11、16、21、26、29、 31号)実測図	53・54	第70図	1号溝跡出土遺物	91
第43図	中・近世の溝跡(1、2、9、11、15、 16号)実測図	55・56	第71図	表探、基本層位出土遺物	92
第44図	1号、2号橋跡	57	第72図	I・II区出土瓦(1)	94
第45図	11号、21号、29号溝跡(内堀) 遺物出土分布図	58	第73図	I・II区出土瓦(2)	95
第46図	掘立柱建物跡模式図	59	第74図	I・II区出土土製品	98
第47図	I・II区掘立柱建物跡配図	60	第75図	砾石器(1)	101
第48図	I・II区井戸跡実測図(1)	62	第76図	砾石器(2)	102
第49図	I・II区井戸跡実測図(2)	63	第77図	砾石器(3)	103
第50図	I・II区土壙(1)	64	第78図	11号溝跡出土硬統計グラフ	104
第51図	I・II区土壙(2)	65	第79図	砾石I類	107
第52図	3号、14号溝跡出土遺物	67	第80図	砾石I類～III類	108
第53図	11号、27号、28号溝跡出土遺物(1)	68	第81図	砾石IV類	109
第54図	11号、28号溝跡出土遺物(2)	69	第82図	砾石V類	110
第55図	12号井戸跡出土遺物	71	第83図	砾石VI類～VII類	111
第56図	表探、基本層位出土遺物	72	第84図	砾石VII類	112
第57図	21号溝跡出土遺物(1)	74	第85図	粉挽き臼	115
			第86図	粉挽き臼(10)、茶臼	116
			第87図	大形礫石器I類、II類	120
			第88図	大形礫石器II類、IV類、V類	121

第 89 図 大形礫石器皿類、珪化木、 スレート片、碗	122	第108図 I・II区掘立柱建物跡、井戸跡 出土金属製品	158
第 90 図 木製品(1)	125	第109図 21号溝、I・II区基本層位出土、表採金 屬製品	159
第 91 図 木製品(2)	128	第110図 I・II区出土古銭	160
第 92 図 木製品(3)	130	第111図 21号溝跡、14号井戸跡出土骨角器	162
第 93 図 木製品(4)	131	第112図 A、B、C、Dトレンチ実測図	167・168
第 94 図 木製品(5)	132	第113図 Eトレンチ遺構配置図、Eトレンチ	
第 95 図 木製品(6)	134	東壁、北壁、サブトレンチ実測図	169・170
第 96 図 木製品(7)	136	第114図 Eトレンチ井戸跡・ピット実測図	172
第 97 図 木製品(8)	139	第115図 Eトレンチ出土陶器、金属製品	174
第 98 図 木製品(9)	142	第116図 Eトレンチ出土陶磁器	175
第 99 図 木製品(10)	143	第117図 Eトレンチ出土木製品	176
第100図 木製品(11)	144	第118図 Eトレンチ出土木製品	117
第101図 木製品(12)	146	第119図 時期別遺構配置図	178
第102図 1号、2号溝跡出土金属製品	152	第120図 陶磁器類產地別組成	189
第103図 11号溝跡出土金属製品(1)	153	第121図 陶磁器変遷図	189
第104図 11号溝跡出土金属製品・土製品(2)	154	第122図 中・近世遺跡分布	195
第105図 12号、14号、15号、16号溝跡出土 金属製品	155	第123図 各期の遺構変遷(I・II区)	201
第106図 21号、26号、31号溝跡出土金属製品	156	第124図 各期の遺構変遷(I・II区)	203
第107図 I・II区土壤出土金属製品	157	第125図 ヒノキの自然分布	207

図 表 目 次

第 1 表 I・II区出土绳文土器観察表	13	第 9 表 大形礫石器観察表	123
第 2 表 I・II区出土弥生土器観察表	17	第10表 木製品(1)観察表	126
第 3 表 I・II区出土古墳時代の土師器観察表	23	第11表 木製品(2)観察表	129
第 4 表 中世以後の遺構出土土器観察表	46	第12表 木製品(3~5)観察表	133
第 5 表 瓦観察表	96	第13表 木製品(7)観察表	137
第 6 表 砥石観察表(Ⅰ類~Ⅵ類)	113	第14表 木製品(8)観察表	140
第 7 表 砥石観察表、(形態不明)砥石、 礫石器の実測表現法	114	第15表 木製品(9)観察表	147
第 8 表 粉挽き臼、茎臼観察表	117	第16表 木製品(10、11)観察表	147
		第17表 木製品(12)観察表	147

第18表 古鉄観察表	161	第24表 I・II区土壤一覧表	180・181
第19表 植物遺存体同定結果一覧表(1)	163	第25表 III区遺構一覧表	181
第20表 植物遺存体同定結果一覧表(2)	164	第26表 主要遺構出土土器共伴関係	187
第21表 I・II区溝一覧表	179	第27表 木製品の素材名	206
第22表 I・II区掘立柱建物跡一覧表	179	第28表 動物遺存体出土表	209・210
第23表 I・II区井戸跡一覧表	180	第29表 重金物組成	211
		第30表 軽金物組成	211

調査体制

遺跡名称	今泉城跡(C-507)	
所在地	仙台市今泉字久保田1-91外	
調査主体	仙台市教育委員会	
調査担当	仙台市教育委員会社会教育課文化財調査係	
担当職員	I・II区 佐藤・斎野裕彦 III区 斎野裕彦・加藤正範・金森安孝	
調査期間	I・II区 昭和56年4月7日～8月31日 III区 昭和56年5月6日～6月11日	
調査対象面積	I・II区 1,375m ²	III区 123m ²
調査面積	718m ²	123m ²
調査参加者	大場拓俊、佐々田弥生、長谷川徹(現苫小牧市埋蔵文化財センター)、松本仁、大友透、五十嵐康洋、小野正泰、八島浩一郎、高橋建一、阿部潜、内藤隆史、千葉きよ子、遠藤みさ子、遠藤たつ子、吉田清子、吉田徳子、木村一子、細谷アキノ、平山みや子、平山新太、山田かつ子、佐藤光子、赤井沢さだ子、谷津妙子、小島美和子、佐藤奈美江、今野富美子、佐藤良子、金今恵子、佐藤清人、佐藤新吾、石川勝利	
調査協力	㈱今武工務店・サカエ興業	

第一章 はじめに

1. 調査に至る経過

近年の仙台市及び周辺部の宅地開発は急激に増加しており、宮城野平野東部から海岸部にもしだいに拡大されつつある。

今泉城跡にも宅地開発の波がおしよせ、近年まで遺跡の中心部は畑地として残されていたが、現在ではほとんど宅地となってしまった。すでに、昭和54年度に宅地造成の事前調査として、900m²の調査を行ない、確実に城館の存在が明らかになっている。今回の調査の対象となった地区は、前回の調査地区の東側に隣接する畑地であったため、開発者と協議し、その結果、事前の調査が必要であると判断した。

調査は、対象面積1,375m²のうち、直接開発に関わる部分約700m²を、昭和56年4月4日より実施した。

2. 位置と環境

今泉城跡は仙台市今泉字久保田に所在する。仙台駅の南東約6.5km。名取川と広瀬川の合流地点より東へ約1.5kmの地点にある。

奥羽山系の一部である面白山地に源を発する名取川及び、その支流である広瀬川は、面白山地から東へ速なる七北田丘陵・青葉山丘陵・高館丘陵を開析しながら東流し、中流域を中心に数多くの段丘を形成させている。一方、先の丘陵部から東側には、仙台平野の一部である宮城野平野（仙台周辺）が開けており、名取川と広瀬川はこの平野部で合流している。

名取川は、河川の下流によって、中流域では峡谷部を形成し、谷口から急に平野部を開けている。この谷口から河川の堆積作用によって、扇状地性の沖積面が形成され、また、下流域では、平野部における自然堤防、後背地、旧河道などの典型的な微地形をみることができる。

仙台市内の平野部における遺跡の大半は、名取川・広瀬川に沿った自然堤防上に立地していると言えよう。

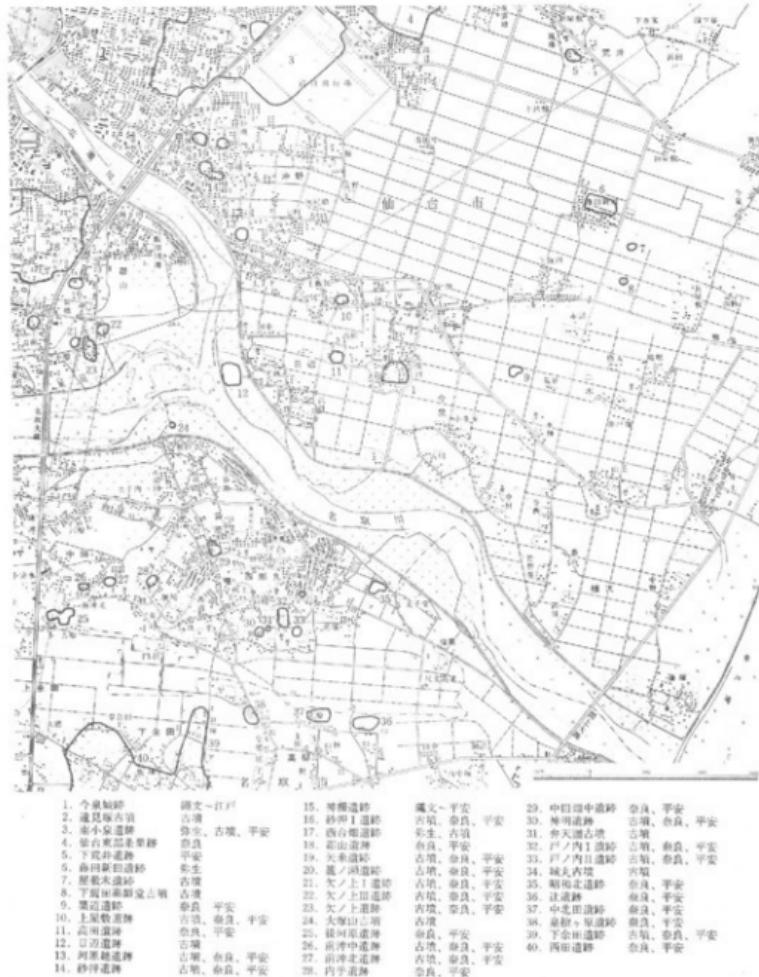
宮城野平野の東部には、後背湿地が広がり、霞ノ目低地（能登・中村）と呼ばれている。また、現在の海岸線に沿うように、いくつかの浜堤列が形成されている。

今泉城跡は、名取川左岸の後背湿地（霞ノ目低地）の中に取り残されたように存在する、自然堤防上に立地している（第2図）。

平野部の地質は、名取川・広瀬川の運搬・堆積作用によって未固結の砂・砾・粘土等の沖積層からなっている。さらに、その下位の基盤は、第三紀層で構成され（地図研1977）、名取川付近では最深部（埋積谷）が-60mに達する。これらの沖積層は、深部から岩切層（10~30m）、福田町層（約10m）、霞ノ目層（3~7m）、深沼層（約5m）などにより構成されている。この

うち、霞ノ目層中より弥生時代の竪穴住居跡が検出されているという（能登・中村1967）。

本遺跡では、1979年の調査で、第III層（今回の第4層）上面より、弥生時代の土壙が検出されていることから、今回の第4層以下の層は、ほぼ古ノ目層あるいは、この層の一部に対応するものであろう。



第1図 今泉城跡と周辺の遺跡（中・近世は第122図を参照）

3. 歴史的環境

仙台市内では、地下鉄関連の発掘など、名取川・広瀬川下流域の遺跡実体が、かなり明確にされつつある。特に、これらの河川に沿った宮城野平野西側では、発掘調査が増え、原始、古代の遺跡の内容が判明してきている。しかし、同平野中央から海岸部にかけては、調査例は極めて少ない。これは、市街化区域の線引に起因している。ところが、最近では市街化区域あるいは、市街化調整区域がだいに東側に拡大される傾向があり、本遺跡の調査もそうした傾向の1つと言えよう。

さて、平野部東側に存在する遺跡は、その内容を十分に把握できるものは少ない。また、近年まで、河川の氾濫等による冠水が頻繁であったためか、遺跡そのものの数も西側に比べて少ない。継続的に営まれた遺跡は少ないので、この今泉城跡の調査でみると、平安時代前半以降のことではないかと考えられる。平安時代以前は、断続的に遺跡が自然堤防や浜堤上に点在している。

今泉城跡周辺の遺跡（第1図）をみると、縄文時代の遺跡はほとんどなく、現在確認できるのは、後～晩期の土器片が出土した本遺跡だけである。最近、名取川と広瀬川の合流地点より西側では、六反田遺跡、山口遺跡など縄文時代の遺跡が発見されている。

弥生時代になると遺跡数も増え、南小泉遺跡（第1図3）、西台細遺跡（第1図17）、藤田新田遺跡（第1図6）等があり、自然堤防上に立置するものが多い。ただ藤田新田遺跡は、最も奥に位置する浜堤上に立地している。



第2図 名取川下流域の地形分類図（清水遺跡より転載）



第3図 今泉城跡周辺の地形図 スクリーンマークは外堀柵位某 () は推定位置

古墳時代には、南小泉遺跡（第1図3）、下飯田薬師堂古墳（第1図8）、遠見塚古墳（第1図2）等があり、また、古墳時代終末から奈良時代の初めにかけて存在した郡山遺跡（第1図18）がある。

奈良から平安時代にかけて、遺跡数は飛躍的に増加し、その大部分は自然堤防上に立地する。しかし、宮城野平野東部では調査例が少なく、必ずしも明確ではない。特に、平安時代後半の様相は不明らかな点が多い。わずかに、最近、仙台市安久東遺跡や名取市清水遺跡などで、11世紀代の集落が知られるようになった。こうした点では、本遺跡の平安時代後半から末にかけての住居跡等は、のちの中世の城館の成立や立置を考える点でも意義のある発見であろう。

中世の遺跡は、仙台市においては館跡等がある。しかし、一般的な集落は調査例がなく、個々の遺跡の調査に付随して、溝や井戸等が調査されたにすぎない。

さて、館跡は、仙台市内においては平野部に多く立地するという特徴がある。市内26ヶ所のうち、13ヶ所で5割を占める。これらの館跡の大部分は、国分氏領に属している。館跡の調査は、県内においてしだいに増加しつつあるが、その全様を知るものはない。仙台市内では、古く1935年に、伊東信雄氏によって、中世留守氏の居城であった岩切城跡の調査が行われている（伊東：1935）。中世の遺跡の調査としては、全国的にみても古い調査の1つと言えよう。しかし、調査では、掘立柱建物跡に伴う柱穴群が発見されたにすぎず、遺跡の内容は明らかではない。また、仙台市安久東遺跡（仙台市教委：1976）では、調査の結果から、これらの遺跡の南に位置する前田館との関連が指摘され、前田屋敷に比定されている。

近世の遺跡は、かつて、仙台市街地が城下町であった關係上、個々の遺跡としてとらえることが困難である。そうした中で、伊達藩初代政宗、そして二代・三代の忠宗・時宗の墓の調査は、全国的にみても画期的な調査となった。

いずれにしても、中世・近世の遺跡は、大部分現在の市街地と重複することや丘陵上にあることから、必ずしもその実体が明らかではない。

第II章 基 本 層 序

I. I・II区

ここでは主として、I区のB-2区西壁深掘地区を基本とした（第4図）。

I層 褐色シルト（10YR5/4）、数年前まで畑地として利用されていた耕作土である。層厚は平均24cmである。II区では平均9cmで薄くなる。最近、宅地開発に伴ってこの上に盛土がなされるようになった。B-5区からB-8区にかけては、さらに細分される。

II_a層 暗褐色シルト (7.5Y R 3%) 層厚は平均10cmである。

II_a層 暗褐色シルト (7.5Y R 4%) 層厚は平均16cmである。

これらの層は細分できないグリットもあり、特にI区の北西部やII区で顕著である。B-7区ではII層がさらに細分できるが極端的である。これらの層は出土遺物等から、後述するIV期～V期に形成された層と考えられる。11号溝（堀）を境として、I・II区とも北側が厚く、南側が薄い傾向がある。

III_a層 暗褐色シルト (7.5Y R 4%) 層厚は平均約20cmである。平安時代や後述するII・III期の遺構はこの層の上面より掘り込まれている。

III_b層 褐色シルト (7.5Y R 4%) 層厚は平均9cmである。

これらの層は11号溝（堀）の南側では、I・II区ともほとんど細分できない所が多く、存在しない場所もある。F-2区ではIII_a層に対応する層が1号住居跡を覆うが、この層中より常滑の破片が出土する。また、III_b層のうち、E-8区では弥生時代の土器や石包丁が、B-3区では弥生時代の壺が出土している。B-6・7区では塩釜式などの土師器が出土する。したがって、場所によって形成年代が異なっているようである。本来はさらに細分されるのかもしれない。大局的には、III_a層はその上面が平安時代からIII期までの生活面であり、本層は平安時代あるいはそれ以前の包含層と理解される。また、III_b層はおよそ弥生時代から古墳時代の包含層と考えられる。

IV_a層 にぶい褐色シルト (7.5Y R 3%) 層厚は平均27cmである。繩文土器は本層上面において確認される。本層以下は、現在無遺物層と考えられる。

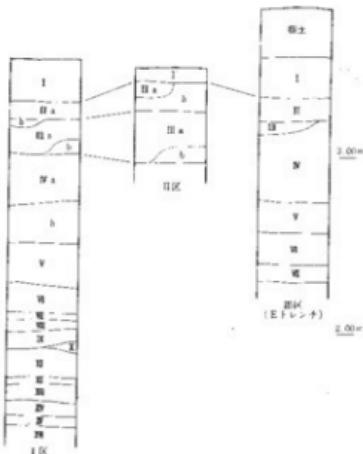
IV_b層 にぶい黄褐色砂質シルト (10Y R 3%) 層厚は約22cmである。下部には、鉄分やマンガンを多く含む。

V 層 にぶい黄褐色砂質シルト (10Y R 3%) 層厚は約24cmである。マンガンを含む。

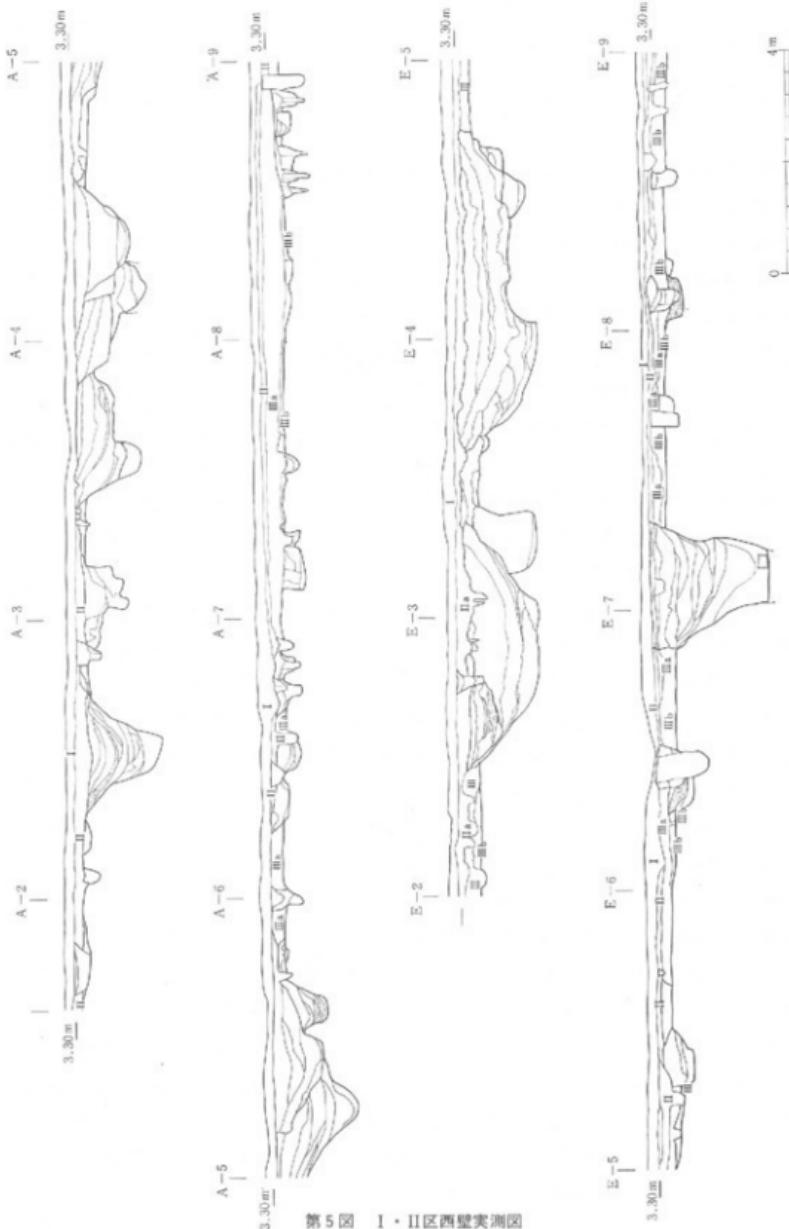
VI 層 灰黄褐色砂 (10Y R 3%) 層厚は約15cmである。

VII 層 にぶい黄褐色砂質シルト (10Y R 3%) 層厚は約4cmである。

VIII 層 にぶい黄褐色細砂 (10Y R 3%) 層厚は4～8cmである。



第4図 基本層序模式図



第5図 I・II区西壁実測図

IX層 にふい黄褐色細砂 (10Y R 5%) 層厚は約 9 cmである。VII層より青くグライ化している。

マンガンをわずかに含む。

X層 褐色砂 (10Y R 5%) 層厚は約 5 cmであり、極部的である。

XI層 にふい黄褐色砂質シルト (10Y R 5%) 層厚は約 14 cmである。マンガンを微量に含む。

XII層 にふい黄褐色砂質シルト (10Y R 5%) 層厚は約 5 cmである。

XIII層 黄褐色細砂 (2.5Y R 5%) 層厚は約 8 cmである。

XIV層 黄褐色砂質シルト (10Y R 5%) 層厚は約 8 cmである。

XV層 にふい黄褐色細砂 (10Y R 5%) 層厚は約 6 cmである。

XVI層 にふい黄褐色砂質シルト (10Y R 5%)

このうちXVI層以下の各層は湧水があり、本遺跡の井戸跡等に供給していたものと考えられる。

昭和54年度調査との対比は極めて困難である。前回の調査ではII層としたものがさらに3層に細分され、これらはいずれも、黒褐色～黒色のシルトである。今回の調査では確認できない。また、前回の調査のIII層（地山）は今回のIV層である。

2. III 区

III区はEトレレンチセクションを使用した。III区は前述のI・II区と異なり、内堀と外堀のはば中間に位置する。III区では、宅地造成に先立って盛土（約30cm）がなされている。

I層 灰黄褐色シルト (10Y R 5%) 層厚は約23cmである。炭化物を含む。

II層 にふい黄褐色シルト (10Y R 5%) 層厚は約13cmである。炭化物を含む。

III層 黒色シルト (10Y R 5%) 層厚は約 7 cmである。本層は極部的にみられるものである。

黄褐色土ブロック (5 ~ 7 cm) を多く含む。

IV層 黒色シルト (10Y R 5%) 層厚は約42cmである。黄褐色土ブロック(1~2cm)多く含む。

V層 黑褐色粘土 (2.5Y R 5%) 層厚は約17cmである。

VI層 黑褐色粘土 (2.5Y R 5%) 層厚は約18cmである。

VII層 褐灰色粘土 (10Y R 5%) 層厚は約 7 cmである。

これらの層群はI・II区の層と大きく異なる。いずれも含水率が高い。比較的古い時期から水田等に利用されていたのかもしれない。III区より検出された江戸時代半ば以後の井戸跡は、III層上面より掘り込まれている。層位的にみて、Eトレレンチで最も古いと考えられる4号溝（中世？）はIX層上面より掘り込まれている。したがって、4号溝が構築される時期には、I・II区の生活面とは1 m前後の落差が存在していたことになる。III区は少なくとも中世には後背湿地として、I・II区は自然堤防上に存在すると理解されよう。また、落差が明瞭であったことは、館の占地に際して立地条件（自然堤防）を容易に選定できたものと考えられよう。

第6圖 I・II區地帶配置圖



第III章 検出した遺構と遺物

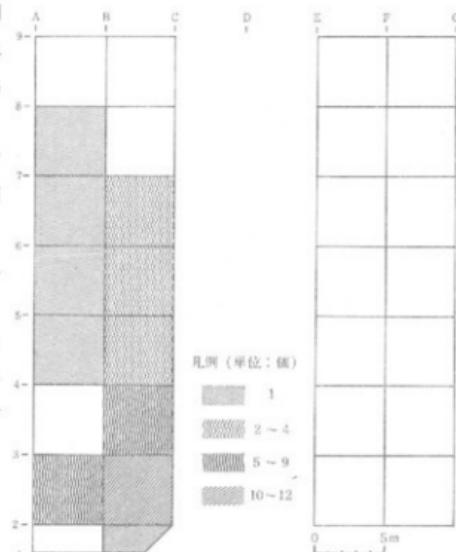
I. 繩文時代（第8・16図）

繩文時代に属する遺構は、今回の調査では検出できなかった。しかし、土器は予想以上に多く破片総数48点が出土し、第7図のごとくすべてI区から出土している。特にI区でも南側に片寄る傾向がみられ、さらに、南側や西側に展開するものと考えられる。

1は後期前葉の宮戸I式に比定されるものであろう。今回の調査では最も古い時期の所産である。2～9は、後期中葉の宮戸II_aあるいはII_b式に対応するものである。9は半円形の突起である。10～15は、西ノ浜～宮戸III_a式にかけての所産と考えられる。いわゆる、貼こぶ文系土器群である。16は後期後半と考えられる注口土器である。17～

22は、後期中葉から後葉にかけての粗製土器と考えられる。特に20～22は、早期末にみられるのと同様の条痕文を地文とし、さらに、半截竹管による格子状沈線を施文している。23～25は、繩文時代晩期の土器である。23は大洞B式の深鉢、24は大洞C式と考えられる注口土器、25は大洞C式と考えられる粗製深鉢である。石器は小形の尖頭器1点（第16図-1）、スクレイバー1点、二次加工ある剥片4点、剥片2点、碎片2点がある。繩文時代から弥生時代のものと思われる。また、第16図-2は繩文時代の石棒の破片と解したが、中・近世の何らかの石製品の可能性もある。

以上、わずかではあるが、時期的なバラエティーをもって繩文時代の遺物が確認された。本遺跡の場合は、遺構がまったく検出されなかつことや遺物の出土量が少ないことから、集落等は予想しにくいか、周辺に存在するであろう集落の領域の中に、今泉周辺が組み込まれていたことは、ほぼ間違いないところであろう。



第7図 繩文時代土器頻度分布図



第8図 I・II区出土純文土器

第1表 I・II区出土縄文土器観察表

場所	グリット	遺 稗	層 級	遺物番号	部 位	地 類	特 徴	施 作	施 作
1 A - 3	11号井戸	堆土下部	100	黒	瓶	施物(青戸口)	多条丸底	地に白い針状のもの含む。	10
2 B - 2	15号井戸	2層	251	口 緑	瓶	施物(青戸口)	平行丸底		71 (1)
3 A - 3, 4	12号井戸	堆土	508	*	*	*	内縫織物文底(1.5号)		15
4 A - 3	13号井戸	堆土上部	703	青	瓶	施物(青戸口)	施物丸底(1.5号) + 施物(丸底)	地に白い針状のもの含む。	7
5 B - 4	9号井戸	5層	674	*	*	*	施物(青戸口)	施物丸底(1.5号) + 施物(丸底)	30
6 A - 7	4号井戸	砂土	493	*	*	*	施物(青戸口)	施物丸底(1.5号) + 施物(丸底)	19
7 B - 5	11号井戸	2層	306	口 緑	瓶	施物(青戸口)	施物(1.5号) + 施物丸底	施物丸底(1.5号) + 施物(丸底)	21
8 A - 3	9号井戸	4層	910	白	縫織物文	施物(青戸口)	施物(1.5号) + 施物(丸底)	施物(1.5号) + 施物(丸底)	26
9 *	13号井戸	堆土	203	口 緑	瓶	施物(青戸口)	施物(1.5号)		6
10 *	12号井戸	堆土	392	口 緑	瓶	施物(青戸口)	人面文 + 施物文、施物		9
11 A - 2	15号井戸	2層	176	青	瓶	*	施物文 + 施物、施物丸底		1
12 A - 6	1号井戸	堆土	104	*	*	*	施物丸底(1.5号) + 施物文 + 施物	施物丸底(1.5号) + 施物文 + 施物	28
13 B - 3 (5号井)	青戸丸底(西側)	502	*	*	*	*	施物丸底(1.5号) + 平行丸底(1.5号)	施物丸底(1.5号) + 平行丸底(1.5号)	33
14 D - 1	17号井戸	28号	161	注 口	瓶	施物	無文		40
15 A - 2	1号井戸	(西側)	155	E4	瓶	施物(青戸口)	施物丸底(1.5号)		17
16 A - 2	有井(1号井) (西側)	483	*	*	*	*	施物丸底(1.5号)	施物丸底(1.5号)	9
17 B - 4	2号井戸	堆土	575	口 緑	瓶	施物(青戸口)	施物(1.5号)	地に白い針状のもの含む。	29
18 B - 2	15号井戸	1層	206	*	*	*	施物丸底(1.5号, 1.8号)		77 (2)
19 A - 3	8号井戸	堆土	543	*	*	*	施物(1.5号)		8
20 H - 3	15号井戸	1層	396	*	*	*	施物丸底(1.5号)	施物丸底(1.5号)	22-①
21 *	*	堆土	602	解	瓶	*	*	5-08 (B-2 17号井堆土) + 施物	38
22 B - 2	15号井戸	1層	296	*	*	*	*	地に白い針状のもの含む。	22-②
23 H - 3	青戸丸底(西側)	737	口 緑	瓶	施物(大底)	施物、施物丸底、 ¹ 又文			38
24 1, 2, 4, 5	26号井戸	1層	437	解	瓶	施物(大底)	施物丸底(青戸口 + 施物)		36
25 A - 2	15号井戸	堆土	367-1	口 緑	瓶	*	平行丸底、施物(1.5号)		2

2. 弥生時代 (第10・11・16図)

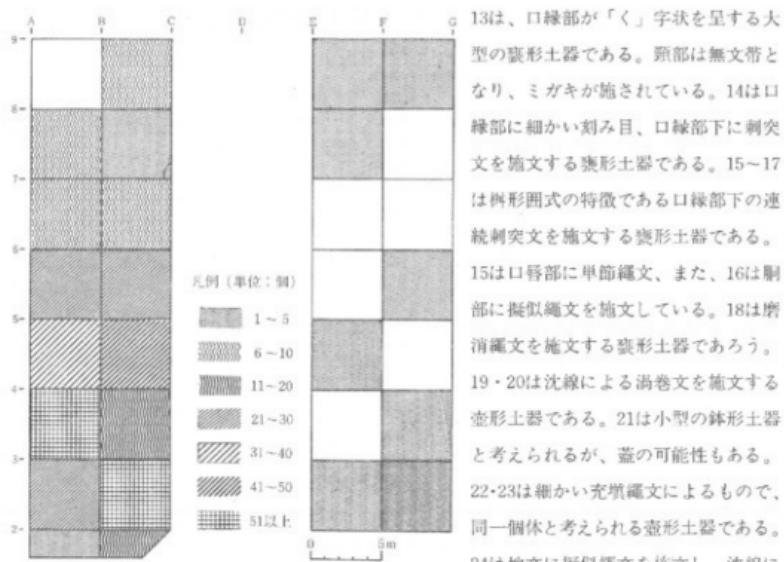
弥生時代に属する遺構は、今回の調査では検出できなかった。わずかに、いくつかのピットにそれらしき可能性を持つものがあるが、断定するに至っていない。また、79年度の調査では土壤がI基確認されている。

ところで、第9図をみると、先の縄文土器と類似した分布状況を示し、I区南側に集中する傾向が認められる。また、縄文土器と異なって、II区でも出土しており、分布域が広がっていることがわかる。

出土総数は516点で、その内訳はI区320片、II区192片、表採4片である。このうち、粗製土器には縄文時代のものと区別のつかないものも存在する可能性がある。

1は本道跡の出土品中、最も大型の壺形土器である。頸部外面はていねいなミガキ、また、肩部内面は、輪積痕を消すように粗いミガキがそれぞれ施されている。2はやはり壺形土器である。底部付近にはおよそ横位方向のミガキ、内面には粗いミガキが施されている。胴部最大径の部分に、炭化物の付着が認められる。3は口縁部下に、連続刺突文を施す壺形土器である。

4～8・9～12は、あるいは壺の底部である。ただし、6・9は縄文土器の可能性もある。



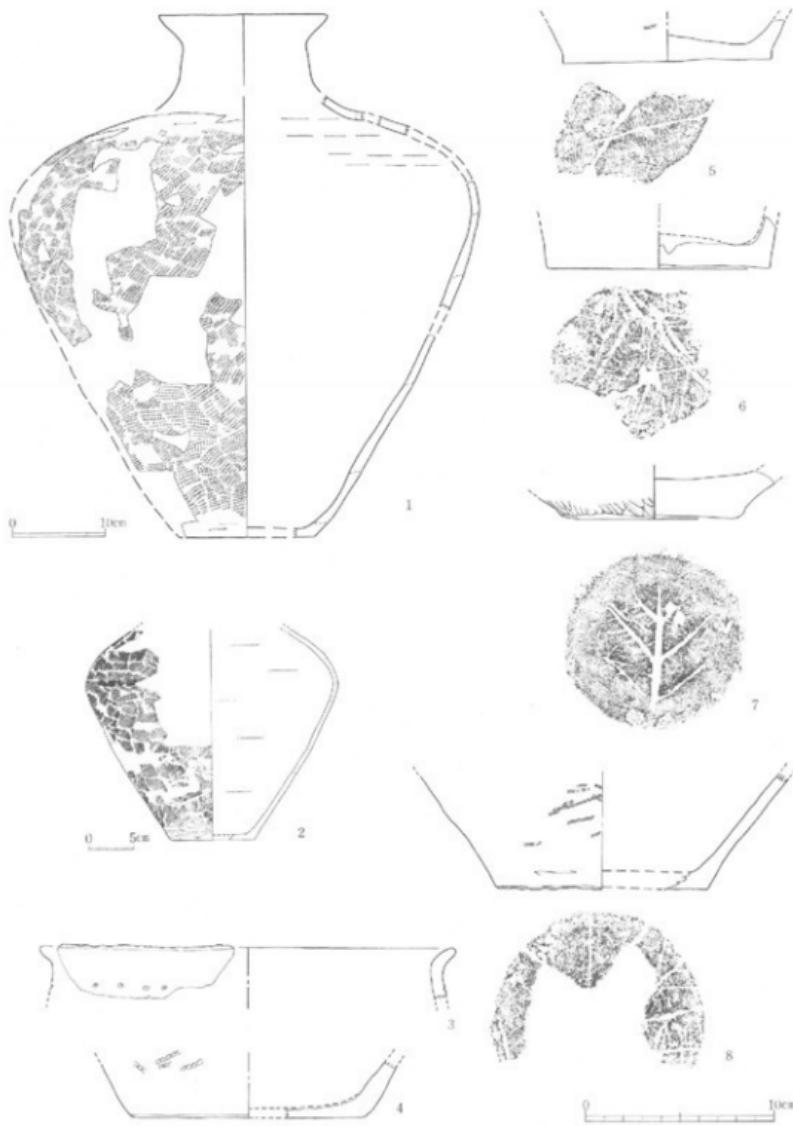
第9図 弥生時代土器頻度分布図

13は、口縁部が「く」字状を呈する大型の縦形土器である。頸部は無文帯となり、ミガキが施されている。14は口縁部に細かい刻み目、口縁部下に刺突文を施文する縦形土器である。15~17は楕円形式の特徴である口縁部下の連続刺突文を施文する縦形土器である。18は口唇部に单節繩文、また、16は胴部に擬似繩文を施文している。18は磨消繩文を施文する縦形土器であろう。19・20は沈線による渦巻文を施文する壺形土器である。21は小型の鉢形土器と考えられるが、蓋の可能性もある。22・23は細かい充填繩文によるもので、同一個体と考えられる壺形土器である。24は地文に擬似繩文を施文し、沈線によって変形工字文を表現したものと考られる。また、内面は黒色を呈し、平滑なミガキを行なっていることから、鉢形土器と考えられる。25は磨消繩文を施文する鉢形土器であろうか。26は変形工字文を施文し、内面は黒色を呈し、平滑なミガキが施された鉢形土器である。

石器は石包丁5点(第16図3~7)、太型蛤刃石斧1点(第17図12)が出土している。前者はいずれも画面穿孔で、4はベッキングによる荒々しい穿孔痕が残され、かつ刃部が薄くなっていない。後者は県内のものとしては、かなり大きいものである。

以上、主要なものについて紹介してきたが、他には繩文施文のみのものや細片の土器が多く図示しえないものが大半である。今回出土した土器群のうち、時期の判定できるものは、中期の楕円形式期のものであり、ほぼ单一時期としてよいであろう。また、粗製壺形土器等、時期の不明な胴部・底部の破片なども、およそこの時期としてよいであろう。

ところで、比較的多くの土器片を得ることができたが、遺構は弥生時代と認定できるものが皆無であった。79年度調査時に検出した土壤を考慮しても、十分に遺跡の性格を理解できない現状である。ただ、第10図1・2の壺は、底部破片が検出できなかったことや、第10図7は丹塗りの壺(?)であることなどから、遺跡の性格を知る手がかりになりうるかもしれない。



第10図 I・II区出土弥生土器(1) 1は36 2は5



11



0 10cm

12



14



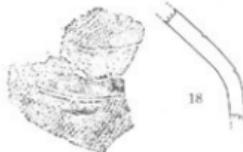
15



16



17



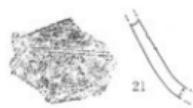
18



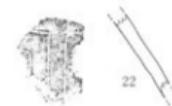
19



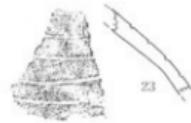
20



21



22



23



24



25



26

第II図 I・II区出土弥生土器(2)

第2表 I・II区出土弥生土器観察表

件数	アリット	名 様	層 及	遺物番号	器 形	部 位	特 徹	文 程	備 考	原本番号	
1	Ⅰ	Ⅱ 15号 滲	Ⅲ層	275	山	削・磨削	圓形孔	縫文(しゆ)	内面内側にカキ、表面に白い針状のもの食む。		
2	Ⅱ	Ⅱ 5号 滲	Ⅰ～Ⅱ層	412	山	削・磨削	×	縫文(しゆ)	内面内側にカキ、表面に白い針状のもの食む。		
3	Ⅲ	Ⅱ 7号 滲	Ⅲ層	444	筒	口縁部	×	削光		29	
4	Ⅳ	Ⅳ 1号 滲	地下下部	922	穿又は山	底	圓形孔?	縫文(しゆ)	表面に白い針状のもの食む。表面を多量に食む。	33	
5	Ⅴ	Ⅳ 3号 滲	地下下部	205	山	削	×	縫文(しゆ)	表面に白い針状のもの食む。	4	
6	Ⅵ	Ⅳ 2号 滲	1層	833	山	削	×	×	表面被	縫文の可能性も有る。	110
7	Ⅶ	Ⅷ 1号上地	806	空	×	×	×	表面被	内面内側にカキ。	32	
8	Ⅷ	Ⅸ 4号 滲	埋土下部	311	山	削	×	縫文(しゆ)	縫文(Ⅷ・Ⅸ 10号母口)と複合。	38	
9	Ⅸ	Ⅹ 3号母口	埋土下部	374	穿又は山	×	×	削代用	縫文の可能性も有る。	9	
10	+	+	4	150	山	削	×	削代用、擦剥痕	縫文の可能性も有り。	6	
11	Ⅺ	Ⅺ 3号母口	496	山	削	×	×	削代用		11	
12	Ⅻ	Ⅻ 4号 滲	地	855	山	削	×	削代用		24	
13	+	+	+	312	筒	口縁部	圓形孔	縫文(しゆ)、圓孔無文	縫文と複合、内面にカキ。		
14	Ⅼ	Ⅼ 2号 滲	1001	山	削	×	×	口付部邊被削み目、削突起	内面にカキ。	35	
15	Ⅽ	Ⅽ 7号母口	上層	902	山	削	×	口付部邊被削み目(縫文)・削突起	内面にカキ、鉢上に白い針状のもの食む。	33	
16	Ⅾ	Ⅾ 2号母口	1層	914	山	削	×	削代用縫文	内面にカキ。	36	
17	Ⅿ	Ⅿ 2号 滲	Ⅲ層	271	山	削	×	縫文(Ⅿ 1号)・削突起		28	
18	ⅰ	ⅰ 1号上地	埋土	550	山	削	×	擦剥痕文(しゆ)・北斎文	内面にカキ、鉢上に白い針状のもの食む。	1	
19	ⅱ	ⅱ 5号 滲	1層	362	山	削	×	北斎文	縫文に白い針状のもの食む、内面に内側充てん有り。	34	
20	ⅲ	ⅲ 4号 滲	1層	859	山	削	×	擦剥痕文(北斎)		30	
21	ⅳ	ⅳ 1号 滲	1006	筒	削	×	×	擦剥痕文・北斎文	縫文の可能性有り、内面にカキ。	2	
22	ⅴ	ⅴ 3号母口	埋土	181	山	削	×	擦剥痕文(しゆ)	鉢上に白い針状のもの食む。	8	
23	ⅵ	ⅵ 6号 滲	1007	筒	削	×	×	擦剥痕文(しゆ)		29	
24	ⅶ	ⅶ 2号 滲	1008	筒	削	×	×	擦剥痕文・擦剥工字文	内面にカキ、鉢上に白い針状のもの食む。	30	
25	ⅷ	ⅷ 7号 滲	埋土	403	筒	削	×	擦剥痕文・北斎文	縫文に白い針状のもの食む。	33	
26	ⅸ	ⅸ 2号 滲	1009	筒	削	×	×	擦剥工字文	内面にカキ、鉢上に白い針状のもの食む。	37	

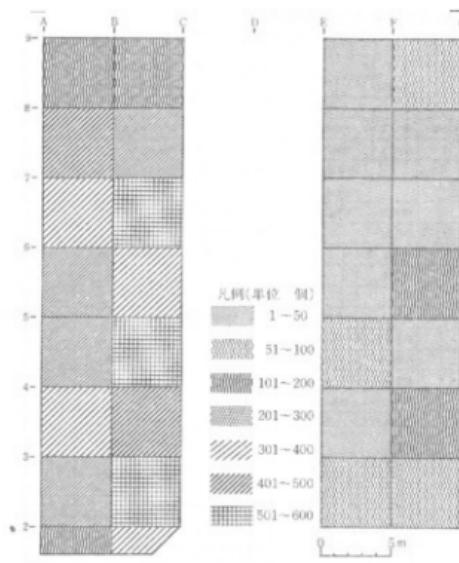
3. 古墳時代（第13、14、15図）

古墳時代に属する遺構は、検出することができなかった。ここでも、弥生時代同様、いくつかのピットにその可能性のあるものが存在するが、やはり断定するに至っていない。土器は大量に出土し、I区で5,425点、II区で1,055点、破片総数6,480点に達している。遺物の分布は、第12図に示すごとくであるが、II区からの出土が増加し、I区の南側に多く出土する傾向は残っているものの、弥生時代と異なって集中区が分散する傾向が認められよう。この傾向は、当然平安時代以後の遺構による擾乱を考慮しなければならないが、しかし、明らかに弥生時代とは異なった分布である。ただ、集中区が分散する傾向は、この時期の遺構が不明である点で、どのように理解してよいのであるう。

さて、土器について概観してみると、塗釜式と南小泉式が混在し、また、実測可能な土器はわずかであった。この他に、6世紀代と考えられる須恵器坏（身）、栗圓式あるいは国分寺下層式と考られる坏体部破片がそれぞれ1点ずつ出土している。

趣

第13図1～10は、刷毛目を特徴とする變形土器である。2は極めて特徴的で、口縁部の輪積み成形後の指頭痕がそのまま残り、内面にはていねいな刷毛目が施されている。4は頭部以下



第12図 古墳時代土器頻度分布図

台付甕

第13図11~13は、台付甕の脚部である。十分に、その特徴を把めない。

甕

甕の破片は5点出土し、このうち図示し得たものは、第13図14・15の2点だけである。15は外面に刷毛目が残る。

壺

第14図16~19は壺形土器である。16・17は内面にミガキが、18は内面にナデがそれぞれ施されている。19は凹みの底部をもつ壺形土器であろう。内外面いずれもミガキである。時期は明確ではないが、塙釜式あるいは南小泉式期のものと考えられる。

壇

第14図20~22は壇形土器である。20・21は内面はナデで、20の頸部には指頭痕が残る。いずれも外面は磨滅が著しいが、21はわずかにミガキが残る。22は外面が刷毛目後に、ミガキが施されている。内面はミガキが主体を占めるがナデやケズリが混在する。外面は丹塗りである。

時期は明確ではないが塙釜式期と考えられる。

がケズリに近いナデ（ナデツケ）が施され、口縁部は外面がほぼ無調整であり、内面は粗いナデである。7は一応図示したが、長胴甕のようになってしまい、本来は口縁部がもう少し開く器形とも考えられるが明確ではない。8は内外面とともに器面が磨耗し、調整は不明であるが、おそらく刷毛目が施されていたものと思われる。これらは、およそ塙釜式期に属するものと考えられるが、7は南小泉式期かあるいはそれよりも後出のものであろうか。10は刷毛目後横ナデを施した壺形土器の口縁部である。口縁部には、工具による押圧が施されている。塙釜式期のものであろう。

第14図23～33は刷毛目を主体とする壺形土器である。これらは折り返しによる複合口縁と有段口縁によって特徴づけられる。23は從未知られていない有段口縁（2段）をもつ壺と考えられ、内外面ともに平滑なミガキが施されている。24は器台の可能性もあるが、有段の壺形土器と考えられる。29は複合口縁ではないが、折り返し手法によって口縁部が成形される。30は外面丹塗りである。

時期は23～31は埴蓋式期、32・34は埴蓋式か南小泉式のものであろう。

高环

第15図34～47は高环形土器である。34は今回の調査で唯一全体の器形がわかるものである。34～37は高环の环部であるが、体部下部に軽い隙線が認められる。また、环部は直線的に傾斜して立ち上がるものが多いが、35のように弯曲しながら立ち上がり、口縁部が外反するものも存在する。38は唯一、円形透孔をもつ高环形土器である。39～41は脚部が円錐状に広がるものと考えられる。42・43は脚部が円柱状になると考えられるものである。44～47は脚部が明確に柱状部と裾部が比較的明瞭に区別できるものである。特に47は柱状部にふくらみをもつ唯一のものである。

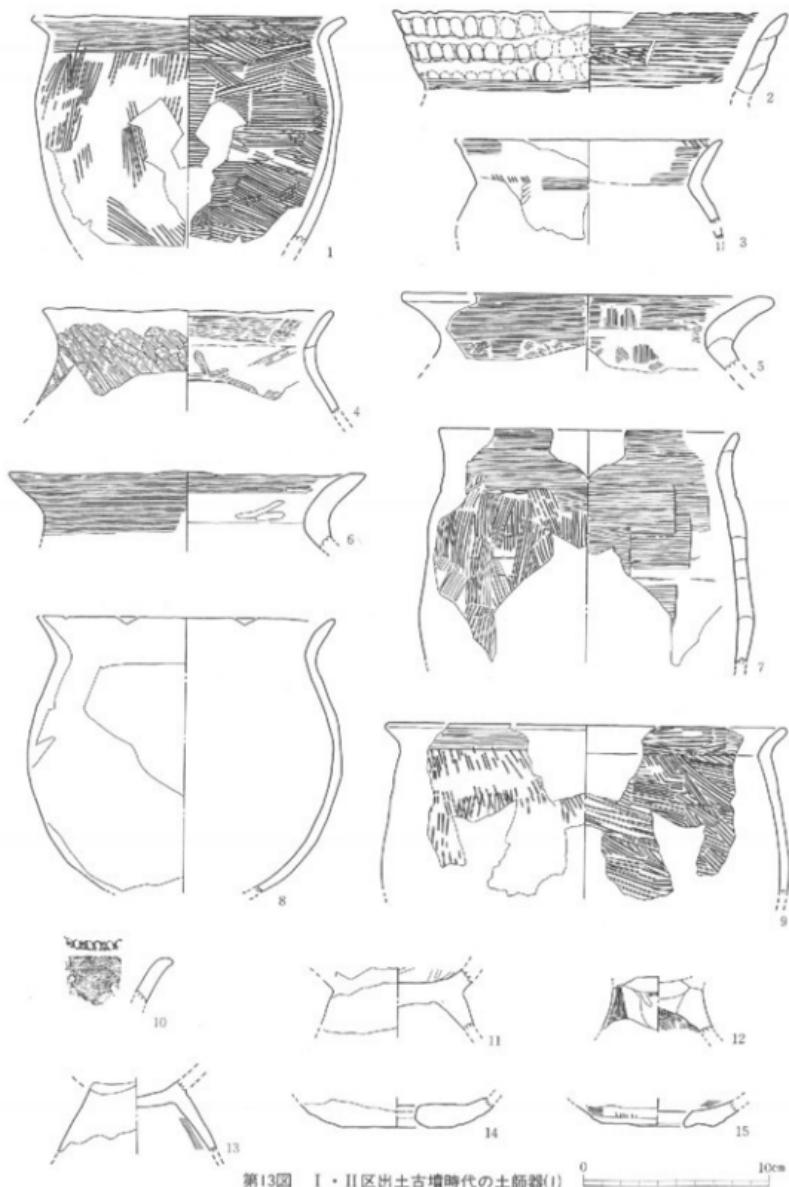
器台

第15図48・49は器台形土器である。48は成形後に脚部に向かって穿孔がなされたものと思われる。49は成形時にすでに穿孔を意識して製作したか、あるいは棒状工具を刺し込んでおいて成形が終了した段階で引き抜いたものと思われる。脚部に透孔が認められる。

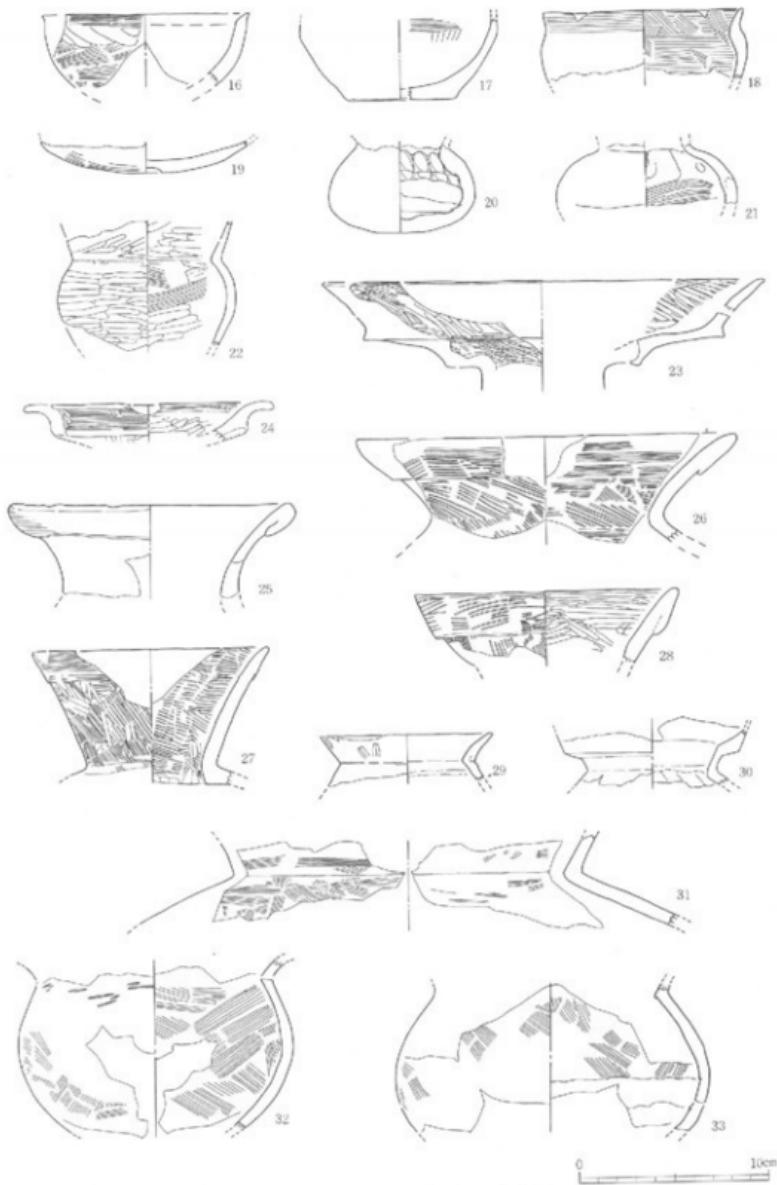
以上各器種ごとに土器を概観したが、これらは主に中世の遺構から出土したものである。また、基本層Ⅲ層より出土したものも、Ⅲ層そのものが古墳時代の包含層に限定できない状況にある。一括遺物もなく、各時期ごとの組成を明らかにすることは困難である。およそ、埴蓋式期の後半段階から南小泉式期にかけて推移した土器群であろう。

石製品

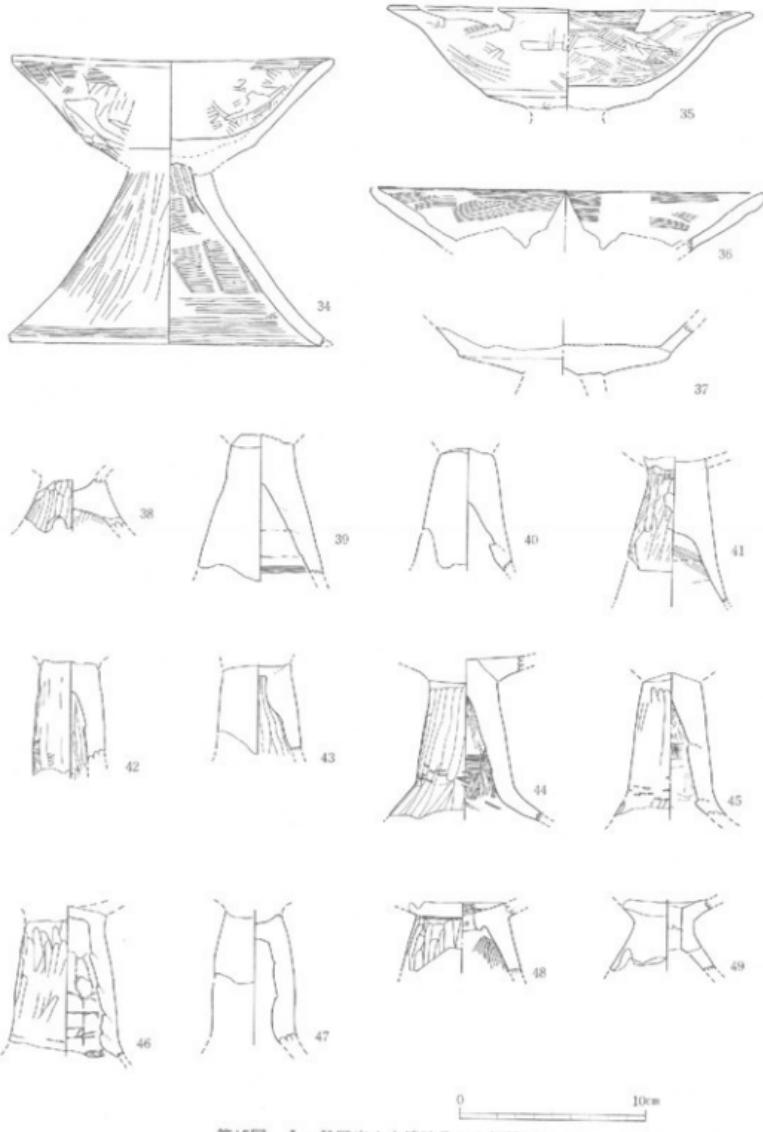
この時代の石製品には、石製模造品3点(第16図8・9・10)、勾玉1点(第16図11)がある。



第13図 I・II区出土古墳時代の土器(1)



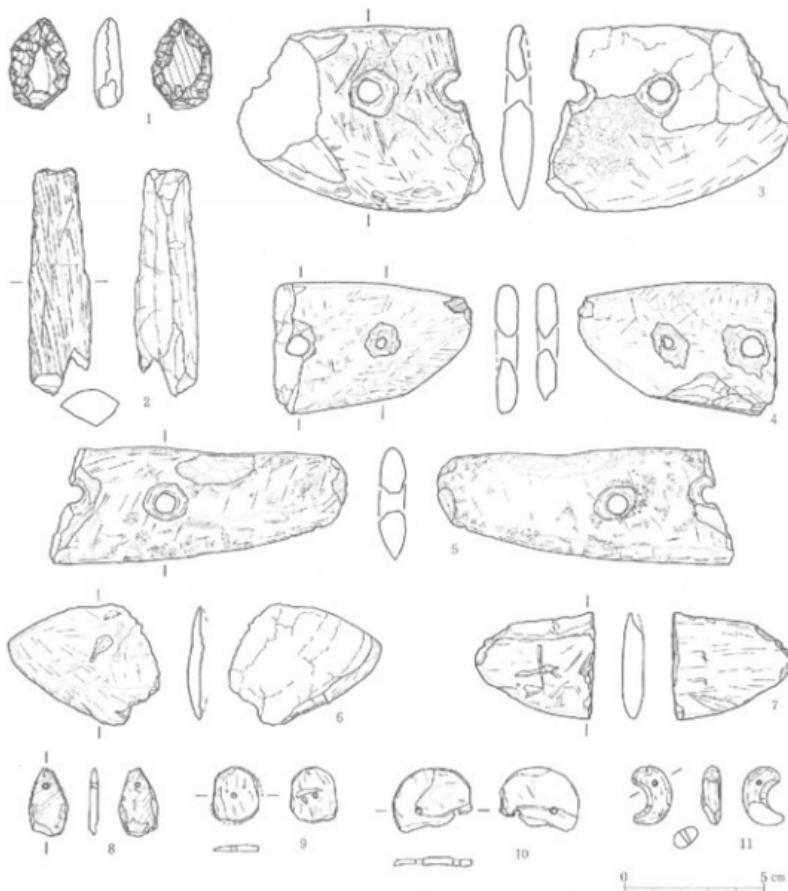
第14図 I・II区出土古墳時代の土師器(2)



第15図 I・II区出土古墳時代の土師器(3)

第3表 I・II区出土土器(古墳時代)観察表

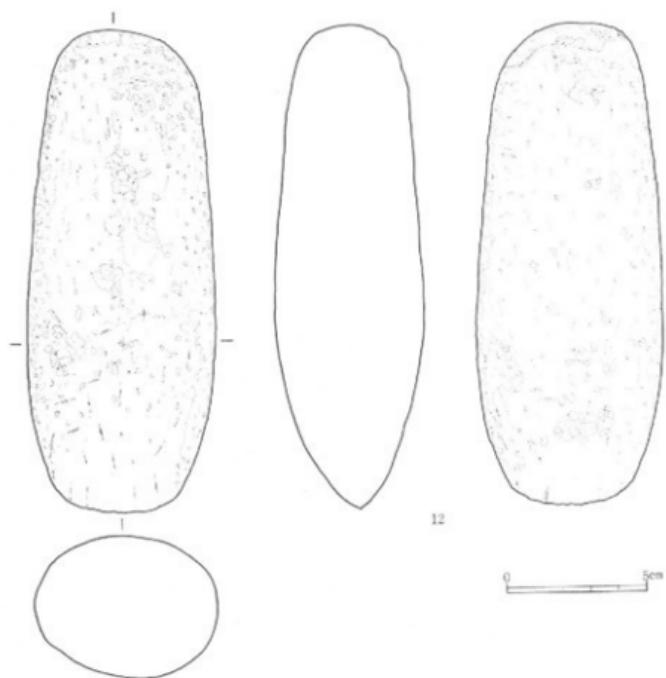
回数	アグリード	番号	名前	考古学的分類	古文書	地図	測量	実測	器 形			備考	実測番号
									内	外	脚		
第3回1	A-2	ヒット	理工	890	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	4
2	A-2	4号土塗	理工	420	西	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	19
3	B-1	1号	理工	177	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	26
4	B-6	1号	理工	493	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	43
5	H-5	7号井戸	理工	795	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	40
6	B-6	1号井戸	理工	482	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	46
7	-	3号井戸	理工	919	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	45
8	B-2	1号	理工	482	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	53
9	E-2	3号井戸	理工	762	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	104
10	A-2	2号井戸	理工	600	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	-
11	H-3	10号井戸	理工	740	西	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	32
12	B-4	1号	理工	154	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	37
13	I-5	1号	理工	-	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	59
14	A-1-5	16号	理工	68	東	直 線	南北式	116	直 線	南北式	116	ヨコナガ	2
15	E-1	11号井戸	理工	865	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	107
第4回16	D-5	7号井戸	理工	705	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	41
17	H-8	1号	理工	150	東	脚部一輪脚	南北式	116	脚部一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	96
18	E-2	1号	理工	705	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	105
19	A-1	1号	理工	517	東	脚部一輪脚	南北式	116	脚部一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	97
20	B-6	1号	理工	1064	東	口 縁 六	南北式	116	口 縁 六	南北式	116	ヨコナガ	50
21	B-8	8号井戸	理工	227	東	直 線	南北式	116	直 線	南北式	116	ヨコナガ	67
22	A-2	1号井戸	理工	217	東	直 線	南北式	116	直 線	南北式	116	ヨコナガ	14
23	B-1	1号	理工	175	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	23
24	B-3	11号井戸	理工	307	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	39
25	A-7	4号井戸	理工	640	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	28
26	B-4	12号井戸	理工	365	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	34
27	B-1	1号井戸	理工	177	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	97
28	A-2	1号井戸	理工	216	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	16
29	A-2	16号井戸	理工	149	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	3
30	D-3	14号井戸	理工	494	東	口縁一輪脚	南北式	116	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	33
31	H-4	8号井戸	理工	305	東	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	36
32	A-3	1号井戸	理工	764	東	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	13
33	B-5	2号井戸	理工	795	東	口縁一輪脚	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	42
第5回44	A-7	1号井戸	理工	460	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	42
35	B-8	1号井戸	理工	446	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	57
36	B-8	7号井戸	理工	795	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	56
37	B-7	6号井戸	理工	191	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	52
38	A-4	1号井戸	理工	164	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	19
39	A-1	16号井戸	理工	799	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	1
40	A-3	12号井戸	理工	620	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	6
41	B-5	1号井戸	理工	495	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	38
42	D-6	5号井戸	理工	798	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	47
43	H-4	11号井戸	理工	334	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	35
44	A-4	1号井戸	理工	470	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	13
45	B-6	8号井戸	理工	949	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	44
46	M-4	11号井戸	理工	699	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	114
47	E-3	29号井戸	理工	862	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	106
48	A-8	1号井戸	理工	461	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	22
49	A-7	1号井戸	理工	1068	南	脚部	南北式	116	ヨコナガ	南北式	116	ヨコナガ	15



No.	種類	地区	重録	層位	14	9m	厚	重量	石質
1	尖頭器	森林	—	—	32.3	21.2	12.4	6.3	チャート
2	石棒?	B-5	11号溝	1 層				(10.9)	ホルンフェルス
3	石包丁	F-2	27号井戸	1 層				(8.8)	細粒砂岩
4	"	F-8	21号溝	2 層				(10.4)	砂岩
5	"	B-6	4号井戸	5 層					シスト
6	"	F-2	31号溝	—					粗粒砂岩
7	"	A-3	13号溝	上部				(7.6)	砂岩
8	石製柄造品	"	12号井戸	1 層	(24.8)	13.7	3.1	(1.7)	スレート
9	"	E-3	11号溝	2・3層	(20.2)	(16.8)	(2.6)	(1.2)	"
10	"	—	8号溝	大塚原下の茶褐色土			(3.0)		細粒砂岩
11	勾玉	E-2	26号井戸	縄語面	19.9	8.0	6.5	(2.1)	木

第16図 古墳時代以前の石器(I)

()内は若干破損しているもの



No.	種類	地区	造構	層位	長	幅	厚	重量	石質
12	大型船形石斧	A-1	16号溝 2層		172.1	65.8	53.9	984	安山岩

第17図 古墳時代以前の石器(2)

4. 平安時代の遺構と遺物

ここでは平安時代の遺構を扱うが、I期（後述）に属する遺構のうち、3号住居跡、25号井戸跡は、便宜上ここで扱うこととする。また、遺物のうち平安時代末期の渥美・常滑などの陶器は、中世の「日本製陶器」において扱い、ここでは、古代の灰釉・綠釉陶器を扱うこととした。

平安時代の遺構には、竪穴住居跡・溝・井戸跡・土壙がある。また、平安時代に属すると考えられるピットが存在するが、そのうちのいくつかは柱穴と考えられる。しかし、建物跡として組むかどうかは、全く不明である。

住居跡

1号住居跡（第19図）

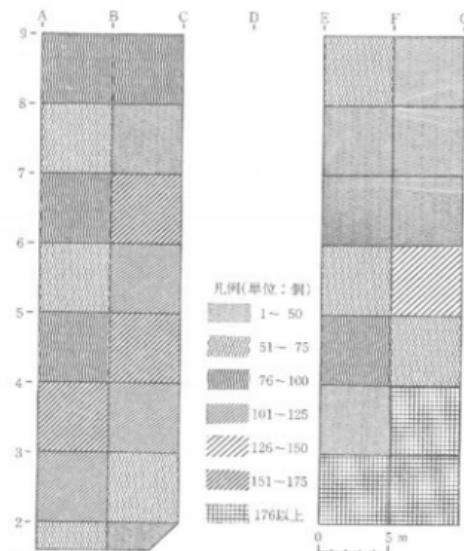
II区の南端F-2区に位置し、IV層上面で確認された住居跡である。この住居跡は、北西コーナー付近約1/4が確認できた。北西コーナーは50号土壙に切られ、51号土壙が西側で接している。北壁約2.1m、西壁1.65mまで計測できるが、全体の規模は不明である。壁高は最大9cmである。埋土は2層で構成される。北西コーナーには楕円形の貯蔵穴(86×70cm、深さ30.5cm)があり、また、南側には不定形の土壙がある。貯蔵穴の南東に柱穴1個(直径約28cm、深さ28.5cm)が検出された。カマドは検出できない。

出土遺物（第19図1～7、第20図1～4）

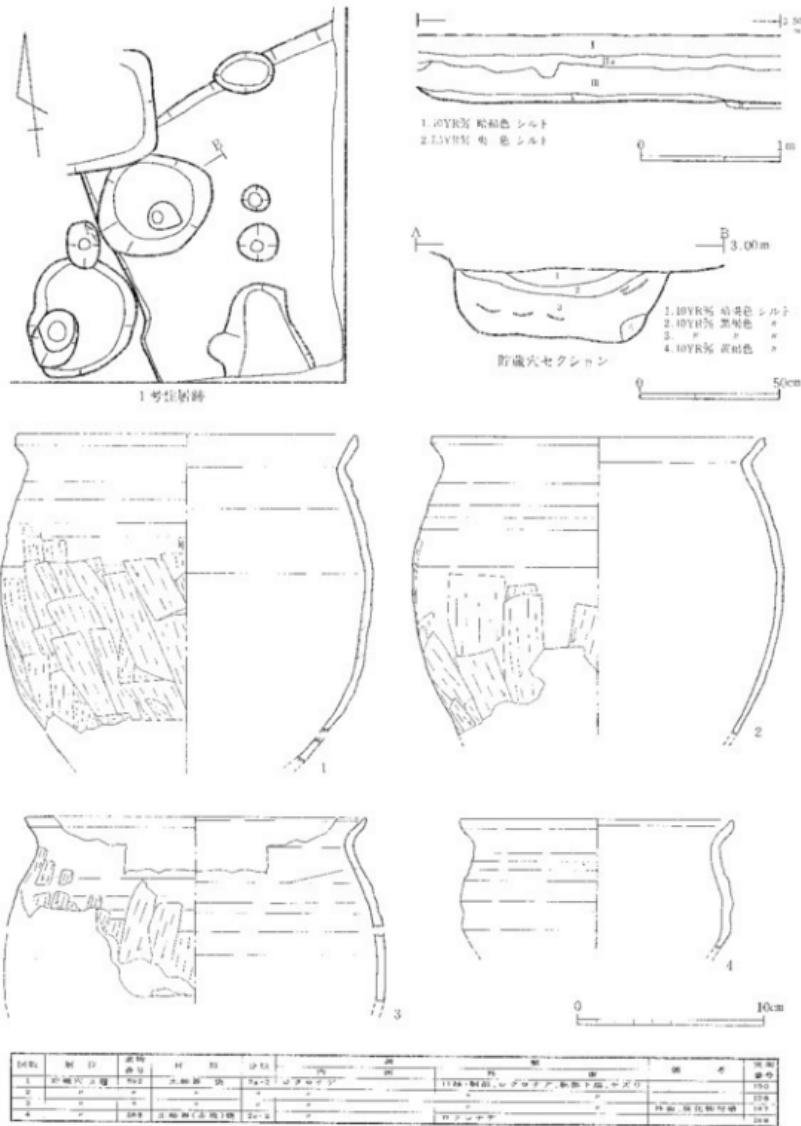
出土土器総数は、竪穴住居跡中最も多く、復元土器と破片合わせて96点出土している。その内訳は土師器563点（内黒45点、赤焼18点）、土師器表31点、灰白色（半環元）の須恵器22点が出土している。

土師器

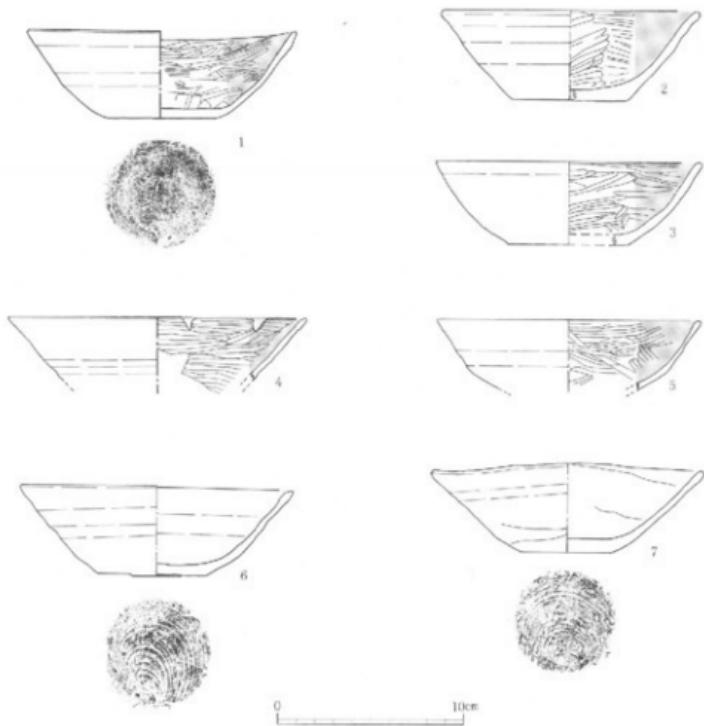
环（内黒） 図示できるものは第20図1～5の5個体である。これらはいずれも貯蔵穴より出土したものである。この环類は、回転糸切り無調整と考えられる。内面のミガキは不規則なものが多く、すべて黒色処理を施す。体部のロクロ痕は、明瞭ではなく、總じて器厚は薄い。



第18図 平安時代土器頻度分布図



第19図 1号住居跡実測図・出土遺物(1)



遺物	解 釈	出 物 番号	種 別	分 加	内 部		外 部		備 考	大別 番号
					内	外	内	外		
1	貯藏穴 3層	502	土器	16	1 c	こかく・三色処理	口縁・口幅、ロクロナサ、直角切妻切妻	まんでいる		104
2	+	+	+	+	+	+	ロクロナサ、成窓斜面切妻			105
3	+	+	+	2	+	+	ロクロナサ			106
4	+	+	+	1 c	+	+	+			107
5	+	+	+	2 a	+	+	+			108
6	+	+	美濃器	16	3	ロクロナサ	口縁・口幅、ロクロナサ、直角切妻切妻	里窯。底端スノコ状に削		109
7	+	+	+	+	+	+	+	+	22.30	101

第20図 1号住居跡・出土遺物(2)

図示できるものは、貯蔵穴より出土した第19図1~4の4個体である。1~3はいずれも、ロクロ調整後へラケズリを施す。このヘラケズリは、体部中央から口縁部付近に及ぶものがある。器厚は薄く、口径と高さがほぼ同じ値を示し、体部は球形に近い。法量に極めて規格性がある。4はいわゆる赤焼の範ちゅうに属するもので、ロクロ調整だけの小型の器である。

須恵器

坏 須恵器坏は、第20図6・7の2点のみである。貯蔵穴より出土している。いずれも灰白色の色調を示し、6は外面に、7は内外面に黒斑が認められる。7は内面の剥落が著しい。また、6の底部外面には、糸切り後についた3条の平行沈線が認められる。スノコのような台に置いたものであろうか。

これらの土器群は、平安時代の表杉ノ入式期のもので、特に甕類は、白鳥良一氏の編年（白鳥良一：1980）のF群土器の甕と形態が類似する。F群土器の甕はロクロ調整のみで、本例と異なるが、体部が球形を呈する点は共通する。したがって、本住居跡の年代は平安時代後半と考えられ、先のF群土器が11世紀以後の年代が与えられていることから、これと同様の年代が考えられる。

2号住居跡（第21図）

II区南側F-3区に位置し、IV層上面で確認された。住居跡は南西コーナー付近約1/2が確認されたにすぎず、全体の規模やカマドは不明である。11号溝・21号・22号掘立柱建物跡に切られ、火山灰を伴う33号溝を切っている。規模は西壁約1.7m、南壁約1.3mを確認したにすぎない。壁高は最大で12cmを測る。埋土は、西側が4層で構成されるが、Gラインセクションでは2層で構成される。図のようにGラインセクションでは、11号溝に流入する土とはほとんど区別がつかなくなる。南西コーナーには、橢円形の貯蔵穴（81×80cm、深さ16cm）が検出された。

貯蔵穴の東側に柱穴が1個検出された。

出土遺物（第21図1～3）

出土土器は破片が多く、総数62点出土した。その内訳は土師器坏48点（内黒19点、赤焼25点、黒色土器4点）、土師器甕14点である。また、他に陶器鉢1点と土鍤が1点ある。

陶器

鉢 第21図1は鉢の口縁部破片である。外面はロクロ痕が明瞭であるが、内面は平滑なナデである。この鉢は床面よりわずかに浮いた状態で出土した。橋崎彰一氏より、12世紀の渥美の製品であるとの御教示をいただいた。

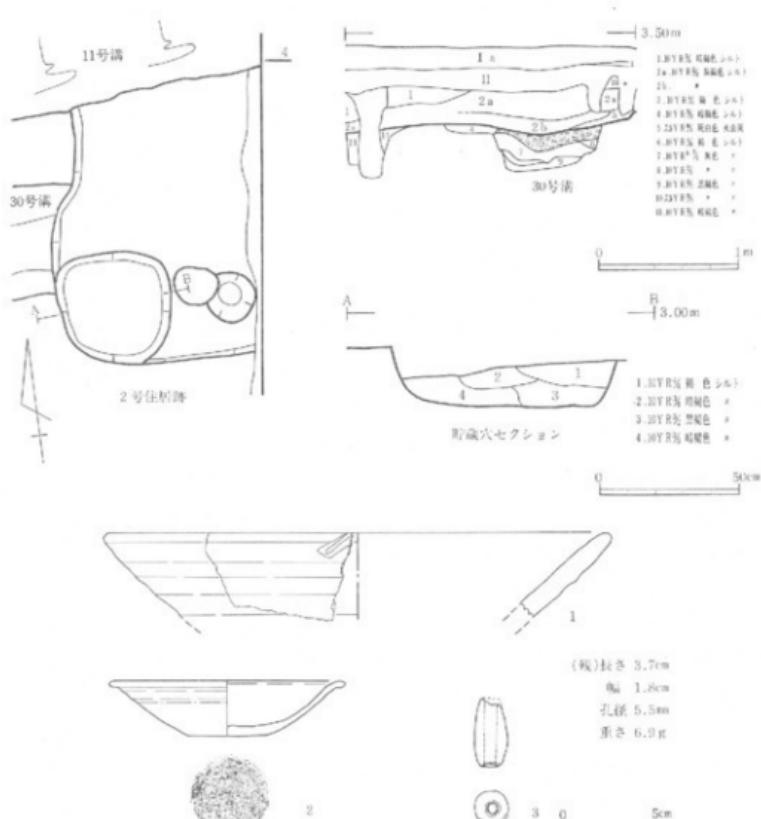
土師器

皿（赤焼） 第21図2は口唇部が外反する皿である。胎土は緻密で、砂粒をほとんど含まない。中世の土師質土器の中に胎土・色調の類似するものがある。土師器皿と土師質土器皿の関連を知る重要な資料となろう。

土製品

土鍤 第21図3は長さ3.7cm、重さ6.9gの土鍤である。

土器群は表杉ノ入式期に属するものであるが、渥美の鉢の出土からおよそ平安時代末期12世紀の住居跡と考えられる。



回収	クリット	遺構	層位	遺物番号	材種	器種	作	性	地	考
1	E-4	2号住	埋土	935	陶器	鉢	平安	渥美	12C	—

回収	層位	遺物番号	種類	分類	測量				地	考
					内	面	外	面		
2	埋土	935	土師器(赤茶)鉢	—	ロフナナ	口縁・外沿・底	口輪・切り	底土に白い斑状のもの含む。F-3,七-1	177	

第21図 2号住居跡実測図・出土遺物

3号住居跡（第22図）

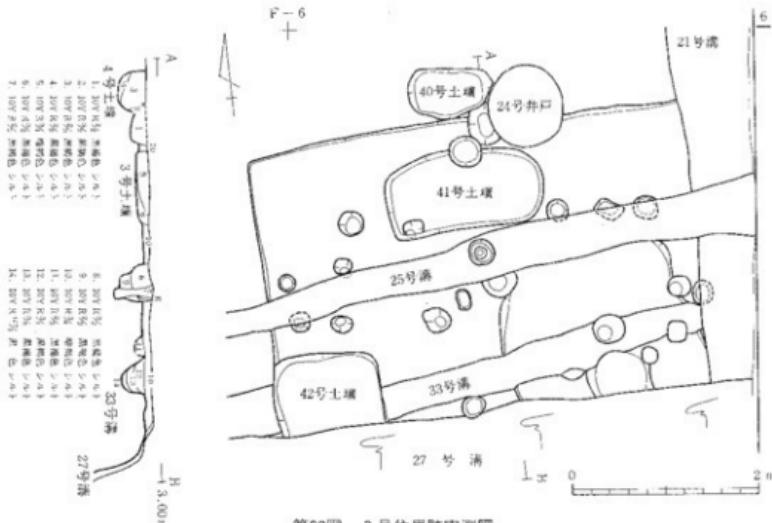
II区中央のF-5区に位置し、IV層上面で確認された住居跡である。北西コーナーを含む全体の約5%が確認できたものと考えられる。本住居跡は21号・25号・26号溝、24号井戸、41号・42号土壌に切られ、33号溝を切る。規模は北壁4.64m、西壁約2.2mが確認できただにすぎないが、およそ1辺5m前後になるものと予想される。壁高は最大約8cmを測る。埋上は単層（10YR5/4、暗褐色シルト）である。東寄りの床面には、短軸約2mのほぼ隅丸方形になるとされる土壌がある。底面は凹凸が著しい。さらに、その中に小型の土壌がある。カマドや貯蔵穴は検出できず、また、15個のピットを検出したが、どれが柱穴になるのか判断できない。

出土遺物（第23図1～4）

出土土器は総数88点である。その内訳は土師器壺55点（内黒26点、赤焼28点、その他1点）、同（赤焼）皿1点、同甕28点、同台付鉢1点、白灰色（半環元）の須恵器壺2点、同甕1点である。その他に灰釉陶器（器種不明）1点、平瓦（凸面繩目）1点、土錐1点、鐵鋤3点、砥石1点、珪化木である。

土師器

壺1は土師器壺と考えられる。底部切り離しは回転糸切り無調整である。内面はミガキ調整は施すが、黒色処理は行なっていない。器厚は極めて薄い。2は床面より出土した土師器（赤焼）壺である。ロクロ痕はほとんどみられず、体部は内寄ぎみに立ち上がり、壺に近い形態



第22図 3号住居跡実測図

である。

高台付鉢 3は高台付鉢と考えられる。底部には横位のナデが施される。

土製品

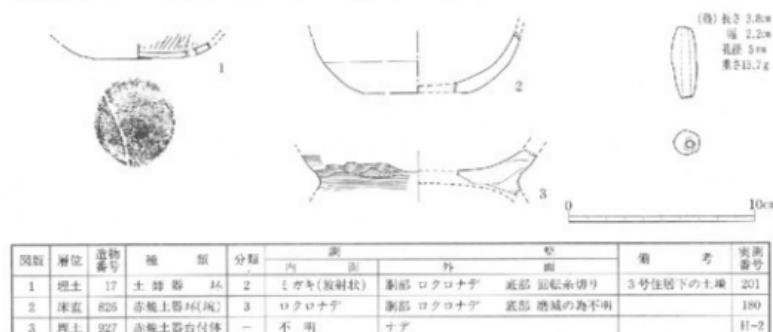
土鍤 4は長さ3.8cm、重さ13.7gの土鍤である。

石製品

砾石 埋土より1点出土している(第7表)

その他に顔料の付着した珪化木1点が出土している。

出土遺物のうち、明確に年代を押えられるものがないが、住居跡の年代は土師器(赤焼)皿等の存在から、平安時代後半と考えてよいであろう。また、鉄鋤3点のうち1点は塊形鉄鋤と考えられるものがあり、小鎌冶工房跡の可能性もある。



第23図 3号住居跡出土遺物

(2) 2号竪穴造構(第24図)

II区の南端E-2区に位置し、IV層上面で確認された。規模は西壁約2.4mが検出されたにすぎず、不明な点が多い。壁高は約10cmである。床面は平坦で、埋土2層(1暗褐色シルト、2黒褐色シルト)で構成される。この造構は、灰白火山灰を伴う32号・29号溝に切られる。

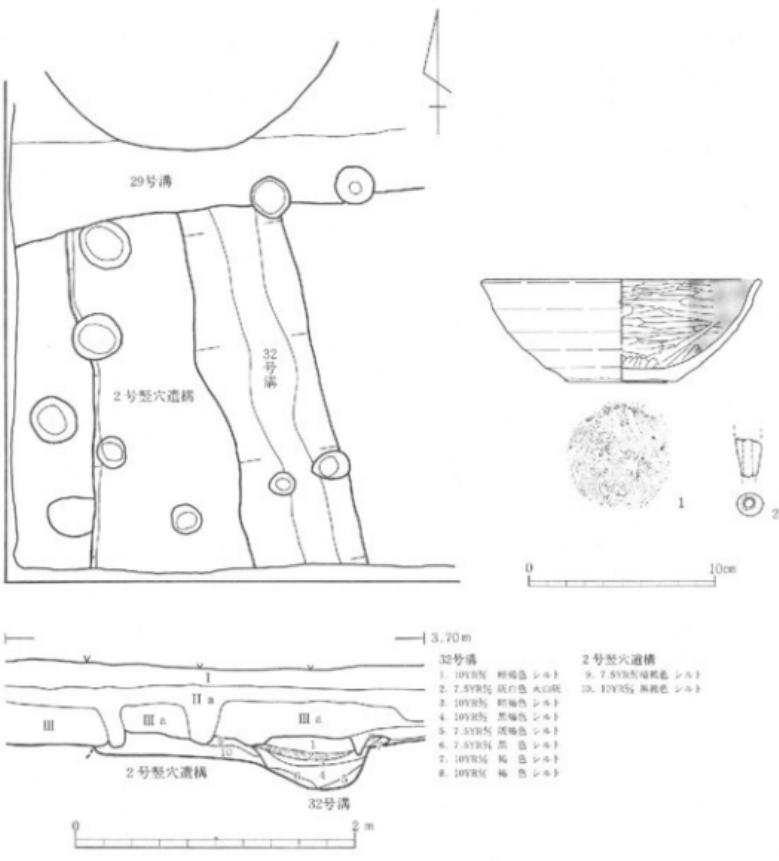
出土遺物(第24図1・2)

土師器

环(内黒) 1はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り無調整である。

土製品

土鍤 2は約1/2を欠損する土鍤である。



第24図 2号竖穴道構跡実測図・出土遺物 32号溝跡実測図

測面	アリット	遺構	層位	測定番号	種類	分類	測量		測定者	実測番号
							内深	外深		
1	北-2	2号竖穴道構	地主上部	705	上部25	16	1.0m	1.0m	黒色無理 口縁、胸筋ロコナテ	近藤・日向久留
<hr/>										
2	北-2	2号竖穴道構	井干	(残)	1.9×1.3		0.5	2.4	892	

(3) 溝 跡

溝跡については、その各々の特徴は第21表を参照されたい。また、紙数の都合上、各々の図面は示していない。

ここでは、これらの溝跡群に関する問題点について若干ふれてみたい。

平安時代の溝跡は、およそ各調査区の北半に集中する傾向があり、東西方向に伸びるものが多い。昭和54年度調査区の講も東西方向に伸びるものが多い。さて、これらの溝跡は、比較的深く断面形が鍋底状を呈するもの（Aタイプ）と、極めて浅く断面形が皿状を呈するもの（Bタイプ）がある。また、Aタイプには火山灰を伴うものが大部分である。

すなわち

Aタイプ………8号・24号・30号・32号・33号溝

Bタイプ………4号・5号・6号・7号・17号・20号・22号・23号溝

に分類される。

Aタイプのうち、33号溝には火山灰が確認できない。また、I区の8号溝はII区の24号溝に連なる可能性が高い。6号溝は前回調査の14号溝に、8号は同じく15号溝に続くものである。これらの溝は、前回調査を行なった20号溝が介在することによって、6号溝が8号溝よりも古いことがわかる。Aタイプは土器類が比較的多く出土するが、Bタイプは出土量が少なくいずれも細片であるという異なる特徴をもつ。こうした現象は、おそらく性格が異なるためと予想されるが、明らかにできない。

出土遺物

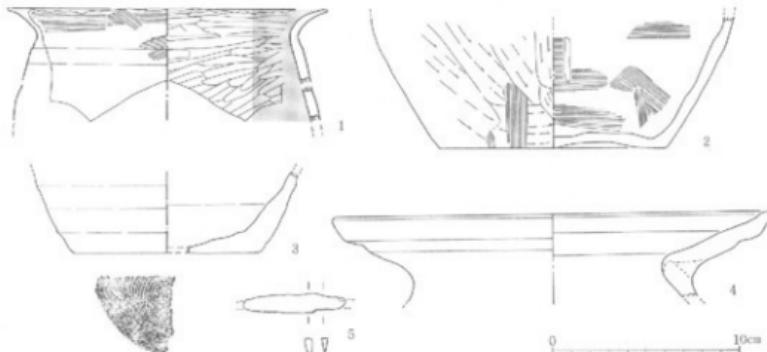
8号溝（第25図1～5）

土師器

1は土師器裏である。ロクロ調整後、口縁部外面に横ナデを施す。内面はミガキ後、黒色処理を施す。口唇部が尖頭状を呈する。2は上師器裏の底部付近の破片である。外面はヘラケズリで、一部にナデが認められる。内面はナデが施される。底部は凸凹が著しい。3・4はいずれもロクロ調整を施す裏の破片である。赤褐色を基調とするもので、いわゆる赤焼土器の範囲に属するものである。

金属製品

刀子 5は鉄製の刀子である。全長は約7～8cmになるものと考えられるが、峰と茎の先端を欠く。



図版	解説	遺物番号	種類	分類	調査		備考	実測番号
					内面	外側		
1	3層(火山灰層下)	806	土器	25	1b ミガキ(模) 黒色処理	口縁部 ロクロナゲ 剣形 ロクロナゲ	B-6区	92
2	地土	949			2a?	小アマ	調部 ヘラケヅリ 槌目 平明	87
3	2層(火山灰層下)	806	(水)	2a?	ロクロナゲ	調部 ロクロナゲ 成部 調節手切	86	
4		16	(水)	2c?		ロクロナゲ		98

図版	グリット	施構	層位	材質	調査					備考	登録番号
					大きさ(cm)	(寸)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)	(%)	
2	B-6	6号第1層	刀子	石	5.4	3.78	1.1	0.4	2.9	0.77	刀身3.75cm, 6.1.65cm 915

第25図 8号溝出土遺物

24号溝（第26図1）

土師器

环（内黒） 1はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す环である。内面のミガキは、横位ミガキ後、口縁部付近まで達する暗文風の放射状ミガキが施され、さらに下位に2段の放射状のミガキを施す。器厚は極めて薄い。



図版	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	分類	調査		備考	実測番号
							内面	外側		
1	E-6	24号溝 破片層	800	土器部	14	14号第1層(内黒) 黒色処理	ロクロナゲ	出土に近い計測のもの含む	151	
2	E-5	33号溝	地土	(元)	4.0×1.6	孔径(cm)	壁厚(cm)	壁厚率%		

第26図 24号・33号溝出土遺物

30号溝（第27図1～6）

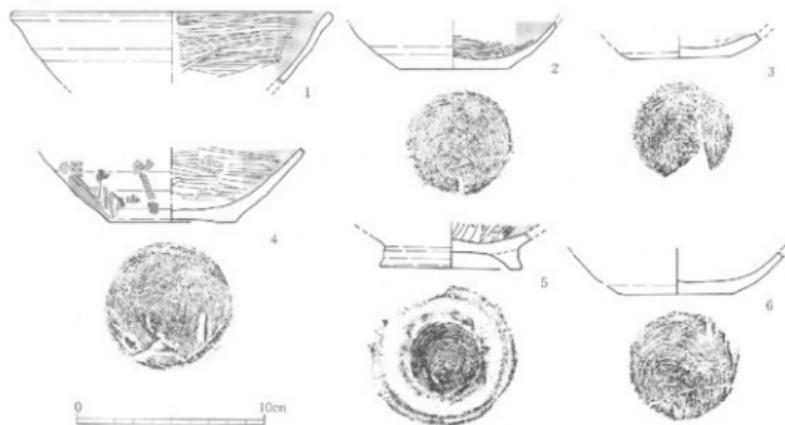
土師器

环（内黒） 1～4はロクロ調整後、内面にミガキ、黒色処理を施す环である。いずれも回転糸切り無調整と考えられる。2の底部外面には4条の平行沈線が認められる。4はロクロ調整後、体部外面にナデが認められるが、調整を意図したものか判断できない。

台付环（内黒） 5は台付环で环部内面はミガキ・黒色処理を施す。

須恵器

环 6は灰白色を基調とする須恵器环である。底部外面には2と同様の沈線が2条認められる。



団数	量	件	遺物 番号	種	形	加	分類	調		型	施	考	実測 番号
								内	外				
1 4	片	871	土師器	輪	N4		I a	ミガキ（内）黒色処理	ロクロナデ				168
2	片	872				x	I	黒色（ミガキ）黒色処理	ロクロナデ	底部 回転糸切り			167
3 4	片	873				x	x	ミガキ、黒色処理	x	x			170
4	x	x	x			x	I c	x	x	側部 ロクロナデ→トテ	x		171
5	x	x		土師器	高台	15	1	黒色（ミガキ）黒色処理	側部 ロクロナデ	x	船上にない形状のもの含む。		169
6	片	872	須 惠 器	輪	N5	-	ロクロナデ		x	x			-

第27図 30号溝跡出土遺物

32号溝（第28図1～8）

土師器

环（内黒） 1～3はロクロ調整後、内面はミガキ・黒色処理を施す。1は底部外面に9条以上の平行沈線がみられる。2は底部外面に記号の一部が認められる。

高台环 5は高台环の底部破片である。

坏（赤焼） 4・6はいわゆる赤焼土器の坏である。6の底部外面には1条の沈線が認められる。

金属製品

鉄製品 7は棒状の鉄製品で後述する中世の火箸としたものと類似する。

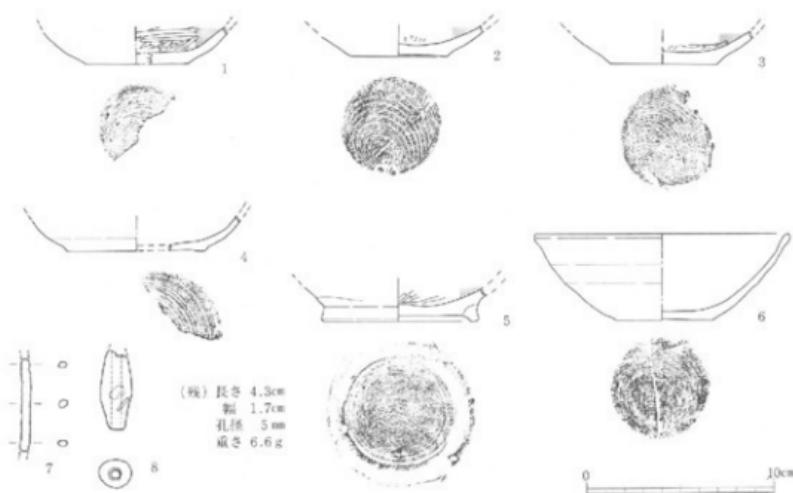
土製品

土鍤 8は管状の土鍤である。重さ6.6gである。

33号溝

土製品

土鍤 第26図2は埋土中より出土した土鍤である。長さ4.9cm、重さ11.0gである。



回数	置き位	遺物番号	種類	形	質	測定		備考	実測番号
						内面	外面		
1	埋土器(4~6層)	766	土鍤	筒	1	1.7cm	褐色結構	鋸部：クロナゲ 鋸部：縦軸 stri	110
2	土	878	*	*	*	*	*	*	丸形大ノコ状底？
3	*	*	*	2	*	*	*	*	121
4	*	763	*	2?	ログナナ？(又は1才キ)	*	*	*	船上に石い封状のもの含む
5	*	876	土鍤器	高台形	1	鋸部：1.2cm(鋸削狀)	褐色結構	*	125
6	*	*	赤焼土器	筒	3	ログナナ	*	*	内面に船用時の付着物みう
<hr/>									
E66. グリット									
底 砂 層 位 種類 形 質									
底砂層									
7	E-2	32号溝	埋土	*	灰	(底) 1.40	0.5	=	1.9 ± 0.30

第26図 32号溝跡出土遺物

(4) 土壙 (第29図)

ここでは、平安時代の土壙のうち、I期(後述)以前のものを扱う。ただし、平安時代でもI期以前のものがあることは以後か判断できないものもここで扱うこととする。さて、こうした条件に合った土壙は合計18基存在する。また、形態分類は後述する中世以後の分類に従っている。

I期以前の土壙………4号・15号・16号・17号・18号・19号・20号・21号

43号・44号・49号・51号・52号

I期以前か以後か不明の土壙………6号・25号・30号・31号・40号・50号

このうち、15号土壙は平安以前に遡る可能性もある。19号・20号土壙は焼土を伴い、49号土壙は火山灰の堆積がみられる。また、21号土壙は土器の出土量が豊富で、住居跡の貯蔵穴の可能性も考えられる。また、18号土壙は自然堆積と考えるには、やや不自然な状況を示す。

次に形態別にみると以下のようなになる。

A I タイプ 25号・51号

C I I タイプ 18号・31号

A II タイプ 6号・52号

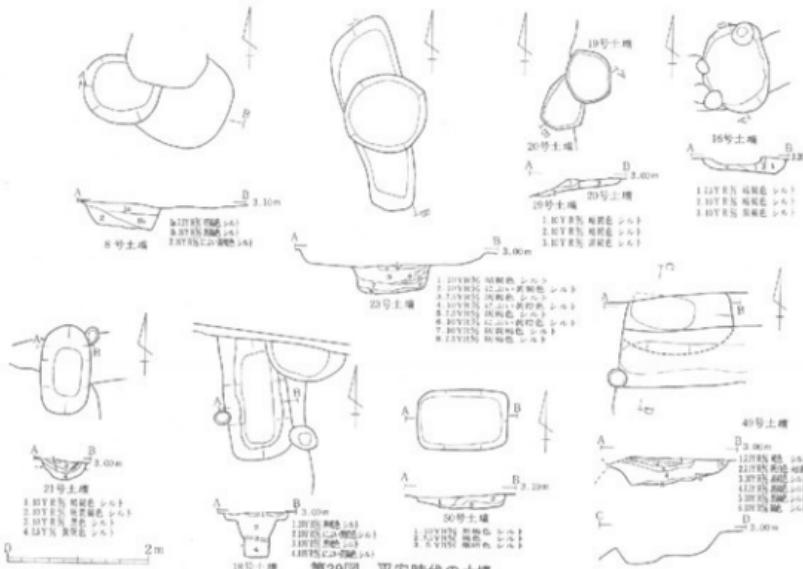
C I I I タイプ 30号

B I I タイプ 16号・19号・20号

形態 不 明 4号・15号・43号・41号

40号・(49号?)

B II タイプ 17号・21号



第29図 平安時代の土壙

上記のものをみると、円形や楕円形が主流を占める。方形のものは、後出の傾向がありそうである。

出土遺物

土壌から良好な形で出土する遺物は極めて少なく、しかも図化できないものがほとんどである。18号・21号土壌は出土遺物が多く、逆に特異な感じがする。

4号土壌（第82図17）

石製品

砥石・磨石 各1点出土している。

16号土壌（第30図1）

土師器

环（内黒） 1はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り無調整である。

測定	アリット	直 構	部位	大きさ(長さ×最大幅(cm))	孔径(cm)	重さ(g)	登録番号
0	/	10cm	3 F-2 28号井戸口	底 (底)3.8×2.2	0.5cm	13.7	942

測定	アリット	直 構	部位	横 穴		登録番号
				内 面	外 面	
1 A-1 16号土壌	性 土	1 土師環	1 車輪 ミガキ 磨器 上部(底付近)ロクロ無 調整	ミガキ ロクロナメ	16号土壌無	42
2 E-3 25号井戸	4種(24個)	794 土師環	— 車輪 ミガキ	ロクロ ミガキ ナメ	手形無孔無	130

第30図 16号土壌、25号・28号井戸出土遺物 2のみ

18号土壌（第31図1～4）

土師器

环（内黒） 1・2はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。1は回転糸切り無調整である。いずれも、体部外面のロクロ痕が比較的明瞭で、体部は外傾して立ち上がるものである。

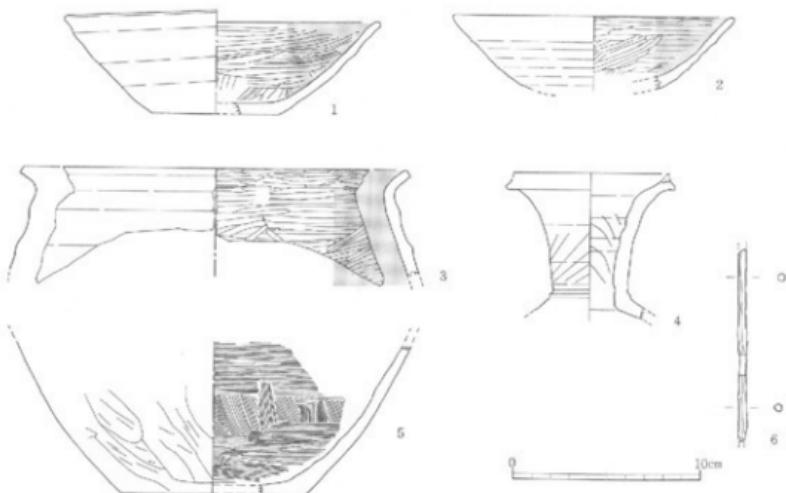
甕（内黒） 3はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。外面にヘラスズリが加えられるのかは不明である。

須恵器

長頸壺 4は灰白色（半環元）を呈する長頸壺である。口縁部の内外面にはシボリ痕が認められる。また、頸部には凸帯が巡ぐる。

甕 5は甕の底部付近の破片である。外面にはヘラケズリ、内面はナデが施されている。
金属製品

鉄製品 6は長さ10.3cmの棒状鉄製品である。性格不明であるが、中世の火箸としたものに類似する。



測定	著者	測定番号	種類	種類	分類	測定				備考	測定番号
						内面		外面			
1	篠生	1012	土器	器	1c	内側	無地（カヌイ目）	外側	無地	動土に白い影のもの含む。	107
2	+	101	+	+	+	ミガキ	黑色處理	+	ロクロナゲ	周縁	回転糸切り
3	+	1012	土器	器	1b	+	+	+	+		108
4	+	+	土器	器	1b	+	ロクロナゲ	+	+		109
5	+	+	土器	器	1b	+	ミガキ	+	テヌリ	内側	白色處理の跡あり。
										外側	白色處理の跡あり。
										底部	縫合り状の自然縫。

測定	アリット	測定	種類	種類	分類	測定				備考	測定番号
						高さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重さ(g)		
6	F-S	18号土壌	北風	鉄製品	鉄	(底)10.3	2.4	0.4	0.4	1.44	421

第31図 18号土壤出土遺物

21号土壤 (第32図 1 ~ 5)

土器

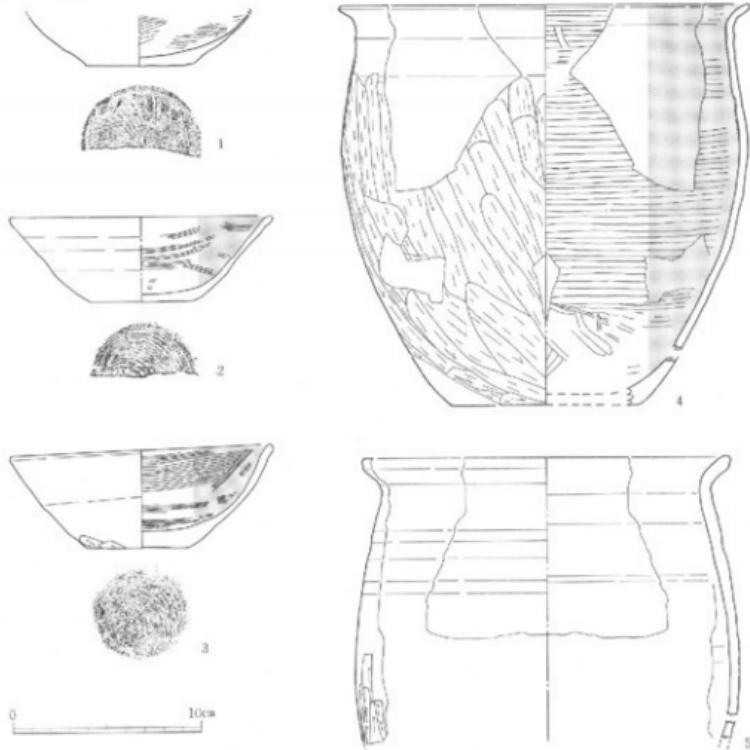
坏 1はロクロ調整後、内面にミガキを施すが黑色処理は行なっていない。器厚は口縁部附近が1mmと極めて薄い。底部は回転糸切り無調整であるが、糸切りを二度行なっている。

坏 (内黒) 2・3はロクロ調整後、内面にミガキ、黑色処理を施す坏である。両者ともミガキの条の幅は狭まい。3は底部の器厚が厚く、安定感がある。また、底部付近の一部にケズリが認められるが、調整を意識したものか不明で、回転糸切り無調整と考えられる。2も回転

糸切り無調整である。

図4はロクロ調整後、外面は体部下半へラケズリ、内面はロクロによるミガキ後、黒色処理を施す。内面ミガキは底部付近では不規則となる。口径と高さがほぼ等しい。口縁部は短い。

5はロクロ調整後、体部外面にヘラケズリを施す長胴甕である。口縁径は短く、口唇部断面は丸味が強い。



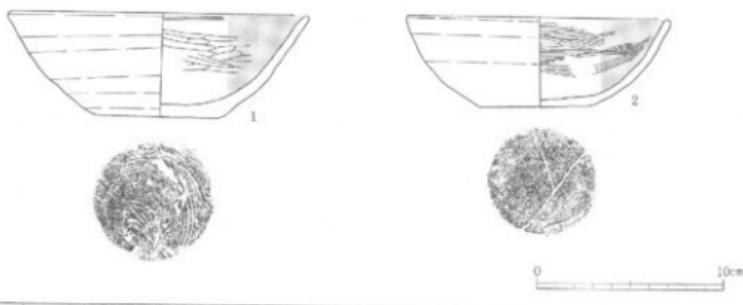
回数	解説	遺物 番号	体 積	分類	調 整		備 考	実測番号
					内 面	外 面		
1	埋土下部	1013	土器器体	2	ミガキ	圓底 ロクロナデ 黒色 細軸糸切り	粘土に白い斑状のもの含む	155
2	*	1020	ノ	1 C	ミガキ(板)黒色処理	口縁 四脚 ロクロナデ ノ	ノ	157
3	*	924	ノ	1 a	ノ	圓底 平底 ロクロナデ ノ	ノ	154
4	埋土上部	907	土器器底	2 b	ノ	口縁部 ロクロナデ 新品 ノ		153
5	埋土下部	923	ノ	2 a	ロクロナデ	口縁 制版 ロクロナデ 新品 下端ケズリ		159

第32図 21号土壤出土遺物

49号土壙（第33図）

土師器

环（内黒） 1・2はロクロ調整後、内面にミガキ・黑色処理が施される。いずれも回転糸切り無調整である。1の底部外面には沈線が2条以上認められる。

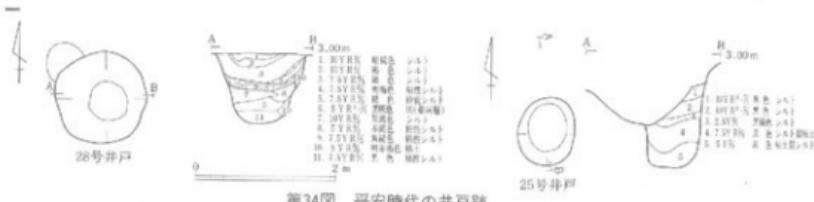


深度	層位	遺物 番号	種類	分類	調 整		重 量	実測 番号
					内 面	外 面		
1	埋土	975	土師器	1	ミガキ 黒色貼模	口縁 制部 ロクロナデ 通部 回転糸切り	既成あり	173
2	2	926	2	2	2	2	既成なし 器底に白い針状のもの含む	174

第33図 49号土壙出土遺物

(5) 井戸跡

平安時代に属する井戸跡は、2基（25号・28号）確認されている。井戸跡の特徴は第23表を参照されたい。井戸の形態（中世の井戸参照）は、25号がBタイプ、28号がAタイプである。



第34図 平安時代の井戸跡

出土遺物

25号井戸跡（第30図2）

土師器

皿2は内外面ナデの手捏ね小皿である。本例と類似するものに、岩手県平泉町毛越遺跡（高橋信雄：1982）より出土の皿があり、本例は12世紀代のものと考えられる。

28号井戸跡（第30図3）

土製品

七鍾 3は長さ3.8cm、重さ13.7gの土鍾である。

他に土師器環・甕・壺(赤焼)の細片が出土している。

以上、これらの井戸跡出土の遺物は極めて少ない。しかし、25号井戸跡出土の皿は貴重な発見であった。この25号井戸跡が、ほぼ12世紀のものと考えられることから、前述した2号住居跡に関連する可能性もある。また、28号井戸跡の年代は、平安時代と考えられるが、詳細な時期は不明である。1号住居跡と関連するものであろうか。

(6) その他の出土遺物

ここでは、基本層位III層、II層、表採、中世以後の造構などより出土した遺物を扱う。

III層(第35図1~3、9)

土師器

环 1~3はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。1・3は回転糸切り無調整である。2は底部切り離しは不明である。また、底部外面には幾位のナデ、ケズリが散発的にみられる。内面のミガキは放射状のものが最終調整となる。

甕 9は赤褐色を呈する甕の口縁部である。口縁部は長く、器厚が厚い。

II層(第35図4~7、8)

土師器

环(赤焼) 4~7はロクロ調整のみのいわゆる赤焼土器環である。7の底部外面には1条の沈線がみられる。

高台环(内黒) 8はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。底部は回転糸切り後に台を貼り付けている。

表採・出土地点不明(第35図5、6)

土師器

皿(赤焼) 5はいわゆる赤焼土器皿である。底部は回転糸切り無調整である。

环 6はロクロ調整後、内面にミガキを施す。黒色処理は行なっていない。底部は回転糸切り無調整である。本例は整理中に帰属不明となったものである。

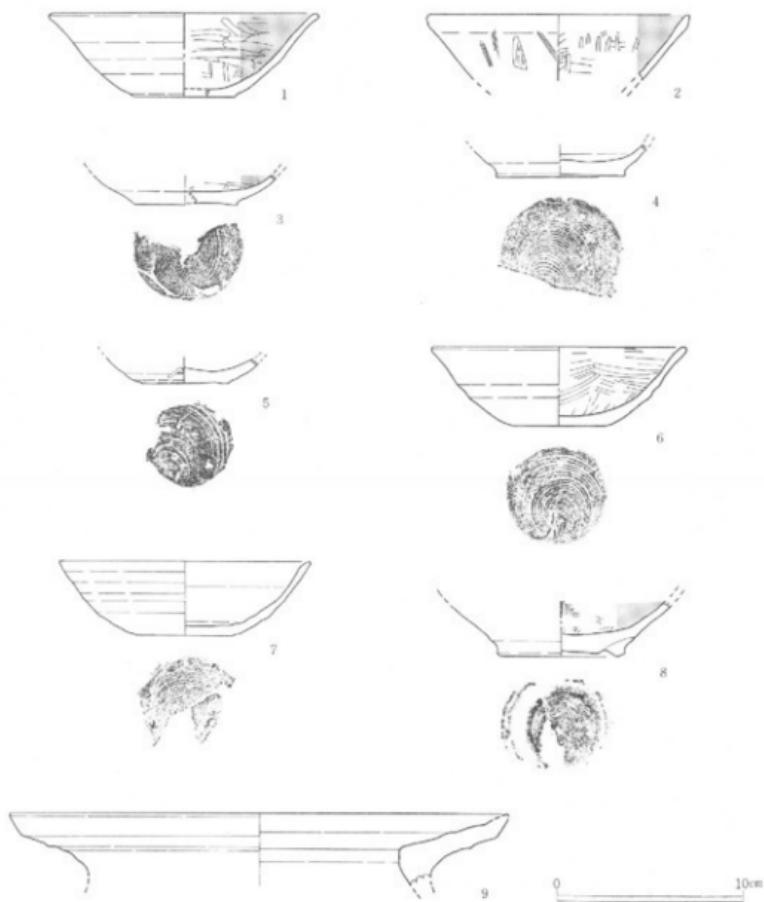
中世以後の造構出土土器(第36図1~16)

土師器

环(内黒) 1、3、5、7は、ロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。いずれも回転糸切り無調整である。3の底部外面には沈線が1条認められる。

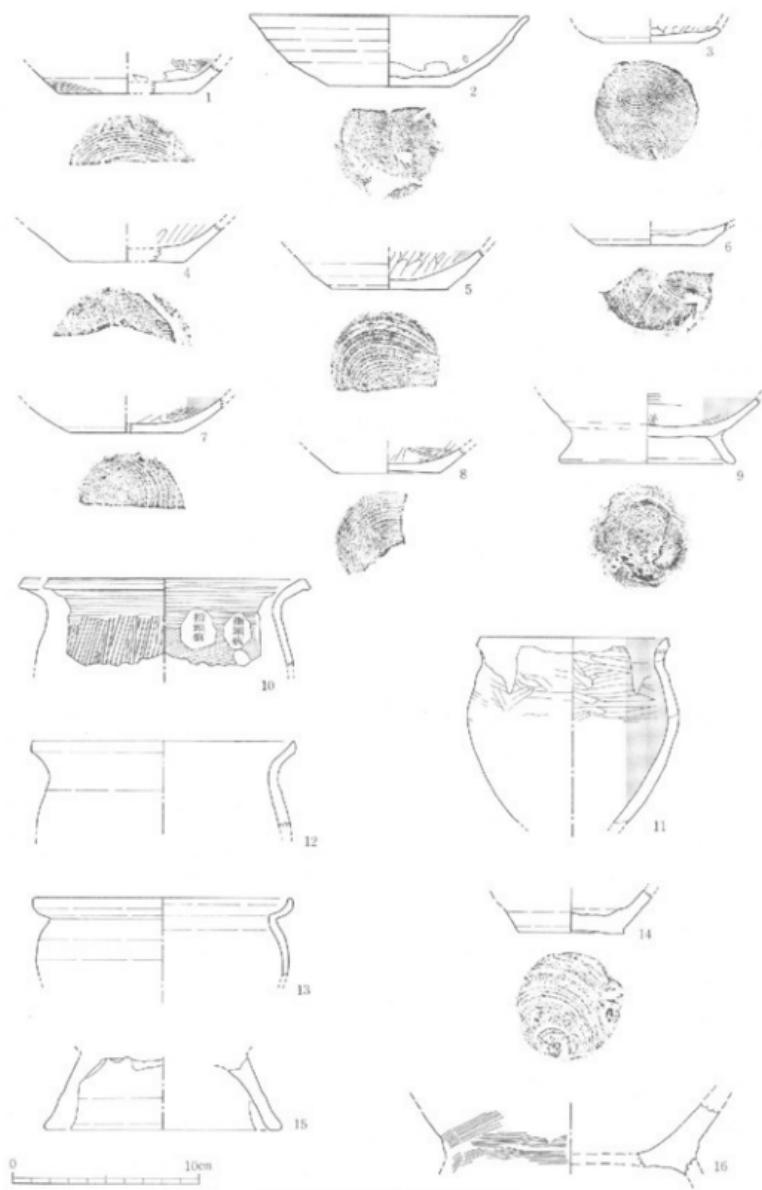
环(赤焼) 2~6はロクロ調整のみの、いわゆる赤焼土器環である。いずれも回転糸切り無調整である。6の底部には「×」の記号がある。

环 4~8はロクロ調整後、内面にミガキを施す。黒色処理は行っていない。4の底部外面



図名	アリット	層	発見番号	形	測		備考
					内	外	
1	E-8	III	16	土器	1.5	1.9	セラミック
2	F-1-3	-	817	-	1.0	*	セロタフ
3	E-2	-	285	-	1.6	1.6	セラミック
4	G-8	II	291	?	(未測)	3	セロタフ
5	F-2	古	167	?	(未測)	*	*
6	地	不	不	-	1.6	2	セロタフ
7	F-2	II	283	?	(未測)	3	セロタフ
8	E-3	-	82	?	西面	1	セラミック
9	A-7	II	460	-	黄	2.1	セロタフ

第35図 III層・II層出土遺物、表探遺物



第36図 中世以後の遺構出土土器

には平行する沈線が2条ある。

高台杯(内黒) 9はロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理を施す。

甕 10は口縁部横ナデ、体部外面刷毛目の小型の甕である。内面は体部ナデ後に指頭痕が三ヶ所につく、土器の特徴から平安時代のものと考えられる。11は内外面にミガキを施し、内面を黒色処理した小型の甕である。

甕(赤焼) 12~14はいわゆる赤焼土器甕である。いずれも小型で、14は底部が回転系切りである。また、13の口縁部は内寄りぎみに立ち上がる特徴をもつ。

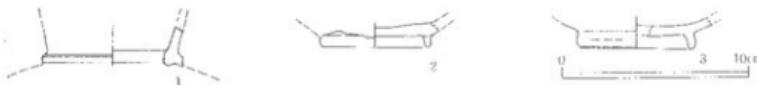
台付鉢 16は台付の鉢と考えられる。底部から台部にかけて、不規則なナデが認められる。器種不明 15は土師器環あるいは皿の高台部と考えられるが、詳細は不明である。

第4表 中世以後の遺構出土土器

件名	アーチ	造形	層位	造物番号	地	形	部位	測定	内面	外	施	備考
1	E-6	5号壺	灰	208	三脚	丸	二		ミガキ・黒色処理	手縫・ロフリマテ	裏窓・細孔・切り	内面に底脚有り
2	B-5	11号壺	灰	402	X	丸	一		手縫	ロフリマテ	X	
3	A-5	X	1	492	X	丸	一		ミガキ・赤色処理	裏窓	ロフリマテ	
4	B-5	X	2	507	X	丸	一		ミガキ・赤色処理	X	X	手・コロナ
5	B-3	15号壺	青	1	407	丸	一	1.7	ミガキ・赤色処理	X	X	脚・口付少しある
6	E-4	11号甕	青	527	Y	丸	一		ロフリマテ	X	X	脚部に付属足跡あり
7	E-8	5号甕	灰	271	X	丸	一		ミガキ・赤色処理	X	X	
8	E-3	10号甕	灰	203	X	丸	一		ミガキ	X	X	脚部に付属足跡のもの有り
9	E-4	11号甕	灰	509	13号甕の内	丸	一		ミガキ・赤色処理	X	X	
10	B-6	5号甕	灰	215	三脚	丸	一	1.6	ミガキ・手縫	脚窓・手縫	手縫・脚窓	X
11	E-4	22号甕	灰	520	X	丸	一	1.6	ミガキ・赤色処理	ミガキ		
12	E-8	18号甕	灰	1-2	270	三脚	丸	1.7	ミガキ・手縫	ミガキ		
13	E-4	11号甕	2-3号	607	X	丸	一		ミガキ		X	
14	E-2	21号甕	灰	425	X	丸	一		脚窓・ロフリマテ	脚窓・脚窓		
15	E-4	28号甕	井上灰	508	1-3号甕の内	丸	一		ロフリマテ	ロフリマテ		
16	E-5	21号甕	1	553	底部に若干剥落	丸	一		ミガキ		X	

陶器(第37図1~3)

1、3は灰釉の水瓶(12世紀)と碗(10世紀後半)である。2は緑釉碗である。



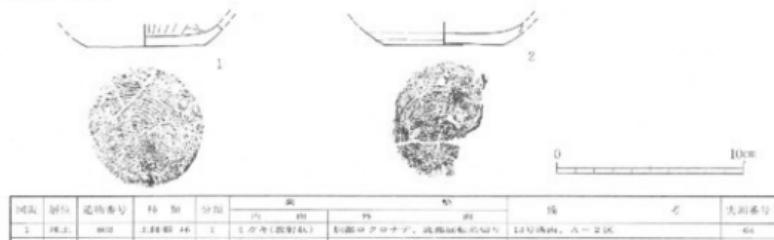
回数	アーチ	造形	層位	造物番号	地	形	部位	測定	内面	外
1	E-2	31号瓶	埋土下前	598	水	瓶	底	12×10	灰釉(円筒7.5×H16) 瓶底	
2	E-2	9	3号	1506	灰	瓶	底	10×7	46瓶	
3	B-5	4号碗	2	434	灰	碗	底	10×8	底	内面素燒している。瓶底の沈線。

第37図 平安時代の陶器

時期不明のビット（第38図1、2）

土師器

環 1はロクロ調整後、内面にミガキを施すが黑色処理は行っていない。2はロクロ調整後の内面調整は磨滅しているために不明である。これは1と同様のものか赤焼土器になるのか判断できない。



第38図 時期不明のビット出土遺物

須恵器（第39・40図）

須恵器は合計358点出土し、その内訳はI区255点、II区104点である。これらは少なくとも古墳時代と平安時代のものが混在していると考えられる。しかし、縞片が多く明確な時代区分ができるるものも存在する。観察の結果では、9割以上が平安時代のものといえよう。

須恵器は、古代の土器総数の約4%であり、また、仮にすべてが平安時代のものとすると、平安時代の土器・陶器数の約13%である。いずれにしろ出現率は低い。

器種別にみると、甕の破片が圧倒的に多く約82%を占める。次いで环約8%であり、他は長頸壺や器種不明のものである。环の減少は、土師器（赤焼）环の増加と補完的な関係にあるためであろう。なお、环はいずれも回転糸切り無調整である。

平安時代の須恵器には、環元したものと灰白色の半環元状態の大きく2種類がある。前者は甕と長頸壺があり、後者には环と長頸壺がある。このような現象はどのような意味をもつものであろうか、器種別に異なる窯から供給されるのであろうか。

最後に、遺構に伴うものは、すでに述べたので、ここでは、他の時代の遺構あるいは包含層出土のものについて概観しておきたい。

环（第39図）

第39図1～4は、いずれも灰白色を基調とする半環元状態の环である。体部外面にロクロ目残すものはほとんどない。1・2のように外傾しながら立ち上がるものが多いため、3のごとく、やや内弯ぎみに立ち上がるものもわずかにある。4は器形の特徴は不明であるが、底部内面に螺旋状の工具痕がみられる。また、2・3の底部には、回転糸切り後につけた教条のほか

平行する沈線がみられる。この圧痕は、底部切り離し後にスノコ状のものに置いたためについたものであろう。このような例は、図示しなかったものや土師器にも認められる。なお、2の体部外面の圧痕は、糸切り用の糸が流れたものであろう。

これらは、平安時代に属する遺構のうち、比較的古い溝に灰白色火山灰（10世紀前半）を伴うことや無調製の十輪器環の存在から、これらの环類もおよそ10世紀以後のものであろう。

甕（第39図6～9、第40図1～9）

甕は第39図6～9、第40図1～9がある。第39図6は小型の甕で口縁部が肥厚する。同図8の頸部付近には、叩き用工具の先端部圧痕が残る。同図9や第40図5・6・8は、体部の叩き目の条がかなり大きい。逆に、第40図7は目が細かく、密に叩かれており、内面には青海波文（同心円文）がみられる。これは他に比べ古い特徴である。この7のように青海波文をもつものは少なく、大半は内面がナデである。第40図1・2・4は、口縁部外面に波状文を施すものであるが、前述の青海波文と同様に数量は少ない。また、本遺跡の須恵器の特徴に第40図4・9のように、ヘラ状工具の木口部によるものと考えられるナテ調整をもつものがある。甕の口唇部形態は、第39図7・8や第40図2のようにあまり特徴のないものが多い。

甕も壺と同様の理由から、およそ10世紀以後のものであろう。

長頸甕（第39図5・10）

長頸甕はわずか9点出土している。図示できるものは第39図5・10と18号土壙の1点がある。5・10はいずれも底部付近の破片であって、全体的な特徴は不明である。いずれも底部内面のロクロ口が明瞭である。10の底部外面には、ロクロ台（？）の圧痕がみられる。

長頸甕も壺・甕と同時期と考えてよいであろう。

以上、須恵器について概観してきたが、これらは、白鳥編年（白鳥良一：1980）によるE・F群土器と類似するものである。したがって、これらの須恵器はおよそ後半段階（10世紀～11世紀）の製品であろう。

5. 中・近世の検出遺構

中・近世の遺構には、溝跡・橋跡・掘立柱跡物跡・井戸跡・土壙・ピットがある。調査時に汚水や梅雨と重なり、遺物の所属が不明なものや、特に井戸跡は断面実測中に土層の崩壊したこと等、細部にわたって十分に特徴をつかむことができなかつたものもある。

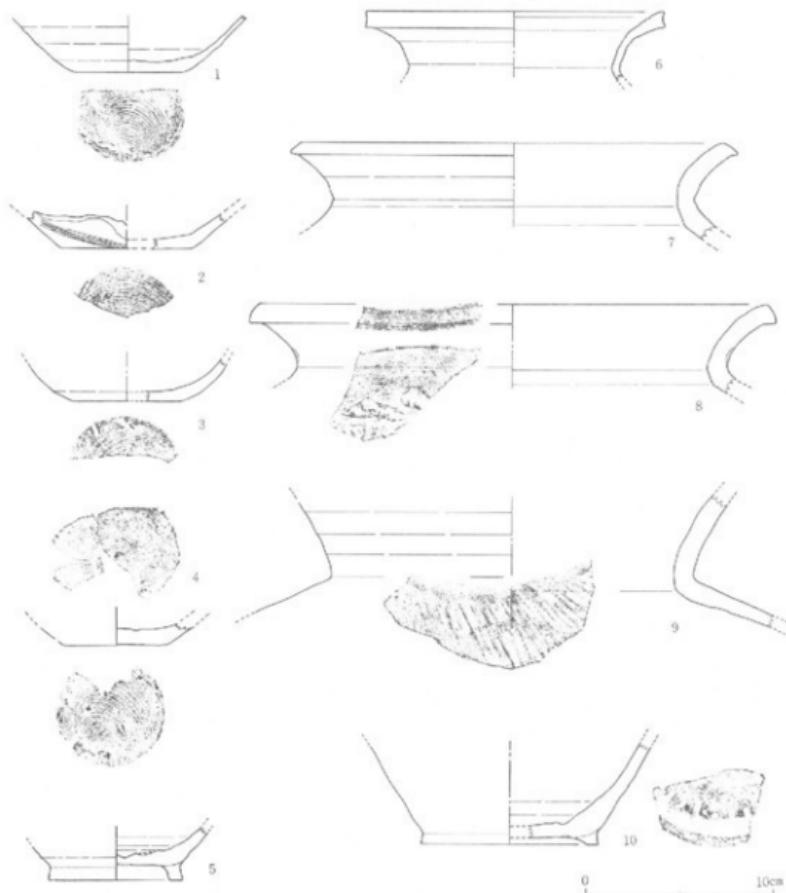
遺構の年代観は、出土遺物や切り合い関係から以下のように考えられる。

I期 平安時代末から鎌倉時代中期（およそ12世紀～13世紀中）

II期 鎌倉時代後半から南北朝時代初期（およそ13世紀後半～14世紀初）

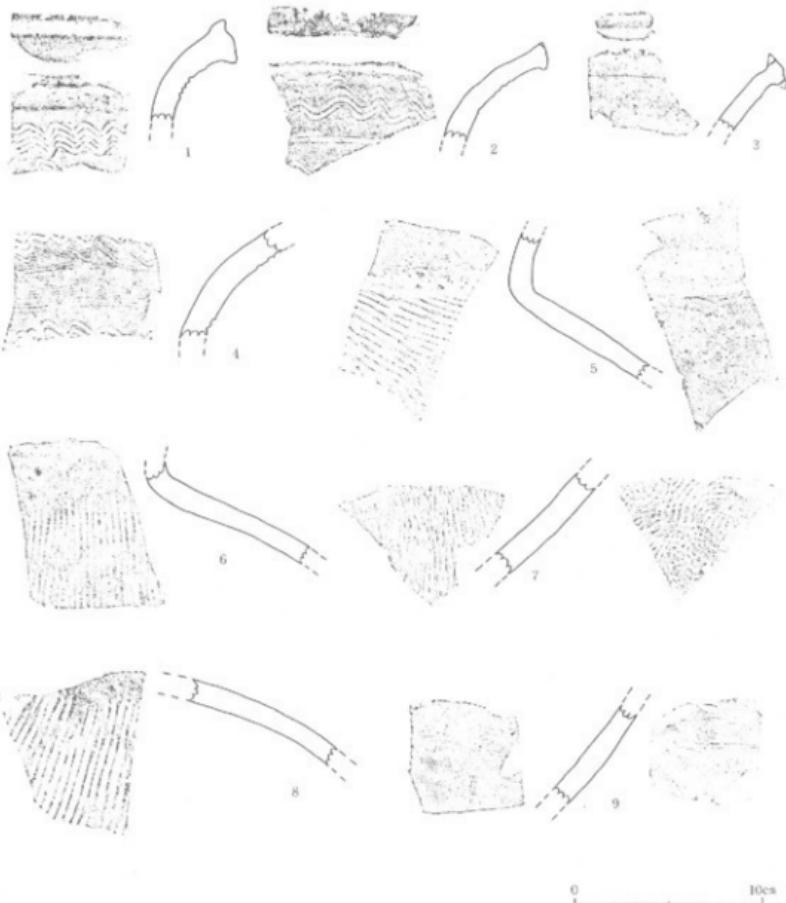
III期 南北朝時代から室町時代中期（およそ14世紀前半～15世紀後半）

IV期 室町時代末期から江戸時代初期（およそ16世紀前半～17世紀前半）



図版	グリット	地層	層位	出土番号	直径	断面	時期	内 容	外 容	考
1	B-7	-	(縦縫)	447	66	断面一輪縫	平安	ロクロナギ	斜面アラマサ、底面斜	
2	B-6	トモガワ	6層	3063	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
3	B-6	トモガワ	7層(上)	256	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
4	A-2	エモガワ	褐色土層	801	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ、スナフ	内面光
5	B-5	3号窯	土器裏面	480	長径	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
6	B-8	-	田端	446	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
7	F-3	20号窯	泥土	754	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
8	F-8	21号窯	1層	749	?	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ	内面に擦触し方木
9	F-3	11号窯	西土	842	?	断面一輪縫	?	ロクロナギ	斜面アラマサ、断面平	内面に木立物
10	B-6	3号窯	8層?	2017	断面一輪縫	?	?	ロクロナギ	斜面アラマサ、底	内面凹入もみ合む

第39図 基本層位・造構出土須恵器(1)



図版	クタード	遺 墓	地 点	遺物番号	目 標	部 分	時 期	内 容	外 在 特 徴	備 考
1	A-4	11号墓	埋土上部	200	鉄	部	18mm~22mm	手斧	ロクロナナ	日本製 ロクロナナ 三面に刃状欠損
2	B-8	2号墓	埋 土	478	鉄	部	20mm~22mm	手斧	ロクロナナ	日本製 ロクロナナ 三面に刃状欠損
3	x	1号墓	x	898	鉄	部	20mm~22mm	手斧	ロクロナナ	日本製 ロクロナナ 三面に刃状欠損
4	B-3	23号骨灰	アラク付	730	*	部	22mm	手斧	ナナ	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損
5	F-6	23号骨灰	1~2層	934	*	頭部	24mm	手斧	ロクロナナ	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損
6	A-4	11号墓	1 部	233	*	部	20mm~22mm	手斧	ナナ	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損
7	F-7	23号骨灰	2 層	891	*	部	20mm~22mm	手斧	ナナ	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損
8	x	x	2 层	629	*	部	20mm~24mm	手斧	ロクロナナ(面ナナ)	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損
9	D-6	5号骨灰	埋土上部	798	*	部	20mm~22mm	手斧	ロクロナナ(面ナナ)	日本製 ハケ目(木口加工) 三面に刃状欠損

第40図 遺構出土須恵器(2)

V期 江戸時代（およそ17世紀中期～19世紀前半）

溝跡（第41・42・43図）

ここでは各時期の特徴や問題点を述べ、個々の溝の特徴は第21表に示してあるので、ここではふれない。

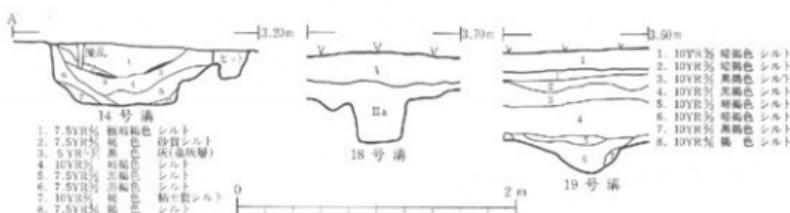
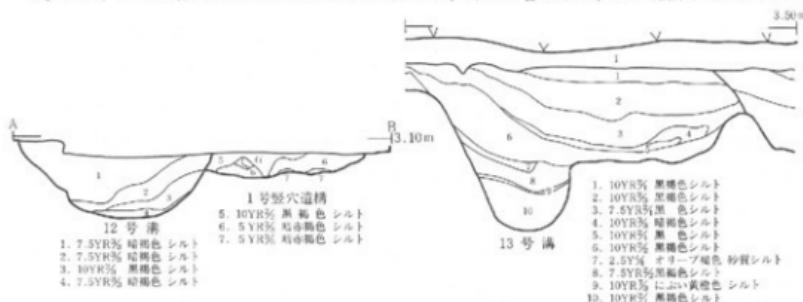
〔I期〕

I期に属するものは、3号・14号溝跡で、いずれも南北に伸びる。

なお、昭和54年度調査の12号溝もこの時期の可能性が強い。この溝も南北に伸びる。性格は不明であるが、方向に統一性があり、何らかの区画のための溝であろうか。3号・14号溝跡からは深美的な甕破片が比較的多く出土している。

〔II期〕

II期には館の成立に伴う堀が出現する。この堀には11号・21号・29号溝が該当する。堀に付属する溝に9号・27号・28号溝がある。このうち、11号溝と29号溝は切り合っており、29号溝が古い。したがって、II期のある時期に堀を改築している。29号溝埋土の特徴は、その上部%は人為的な堆積層で、多量の地山ブロック（IV層）の混入する土層である。11号・21号溝の埋土は、いずれも大別3層に分類でき、溝底や最下層（3層）から、およそII期の遺物が出土する。また、1・2層からはIII期の陶磁器類が出土し、特に1層からは、15世紀前半の瀬戸の製



品が多く出土する。

(III期)

III期には、II期に構築された溝跡（堀）が継続使用され、前述したごとく、15世紀前半にはほぼ埋没が完了する。また、この時期に構築される溝に10号・13号・15号・16号・31号溝跡がある。31号溝の溝底からは15世紀の青磁が出土し、また、16号溝が介在することによって、15号→16号→31号の順で構築されたことがわかる。断面形は15号溝がV字形（薬研堀）、16号溝は鍋底形、31号溝は箱形（箱堀）と様々である。これらはIII期でも比較的新しい期に構築されたと考えられる。おそらく、15号・31号溝は前述の11号溝が機能しなくなった時点で、新たに構築されたものであろう。とすれば、この2条の溝は堀としての性格をもつものとも考えられる。16号溝の性格は不明であるが、B-2区最下層より魚骨が出土し、注目される。10号溝は全く性格が不明である。この溝は11号溝より新しく1号溝より古い。前回の調査で16号溝としたものが該当する。13号溝は鍋底形の断面を示し、南側では隅丸長方形の土壌を伴う。性格は不明であるが、北側に位置する竪穴遺構と関連する可能性もある。15号・16号・31号溝は、出土遺物から判断して、遅くともIV期には埋没が完了している。

(IV期)

IV期に属する溝は、1号・2号・12号・18号・19号・25号・26号溝跡である。1号溝（第43図）は、断面形はほぼV字形になるか、南側の一部では薬研堀になる。この溝は前回調査の22号溝に該当し、さらに西側に伸びることがわかっている。何かを区画する溝であろう。詳細は後述するが、ほぼ同じ時期に須田玄蕃という人物が、居住していたことが文献にあることからこの溝は館に伴うあるいはそれを区画する堀と理解してよいであろう。この溝はII期の堀に次いで遺物の出土量が多い。主な遺物は明の染付磁器、黄瀬戸、志野、志野織部、唐津、土師質土器皿等がある。また、特異な例として、15世紀代の備前（？）窯があり、伝世品であろうか。1号溝に付属するのではないかと考えられる溝に2号溝がある。この溝は極めて浅く、埋土中に大型の炭が含まれる。12号溝は断面がU字形に近いもので、I区のみに存在し、II区には続かない。性格は不明である。18号・19号溝は規模が小さく、断面がほぼU字形を呈する。この2条の溝も性格が不明である。ただ、18号溝は18号掘立柱建物跡に平行して存在することから、関連性をもつものかもしれない。25号溝は断面がU字形を呈し、さらに東側に伸びる。溝の東側先端部より志野織部の皿が出土している。26号溝は断面が鍋底形を呈し、25号溝同様東側に伸びる。この2条の溝も北側の20号掘立柱建物跡に関連するものであろう。

(V期)

V期の溝は今回の調査では、確認されていない。



図62 図 中・近世の層 (11・16・21・26・29・31号) 實測図

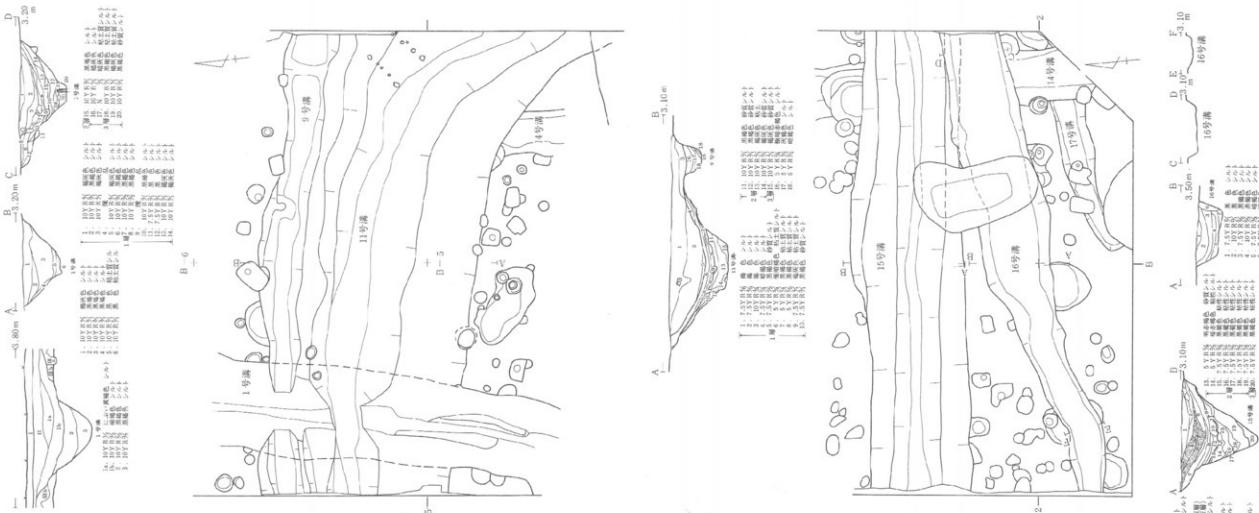
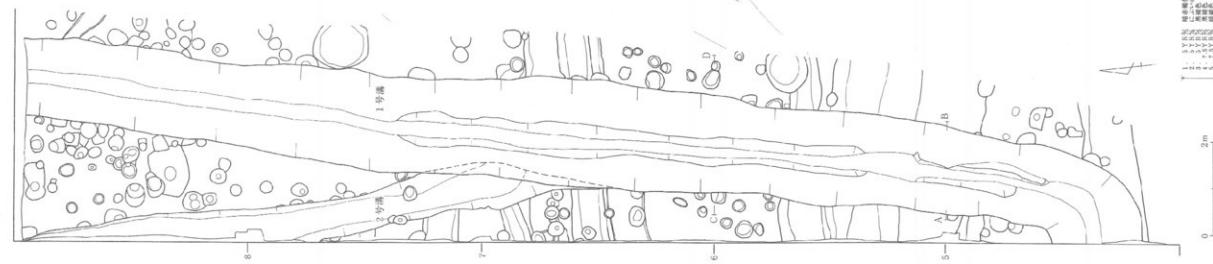


図45 中・近世の溝 (1・2・3・11・15) 実測図

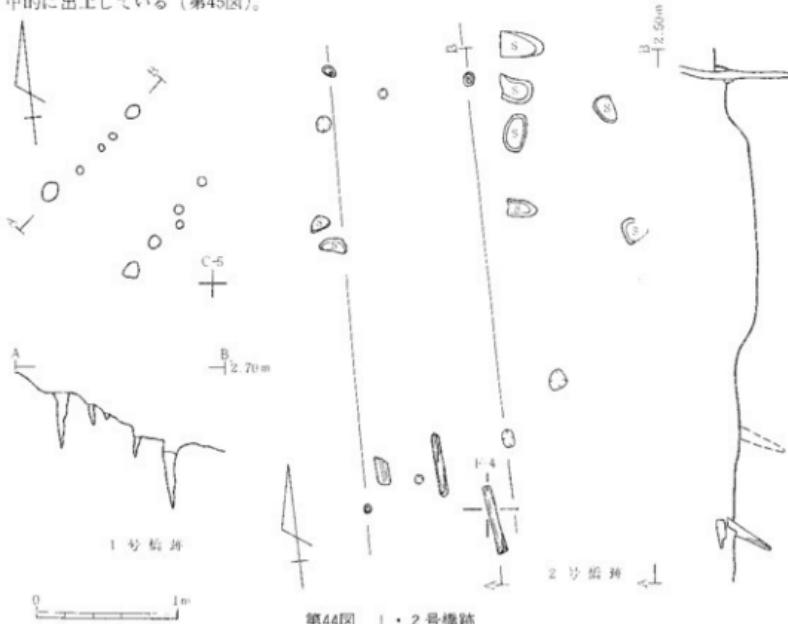
橋跡（第44図）

1号橋跡

11号溝北岸B-5区より、平行に並ぶ杭列を検出した。この杭列は、杭そのものは検出できなかったが、穴の形状から杭を打ち込んだものと理解される。列間の幅は約80cmである。特に西列のものは両端のものの径が大きく、その間のものは小さい。一応、橋として扱ったが対岸に同様の施設がないことから、洗い場のような施設とも考えられる。今後の類例を待って検討したい。なお、この橋跡の南側（溝の中心部付近）からは、比較的多くの漆器椀と1号木簡などが出土し、何らかの関連性があるものと考えられる。II～III期の施設と考えられる。

2号橋跡

11号溝E-2区の溝底より、杭や小型のピットが確認された。これらは、その出土状況から、橋脚の杭と杭穴と判断した。掘り方はほとんどみられず打ち込まれたものである。長さ約5.5m、幅約1mの橋跡と考えてよいであろう。北側の橋脚はほぼ垂直に、南側のものは70～80°の角度で打ち込まれている。また、この橋の東にこれと平行する石が4個検出されている。11号溝でも、II区内は最も遺物の出土が多く、特に動物骨・鏡・柄杓・曲物等が、橋跡付近より集中的に出土している（第45図）。



第44図 1・2号橋跡



第45図 11号・21号・29号溝主要遺物出土分布図(出土層位は考慮していない)

掘立柱建物跡（第47図）

今回の調査で確認できた掘立柱建物跡は25棟である。各建物跡の特徴は第22表に示した。今回の調査では、4類型8種の建物跡を検出した（第46図）。

A類 側柱式のもので、 2×2 間・ 2×3 間・ 3×3 間・ 3×4 間の4種類がある。ほぼ東西棟のものがほとんどである。

A₁ (2×2 間) 12号?、14号、21号・(23号)

A₂ (2×3 間) 22号（変則）

A₃ (3×3 間) 15号・18号

A₄ (3×4 間) 5号

B類 純柱式の東西棟で、すべて 2×2 間である。

この類型には、3号・13号・25号（変則）がある。

C類 側柱式の東西棟で南北側に庇を作うもの。

C₁ (3×4 間) 7号

C₂ (3×4 間、内部に柱をもつ) 8号

D類 側柱式の南北棟で、4種類に細分される。

D₁ (3×4 間) 6号

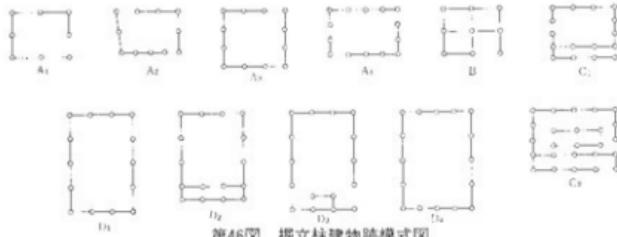
D₂ (3×4 間+庇) 10号、20号?

D₃ (3×4 間、内部の南寄りに柱をもつ) 9号、19号

D₄ (4×4 間) 4号

この他に分類不明のものに、1号・2号・11号・16号・17号・24号があるが、これらはおよそA類に属する可能性が強い。

本遺跡では、A・D類が最も一般的な建物構造と考えられる。B類は倉庫などが考えられようか。C₂類は主殿のような性格をもつものであろう。また、D₃類とした建物跡の南北の柱の配列は、入口のような性格をもつものと考えられる。I区の南北のA類に属する小型の建物跡（12号～15号）は、他のI期の埋土との類似性などから、I期頃の建物群と考えられる。21号

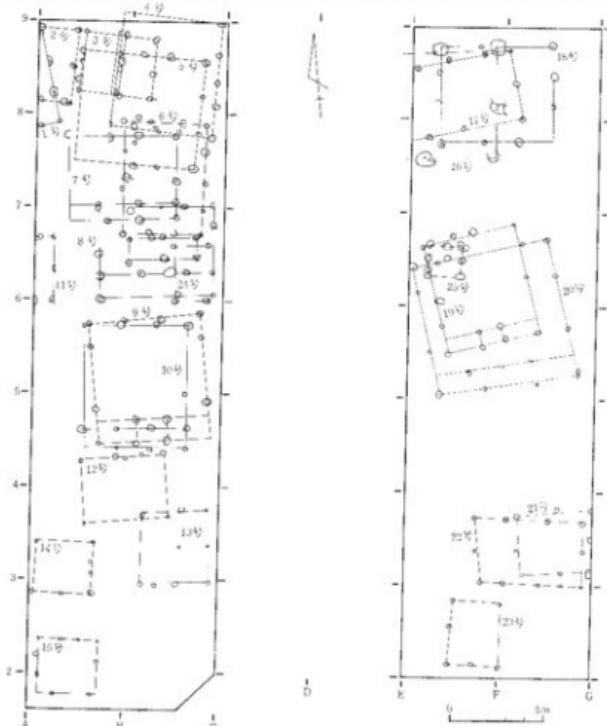


第46図 掘立柱建物跡模式図

は11号溝にかかる橋脚との関連性が推測される。つまり、この建物跡は見張小屋や作事小屋的な性格があったのではないかろうか。16号は大型の掘り方をもつもので、このような例は田畠に類似するものがあり、ほぼ同時期（V期）のものであろう。

各時期の建物跡（第22表）の間尺は、不揃いのものがほとんどであるが、I期は4～7尺と不規則で建物面積が狭い。II・III期はおよそ6～7尺ではば一定している。IV期はややばらつきが大きく6～8尺である。V期は建物が明確ではない。ところが、前回調査で確認された平安時代のものは、間尺が9尺で一定しており、中世のものとは極めて対称的で規則性がある。

ところで、鎌倉時代には引違いのふすまの出現に伴って、丸柱から角柱に変化したことが知られる（太田博太郎：1971）。また、仙台周辺の中・近世の建物跡に関して、興味ある指摘がある。すなわち、隣接する名取郡六郷村と宮城郡七郷村（現在はいずれも仙台市）では民家の間取りが違い、これは藩制以前の領主が異なることに起因するのではないかという（小倉強：1972）。これらの問題点は興味深く、今後の調査・研究の課題として指摘しておきたい。



井戸跡（第48、49図）

本遺跡より検出された井戸跡は28基である。このうち、I～V期に属するものは27基である。各井戸跡の特徴は第23表に示したので、ここでは扱っていない。およそV類型に分類することができる。

- A類 直径が1m前後で円形を呈し、断面が逆台形のもの。
- B類 直径が1m前後で円形を呈し、断面が円筒形のもの。
- C類 直径が1.5～2mで円形を呈し、断面が円筒形のもの。
- D類 直径が1.5～2mで円形を呈し、断面が円筒形で、ゆるい段をもつもの。
- E類 直径が1.5～2mで楕円形を呈し、断面が円筒形で、ゆるい段をもつもの。

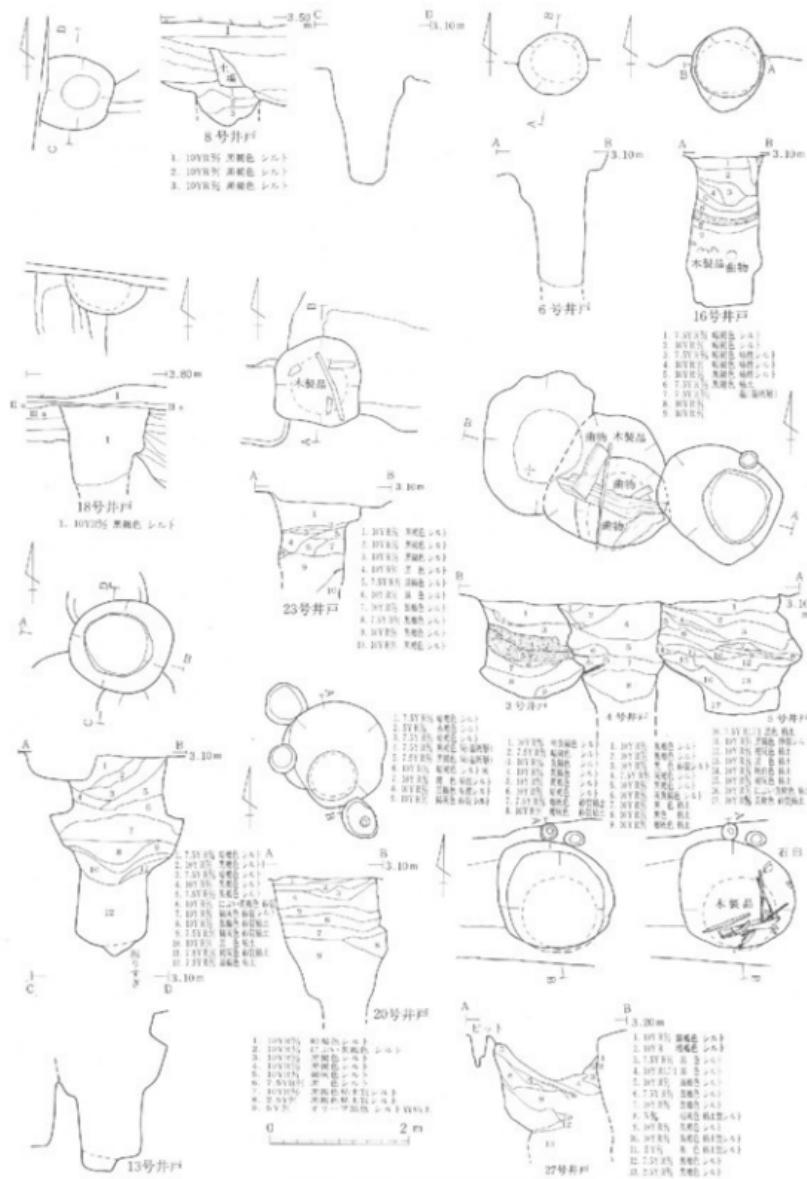
A類には、平安時代の28号井戸跡があるが、I期以後には今回の調査では確認されていない。B類には2号・6号・8号・14号・15号・16号・18号・23号・24号・25号がある。C類には3号・4号・13号・19号・20号・27号がある。D類には5号・9号・10号・11号・12号・21号・22号がある。E類には1号・7号がある。分類できないものには17号・26号がある。時期的な傾向としては、B類はI・II期に多く、その他にはC、D類がII～III期にやや多いが、さほど時期的傾向はない。井戸の分布には偏在性があり、I区の中央から南間に多く分布する。V期の井戸は1基（19号井戸）だけであるが、後述するIII区では集中的に検出されている。V期を除けば、時期別の増減はあまり認められない。

今回調査した井戸跡で、井戸枠材が出土した例は、2号・4号・12号・15号・23号・27号である。

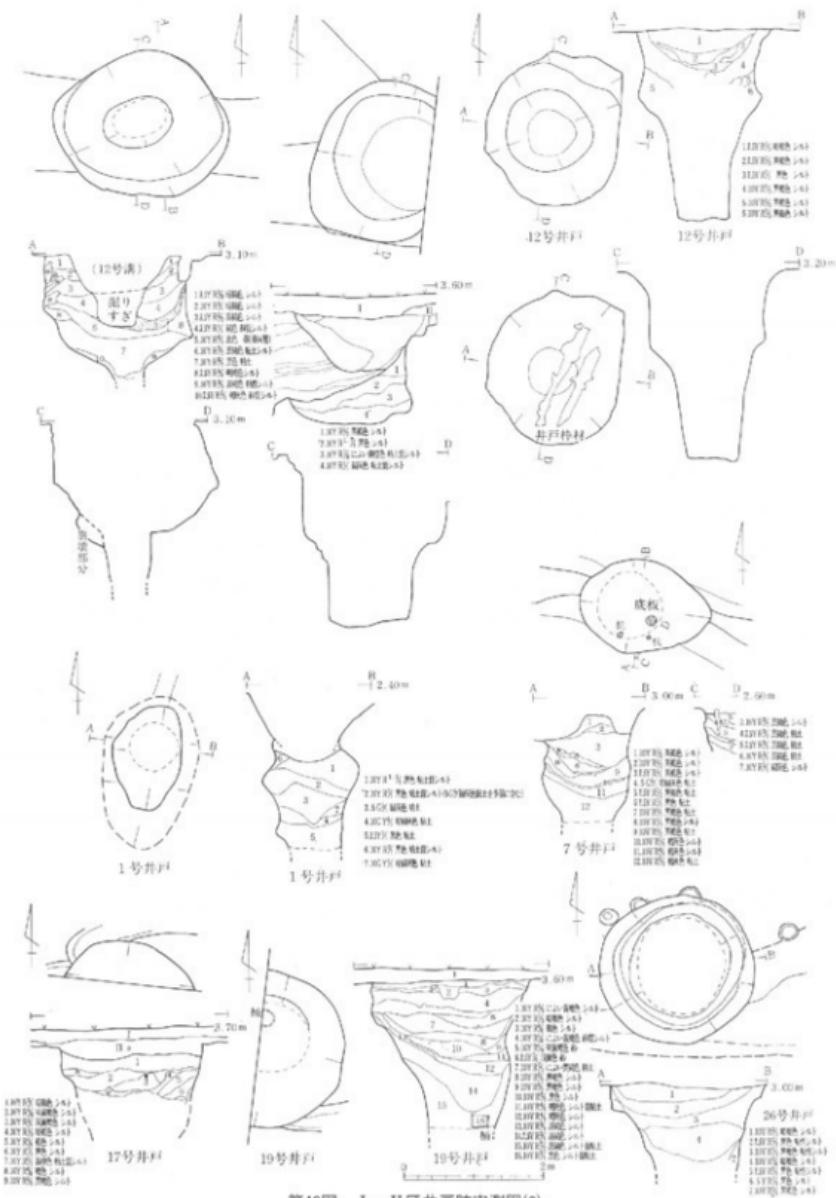
土壙（第50・51図）

本遺跡より検出された土壙は54基である。このうち、I～IV期に属するものは38基である。V期に属するものは明らかでない。さて、各土壙の特徴は第24表を参照されたい。これらの土壙は、およそ4類型12種に分類できる。土壙の平面形は、円形のもの（A）、楕円形を基調とするもの（B）、隅丸方形を基調とするもの（C）、不定形のもの（D）がある。断面は鍋底形（I）、皿形（II）、舟底形（III）がある。これらは、さらに細分できるものがある。B型には楕円形（B₁）と長楕円形（B₂）が、C型には隅丸方形（C₁）と隅丸長方形（C₂）がある。分類はこれらの条件の組合せによって行った。なお、平安時代の土壙も（ ）を付して明記した。

- A I型……7号・8号・11号・23号・25号・36号・（51号）
- A II型……6号・（53号）
- B₁ I型……9号・15号・（19号・40号）
- B₁ II型……33号・46号・（17号・21号）



第48図 I・II区井戸跡実測図(1)



第49図 I・II区井戸跡実測図(2)

B₂I型……34号

B₂II型……32号？（C型の可能性もある）

C₁I型……1号・14号・24号・26号・28号・29号・35号・37号・41号

（19号・20号・40号）

C₁II型……（30号）

C₁III型……50号

C₂I型……2号・3号・38号・39号・47号（長軸と短軸の差が2倍を越えるもの）

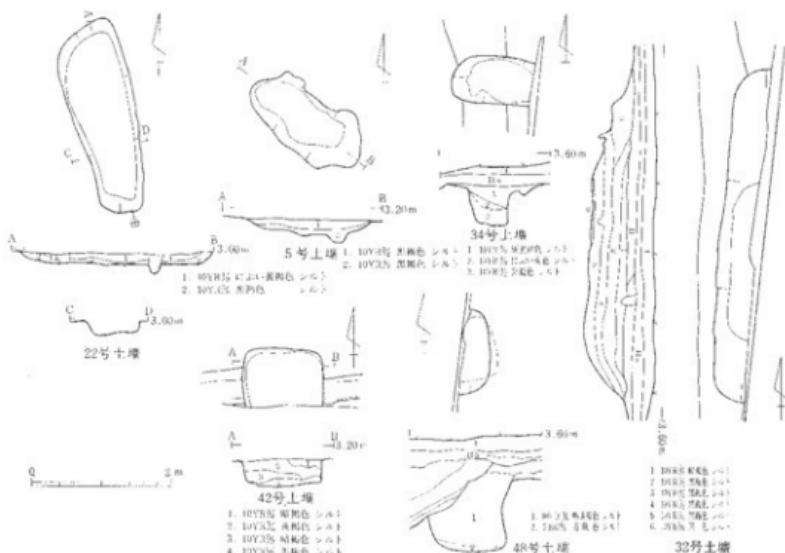
D I型……22号

D II型……5号

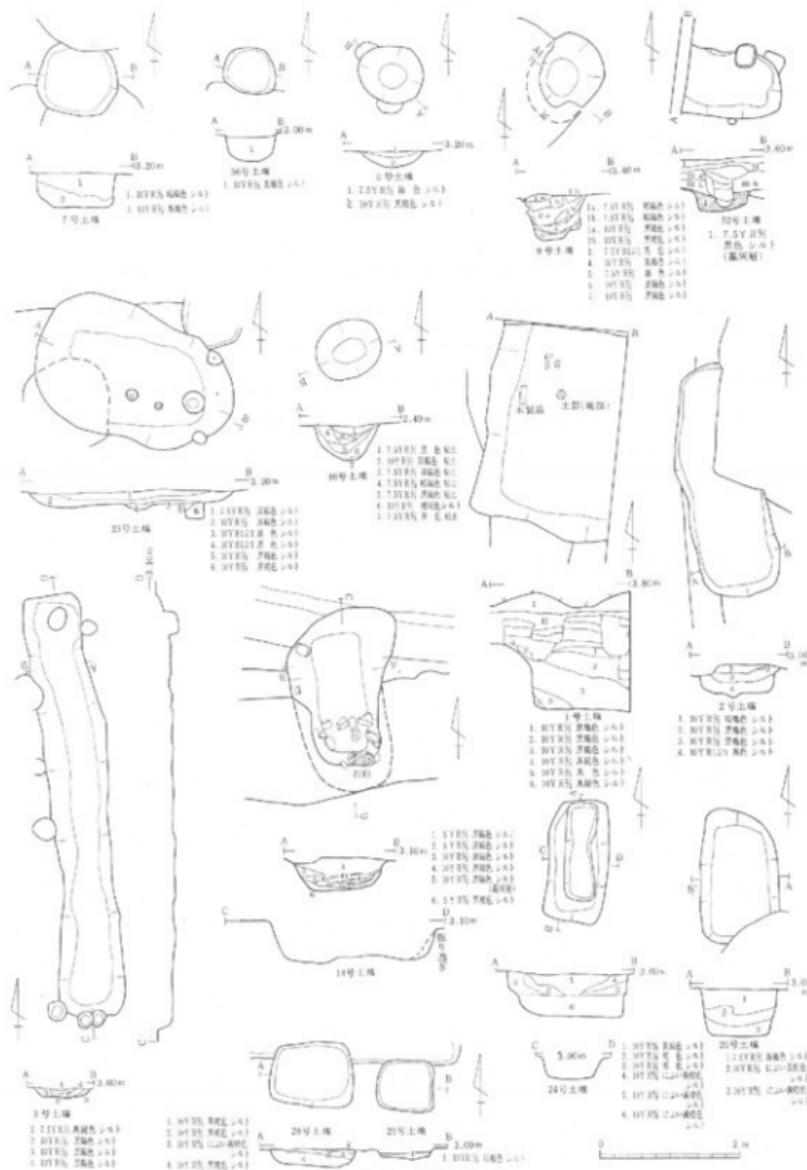
分類不可能なもの……10号・12号・13号・27号・42号・45号・48号・54号

（4号・15号・44号・49号）

これらの土壤において、人为堆積と考えられるものは、22号・23号・24号・26号・48号の各土壤がある。しかし、その性格を推定できるような遺物がない。14号土壤は石臼の破片が多く出土している。ゴミ捨て用の穴であろうか。52号土壤は、ワラ灰が充満しており、囲炉裏やカマドの焚口ではないかと考えられる。この土壤と組む埴物は、16号建物跡が該当しそうであるが、断定できない。33号土壤は20号建物跡に付属する可能性が強い。C₁I型は偏在性が強く、



第50図 I・II区土壤 (I)



第51図 I・II区土壤(2)

I区の北半に集中する。前回の調査においても、この型の土壙に偏在性が認められる。類型別の時期別変遷は明確ではないが、平安時代にB-I型がやや多い程度であるが、バラエティーに富む。I期ではA-I型、II期ではC-I型がやや目立つ程度である。時期が下るにしたがって、しだいに土壙数は減少傾向を示す。

ビット

今回の調査（I・II区）では、建物跡の柱穴も含めて、合計約800個検出された。これらのビット群は、I・II区とも11号溝を境にして、その北側に偏在する傾向があり、全体の7割以上を占めている。この傾向は、逆に11号溝等が館を区画する堀の傍証資料となる。また、およそ11号溝（I・II区）の北側のビットの埋土は、黒色～黒褐色系の色調を呈するものが多く、南側は褐色系の色調を呈するものが多い。これはある程度、時期差を示すものであろう。また、ビットの平面形は円形を呈するものが多いが、掘り方ではなく、柱穴そのものが方形を呈するものが少なからず存在する。

6. 中・近世の出土遺物

(1) 日本製陶器

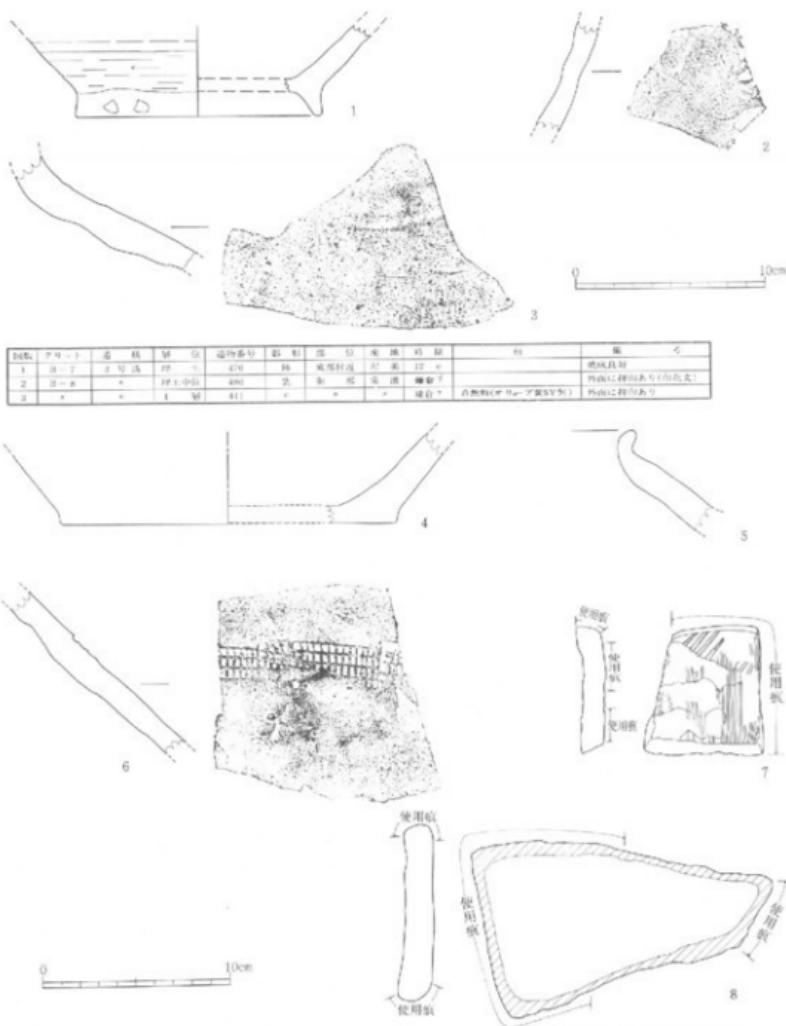
ここでは、中近世（今泉城I期～V期）の陶器を扱う。

渥美

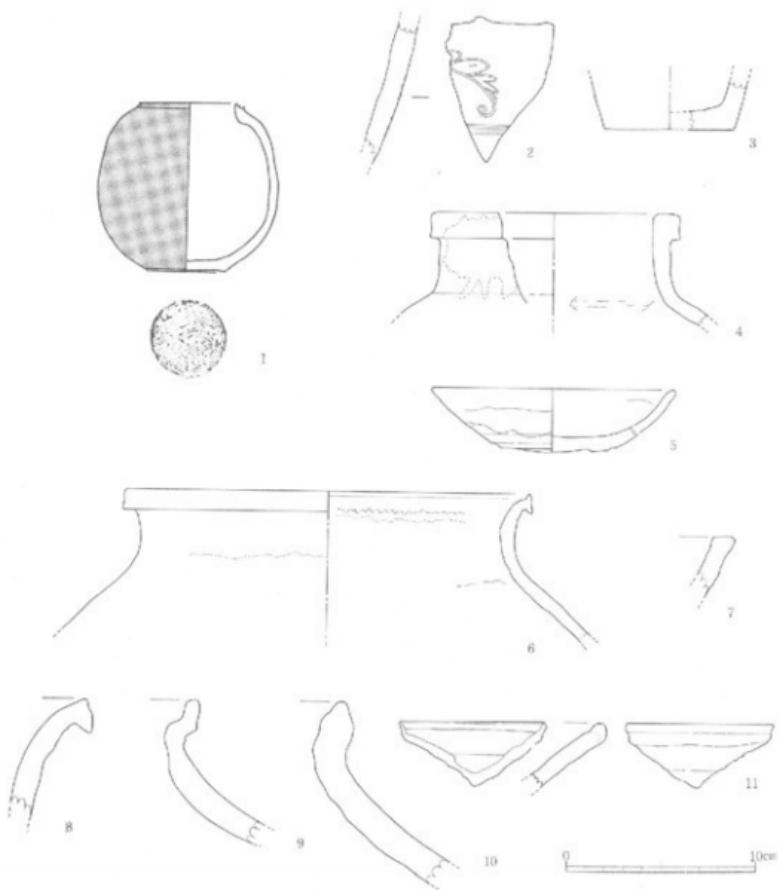
渥美的製品は合計26点出土し、甕・壺・鉢がみられる。いずれも破片で図示できるものは少ない。第66図7は、刷毛目・押印のある甕であろう。鎌倉前半のものと考えられる。第52図5は短頭轍の口縁部、同図7は甕あるいは壺の破片と考えられるもので、割れ口及び外面には磨耗痕が認められる。第52図1は貼り付高台のある鉢である。高台脇にはケズリ、内面には使用痕が認められる。釉は認められない。ほぼ12世紀の製品と考えられる。第54図1は、甕あるいは壺の肩部付近の破片と考えられる。外面には、極めて特徴的な押印がみられる。ほぼ鎌倉初め頃のものであろう。

常滑

常滑の製品は合計134点出土し、県内産の窯器系陶器に次いで出土量が多い。赤羽一郎氏の編年によれば、第2段階から第3段階にかけてのものが多く出土し、特に後者が多い。常滑の製品には、甕・壺があり、わずかに鉢が加わる。また近世に属すと考えられる灰釉の大平鉢が1点出土している。

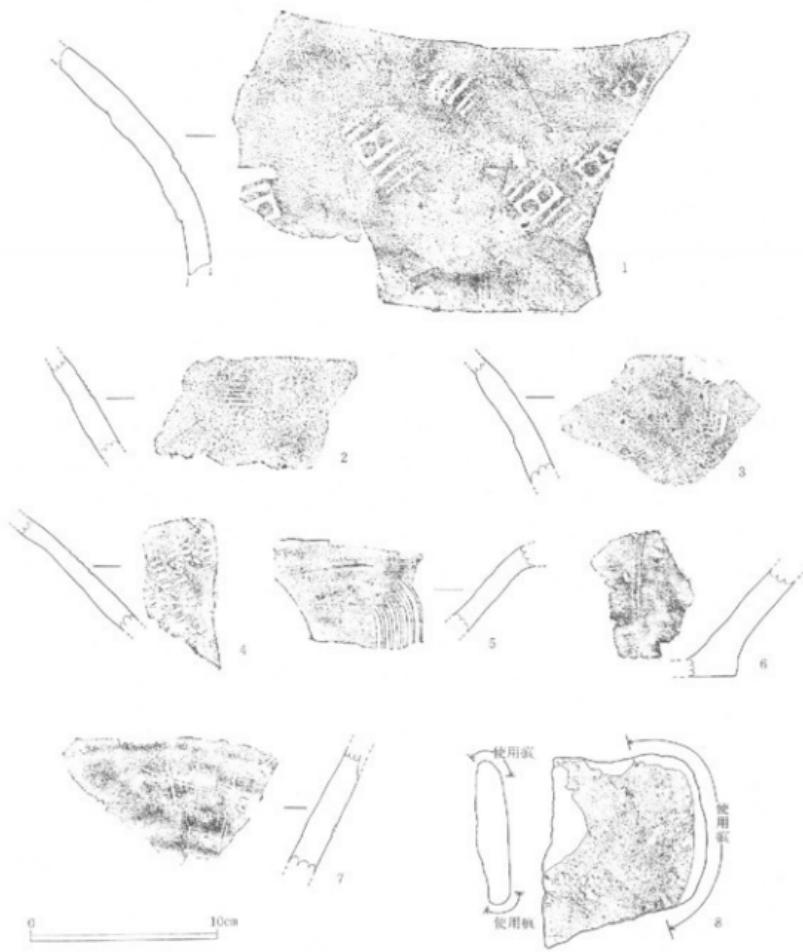


第52図 3号・14号溝跡出土遺物



図版	グリ	遺構	層位	番号	西	東	南北	南北	時期	種	備考
1	F-5	27号跡	埋土上部	380	新米面入れ	1184-高輪	西側	西側	古期	鉢形(縦出10.2)	
2	F-4	11号跡	2層	626	陶器の底子	1184-高輪	西側	西側	古期	鉢形(ヨリ一ツ狭いY字)	
3	E-4	13号跡	3層	893	小皿	1184-高輪	東北	東北	古期		
4	x	x	1層	922	◎	1184-1128	高輪	西側	古期	口沿斜	
5	x	28号跡	埋土上部	941	盤	1184-1128	高輪	西側	古期(ヨリ一ツ狭いY字)	西側出10.2の付着物あり	
6	x	11号跡	底	17	盤	1184-1128	高輪	西側	古期	口沿斜	西側出10.2の付着物あり
7	x	x	埋土	955	盤	1184-1128	高輪	西側	古期		西側出
8	F-4	x	2・3層	664	盤	1184-1128	高輪	西側	不明	口沿斜	
9	E-4	x	底	845	x	1184-1128	高輪	東北	古期		
10	F-4	x	x	970	x	1184-1128	高輪	東北	古期		
11	B-4	x	x	214	盤	1184-1128	高輪	東北	古期(内凹)		

第53図 11号・27号・28号跡出土遺物(1) 1/2, 6/6



図数	グリット	遺構	層位	追跡番号	器形	部位	重地	時期	種	備考
1	F-2	11号溝 (内溝)	第1層	844	鉢又は盆	斜部	山美	I期	自然釉(水色)	外面上に捺印あり。
2	B区	x	2 層	603	盤?	x	雷道	II期	自然釉	外面上に墨毛目あり。
3	E-3-4	11号溝	3 层	841	盤	x	x	"		外面上に捺印あり。
4	F-4	x	2 层	610	鉢又は盆	x	x	不明		外面上に捺印が連続している。
5	B-4	x	1 层	265	盤 鈴	x	胎 内	Ⅲ期?		外面上に斜い斜溝の上のきぬ。 捺印あり。
6	F-4	11号溝	3 层	729	盤	胎 部	不 明	II期?		外面上に捺印あり。
7	E-4	11号溝	底	612	盤 鈴	胎 部	x	不明		胎子底の跡面あり、表面に崩れ底あり。
8	x	x	1 层	527	盤	x	雷 道	x		

第54図 11号・28号溝出土遺物(2)

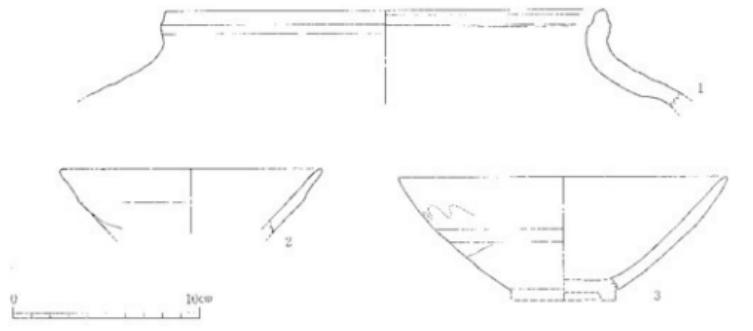
第62図5は、甕あるいは壺と考えられる破片で、菊花状の押印が認められる。第61図3は単線の三筋壺の破片と考えられる。およそ12世紀後半頃のものであろう。第66図3は産地が明確ではないが、おそらく常滑の甕の底部であろう。同図6はヘラケズリ後に高台を貼り付け、ナデが施されたと考えられる鉢である。12世紀の製品と考えられる。第64図3は産地は明確ではないが、江戸時代中期頃と考えられる鉢である。内外面ともに体部上半から口縁部にかけて、浅黄色の灰釉（？）がみられる。それ以下は露胎となり、底面は回転ヘラケズリである。第60図2は比較的小型の甕あるいは壺の底部の破片である。第52図6は、押印がほぼ1列に並ぶ甕の破片であろう。焼成不良で産地は明確ではないが、常滑の製品と考えられる。第52図2・3は甕あるいは壺と考えられ、2は印花文・3は格子状が不明瞭ながら認められる。第53図4は口縁部が肥厚する壺で、檜崎彰一氏の御教示によれば、応永3年銘のある千葉県清澄寺経塚と類似する。宝町初め頃の製品であろう。口縁部には灰白色や紫色の釉がみられる。他に類似する胴部破片が1点ある。第53図6は常滑の製品では最もも様相のわかるものである。口縁部には縁帶があり、釉の量も多い。赤利氏の第3段階の甕であろう。同様の口縁部破片が他に2点ある。縁帶が頭部に密着する甕はない。第53図11は内面にも自然釉がかかる鉢である。鎌倉初期（13世紀）の製品であろう。第54図2～4・8はいずれも甕あるいは壺の破片と考えられる。種々の押印が認められるが、2は工具痕と考えられる。第57図6は甕の底部破片と考えられる。底部内面には炭化物が、外面には焼台と考えられる疊が付着している。同図7は押印のみられる甕の肩部の破片である。同図8は底部中央が盛り上がる甕で、底面付近の外面には明瞭なナデがみられる。

瀬戸

瀬戸の製品は合計52点出土し、およそ13世紀～15世紀中頃の製品がみられ、わずかに近世初期と考えられる皿が1点出土している。特に14世紀末から15世紀中頃の製品は11号・21号溝の埋土上部より多く出土し、溝の埋没年代をよく示している。

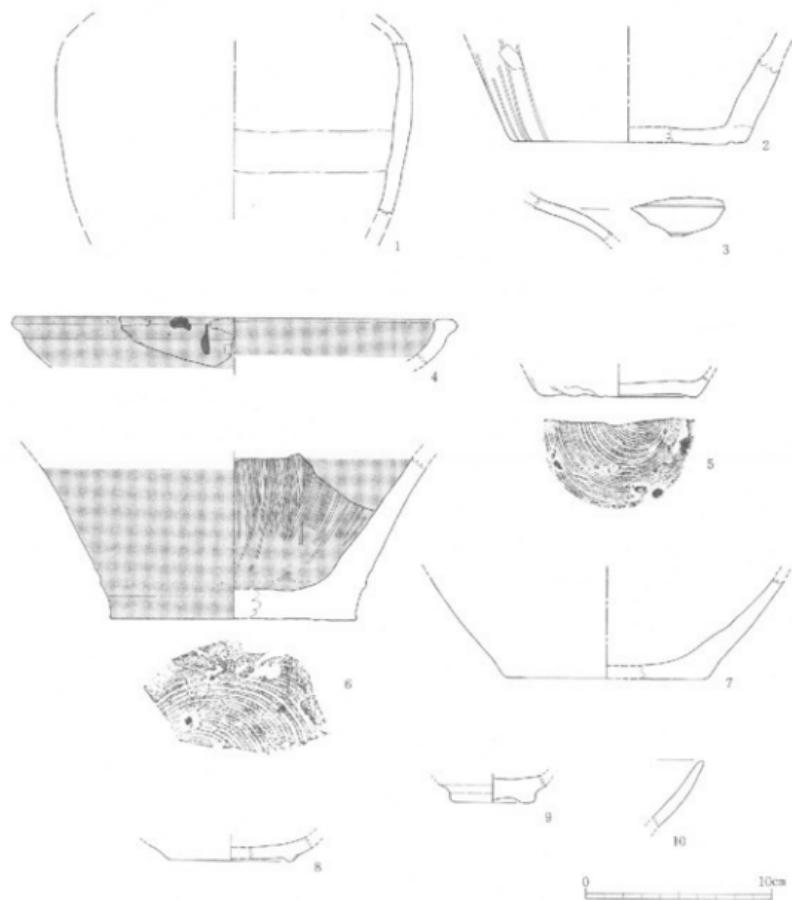
第55図2は口縁部の器厚が薄くなる灰釉の平碗で、外面の胴部下半は露胎になるものと考えられる。15世紀前半の製品であろう。同図3は2と同様、灰釉平碗であり、外面の胴部下半は露胎でケズリがみられる。15世紀初めの製品と考える。第64図9は1号溝の底部より出土したが、溝の年代とは一致しない。溝構築時に混入したものであろう。鉄釉の瓶子と考えられ、内外面ともに鉄釉が施されている。底部には回転糸切り痕がみられる。内面の鉄釉には、さらに灰白色の釉が流れている。14世紀末～15世紀初め頃の製品と考えられる。第53図1は鉄釉の肩衝茶入れで、底面には回転糸切り痕が認められる。15世紀初めのものである。同図2はオリーブ灰色の灰釉の施釉された梅瓶あるいは瓶子と考えられる。ほぼ鎌倉末期（14世紀前半）の

ものである。同図5は口縁部の内外のみ施釉のみられる灰釉皿である。高台はケズリ出しによるものである。見込みにはトチン跡がみられる。第58図1は灰オリーブ色の灰釉が内外面の胸部上半に施釉された袴腰香炉である。底部には回転糸切り後、粘土を貼り付けて三脚としている。およそ15世紀中頃の製品と考えられる。同図2は浅黄色の灰釉が施釉されたおろし皿である。内面は使用頻度が高いために、釉がとれ露胎となっている。1と同様ほぼ15世紀中頃の製品と考えられる。同図3～5は鉄釉大日茶碗である。これらの露胎部分にはケズリ調整が認められる。3は15世紀第1四半期、4は同第2四半期に、また5は15世紀前半の製品である。4の削れ口の一部には漆（？）の付着が認められ、接合したことを示すものであろう。第59図5は浅黄色の灰釉が施釉された天日茶碗あるいは平碗であろう。15世紀頃の製品であろう。同図10は灰釉皿の底部破片と考えられる。江戸時代以後のものであろう。第56図1は緑灰色の灰釉瓶子の胸部破片である。およそ鎌倉初期（13世紀）の製品であろう。同図2は透明度の高い緑色の灰釉梅瓶である。外面には単線と複線の縱位沈線がみられる。底部外面は釉が残り、トチン跡がみられる。14世紀の製品であろう。同図3はオリーブ灰色の灰釉の瓶類で、器厚の滑さなどから花瓶ではないかと考えられる。外面には2本1組の平行沈線が2段みられる。ほぼ14世紀頃の製品であろう。同図5は内面に灰釉が施釉され、外面は露胎で、1部に釉の付着や流れた釉がみられる。底部の内外面にトチン跡が認められる。器種は浅鉢と考えられ、15世紀の製品であろう。同図10は表採品で、灰釉の平碗であろう。外面の灰釉は、体部上半まで施釉されている。15世紀の製品であろう。



番号	アラート	遺物	解説	出所	施釉 方法	施加 部位	产地	時期	種	実 考
1	A-3	12号井(1)	陶土	203	灰	口縁部	日本	14世紀	灰釉(灰オリーブ色)	-
2	-	n	袴腰香炉	134	手動	口縁部～胴部	日本	-	灰釉	15世紀中頃
3	-	n	鉄釉大日茶碗	620	-	-	日本	15世紀	鉄釉(灰オリーブ色)	15世紀前半

第55図 12号井戸跡出土遺物 1%



番号	アーチーク	遺物	層位	遺物番号	形	質	色	特徴	備考
1	A-A	日盤	II	板子	圓盤	泥炭	1 黒	黒釉(黒地にG Y 带)	黒地に河原模様有り。内側の周辺部が輪状入る。内側は11字文有り。
2	B-B	日盤下	III	板子	圓盤-板子	+	日 盤	板子(黒オリーブ色G Y R 5%)	平行する2本の波線が2ヶ所に見られる。
3	B-B	日盤	IV	板子	圓盤	+	日 盤	板子(灰褐色G Y R 5%)	口縁部外側に黒褐色の付着物が見られる。
4	B-B	*	IV	板子	圓盤	泥炭	IV 黑	板子(オリーブ黒G Y 5%)	輪入有り。内側部の周辺部が輪状の黒い輪の上に斜線
5	B-B	日盤下	VII	板子	圓盤	泥炭	5 黑	板子(オリーブ黒G Y 5%)	斜線入りで2ヶ所有る。
6	A-A	*	VI	板子	圓盤-板子	G R 7%	*	板子(灰地G Y R 5%)	斜線入りで2ヶ所有り。外側周囲より手工具跡有り。
7	A-A	日盤	VI	板子	圓盤	泥炭	7 黑	板子	斜線入りで2ヶ所有り。外側周囲より手工具跡有り。
8	F-F	*	VI	日 盘	圓盤	泥炭	8 黑	圓盤(灰地G Y R 5%)	斜線入りで2ヶ所有り。内側周囲より手工具跡有り。
9	E-E	*	VI	日 盘	圓盤	泥炭	9 黑	圓盤(灰地G Y R 5%)	斜線入り周囲有り。内側に輪状の跡あり。
10	實底	1049	鍋	口縁部-底部	鍋	泥炭	不 明	底物(灰地G Y 5%)	底入有り。

第56図 表探・基本層位出土遺物(陶器)

県内産無釉陶器

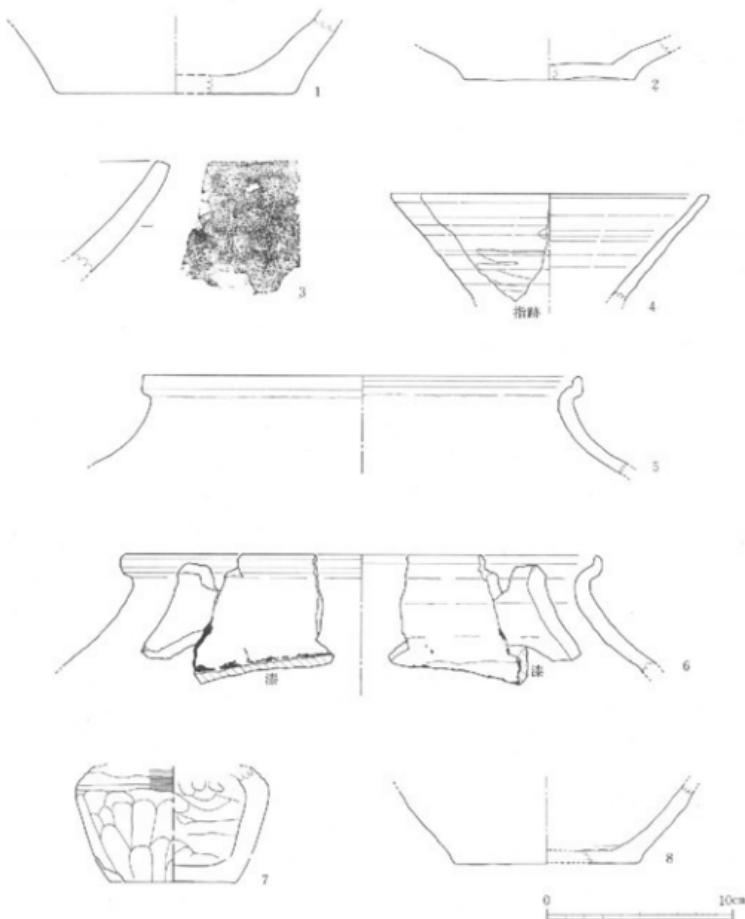
ここでは、東北窯を中心に県内に生産地があると考えられるものを扱う。なお一部県内と限定できないものや不明のものも扱っている。分類の基準は後述するごとく、胎土を主体とし行った。

(東北窯あるいはその類似品)

後述するごとく、東北窯の資料と比較して、胎土の共通するもの、あるいは類似するものを一応ここでは東北窯の製品あるいは類似品と推定した。しかし、東北窯と断定する基準がまだ確定していない現状であり、今後さらに検討を要する課題である。これはひとり東北窯に限らないことはいうまでもないことであろう。

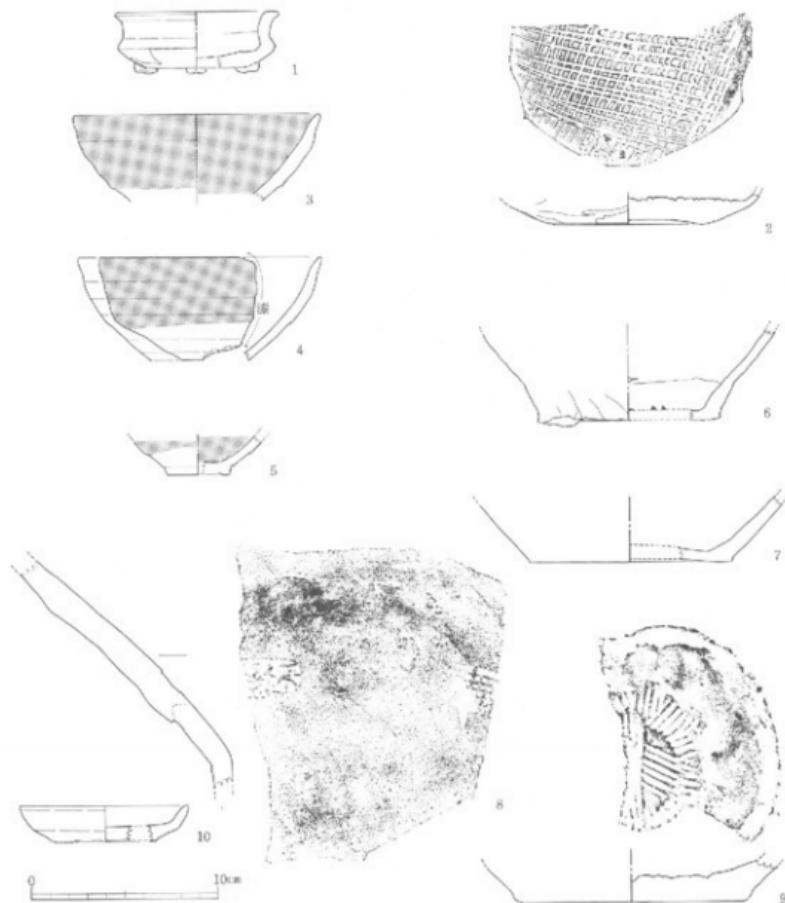
さて、東北窯の製品あるいは東北窯類似品と考えられるものには、甕・壺・鉢があり、合計210点である。

甕はいずれも、受口状の口縁部を特徴とするが、受口が明確なもの（1類）と寸詰りで不明確なもの（2類）がある。壺は刷下半部のものが存在するが、明確ではない。鉢は東北窯の収集品中には、口唇部の断面が丸頭のものと角頭のものがあり、角頭類にはさらに口唇部の凹むものや、段差のあるものなどがある。本遺跡では変化のない角頭のものばかりである。鉢の胴部の特徴には、外傾してそのまま立ち上がるるものと、口唇部付近でゆるく屈曲するものなどがある。今回の調査では、東北窯の可能性のある横目をもつ搖鉢は出土していない。ところで2類としたものは、他の生産地の可能性が強い。第62図4は角頭の鉢で、口縁部付近にゆるい屈曲が認められる。外面には自然釉がみられるが、口唇部と内面にはみられない。第55図1は受口部が寸詰まりで明確さを欠く2類の甕である。胎土は東北窯のものと類似する。第61図1は甕の底部と考えられ、内外面ともにナデである。同図2は白色の吹き出しのある2類に属する甕の口縁部破片である。焼成は甘い。第66図2は口縁部付近がやや膨らむ角頭の鉢である。第60図1は胴部が急激に立ち上がる点から壺と考えられる。外面の底部付近に記号（ヘラ書きの沈線）が認められる。これは窯印かどうかは不明である。同図4は甕あるいは壺の胴部破片で、指頭による記号が認められる。この記号は1と同様のものであろう。第52図4は、甕の底部破片であろう。同図8は甕の胴部破片と考えられ、割れ口とその周辺部は磨耗している。陶片を二次利用したものであろう。第53図3は小型の甕と考えられる。底部内面には灰が被っている。同図7は角頭の口縁部をもつ鉢である。口縁部には灰が被る。同図9・10は甕の口縁部破片で、9は1類に、10は2類に属する。特に10はほとんど受口状を示さなくなってしまっており、焼成は甘く赤褐色を呈する。第57図1は横目のない捏鉢である。内面には使用痕が認められる。同図2は内外面にナデのある甕である。同図3は角頭の鉢で、口縁部外面には横ナデが施される。同図4は外傾しながら立ち上がり、口縁部が角頭の捏鉢である。口縁部の内側と胴部下位に使用痕



団体	グリット	遺構	層位	遺物番号	種類	部 分	地質	時期	形	特	考
1	F-6	21号溝	堆土	895	埴輪	腰	東北↑	古期	輪錐	板面、内面、発明瓦あり	
2	"	"	1層	613	埴	"	"	"	"		
3	F-8	"	"	616	埴輪	口縁部	"	"	"	口縁部、内・外面コナテ	
4	F-5	"	"	621	埴輪	口縁～側部	"	"	"	外曲に花跡あり、内面に使用痕あり	
5	F-7	"	"	614	埴	"	"	"	"	褐色粒子の吹出しあり、内面にわずかに炭化物付着	
6	F-8	"	2層	807	埴	"	"	"	"	褐色粒子の吹出しあり、削れ目に付着物あり(漆)	
7	F-7	"	3層	585	小壺	転組～底部	"	"	"	内・外底共火かぶりあり、転組外縁コナテ、底面、内・外底共縫いナナ	
8	F-6	"	2層	720	埴	"	"	"	"		

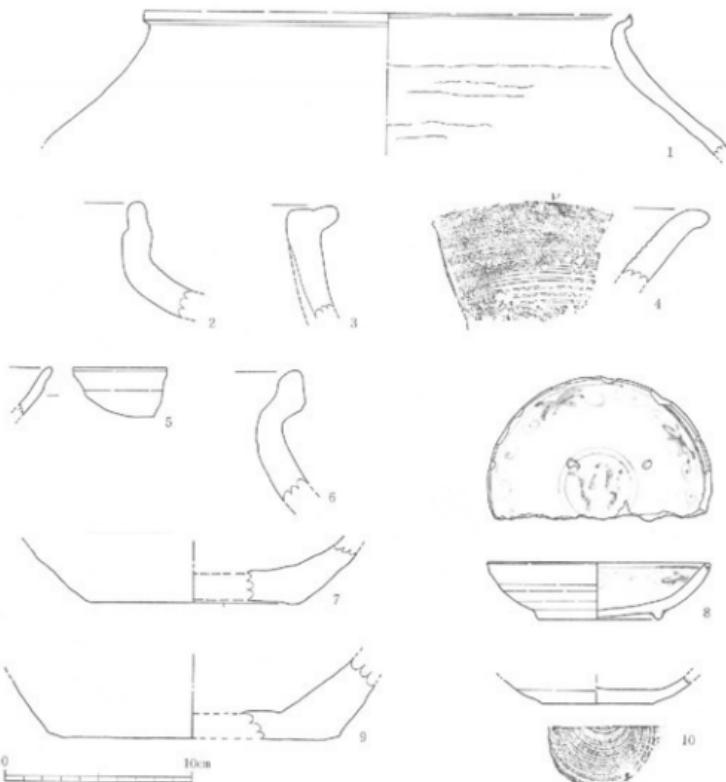
第57図 21号溝出土遺物(I) 2・4・5・6・8は%



深度	グリット	遺 留	基 本	遺物番号	地 無	形	面	住	深 度	特 性	相	類
1	F-7	日 陶	1 壁	584	陶	瓶	均	高	15	粗	古 3 事。	
2	F-8	x	x	579	x	均	高	高	15	粗	古 4 一 五 木 単 位。	
3	x	x	x	569	x	大口 陶	均	高	x	x	粗	(古 4 今 2)
4	x	x	x	571	x	x	x	x	x	x	粗	(古 4 今 2)
5	x	x	x	570	x	x	x	x	x	x	粗	(古 4 今 2)
6	x	x	2 壁	268	x	集	x	集	15	粗	古 4 木 单 位。	
7	x	x	x	772	x	x	近	部	x	x	古 5 集	
8	x	x	x	726	x	x	近	部	x	x	古 5 集	
9	F-7	x	1 壁	698	x	罐	均	低	20	粗	古 5 木 单 位。	
10	x	x	x	632	土 壤	瓦	均	近 部	15	粗	古 5 木 单 位。	

第58図 21号溝跡出土遺物(2) 6・7段

が認められる。また刷部外面に左手の指の圧痕が認められる。同図5は1類に属する甕である。口縁部の内外面には横ナデ、それ以下は内外面ともに粗いナデが施される。褐色の吹き出しがみられ、内面には炭化物が付着している。同図6は1類に属する甕で、調整は先の5と同様で



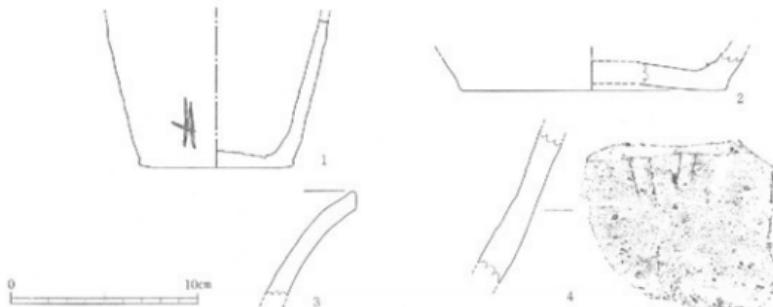
回数	クリット	土 像	層 位	遺物番号	部	形 似	施 工	特	備 考
1	B-4	12号甕	埋 土	246	甕	口縁~刷部	施工 不明	施されない	内外ともに刷部が多い(かなり深い二重手)
2	*	*	陶土上層	311	*	口縁部	施工 不明	施されない	施されない
3	*	*	*	*	*	施工 不明	施工 不明	施工 不明	施工 不明
4	A-1・2	16号甕	埋 土	68	接脚	*	施工 不明	施工 不明	施工 不明
5	A-5	9号甕	埋土中位	501	天目茶碗	*	施工 不明	施工 不明	施工 不明
6	E-3	29号甕	セアシング層	742	甕	*	施工 不明	施工 不明	施工 不明
7	E-3	*	1 箔	701	箆?	追 加	不明 *	施工 不明	施工 不明
8	E-5	25号甕	網底灰	91	志野追加小皿	口縁~底部	施工 不明	施工 不明	施工 不明
9	E-4・5	20号甕	1 箔	380	甕	底 部	不明 *	施工 不明	施工 不明
10	A-4	1号甕	1 箔	486	甕	施工 不明	施工 不明	施工 不明	施工 不明

第59図 中・近世溝（9・12・16・25・26・29号）、1号竪穴遺構出土遺物 1は36

ある。内面には積み上げ底が残る。また、割れ口やその周辺には漆の付着が認められ、接合底と考えられる。同図7は小型の甌である。外面は縦位のナデツケ後、頸部に横ナデが施され、内面は粗いナデが施され、肩部に指痕痕が認められる。同図8は甌の底部破片である。第59図1・2・6はいずれも1類に属する甌である。1は口唇部がやや尖銳化している。焼成は甘く、内外面ともに剥落が著しい。この割れ口には漆が付着している。1は県内産の製品としたが、明確ではない。第62図1は外傾しながら立ち上がる角頭の鉢（捏鉢？）である。

〔胎土に白針を含むグループ〕

このグループは、酸化炎焼成で焼成の甘いものが多いが、の中でも硬質のものと軟質のものがある。前者はおよそII期の遺構を中心に出土する傾向があり、今のところ甌・鉢が判明している。後者はおよそIII期～IV期に属する遺構を中心に出土する傾向があり、柄目の太い擂鉢・甌（？）がある。これらは器形等を十分理解できるものがほとんどなく、図示できたものは、後者の擂鉢のみである。現在確認しているものは、合計45点である。第62図3は6本単位の柄目のある焼成による瓦質擂鉢である。同図9は5本単位の柄目のある酸化炎焼成の擂鉢である。胎土は精選され、砂粒はほとんど含まない。第65図6は口唇部付近が大きく外反する擂鉢で、口縁部内面には、5本単位の柄目が横位に施される。器表面は剥落が著しい。第54図5は擂鉢の口縁部付近の破片である。柄目は7本単位かと考えられる。第58図9は6本単位の柄目がある瓦質の擂鉢で内面は塗焼である。外面の底部付近には縦位のヘラナデが整然と施される。第59図4は6本単位の横位の柄目があり、塗焼の瓦質擂鉢である。第71図1は柄目がない捏鉢と



図版	アラート	直 縄	留 置	遺物番号	器 形	横 位	座 位	時 期	母	備	考
1	B-2	15号溝	埋 上	159	甌	横2-4部	裏	不 明			外面 刷毛（木あり）ヘラ括記号なし
2	A-2	〃	〃	157	甌	横	裏	不 明			
3	B-2	〃	1 墓	256	甌	口 縁 部	裏 内 ?	*	日 沈		
4	〃	〃	埋 土	147	甌	横	裏	*			外面 1回と同時と迷われる複数あり。但し、帶縞きである。

第60図 15号溝跡出土遺物 1は36

考えられる口縁部破片である。内面には三本沈線による記号が認められる。同図3は5本単位の櫛目のある擂鉢底部である。底部内面に十字形の櫛目が特徴的である。

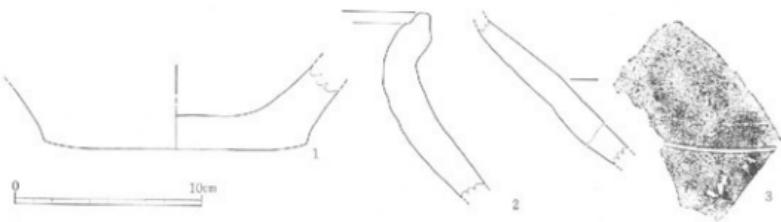
〔胎土に金雲母を含むグループ〕

このグループは極めて量が少なく、わずか3点のみである。9号掘立柱建物と12号溝から出土しており、このグループの年代はIII期末～IV期頃のものであることがわかる。生産地は不明であるが、仙台市内から出土する縄文土器等にも金雲母を含むものがあることから、一応県内を想定している。

第59図3は口唇部が折れ曲がり、その中央には沈線が巡る。おそらく胸部の脇らむ表であろう。第62図10は8本単位の櫛目のある擂鉢で、内面は焼成になっている。

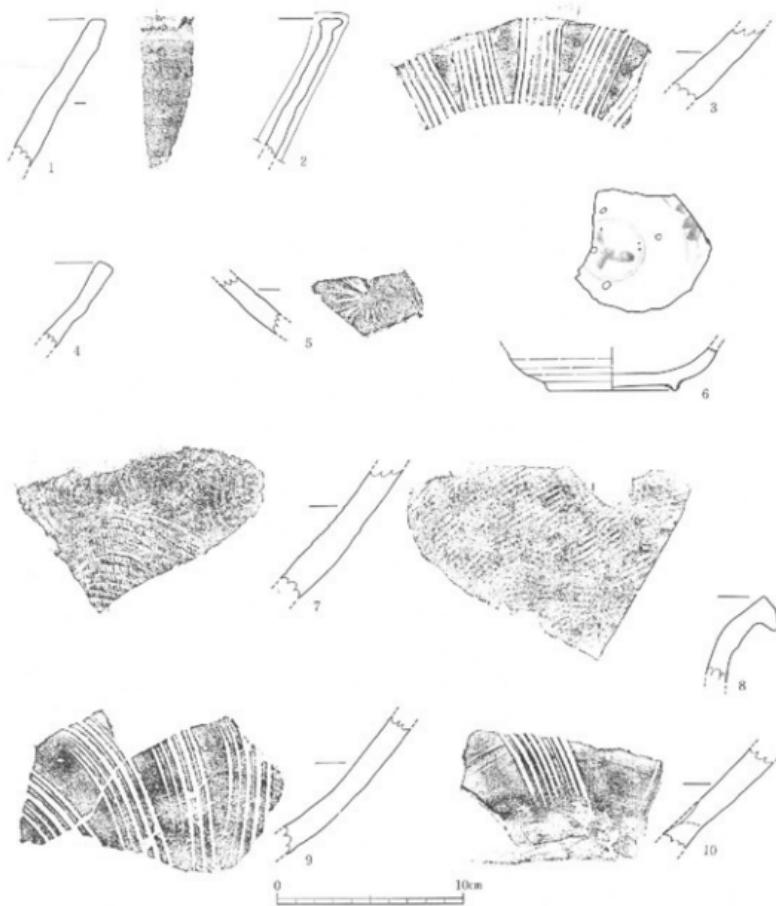
产地不明の中世無釉陶器

第62図7はIV期の遺構（37号土壤）より出土した表の破片である。外面には平行叩き目、内面には青海波が施され、さらに縄目の叩き目（？）がみられる。須恵器と同様の調整技法をとるが、須恵器そのものではないと考えられる。長石・石英等の砂粒を含み、焼成は酸化炎で良好である。色調はにぶい赤褐色を呈する。中世に属するものと理解したい。同図8は環元炎焼成で須恵器系陶器の表であろう。これと同一個体と考えられるものに第53図8がある。いずれも12世紀～13世紀の製品であろうか。第66図1は胎土に白色砂砾（長石？）を多く含む擂鉢である。信楽の製品に類似するが、断定できない。およそ室町時代の製品であろうか。第65図4は7本単位の櫛目のある擂鉢である。芹沢長介氏の御教示では、山形県米沢市の戸長里窯（織部系）の製品に類似する。とすれば、この擂鉢は16世紀後半のものであろう。同図10・11は赤褐色を呈する表の破片である。檜崎彰一氏より、15世紀頃の備前に類似するとの御教示をいた



団数	グリット	透 験	解 釈	遺物番号	形 式	部 位	破 壊	時 期	規 格	考
1	B-4	10号井P	植土下部	443	洗	脚部～底部	切削？	—	—	—
2	—	—	透 土	438	*	口 線 部	*	日 用	—	白色粒子の焼き出し有り、内部に縦毛目のようなもの有り。
3	—	—	—	—	洗	脚 部 底 部	I	日 用	—	外壁に浅な有り(二筋盛れ)。

第61図 10号井戸跡出土遺物



回数	アソート	遺物種類	性質	状況	遺物番号	番号	形	色	表面	裏地	時	期	備	参考
1	B-7-8	2号土塊	泥土	326	鉢	口縁-側面	裏内	黒	無地	無地	II世	後期	丸きが無い	
2	A-3	9号土塊	*	365	漆器	口縁部	不明	不明	不明	不明	無地	(着老海7.58%)		
3	B-2	14号土塊	(5-40mm)	261	鉢	底	底内	*	*	*	無地	多量	施目を多量に、施土に白い斑状のもの含む	埋蔵
4	E-5	35号土塊	陶土	1028	鉢	口縁部	/	不規						
5	E-7	24号土塊	*	577	漆器	側	漆	赤	無地	*	自然形		薄作(古式文)	
6	F-6	33号土塊	1号	150	漆器	漆器形小漆器	側面-底面	赤	無地	井	漆	2.5YR 8/2	黒地(2.5YR 8/2)	丸縁 内裏 垂幕支(にぶい縁)2.5YR 8/2 黒地(2.5YR 8/2)
7	E-4	35号土塊	1号	586	漆器	側	漆	不規	不規	不規	後石器?			調査 施用 不明な点は、内裏 漆器 支持柱な点は、施用に施化物材質
8	A-6	1号土塊	陶土	604	鉢	口縁部	/	無地	無地	無地	(古式文)		口縁部は渦巻形に弧曲	
9	A-5	6号土塊	2号	267	漆器	側	漆	赤	無地	無地	II世	後期	施目を多量に	施土に白い斑状のもの含む
10	A-4	9号土塊	2号	267	*	*	*	*	*	*	II世	後期	施目を多量に	施土に全漆青合む

第62図 I・II区土壤・ピット掘立柱建物跡出土遺物

だいた。もし、備前ならば東北ではおそらく初めての出土例になるが、連断はさけ、今後さらに検討が必要である。第60図3は鉢の口縁部破片であろう。内面は灰被りで、ヘラ書き沈線(記号か?)が認められる。胎土は東北窯のものに類似するが、口縁部の断面形(外削ぎ)は、従来の東北窯の製品中には知られていないものである。第54図6は擂鉢の底部破片である。同図7は内面に「×」のヘラ書きのある捏鉢である。Ⅱ期の生産品であろう。擂目は2本認められるが、内面の磨耗が著しく2本単位かどうか定かではない。第59図7・9は皿の底部と考えられる。県内産の製品の可能性もあるが定かではない。第71図12は焼成の甘い赤褐色の捏鉢である。外面には継ぎの沈線が20本以上(記号か?)認められる。Ⅱ~Ⅲ期の製品であろう。第56図7は器厚の薄い鉢と考えられる。

近世施釉陶磁器

ここでは、今泉城IV期・V期の施釉陶器を扱う。

陶器

美濃

美濃製品と考えられるものには、志野・鼠志野・志野織部・黄漸戸・御深井釉があり、いずれも16世紀末~17世紀初めの製品である。これらは、特に1号溝から多く出土している。

志野

志野は10点出土し、皿・向付がある。図示し得るものは、向付1点である。第66図9は垣根文(鉄絵)の向付である。16世紀末期のものであろう。

鼠志野

鼠志野は2点出土し、いずれも皿の破片である。第63図13は蔓草文(鉄絵)の皿である。胎土は黒褐色を呈し、高台内に輪トチン跡がみられる。慶長年間初期のものであろう。

志野織部

志野織部は9点出土し、いずれも皿である。いずれも慶長年間のものと考えられる。第62図6は蔓草文(鉄絵)の皿である。見込みと高台内に円錐ビン跡(3ヶ)がみられる。第66図8は垣根文と花文(鉄絵)のみられる皿である。釉は焼成不足のためか白濁している。第63図9は前述のものと同様、垣根文と花文(鉄絵)の皿である。高台内にトチン跡がある。榎崎氏の御教示では、慶長10年前後の製品と考えられる。第59図8は、水鳥(見込み)と蔓草文を配した皿である。見込みと高台内には円錐ビン跡がみられる。慶長年間(元禄・享和並行)のものである。榎崎氏より元禄・享和の製品と類似しているとの御教示をいただいた。

これらはいずれも岐阜県上岐市周辺の窯の製品と考えられる。

黄瀬戸

黄瀬戸は11点出土し、いずれも皿類である。平皿・菊皿・折縁深皿がある。

第63図10は2本単位の沈線がみられる菊皿である。17世紀初めの製品であろう。同図11は内面2本単位、外面1本単位の沈線がみられる菊皿である。17世紀初めの製品であろう。同図12はケズリ高台の皿である。16世紀の製品である。第64図1は折縁深皿と考えられる口縁部破片である。16世紀の製品である。同図2も折縁深皿と考えられる底部破片である。17世紀初めの製品であろう。第56図8は灰釉系黄瀬戸の皿と考えられる。およそ16世紀中葉の製品であろう。

御深井釉

いわゆる御深井焼とは異なるもので、わずか1点出土している。

第63図14は御深井釉皿である。釉は長石分が多いためか灰白色を呈する。胎土は瀬戸のものに近い。17世紀初めの製品であろう。

唐津

唐津は12点出土し、碗・皿・鉢がある。このうち碗が最も多い。

第66図4は見込みに花文（鉄絵）を配する碗であろう。産地は唐津としたが、必ずしも明確ではない。底部は葵筋底である。およそ16世紀の製品であろう。同図10は褐色の長石分の多い釉がかけられた皿である。およそ16世紀後半のものであろう。同図11は灰オリーブ色の長石分の多い釉がかけられた皿であろう。ほぼ10と同様の年代が考えられる。第63図4・5・6は浅黄色を主体とする色調の釉がかけられた碗で、倉田芳郎氏より、長崎県三川内の製品に類似しているとの御教示をいただいた。これらはいずれも17世紀の製品であろう。同図7は灰オリーブ色を呈する灰釉系碗である。高台脇と見込みの一部に青色の釉がみられる。およそ16世紀後半の製品であろう。第65図9は成形後に化粧土で内面と外面口縁部に文様を描き、褐色の釉を内外面ともに胴部下半までみられ、それ以下は露胎となる鉢である。およそ17世紀初めの製品である。これに類似する緑釉の刷毛目文鉢が1点ある。第56図9は内面に灰白色の釉がかけられた皿（？）の破片である。およそ16世紀の製品であろうか。

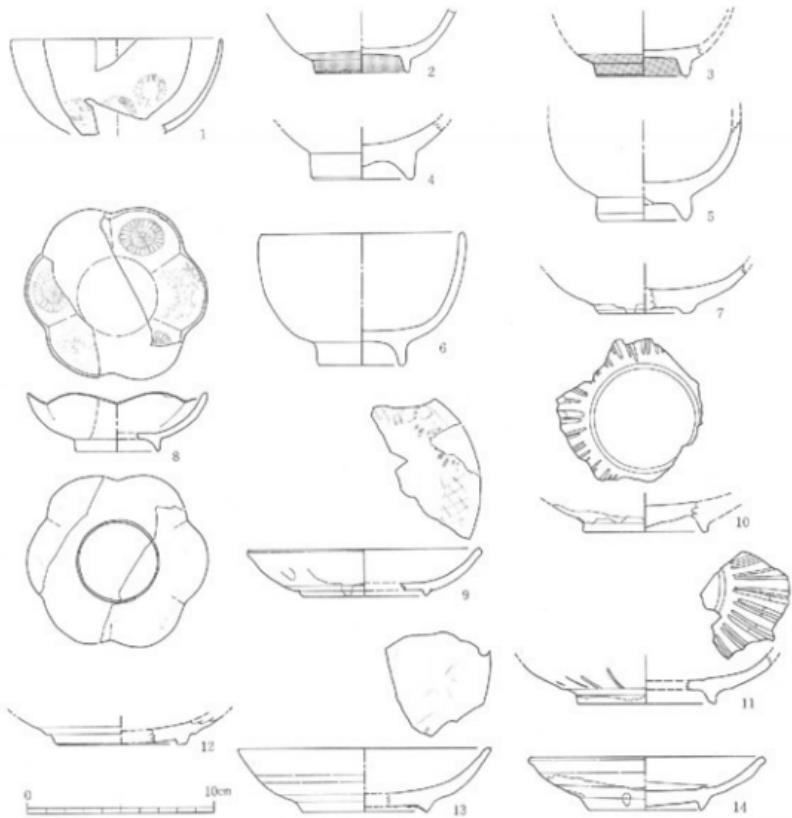
産地不明の施釉陶器

産地不明の陶器は、擂鉢が主体を占めている。これに碗・鉢・壺などが加わる、これらの陶器の大半はおよそ県内あるいは東北地方に生産地が存在する可能性が強い。しかし、近世以後の窯跡の発掘事例がほとんど皆無に等しい現状では、生産地を推定することは困難であろう。第62図2は内外面に鉄釉のかかる擂鉢である。擂目は確認できない。口唇部は内側に肥厚するのか特徴である。第66図5は外面に光沢のない鉄釉がかかる壺である。耳の圧痕が残る。第63

図2・3は透明度の高い黄褐色の釉のかけられた碗である。成形後に高台脇と高台内に鉄釉が塗られ、重ならないように黄褐色の釉がかけられている。器厚は薄いのが特徴である。口唇部破片にも鉄釉がみられ、肥前磁器と共通する。年代は17世紀以後であろう。第64図4～8はいずれも1号溝より出土した鉄釉擂鉢である。柄目は4が11本、5が7本、6は単位不明、7は8本、8は6本と様々である。4・6は口唇部内側に突帯が巡り、5・7は口唇部が外側に折れ曲がる。片口部分の凹みは浅い。いずれも焼成は良い。8は口唇部がわずかに外反し、内側に後をもつ擂鉢である。焼成は甘い。なお、外面の口唇部下に1ヶ所突起が認められる。これらのうち5・7・8は唐津の胎土に類似する。4～8はおよそ16世紀～17世紀のものと考えられる。第65図1・2・5・7・8は、いずれも1号溝より出土した擂鉢である。1・5は口縁部の内外だけにオーリーブ黒色の鉄釉がかけられている。1は擂鉢として扱ったが、あるいは鉢の可能性もある。5は柄目が8本単位で片口部をもつ。また、5と類似する擂鉢が他に1点ある。2は口唇部の内側が肥厚する鉄釉（？）擂鉢であろう。焼成は甘い。県内もしくは東北地方の製品であろう。7は胎土に黒色粒子を含む鉄釉擂鉢である。生産地は不明であるが、東海地方の製品であろうか。8は鉄釉擂鉢の底部破片である。柄目は6本単位で、底部には糸切り痕がみられる。第64図5・7・8のものと胎土が類似する。これらの擂鉢が16世紀～17世紀初めころの製品と考えられる。第56図4は内窓しながら立ち上がり、口唇部が肥厚する鉄釉鉢である。胎土は唐津のものに類似する。およそ江戸時代以後のものであろう。同図5は8本単位の柄目をもつ擂鉢である。底部には糸切り痕が残る。年代は不明であるが、およそ江戸中期以後のものであろう。この他に青灰色の釉をかけた製品（器種不明）が1点出土している。これは19世紀前半頃の上野目焼であろう。

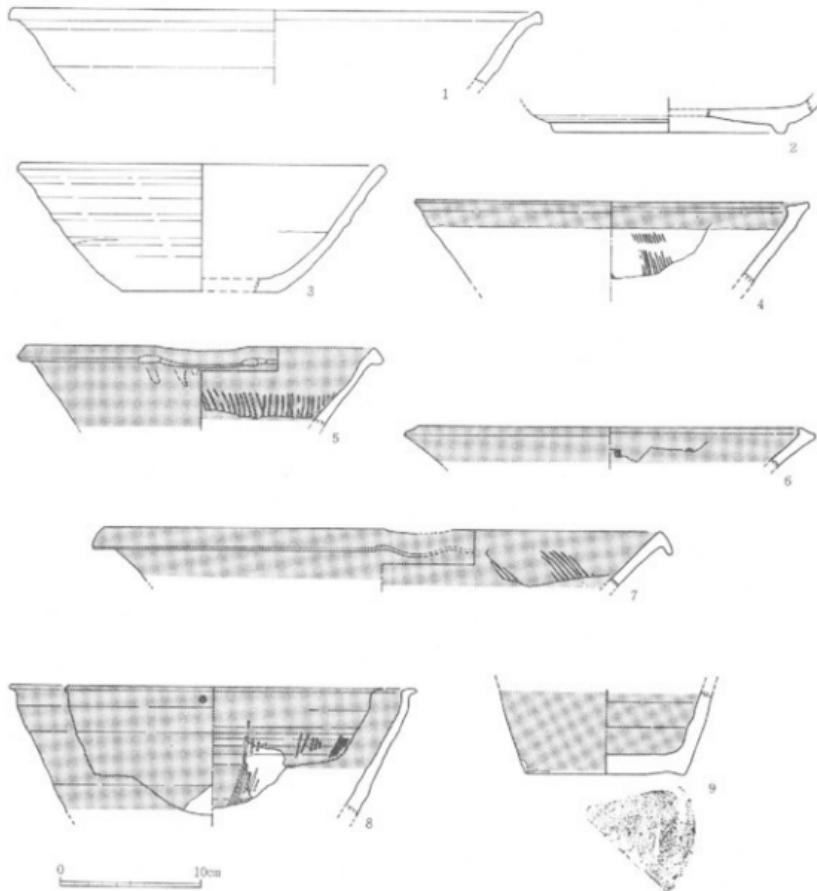
磁器

本遺跡出土の磁器には、肥前35点、切込（宮城県宮崎町）2点があり、前者が主体を占める。また、これらの磁器は、碗・皿の細片で、図示し得るもののがほとんどない。第63図1は花文の染付を配した碗である。17世紀～18世紀の製品であろう。同図8は型作りで、ゴム版染付の輪花皿である。およそ18世紀以後の製品であろう。他に麦藁手茶碗やくらわんか碗・皿等があり、18世紀～19世紀頃のものであろう。切込は綿縞の染付を配した碗と考えられる破片が2点出土している。從来、切込の分布は、宮城県北部から岩手県南部に限られていたようで、本遺跡例は、現在分布の南限を示すものであろう。



編號	アリット	直 幅	横 幅	厚 さ	遺物番号	種類	形	深 度	底 部	時 代	特 徴	考
1	A-6	1号基	1a. 25mm	112	器底	碗	口縁一斜底	見	V型	透明釉	染付 ブルー 置入あり	
2	x	x	透光	51	陶器	丸	縦	多段一斜底	東北地方	*	透明釉前(?) リーフ模様(?) 透光強度: 高(?)	置入あり
3	x	x	*	146	*	*	ノ	底	見	?	透明釉後(?) リーフ模様(?) 透光強度: 高(?)	*
4	A-5	x	1. 2層	110	x	*	*	山	?	透明釉前(?) 透光強度: Y(?)	*	
5	x	x	*	*	*	*	斜面一近底	?	?	透明釉前(?) 透光強度: S(Y%)	*	
6	A-6	*	2層上層	97	*	*	二輪一底盤	*	*	透明釉前(?) 透光強度: S(Y%)	*	
7	A-4	x	6層	62	*	碗	底	?	?	灰褐色灰(?) -7.5(Y%)	*	
8	A-6	x	1a. 25mm	112	陶器	小盤?	口縁一斜底	見	V型	透明釉系	置入あり	透明釉前(?) 透光強度: 高(?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?) (?)
9	A-4	x	1層	128	陶器	立脚器底小片	*	美	底	?	長石斑?	立脚 前(?) (?) 透光強度: ソーラー(?) 5(Y%) 800. 5(Y%) 8000
10	A-6	*	肆七	51	/	平面、直底	碗	底	?	灰褐色(?) 透光強度: S(Y%)	有孔穴	
11	x	x	*	*	*	*	*	*	*	黄褐色(?) 透光強度: S(Y%)	内底 菓花文? 外面 斜面點に北緯	
12	A-6	x	1a. 25mm	112	*	丸	?	*	*	黄褐色(?) 透光強度: S(Y%)	直白面に星(?) に「十」字(?) 透光強度:	
13	A-5	x	1. 2層	113	*	丸	斜底	*	*	赤褐色(?) 透光強度: S(Y%)	置入あり 置入内に縦・横・V字あり	
14	A-8	x	1a. 25mm	50	x	丸	?	*	*	剥離痕(?) 透光強度: S(Y%)	内底に剥離痕の跡あり。	

第63図 1号溝跡出土遺物(1)



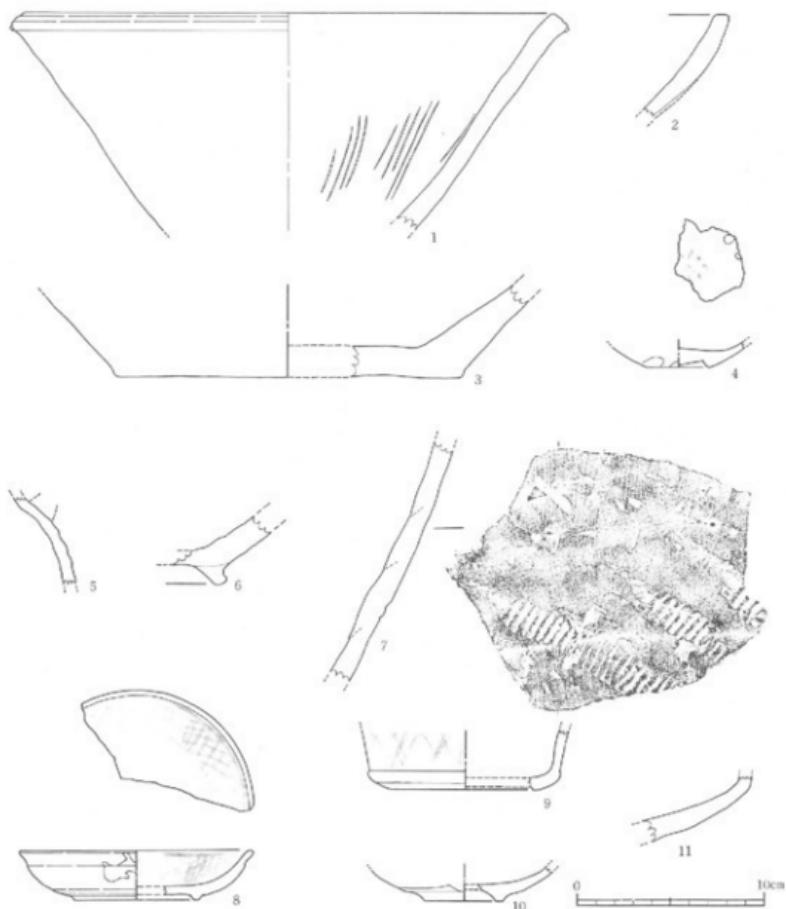
国名	アリット	直 横	層 位	遺物番号	種 類	形 態	住 居	地 域	時 期	施 設	備 考
1	A-8	1号溝	Ia, Ib層	112	折縁直口 縁付	直口 縁付	良美	日向	貴賤戸(深褐色5YR8%)		貫入あり
2	A-5	x	1層	101	x	直 縁	部	x	x		
3	A-8	x	Ia, Ib層	112	直 縁 口縫一系縫	直口 縫合	直	地	(淡黄色15YR7)	斜修下端より直縫にかけて摩耗している。	
4	A-4	x	1層	115	直 縁 口縫一系縫	直口 縫合	不規	日向	鉢形(カリーブ系7.5Y8%)	口縫にのみ施物、把口と木耳足	
5	x	x	1.5層	104	x	x	x	x	鉢形(カリーブ系7.5Y8%)	縫合に施物が直縫に厚く残れている。口縫に片耳あり	
6	A-6	x	2層	57	x	x	x	x	鉢形(カリーブ系7.5Y8%)	縫合に施物が直縫に厚く残れている。口縫に片耳あり	
7	A-7	x	1層	123	x	x	x	x	鉢形(カリーブ系7.5Y8%)	剪口き本(?)単位 口縫に片耳あり	
8	A-5	x	x	72	x	口縫一系縫	x	x	鉢形(カリーブ系7.5Y8%)	内、外側面に施物ない箇所あり。縫合と本と施物 口縫部下に半はげの施物あり(始丹城・2世紀)	
9	A-8	x	底面	193	灰 子 底	底	深	地	鉢形(黒褐色5YR8%)	貫入あり	

第64図 1号溝跡出土遺物(2)



図版	アリット	遺 槽	層 段	遺物番号	種 類	性 能	部 位	記 号	地	場 所
1	A-6	1号槽	3層	141	陶	器口	縫合部	平	Y	鉄地(用オリーブ色2.5YR)
2	A-6	x	1a, 1b層	112	x	x	x	x	x	鉄地の繊維
3	A-7	x	1層	123	x	x	x	顎内?	x	
4	A-4	x	2	126	x	x	x	不明	x	褐色(7本单位)
5	A-5	x	1, 2層	120	x	x	x	x	x	褐色(用オリーブ色2.5YR)
6	A-7	x	1層	123	x	x	x	頭 頂	x	褐色5本单位(2) 黒土に付いた物のもの含む
7	x	x	x	x	x	x	網	不 明	x	褐色(10本单位)
8	A-8	x	1a, 1b層	111	x	網	部	x	x	褐色(用オリーブ色2.5YR)
9	A-7	x	3層	223	骨	口 頚 部	腹 津	x	x	褐色(用オリーブ色2.5YR)
10	x	x	1層	123	骨	堅骨(骨)	顎内?	頭一尾端	x	骨あるいは沈落(2本)あり
11	A-8	x	3層	127	骨	x	x	x	x	骨あり

第65図 I号溝跡出土遺物(3)



遺物	グリット	遺構	層	枚	遺物番号	形	基	形	性	地	時	文	形	備	考
1	A-3	11号井戸	堆土上層	139	壺	瓶	口縁~胴部	小	明	田	葉				
2	F-2	23号井戸	堆土下部	636	鉢	盆	口縁部	中	明	田	葉?				
3	E-2	26号井戸	堆土上層	704	便	圓盤~浅盤	深淺?	不	明						
4	E-7	26号井戸	2層	921	瓶	瓶	口縁~胴部	中	明	田	葉	(横5.7分)	直筒	内側丸い形、外側V字形	
5	F-5	23号井戸	1層	962	双耳壺?	壺	口縁~胴部	中	明	田	葉	(横5.7分)	直筒	内側丸い形、外側V字形	
6	*	*	*	*	合付物	底	深	口縫	深	不	明				
7	F-7	23号井戸	堆土上層	958	壺	瓶	口縁~胴部	浅	明	田	葉?			内側丸い形、單耳	
8	F	F-2層	志賀色芯小窓	1535	志賀色芯小窓	口縁~胴部	美	深	N	葉	長持?			上縁、外縁にV字形の窓、内縁にV字形の窓、縫合部、縫合部不規則	
9	F	F-1層	志賀色芯	1533	志賀色芯	口縫~底部	x	x	x	x	x	(横4.5Y 5.5分)		縫合部V字形、縫合部不規則	
10	x	x	2層	930	壺	瓶	口縫	深	明	田	葉	(横4.5Y 5.5分)	肩入あり	外縁の一箇に気泡あり	
11	x	x	堆土	803	平盤	深	口縫	x	x	x	x	(横オーライ5.5分)			

第66図 I・II区井戸跡出土遺物

(2) 中国製陶磁器

これらは、いずれも中国産の製品である。出土点数は41点あり、その内訳は、青磁30点、白磁4点、天目1点、染付6点である。比率をみると、青磁73%、白磁（青白磁）10%、天目約2%、染付約15%である。

青磁

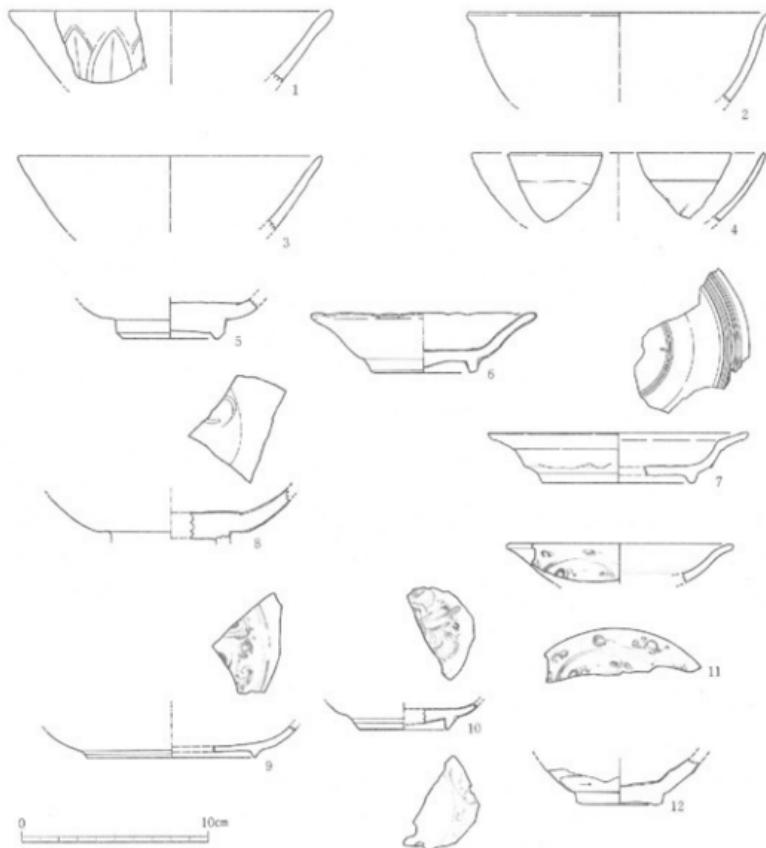
青磁は、およそ13世紀～16世紀までの龍泉窯系・景德鎮窯系・同安窯系の碗・皿が確認されている。第67図1は片切形で龍泉窯系の鍋邊弁文碗、第68図1は、側頭様の網線蓮弁文碗である。第67図2・3・5は、無文の碗と考えられる。2は口縁部が外反し、3は外傾して立ち上がる碗で、いずれも龍泉窯系のものと考えられる。5は高台内にケズリが認められる。15世紀前半頃の碗である。第67図4は、内面に柄状工具の刺突が認められ、同安窯系の劃花文碗と考えられる。第68図2は、南宋（？）の劃花文碗と考えられ、本道跡では最も古い青磁である。第67図6・7は青磁の皿と考えられるものである。6は口縁が稜花をなす景德鎮窯系の皿である。高台内（外底）は、釉を環状に削り取っている。釉は焼成不良のため、気泡が多く、沈線文様があるが不明である。7は青磁の焼成不足かあるいは鉢釉と考えられる皿で、内面に沈線文が認められる。見込み及び高台内にはピンチの跡が認められる。高台・高台脇・高台内は露胎であり、高台脇にケズリが認められる。この皿は、一応青磁として扱ったが、なお検討が必要である。これらの皿はいずれも明代のものであろう。

この他に、図示できないか劃花花弁文碗と考えられるものや、外面に横目文をもつ碗などがある。

白磁・青白磁

第67図8はいわゆる青白磁で、高台脇にケズリがある。高台内には釉が認められない。南宋～元にかけての劃花文（？）碗と考えられる。第68図3は口唇部が無釉（口禿手）の碗あるいは皿と考えられる。外面下位にはケズリがみられ、軽い模がつく。鎌倉中期かそれ以前（南宋～元）のものと思われる。これに類似するものが、光明寺裏遺跡（北区鎌倉学園内遺跡発掘調査団・他：1980）より出土している。同図4は口唇部付近の器厚が薄くなり、やや外反する碗で、文様の有無は不明である。時期は明確ではないが、元代後半のものであろうか。同図5は唐草文の梅瓶（青白磁）と考えられる。削れ口には、接着剤としての漆の付着がみられる。およそ13世紀末頃の景德鎮窯系の製品と考えられる。

白磁（青白磁も含む）は、出土量が少なく、全体の様相を知るものがないが、いずれも中国陶磁器の中では古い傾向（鎌倉中期～末期）を示す。



図版	アーチ・透	横	縦	文	造物名	種類	基	形	感	性	造	施	基	備	考
1	B-2	1号窓	1層	225	青磁	碗		口縁~側面	中腹溝	元(13C)	青磁(13C) 磁色:3.5G 7.5YR 10%W 0.3-0.8mm			裏人有り 電卓用本蓋付	
2	A-5	11号窓	1層	327	x	x	x	x	x	x	x	x	x	裏人有り 電卓用	
3	B-4	9号窓	7層	615	x	x	x	x	x	x	x	x	x	裏人有り 電卓用 青磁(13C) 磁色:7.5Y 10%W 0.3-0.8mm	
4	F-6	22号窓	1, 2層	901	x	x	x	x	x	x	x	x	x	青磁(セリヤ灰10.5YR 1%)	
5	F-8	33号窓	1層	384	x	x	x	側面~底部	x	x	x	x	x	裏人有り, 青磁(13C) 磁色:10.5YR 8.5%	
6	A-8	1号窓	1a, 1b層	112	x	x	x	口縁~底部	x	x	x	x	x	裏人有り,	
7	F-7	21号窓	埋土	808	x	x	x	x	x	x	x	x	x	裏人有り, 光沢無しの小皿付きでいる。 青磁(13C) 磁色:5.5Y 10%W Y 0.3-0.8mm	
8	E-5	田器	1層	621	白磁	碗	側面~底部	中腹溝	IC					裏人有り,	
9	A-8	1号窓	1a, 1b層	54	金竹	小瓶	x	x	x	x	x	x	x	裏人有り(青磁色10.5C)	
10	I	1区窓	(1号窓?)	26	x	x	x	x	x	x	x	x	x	裏人有り, 青磁(13C) 磁色:5.5Y 10%W Y 0.3-0.8mm	
11	B-2	16号窓	瓦土上層	64	x	x	x	口縁~側面	x	x	x	x	x	裏人有り(青磁色10.5C)~青磁色10.5C)	
12	A-8	1号窓	1a, 1b層	112	天板	碗	側面~底部	x	x	x	x	x	x	裏人有り(青磁色10.5C)~青磁色10.5C)	

第67図 中国製陶器(1)

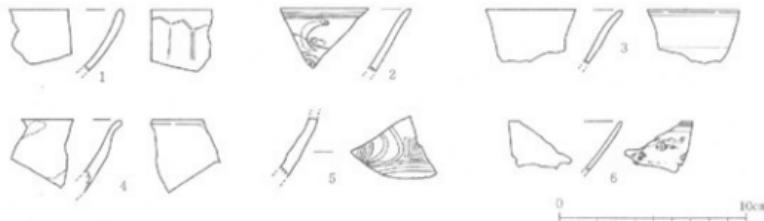
天目

第67図12は、黒釉の天目茶碗である。中国産の天目茶碗は、わずか一点のみの出土である。内面の見込み部に至る部分には軽い棱がみられる。また、高台脇及び高台内は露胎でケズリが認められる。

時期は元があるいはさらに古い時期のものと看される。

364

染付には碗と皿がある。第67図9は見込みに文様のみられる皿で、脛付には釉が認められない。同図10は所属不明となった出土品である。見込みに十字花文の変様と思われる文様、外面には唐草文（？）かと考えられる文様がみられる碗であろう。高台の付根には釉が厚くたまり、一見葵筋底風に見える。これと同様の破片が他に1点ある。同図11は、口縁部や体部の内外面に界線があり、外面体部には唐草文（+牡丹？）がみられる小皿である。第68図6は口縁部内外面に界線、外面には唐草文かと思われる文様のつく碗である。これらの染付はいずれも16世紀の時期のものであろう。



固有名	アクリト	道	駅	里	生	地番	地番	目	地	位	施	施	時	期	物	備	考
1	F-2	北	3号	高	第1	415	青梅	南	口端	脚部	中田庄	明(16C後半)	青梅(セリツイフジG Y前)	入有り。運営支間			
2	B-6	3号	井戸ノ川	北	上成	956	御	西	+	+	南	未	青梅(御跡? G S Y前)	走有り。			
3	B-8	1号	横	中	2下留	978	白塗	東	+	+	未	不明	白塗(黒色? G S Y前)	走有り。御跡に沿って通す様に			
4	B-7	ビ	3号	15	上	241	土	西	+	+	未	未	白塗(明治後G Y前)	走有り。御跡に沿って通す様に			
5	E-4	11号	高須町	1	2留	612	白	東	脚	脚	合	明治(12C後)	白塗の光明相	墨跡有り。深入り有り。○	テラス状の坂が見られる。		
6	E-4.5	20号	高	1	留	616	青	東	脚	脚	明(15C後)	透塗(厚約3mm)	藍色で走有り				

第68図 中国製陶磁器(2)

(3) 土師質土器

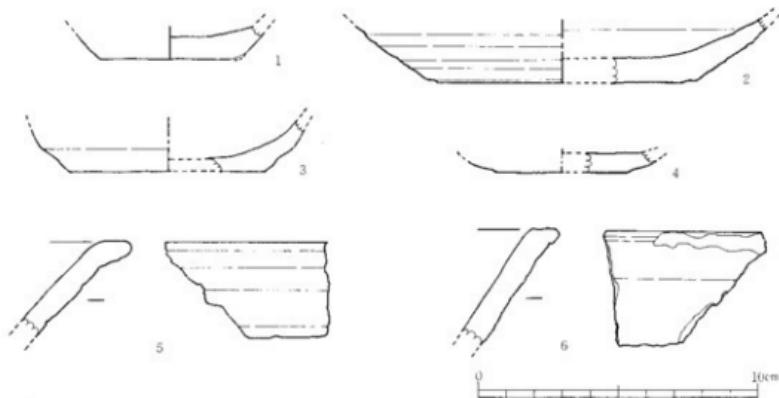
従来、一般に中世以降の酸化炎で焼成された土器類に対して「土師質土器」「中世土器」「かわらけ」等の名称で呼ばれている。これらは、おおむね古代の土器の系統を引くという考え方から導き出された名称であろう。ここでは便宜的に「土師質土器」と呼ぶことにしよう。

本遺跡より出土した土師質土器は、皿が主体を占めるが、鉢も存在するようである。これらの土器群は、いわゆる「赤焼土器」と比較した場合、ほとんど砂粒を含まず、焼成も極めて良い。この特徴は特にIII期以降のものに顕著である。ここでは出土数が少ないので器形分類は行っていない。皿類はいずれも回転糸切りで再調整はない。また、I期・II期に属するものは明確ではなく、「赤焼土器」との区別もつけにくい。

ここでは、遺構の時期別に土師質土器の変遷を概観してみたい。

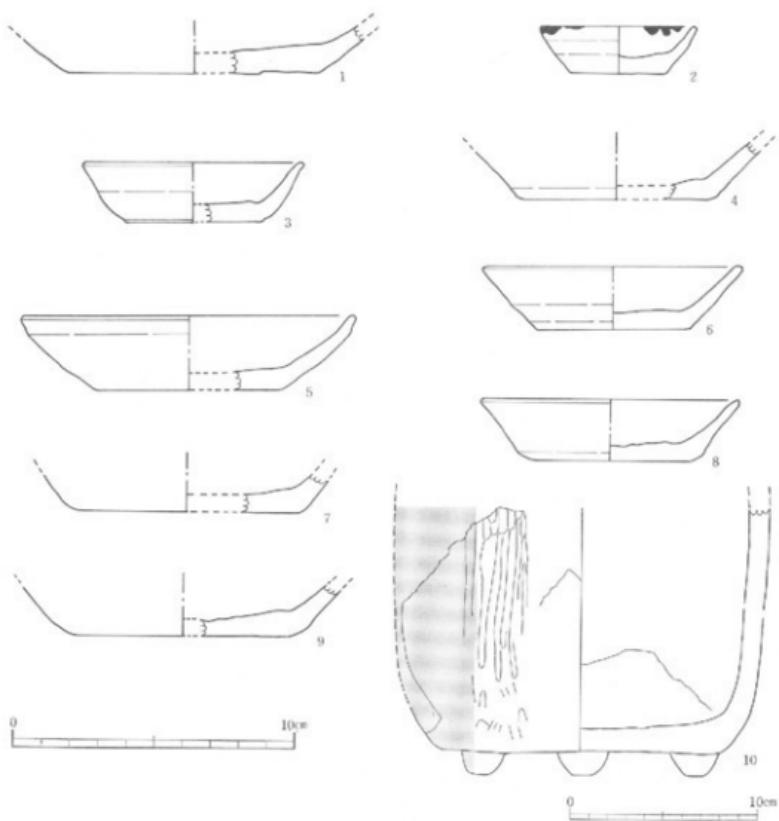
I期後半は土師質土器の存在が予想されるのであるが、「赤焼土器」との区別が明確ではない。現段階では皆無とせざるを得ない。

II期は、やはりI期同様「赤焼土器」と区別がつけにくい。わずかな資料からの判断では、砂粒が少なくなり、焼成はよく「赤焼土器」より硬質であるらしい。遺構の出土状況等から、第69図1、第69図4の皿、第69図5・6、第71図6・7の鉢がこの時期のものと思われる。こ



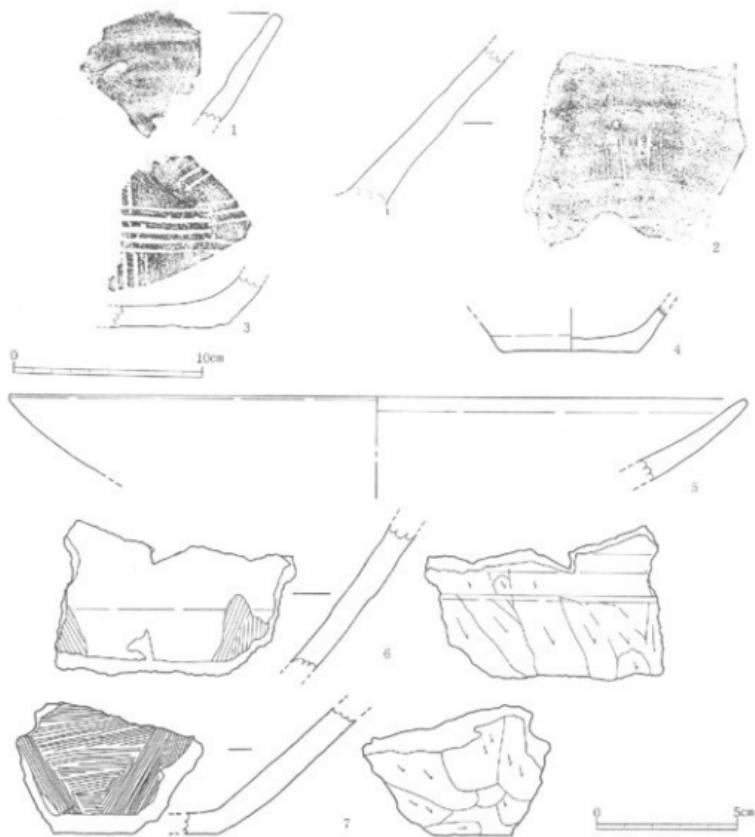
部品	アリット	通 構	層位	遺物番号	形状	部 位	時 期	内 面		外 面		備 考
								内	外	内	外	
1	Ⅰ-2	11号溝	底	405	深	底	Ⅱ期	セラミック		セラミック		
2	Ⅱ-4	=	上層	527	+	=	Ⅲ期					
3	+	-	+	*	+	+	+	+	+	+	+	内面に縦目有、縫合部
4	+	-	上層	563	深	底	Ⅲ期	+	+	+	+	内面に縦目有
5	Ⅲ-2-4	=	下層	641	浅	上層	+	+	+	+	+	
6	Ⅲ-4	28号溝	底上層	587	+	=	+	+	+	+	+	

第69図 11号・28号溝出土遺物



図版	グリット	透 漏	施 伏	遺物番号	器 形	施 痕	地 貨	調		考
								内 面	外 面	
1	A-B	1号清	施 土	54	盆	施 痕	厚層	ロクロナデ	ロクロナデ	動土に白い鍍鉄のもの含む
2	*	*	2号	138	追 明 盆	口縁部-底部	N期	*	*	口縁部2-3cm付近する位置に鍍鉄片あり
3	*	*	*	140	盆	*	*	*	*	動土に白い鍍鉄のもの含む
4	*	*	*	*	圓盤-底部	*	*	*	*	
5	*	*	2号上	1019	口縁部-底部	*	*	*	*	底部近くに陶片あり
6	*	*	*	△A	*	*	*	*	*	
7	A-2-B	*	3号	136	*	底 部	*	*	*	
8	*	*	*	*	口縁部-底部	*	*	*		
9	A-7	*	底	220	盆	*	*	*	底部	底部に白い鍍鉄のもの含む
10	*	*	*	282	内 透 漏	底部-瓶部	*	施ナデ	盛みがち 盛みがち	三足は二号は三角形の位置

第70図 1号溝跡出土遺物



部類	アクリト	層位	通鑑番号	形	性	目	剖	形	性	層	地	層	期	期	備
1	F-2	面層	1042	圓	卵	鰓	口輪～鰓部	帆	内	不	明	自然根			西面はXの兆候のも のがある。表面は白い針状のもの の付着。内部を骨盤 で構成する。底面は斜面 で、その上に複数の孔が有る。
2	B-8	面層	138	x	柱状	鰓	帆	内	不	明	小	明			表面は白い針状のもの の付着。内部を骨盤 で構成する。底面は斜面 で、その上に複数の孔が有る。
3	B-3	表様		x	x	鰓	帆	基内	面						内部は、外側ともロブ ロガサ。底部屈曲があり、土中で半分色 變り。
4	A-8	江潮	1019	木脚鉄土器	皿		x			II	皿				外側ともロブ ロガサ。
5	x	日暦	x	x	大頭?	口	輪	部		IV or V	皿				外側ともロブ ロガサ。
6	E-2	面層	x	x	鰓	帆	帆		II	頭?					内面はクロトガ後、 後脚側のカナ。外側 はロブロガサ後、古い 頃アマリ。
7	A-6	日暦	x	x	x	x	帆	帆			x				内面はテテ後、頭に 複数孔にナナ。外側、 軽いクズリ。内面底 部はくじらモザイク 模様。

第71図 表様・基本層位出土遺物

これらの資料をみると、平安時代の土師器皿と調整技法はほとんど変わりないようである。

III期は、II期のものとは異なり、「赤焼土器」と前述したことと明瞭に区別することができる。この時期には、第69図2・3、第58図10がある。3、10の小皿は、腰が張り、急激に立ち上がる。2はやや大型であるが、外傾しながら立ち上がる。外面のロクロ目が極めて明瞭である。

IV期は比較的量が豊富で、特に、1号溝より集中的に出土している。この時期には第70図1～9、第71図4・5がある。いずれも皿で口径5～9cmの小型のもの、口径10cm以上の中型のもの、そして5のような口径25cm以上の大型のものが存在する。ただ、5については時期が明確ではなく、V期に属する可能性もある。

(4) 瓦質土器

瓦質の上器類には、擂鉢・火消壺・火鉢がある。擂鉢については陶器の項で扱っている。ここでは火消壺と火鉢について扱う。

〔火消壺〕

第70図10は、三足の火消壺と考えられる。外面は縦位のミガキ後黒色処理している。胴部上半を欠くが、おそらく内窓して立ち上がり、蓋が付くものと考えられる。内面はナデで、炭化物の付着がみられる。他の遺物から判断して、およそ17世紀のものであろう。

〔火鉢〕

亀甲文の型押しのある口縁部破片で、細片であるため図示できない。他に、雷文の破片1点がある。

(5) 瓦(第72・73図、第5表)

今回の調査で出土した瓦は、表採品を含めて合計27点出土した。I区は12点、II区は14点(表採品1点)、表採品1点である。

これらの瓦を観察すると大きく4種類に分類することが可能である。

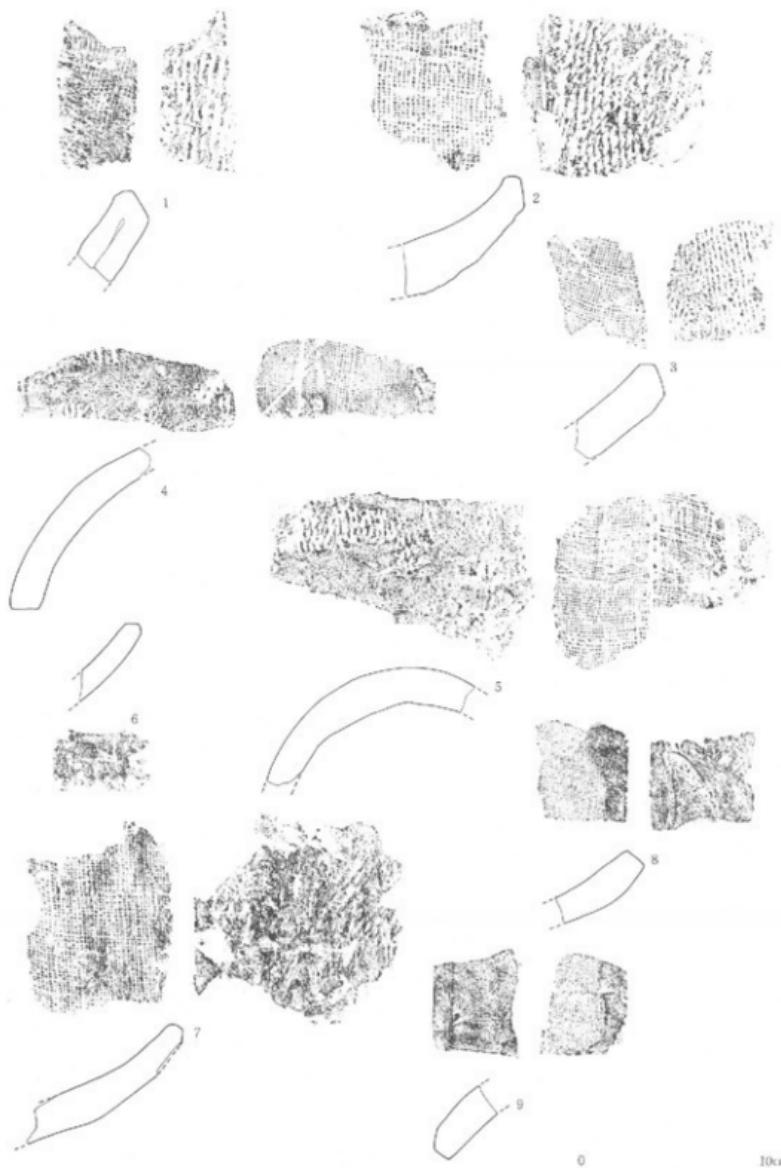
1類 凸面は繩目、凹面は布目のみられるもの(布目のないものあり)。

2類 凸面はナデ、凹面は布目のみられるもの(布目のないものあり)。

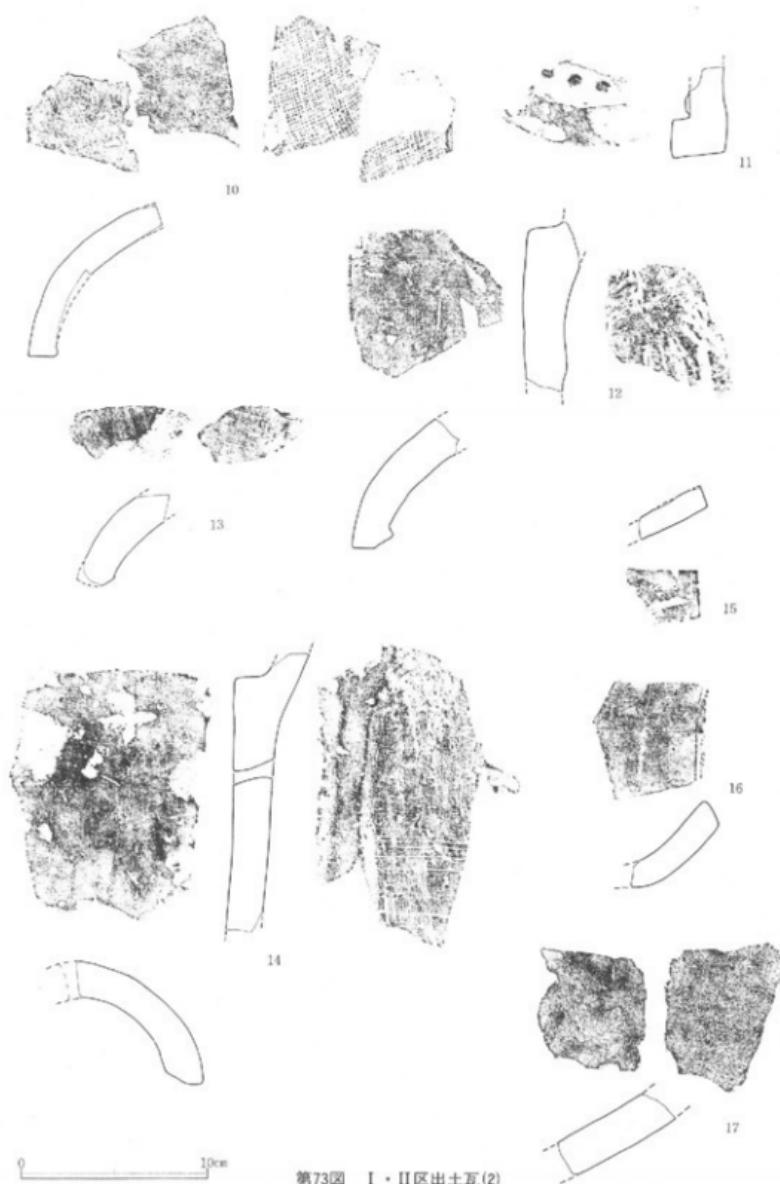
3類 凸面はミガキ、凹面は布目のみられるもの(埴瓦)。

4類 凸面はミガキ、凹面はミガキのみられるもの(埴瓦)。

1類は繩日の節は大きく、布目は大きく荒い。2類は1類に比べ小型化し、布目を消しているものもある。3・4類はいずれも埴瓦であり、凹面の布目の有無の差による。3・4類はいず



第72図 I・II区出土瓦(1)



第73図 I・II区出土瓦(2)

第5表 瓦 鋼 磚 表

固形	グリット	遺構	層位	取上番号	種別	鋼			分類	時期	備考
						凸面	凹面	端目			
1	B-3	1号溝	上層	708	平瓦	n	n	n	1類	I期	
2	E-4	28号溝	壁土中部	538	n	n	n	n		Ⅲ期	
3	F-6	23号井戸	1層	952	n	n	n	n		Ⅱ～Ⅲ期	
4		11号溝	2層	526	丸瓦	n	n	n			
5		29号溝	1層	882	p	n	n	n		Ⅲ期	
6	E-3・4	11号溝	底	843	平瓦	n	n	n	2類	Ⅱ～Ⅲ期	
7	B-4・5		1層	319	n	n	n	n			
8	A-3	11号井戸	1層	130	n	n	n	n			
9	B-2	11号溝	底	485	丸瓦	n	n	n			
10	F-4		2、3層	606	n	n	n	n		Kog11と接合	
11	A-6	1号溝	3層	141	新丸瓦				3類	IV期	様瓦 巴文
12	"	2号溝		53	丸瓦	n	n	n			n
13	A-4	1号溝	3層	128	n	n	n	n			n
14	F-8	18号井戸	2層	786	n	n	n	n			中央に釘穴あり
15	B-4		1層	27	平瓦	n	n	n	4類	n	n
16	表			201	n	n	n	n		n	
17	A-3・4	12号溝	壁土上部	268	n	n	n	n			

(時期は遺構の所蔵時期を示す)

れも今泉城IV期以後の遺構に伴うようである。したがって、逆に1・2類は明確な遺構が平安時代以降から出現することを考慮すれば、およそ平安時代から室町時代の中に位置付けることが可能である。1類はその使用年代は明確ではないが、およそ平安時代であろう。2類については、おそらく平安時代後半から室町時代前半の中に位置付けるのが妥当であろう。また、3類から4類への変化は、織田信長による安土城築城の際に布目瓦がなくなったという指摘(駒井鋼之助: 1981)があり、地域を異にするが、およそ3類から4類へ変遷したものと考えてよいであろう。また、共伴する場合も当然考えられる。以上のことから、本遺跡出土の瓦は、およそ1類から4類へ変遷したものと考えることができよう。瓦の詳細については、第5表に示したが、いずれも細片が多く、平瓦と丸瓦の区別のつけにくいものが多い。中世においては板瓦、柿葺などが流行したが、瓦葺は極めて少なく、地方の館や寺院ではなおさらのことであろう。本遺跡出土の瓦は、館か周辺の寺院の棟に葺かれた瓦と理解しておきたい。

(6) 土製品

土製品には土鍤、羽口、増堀、土鈴、その他がある。

1. 漁具（土鍤）

ここでは重複するが、平安時代の遺構（I期以前）出土のものも含めて述べたい。

土鍤は出土総数29点で、いずれも管状で中心孔をもつものである。したがって時期別の形態

変化はない。すでに平安時代の遺構より出土したもの5点は図示した。その他に中世の遺構あるいは遺構に伴わない土鍤が24点ある（第74図1～13）。I区は北側のB-7・8区に多く、II区では南側E-2区やF-3区に多い。

土鍤は平安時代中期以後、III期までの遺構から出土し、他の時期は不明である。平安時代からI期にかけてのものは、長さ3.7cm～4.9cm、最大径1.4cm～2.2cmで比較的小型である。重さは散在する傾向があり、5.1g～13.7gである。逆に、II・III期の遺構出土のものや遺構に伴わないものは、平安時代（I期も含む）に比較するとやや大型化の傾向を示している。中世の遺構から出土したものは、必ずしも遺構と同時期のものか判断できない。例えば、本遺跡の南西にある名取市清水遺跡（丹羽茂・他：1981）の出土土鍤は2種に大別されるが、古墳～平安時代に位置付けされている。形態等によって時期を限定できないと指摘されている。清水遺跡例は、本遺跡のものと比較した場合、形態や重量にひらきがある。本遺跡出土例のうち、平安時代からI期にかけてのものは、仙台市山口遺跡（佐藤洋：1981）の平安時代の河川跡出土例に類例を求めることができる。年代的にもほぼ一致するものである。また、中世遺構出土のものや遺構に伴わないものは、比較資料がないがここでは中世の土鍤と理解しておきたい。土鍤の時代的变化等は、川筋（あるいは海）に沿った遺跡の比較検討が、今後必要であると考えられる。本遺跡ではIII期の遺構に伴う魚骨が出土しており、魚類との関連も今後の検討課題である。

2. 小鋳冶関係土製品

小鋳冶に関係する土製品には、羽口・埴堀がある。

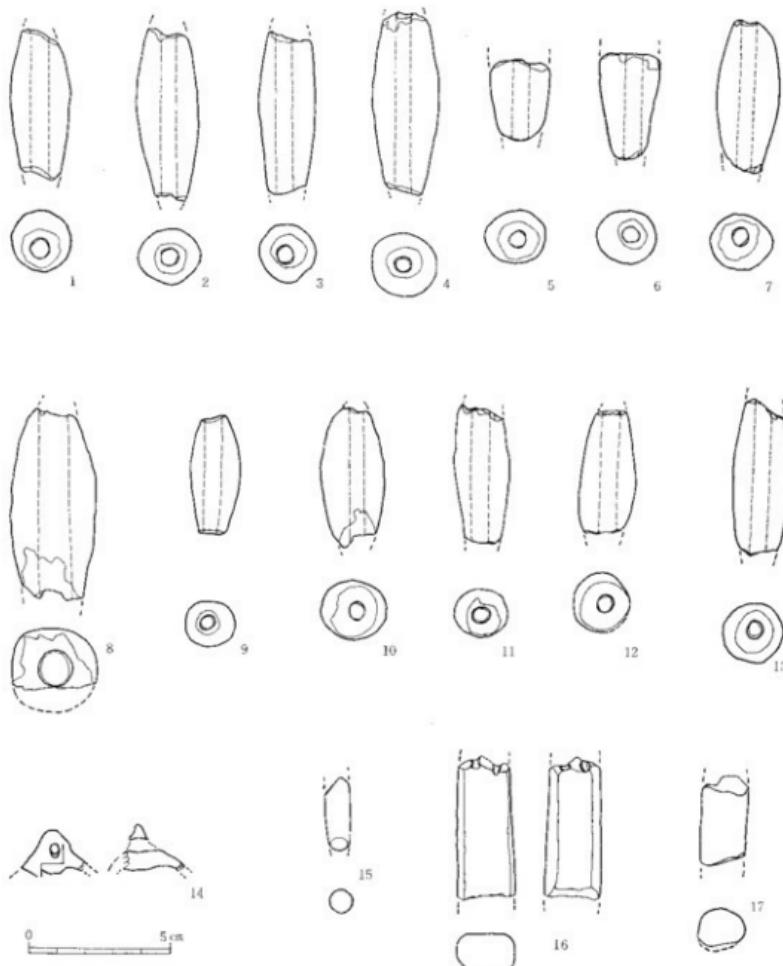
羽口

羽口は2個体出土している。第104図14は現存長15.4cm、最大径9.8cm、内径は一定ではないが約3cmを測る。本例は11号溝（E-4区）2層より出土したもので、III期に属するものと考えられる。古代のものに比べると大型化しているようである。先端には溶解した鉄の付着が認められる。他に12号溝（IV期）出土の細片がある。

埴堀

埴堀は3個体分出土している。このうち、図示できるものは第107図9の1点である。9は口径7.4cm、器高3.3cmで丸底である。内面には緑青が認められることから、銅製品の製作に利用されたものであろう。46号土壙上面より出土した。本例はII～III期のものと考えられる。他に、F-8区II層と表採の各1点あり、いずれも口縁部細片である。

以上、これらの遺物から判断して小鋳冶遺構の存在が予想されるが、今回は明らかにするこ



图版号	器物名	器形	器口	器底	器身	器身高(m)	器身宽(m)	器身厚(m)	器身重(g)
1	石刀	B-7	口	底	身	0.25±0.2	0.7	0.4	430±61
2	器	c	x	x	(B)6.3±2.2	2.6	38.4	2.7±2.1	
3	器	c	x	x	(B)5.9±2.9	0.6	30.4	441	
4	器	B-E	圆唇凹口	平底	(B)6.5±2.7	0.5	26.5	326	
5	器	B-E	圆唇凹口	平底	(B)2.9±2.2	0.6	16.1	478	
6	器	c	x	x	(B)6.3±2.1	2.6	42.5	578	
7	器	E	c	c	11号磨光石刀	1.2	35.9	780	
8	器	c	x	x	21号磨光石刀	1	44.2±1.7	0.5	235
9	器	c	x	x					
10	器	c	x	x					
11	器	c	x	x					
12	器	c	x	x					
13	器	c	x	x					
14	器	c	x	x					
15	器	c	x	x					
16	器	c	x	x					
17	器	c	x	x					

第74图 I・II区出土土器

とができなかった。

3. その他

第74図14は土鈴である。16号溝（III期）B-2区より出土した。信仰に関連するものであろうか。同図15～17は、用途不明の棒状七製品である。16は2ヶ所に孔をもつ。

（7） 石製品

中世以降の石製品として、ここで扱うのは、礫・礫石器、石臼、砥石、大形礫石器、硯、スレート片、珪化木、板石である。石臼を除けば、これらの遺物は館成立以前の今泉の各期にも存在し得るもので、各時期のものが混在している可能性もあるが、明確に分離し得ないので、ここで一括して扱う。

礫・礫石器（第75図～77図、図版21～23）

ほとんど加工しない手に握れるくらいの自然の円礫の表面に、磨痕、敲打痕、凹み等の使用痕を残した石器を、礫石器と総称する。その使用痕の種類によって、磨石、敲石、凹石などと呼びわけられてきたこの種の石器を、実は使用痕の在り方が単純でないことから、それらの分類を一括廃したうえで、把え直そうとする試みもある（後藤：1979）。礫石器は石器時代に最も普通に知られており、古墳時代～平安時代の住居跡から出土することもよくあるが、中世以降ではあまり注意にのばっていない。また、各時代を通じて、一般に遺跡を発掘すると、使用痕加工痕等は認められないが、本米の自然層中には含まれてない、従って人為的に運ばれた可能性のある礫が相当数出土するものであるが、発掘の際にあまり積極的に採集されないし、採集されてもほとんど分析・報告の対象とならない。

今回の発掘では、中世（II～III期）の内堀と考えられる11号溝で、発掘中に埋土に多数の主として拳大の円礫が含まれていることが注意された。これらの礫は主にグライ化したシルト層である大別した埋土の2層から木製品や植物遺体と混在して出土し、特に一箇所にかたまって出土することは無いが、I区で232個、II区で39個で、溝の屈曲部であるB-5区に最も多い（146個。ついでA-5区88個、B-4区37個）。これらの礫は遺跡の自然層中には含まれておらず、人為的に運ばれたものと思われる。これらが合戦や習俗に関連した「つぶて」（中沢：1981参考）ではないか、との指摘もあり、採集された礫すべてを分析対象として、計測値、使用痕の有無等の属性を記録した。ただし、発掘時に微細な礫や大きな礫など、数としてはごく少なかったが、すべてを採集しているわけではないので、その点、資料に限界がある。他の遺構については、11号溝のような礫の出土状況は見られず、採集されている礫も少く、かつ採集方法も充分でないので、使用痕の認められたものについてのみ報告することにした。礫石器の使用

痕については、一般に客観的な認定基準が定まってないが、一応、ほとんどの観察者が一致すると思われる明瞭なもののみを認定した。磨痕では非常に滑らかな面（図版23-1）と、集中的な擦痕（図版23-2）である。敲打痕は、自然の作用による細かな凹みとの区別がいっそう難しく、確実なものと認定されたのは1点のみである（第76図10）。よって、使用痕が認定されなかったものの中にも、実際には使用されたものが含まれている可能性は当然ある（なお、実測図の表現はP.114参照）。

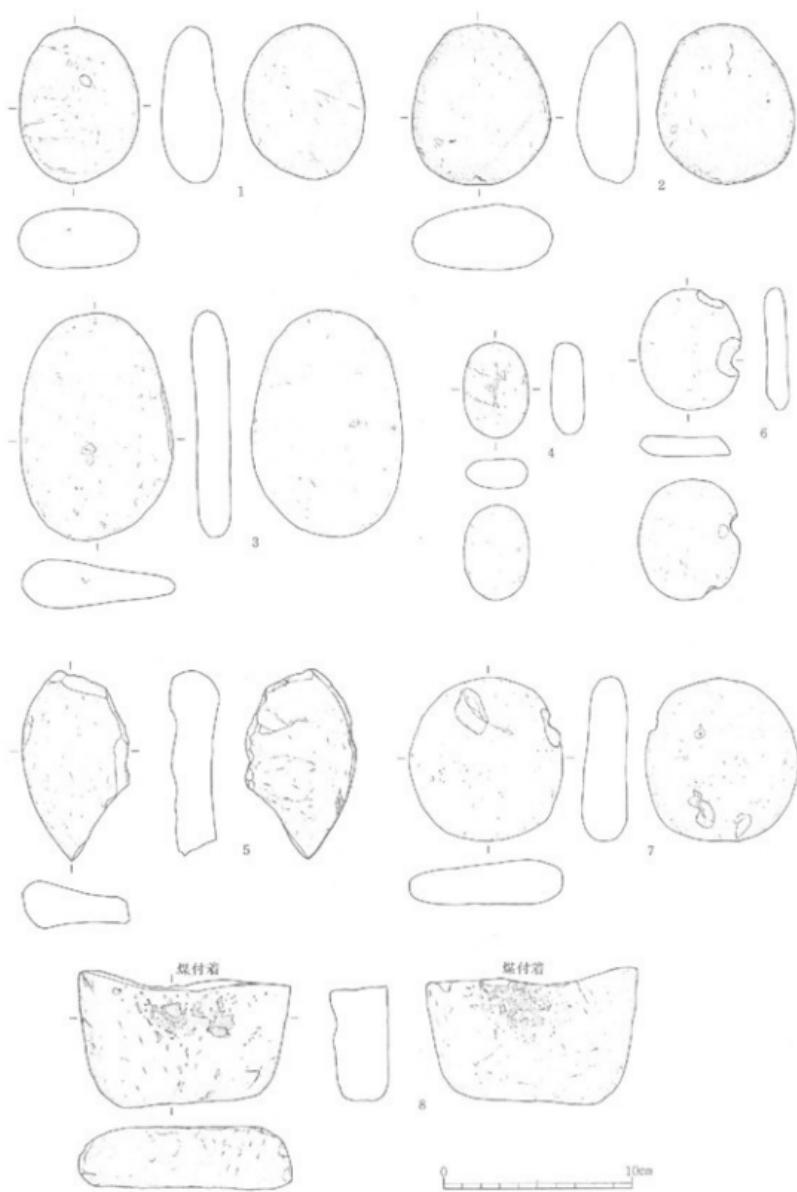
〈11号溝出土の礫〉 計測値の記述的な統計表現は第78図に示した。直接比較できるデータがないので、これ以上の事は言えないが、長さをとった場合、平均値±12~13mmの間に全体の約68%が含まれるのは、かなりの集中度と言えよう。形態に関しては第78図4に長さ・幅・厚さの比を示した。このグラフは、縦軸が礫の平面観を示し、1.0が円形で、数値が大きくなるにつれ細長くなることを示す。横軸は断面形で、数値が大きくなるにつれて厚味を増し、1.0が最大で円形になる。このグラフでは、角の有無等細かい形は現れないが、観察所見として、橢円形で偏平ないしや厚味のあるものが大半を占め、角ばって厚味のあるもの、棒状、角柱状のものは非常に少ないことが言える。

使用痕が認められたものは、I区で7個（3.0%）、II区で6個（15.4%）、計13個（4.8%）で、割合は大変少ない。第75図3は側縁に平坦な磨面があり、6は側縁に二つの抉り状の剥離痕がある。8は破断面も磨られ、二つの凹みには縫状の付着物がつまっている。使用痕を有するものは、必ずしも標準的な大きさ、形態の礫ではない。

石質では、I・II区を併せて、安山岩が40.6%、砂岩系のものが27.3%で大半を占める（第78図5）。安田（1978 P.523）は、名取川の下流域で2kmごとの礫の最大粒径（2500m²内に於ける最大粒径8個の中径を求め、算術平均したもの）を示しているが、今泉城を挟む2地点のそれは、21cmと12cmであり、かつ安山岩を多く産するという報告は、参考になろう。

〈その他の遺構の礫石器〉 発掘区全体では上述のような小形の礫が131個採集されている。最も多のが15号溝で14個、ついでE-7区19号井戸8個、29号溝6個、21号溝5個で、11号溝に比べ、ずっと少ない。うち、18個に使用痕が認められた（大形の礫は、大形礫石器の項で扱う）。

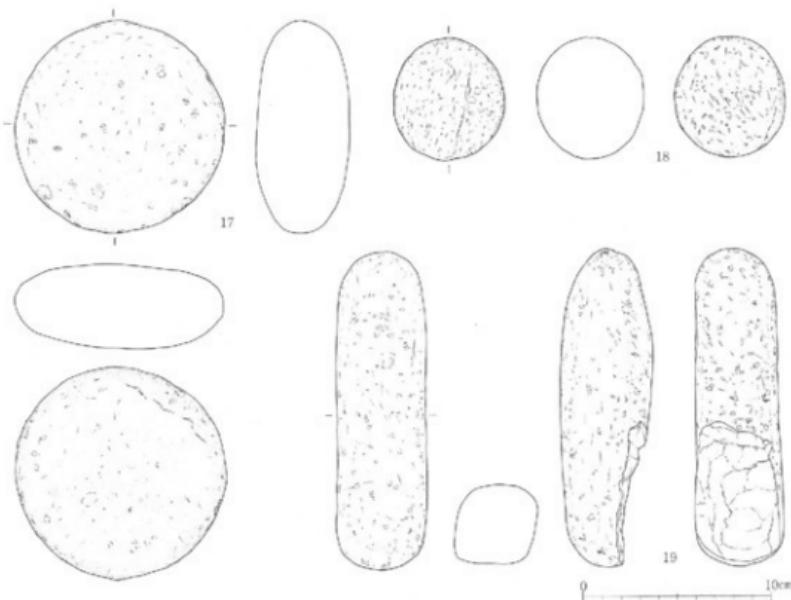
11号溝から集中的に出土した礫については、遺跡の重複性や採集方法の問題もあり、その性格を明らかにし得ないが、出土状況や大きさ・形態の集中性から見て、中世に於いて選択的に今泉城に持ち込まれ、溝の埋没過程に廻棄ないしは取り込まれた可能性が強い。また、礫は遺跡の前面を流れる名取川から採集されたのではないだろうか。使用痕を残すものが確実に含まれているが、平安時代以前の遺跡も重複しているので、中世に於ける礫石器の存在についてはここでは確定的なことは言えない。他の遺構出土のものについても同様である。ただ、形態や



第75図 石器(I)



第76図 標石器(2)



回数	地区	成形	部位	長 (mm)	幅 (mm)	厚 (mm)	重 (g)	石	質	跡痕	その他の使用痕	備考	下限
75-1	A-3	11号	側	縫	82.5	64.0	33.2	239	シルト岩	○		Ⅲ期	
-2	e				85.5	74.6	31.0	314	安山岩	○			
-3	e				121.2	80.4	23.0	191	砂岩	○			
-4	B-4	2			51.0	34.2	18.0	30	安山岩	○			
-5	e						27.1	中粒砂岩	○		成形		
B-5					99.1	87.9	36.7	230	?	○			
"					73.4	69.6	31.1	200	安山岩	○			
-6	E-4	2			66.4	54.6	12.9	35	シルト岩	○	縫合に丸打二つ		
-7	E-6	2			86.6	82.3	24.3	113	安山岩	○			
-8	F-4	2			113.0	69.4	31.3	410	安山岩	○	凹み二つ	円形に敷付着	
76-9	F-4	2			99.7	86.1	63.1	702	安山岩	○			
"							39.2	?	○		成形		
"					63.0	49.4							
A-7	4号上層							中粒砂岩	○				
E-3	29号縫2層							シルト岩	○		平安		
-12	"				54.4	44.0	15.0	58	安山岩	○			
-10	F-2 21号縫	埋土中位			102.1	35.8	33.7	157	オランピュルス	○	丸端に丸打板	成形?	Ⅲ期
-11	F-8	2	縫		54.8				シルト岩	○		成形	
"		1	縫					ホルンフェルス	○				
A-3	13号縫	波上層						中粒砂岩	○				
B-2	16号縫	埋土下部						中粒砂岩	○			Ⅱ期	
-14	"	15号縫			72.7	64.4	28.4	190	中粒砂岩	○			
-13	B-4	12号縫			133.3	92.5	(20.6)	(233)	粗粒砂岩	○	撲板のある丸打三つ	成形?	
-15	"	1号縫穴壺底			95.9	74.8	44.1	240	シルト岩	○			
B-2	14号土壠							スレート	○		成形		
77-19	B-3	13号井戸			(169.7)	66.1	43.1	(554)	有孔安山岩	○		成形?	Ⅲ期
E-2	19号井戸						15.3	シルト岩	○		成形	Ⅲ期	
B-5	7号井戸							?	○				
76-16	A-1	II層			94.6	24.1	25.4	72	中粒砂岩	○			
77-18	E-7				66.3	58.2	35.6	273	中粒砂岩	○			
-17	F-5	III層			111.5	110.1	48.8	944	?	○			

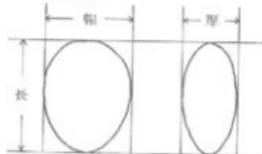
第77図 磚石器(3)

		長(mm)	幅(mm)	厚(mm)	重量(g)
I 区	n	208	208	216	204
	\bar{x}	88.2	65.6	31.1	236
	σ_{n-1}	11.8	9.6	7.1	76
	最大 値 $max.x$	138.4	88.9	56.7	550
II 区	最小 値 $min.x$	51.0	34.2	13.5	30
	n	30	33	33	29
	\bar{x}	84.9	68.6	31.8	251
	σ_{n-1}	12.9	9.1	9.5	128
区 合計	max.x	113.0	86.7	63.1	702
	min.x	54.8	52.0	12.9	35
	n	238	242	249	233
	\bar{x}	87.8	66.1	31.2	238
I II 区 合計	σ_{n-1}	12.0	10.2	7.4	84
	max.x	138.4	88.9	63.1	702
	min.x	51.0	34.2	12.9	30

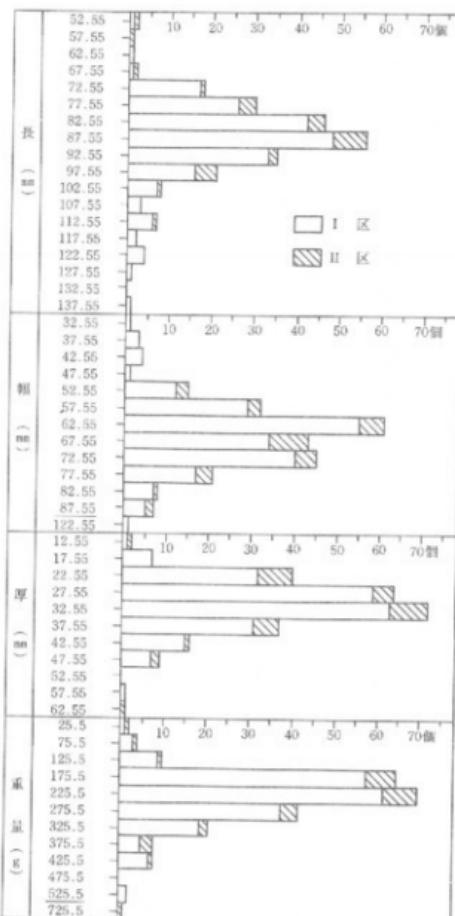
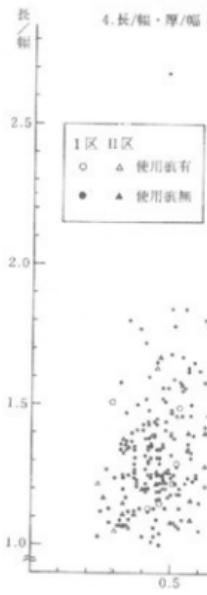
* \bar{x}, σ_{n-1} は右のグラフより簡易的に求めた

1. 平均、標準偏差

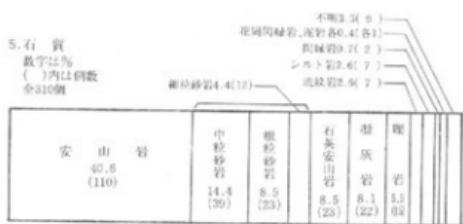
2. 計測法



4. 長/幅・厚/幅 相関



3. 長、幅、厚、重量度数分布



第78図 11号溝出土石礫統計グラフ (個の横の数字は個数の割合により省略した)

使用痕の在り方を見た場合、いわゆる石器時代の礫石器とは多少異なった印象を受けるものが含まれる。今後、中世以降の遺跡におけるこのような礫の出土に、より注意が払われるべきだろう。

砥石（第79図～84図、図版235・236）

今日、我々が普通に目にする砥石は金属を研ぐものであるが、広く物を研ぎ磨く道具と定義され、我々が“砥石”として認識する遺物は石器時代に遡る。古墳時代以降になると我々が日常刀物を研ぐために使うような方形の砥石はかなり普通に見られるようになる。ここでは比較的粒子の細かい岩石で、平坦な磨面をもつものを砥石として分類した。分類した砥石は、宮城県刀剣登録審査員の中川高氏に鑑定頂いたが、すべて金属に対して使用可能のことである。

小片も含めて88点が得られ、かなりの出土量と言える。他の石製品同様、個々の砥石の正確な時期は決め難いが、出土量の多さから見ても中～近世のものが主体を占めると推測される。

砥石を用いる人による最も一般的な分類は、荒砥・中砥・仕上砥であり、この三つの区分は、高級品・特殊品を仕上げる場合などを除けば、対象や人によって極端な差は無いようである。もちろん、目の粗さは原石によって決まるので、上記の三つの中でも様々な段階のものがあり中間的なものもある。それ以上の細かい分類は用途・産地を併わせ、地名等を冠した固有名詞的なもの、商品名で、高級品や名品に主眼が置かれ、時代や人によても様々で、考古学で通常用いるような、属性に与えた優先関係に基づく分類ではない。このような名称については、和漢三才図会（寺島良安編 1712正徳2年 105巻）、日本山海名産図会（藤闇月画 1799寛政11年、5巻）や現在販売されている自然砥石の名称が参考になろう（なお、村松 1973 P.171～195参照）。

ここでは、全体を便宜的に形態によりI～IV類に分類して提示することにした。I・II類は直方体にきれいに面が画されたもので、I類は断面に厚味があり、II類は偏平なものである。破損品が多く、かつ砥石の場合破損面と磨面の新旧関係が明瞭でないので、大きさでさらに分けることはしなかった。III類は大形で不定形なもの、IV類は末端が石斧のような形をしたもの、V類は中央に溝がある有溝砥石、IV類はいずれにも属さない不定形などを一括し、小片で形態不明のものも表にまとめた。この他に、中川氏によれば、大形礫石器のIV類としたものが固定式の砥石として使用可能とのことである。

〈目の粗さ〉 今回出土した砥石は中川氏によれば、概ね中砥の範に入るものの、日用品を対象とするなら、仕上砥として使用可能なものも含まれる。本格的な荒砥は無い。また、名品の類は1点も含まれてない、とのことである。石質との関連をみると、シルト岩が中砥から仕上砥に、細粒砂岩やホルンフェルスが中砥からやや荒い方に対応するようである。

〈面の状態〉 I・II類の場合、特に、最も使用されたと思われる1~2面が凹面となり、他の面に比べて滑らかに磨り上がっていることが多い（実測図に＊印で表示）。これは必ずしも砥石の正面側（幅広の面）とは限らない。逆に凸面をもつ例もある（No.29 第80図10。○で表示）。III類では、No.44（第81図14）が平坦面と側面に凹面を、No.37（第81図15）が平坦面、凸面、凹面を持ち、それぞれに使用されているようである。用途に応じて使い分けられたのだろう。IV類では、貝殻状の剝離面の内部を磨りこんだり（No.59、第84図26）、破片全体を特殊な面の形に磨ったり（No.63、第84図27）、折れた角と折れ口の部分を幅狭な砥面として利用している例（No.57）がある。

〈擦痕・その他の痕跡〉 砥面の表面は研磨によって滑らかになっているが、その上に多数の線状の傷（擦痕）が残されている（図版23-3.5）。このような擦痕の大きなものは、我々の通常の砥石の用法からすれば、刃こぼれを消したり、研ぎすぎた刃を清すため、刃を垂直にあてた結果と思われるが、全体に現在の砥石に比べ擦痕が非常に多い。これらの擦痕は幅・深さとも様々で、同じ砥石の面には同種の擦痕がある程度集中していることから、こすりつけられた刃物の多様さを反映しているものと思われる。

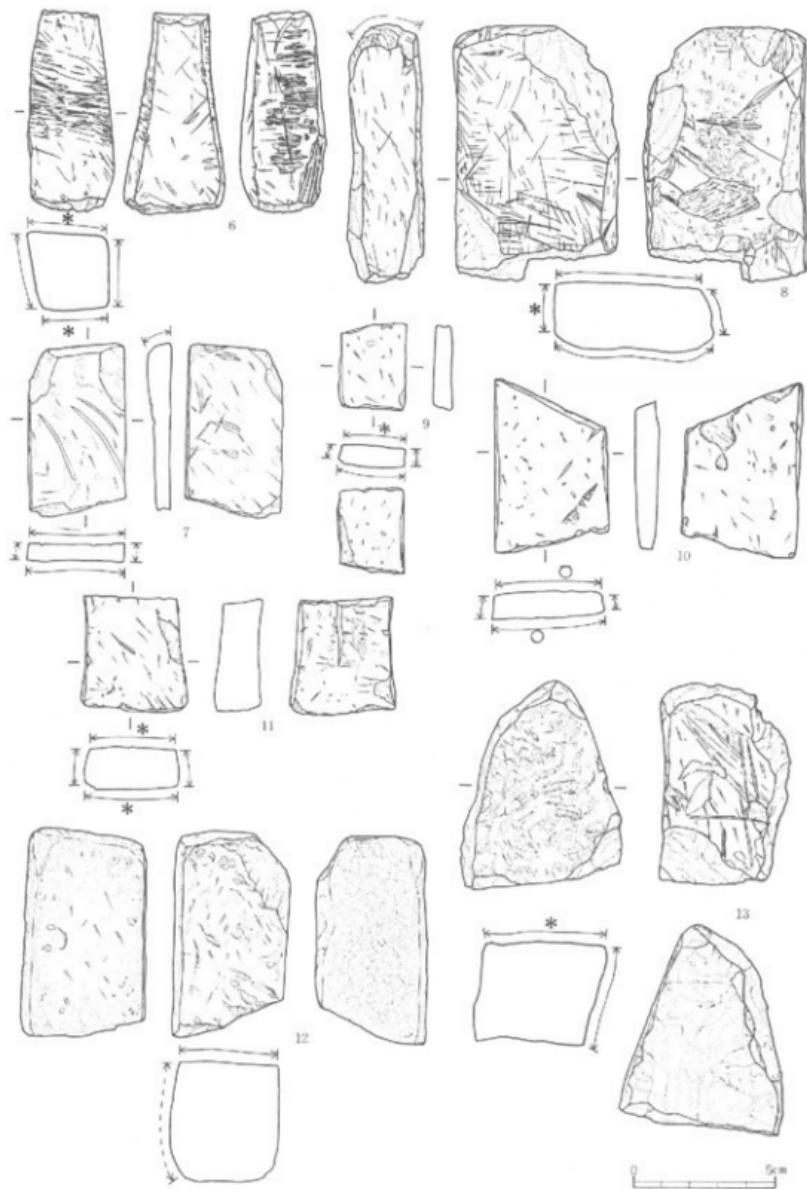
また、砥面や破損面に、特殊な刃先や部分を研いだような小さな溝がいくつか見られる場合がある。No.54（図版23-6）は幅1mm位の溝が数本1組で、側面に抉りをつけている。

No.25（第80図8、図版23-7）では敲打痕が見られ、No.1（第79図1、図版23-4）では整形のためか、削り取られたような跡がある。II類のNo.27、No.35は側面が切り離されたままになっている。

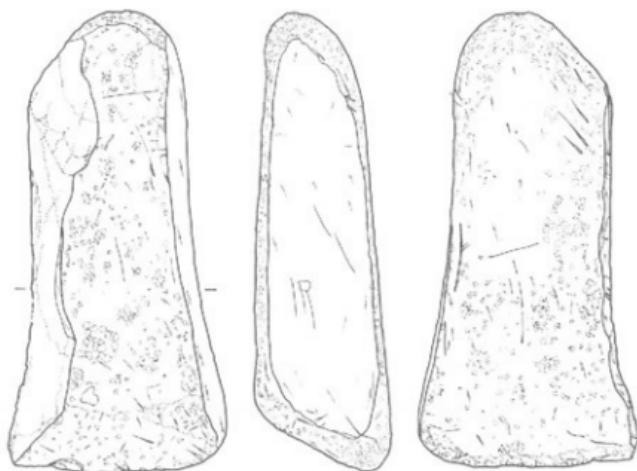
以上、出土した砥石について概括した。これらの砥石の様々な面の形状、擦痕は多様な刃物（農具、武器、工具等）の存在を想せるが、具体的な使用対象・使用法等を明らかにすることはできない。使用痕をいくらていねいに観察しても、それ自体からは解釈は成立しないのが使用痕研究の原則であり（芹沢・梶原・阿子島 1981）、砥石の場合、実験が難しく、用法が変化に富んでいるため、民俗例の援用も容易でない。分類した各形態と用法の関連も、今回充分明らかにしえなかつた。観察表も、あくまで記述的な段階にとどまるものである。また、砥石の原産地同定については、これまでほとんど試みられてないが、追求してみる価値はある。自然砥石の採掘は、近年急速に衰えており（村松 1973）、宮城県内で現在採掘が行われているところはない。しかし、各遺跡出土の資料の比較や、最近まで採掘されていた砥石との比較、伝承によるかつての砥石产地の探索などの基礎的作業を通して、ある程度明らかにできる可能性もある。



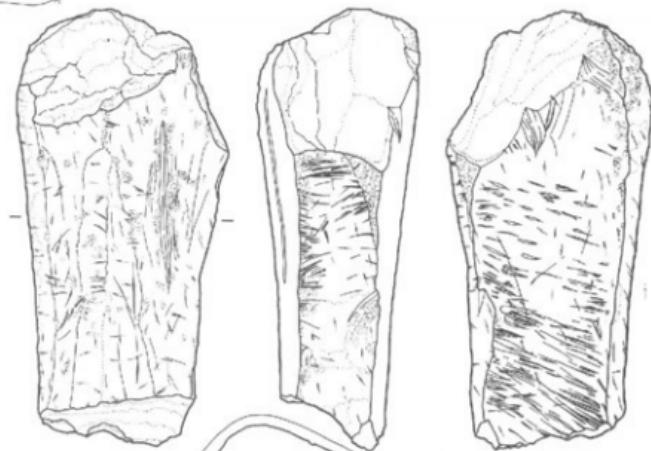
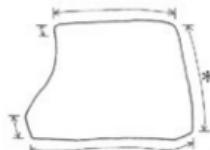
第79図 砥石 I 類



第80図 砥石 I類(6)、II類(7-11)、III類(12・13)



14



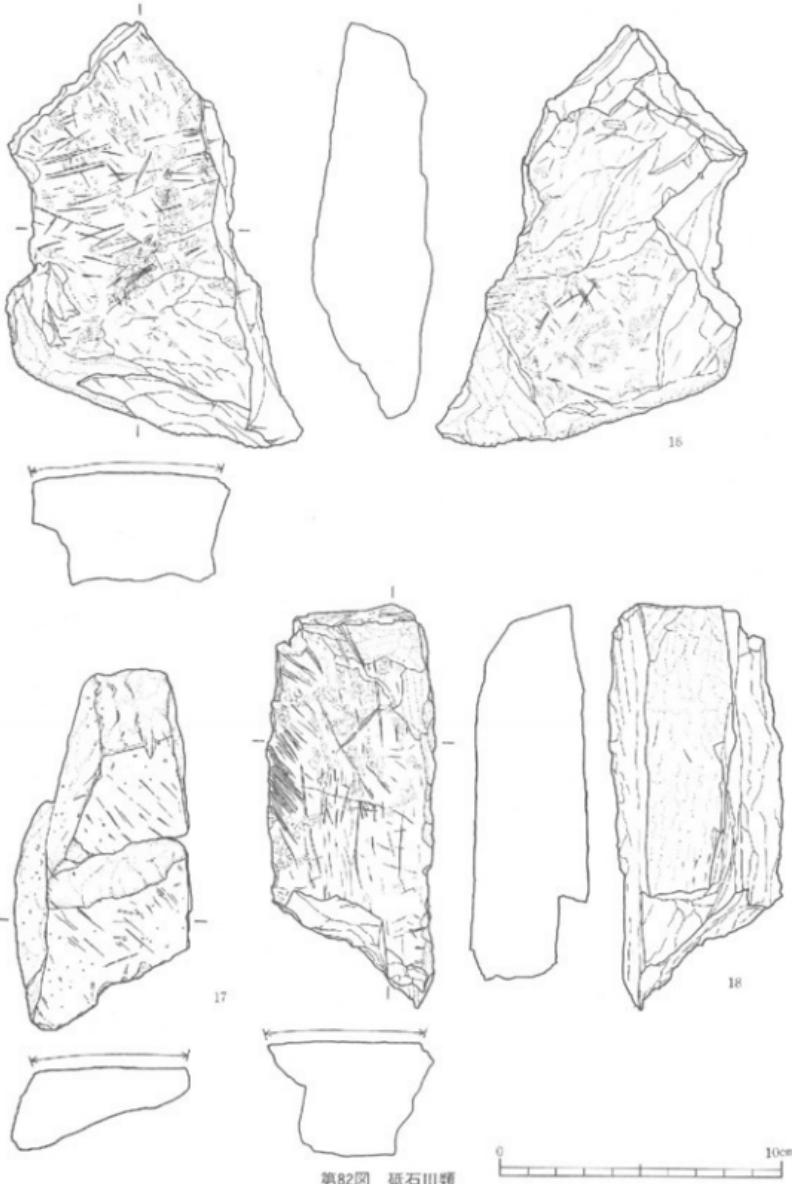
15



10cm

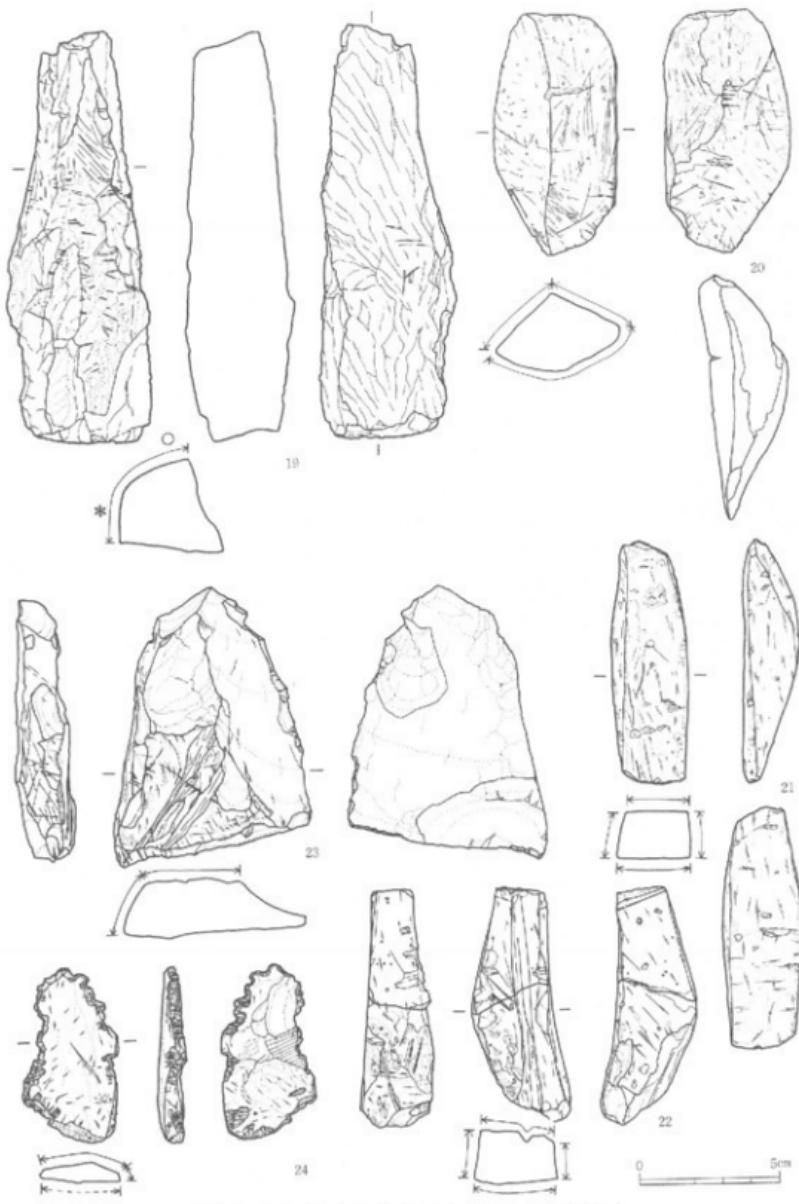


第81図 砥石III類

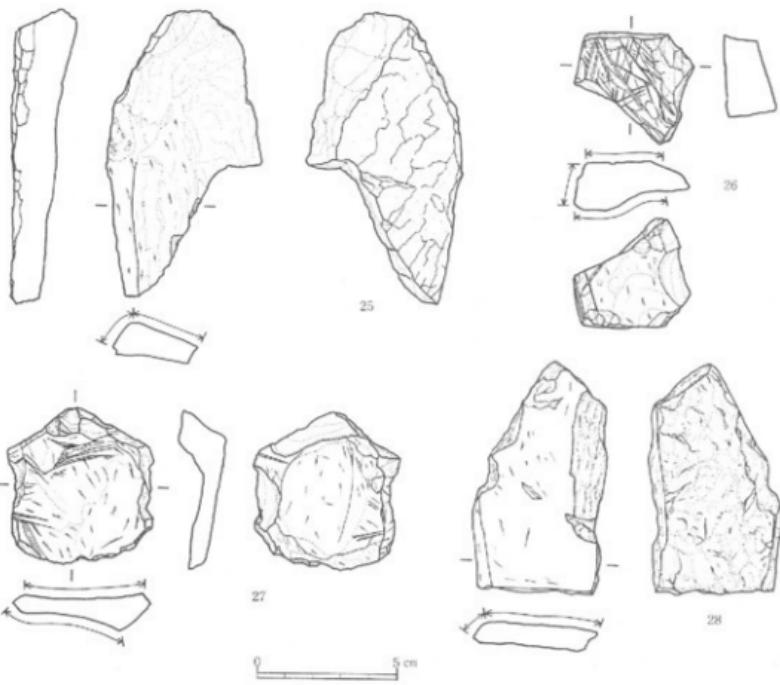


第82図 磚石器類

0 10cm



第83図 砥石III類(19)、IV類(20・21)、V類(22)、VI類(23・24)



第84図 砥石VI類、石臼の目

第6表 研石觀察表

I 類(No. 1~21)・II 類(22~35)・III 類(36~49)・IV 類(50~51)・V 類(52)・VI 類(53~66)

「腰は平指腹、胸は四指、口は凸頭」 「腰は指腹が裏しい音

*月の記載の無いものは中略 *単位はmm, g

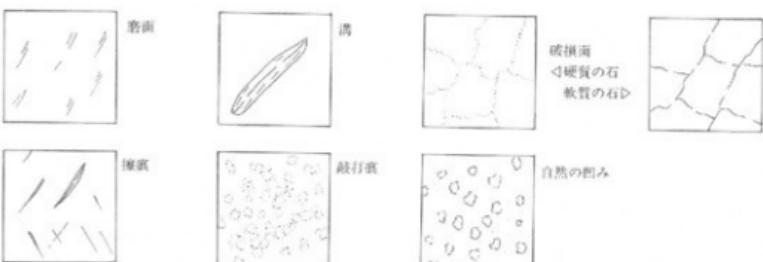
No.	固有	地区区	地 情	層 位	種	厚	有 質	特	考	下限
1	- 1	E - 3	25号井戸		64.1	61.4	シルト岩	中-上付底, 図3, 平1		期
2	- 4	B - 7	3号溝		37.4	50.8	細粒砂岩	P12, 平2		
3	"	"	"					シルト岩	小片	
4	- 2	F - 7	26号土壤	標 1. 上部	24.2	29.4	"	P12, 平2, 黒色付岩物		日期
5	F - 4	11号溝	3	層	20.8	17.0	細粒砂岩	P13, 平1, 溝1		
6	A - 3	12号井戸	標 1. 上部				"	やや堅目		組織
7	A - 5	11号溝	2 層				"	四1.半2, 岩面も堅密, 溝2		
8	-- 3	"	"		23.0	17.5	"	P12, 平2, 溝2		
9	- 6	E - 4	"	1 層	27.0	34.9	"	P12, 中2, 斜		
10	"	"	"	1 層	34.4	37.5	"	P11, 平3, 本体にうすい黑色付岩物		
11	F - 4	"	2 層		47.1	30.2	"	P12, 中2		
12	F - 3	"	"		40.7	28.3	シルト岩	やや堅日, P12, 平2		
13	- 5	"	"				"	中-上付底, 図1, 平2, 溝2		
14	A - 2	15号溝	1. + 2 層		37.2	43.8	泥	P11, 平3, 黑色付岩物		
15	"	21号溝	2 層		57.5	59.3	細粒砂岩	六1.半1(溝1, 極多), 四1, "傾水" にやや似る		
16	"	"	"		44.0	48.0	"	P11, 平3(底), 入京底?		
17	"	"	"				"			
18	A - 7	1号溝	"				"	沿堤に湧		Ⅳ期
19	"	"	1 層				シルト岩	P12, 平2, 部分的に黑色付岩物, 潟		
20	F - 4.5	26号溝	31.5	29.1			"	P12, 平1, 黑色付岩物, 溝1		
21	"	"	1 层				細粒砂岩			
22	11	B - 3	14号溝		36.9	17.1	中粒砂岩	P12(溝1), 斜面凹2		期
23	A - 8	4号ビット (2号側立)			39.4	12.7	"	四1(溝), 平1, 岩面平2(斜)		田期
24	A - 5	11号溝	2 層		30.1	16.2	"	P11, 平1, 岩面平2		
25	- 8	F - 4	"		56.1	26.0	細粒砂岩	中-上付底, 四1, 平1, 斜面凹2, 溝2, 打撃凹		
26	F - 6	21号溝	2 層		44.6	11.7	粗 砂 岩	P12, 斜面凸2, 溝1		
27	- 7	A - 2	15号溝	1 層	34.5	8.9	粗粒砂岩	中-上付底, 四1, 平1, 斜面凹1, 溝3		Ⅳ期
28	A - 1.2	16号溝			24.9	10.4	中粒砂岩	P12(溝1), 斜面平2		
29	- 10	A - 2	1号溝	3 層	40.1	9.0	細粒砂岩	凸2(溝1), 斜面平2		Ⅴ期
30	B - 8	3号土塗	"		40.9	10.4	"	P11, 平1, 斜面平2		不明
31	- 9	B - 6	田		23.7	7.1	粗 砂 岩	P11, 平1, 斜面凹2		
32	A - 8	"	"		57.3	16.4	"	P11, 平1, 斜面凹1, 平1		
33	"	"	"		30.1	15.0	"	P12, 斜面平2		
34	"	"	"		46.1	17.2	シルト岩	P11(溝3, 潟), 凸1(斜), 斜面平2		
35	"	"	"		27.3	5.6	"	凸2, 斜面切り出し		

No.	団体	地区	地質	所位	Lc	幅	厚	重量	石 貨		備 考
									岩	砂	
36	- 17	A - 7	4号土堆	面	(144.9)	73.4	52.6	(726)	中粒砂岩	平1, 右側切削部	平安
37	- 15	B - 4	11号溝	面	(162.0)	90.7	60.0	(672)	中粒砂岩	平1(底), 平1(黑色付岩物), 平1	Ⅱ期
38	- 16	E - 3	"	3 層	(162.0)	90.7	60.0	(672)	ホルンフェルス	平1, (底)	"
39	- 7	F - 2	20号溝	1 層	"	"	57.0	"	細粒砂岩	"	"
40	- 18	A - 4	5号土堆	面	(144.0)	(60.1)	41.5	(460)	ホルンフェルス	平1(底), 黑色付岩物	Ⅲ期
41	- 19	B - 4	11号溝	2 层	(144.4)	45.6	38.6	(350)	ホルンフェルス	平1(底)	"
42	- 12	E - 4	"	"	"	40.0	43.2	(201)	"	平1(底), 黑色付岩物	"
43	- 13	F - 2	18号溝	埋土部	(63.2)	(53.9)	"	"	"	平1, (底)	"
44	- 14	F - 8	19号溝	面	164.3	76.0	65.0	691	シラバ岩	平1(上端), 平1, 平1	Ⅲ期
45	- 5	F - 5	25号溝	面	"	57.2	49.0	"	細粒砂岩	平1(下), 一部に黑色付岩物	Ⅲ期
46	- 13	A - 6	19号ヒット	面	(56.6)	(28.4)	"	"	中粒砂岩	風化, 破壊, 平1(底)	不明
47	- 14	A - 7	不明土堆	面	(180.6)	37.5	"	"	細粒砂岩	中粒砂岩で使用しない, 黒然石に近い	"
48	- 6	A - 6	"	"	"	(51.6)	"	"	"	"	"
49	- 1	C - 2	未記	"	"	"	"	"	中粒砂岩	平1(底)	"
50	- 10	E - 4	14号溝	1 层	86.1	45.0	36.5	96	細粒砂岩	中粒砂岩	Ⅲ期
51	- 21	A - 7	1号溝	1 层	86.2	27.9	18.2	62	シラバ岩	中粒砂岩	Ⅲ期
52	- 22	- 3	12号井跡	1号土堆	(64.0)	31.2	24.8	(73)	中粒砂岩	"	"
53	- 23	A - 7	1号土堆	粘土層	(64.0)	27.0	20.0	(27)	中粒砂岩	"	"
54	- 24	F - 7	2号井跡	1 层	61.7	32.6	1.0	18	シラバ岩	中1(底), 開削, 剥離に數枚1層の挟り込み	Ⅲ期
55	- 26	G - 6	2号井戸	2 下層	(44.2)	"	9.5	"	中粒砂岩	平1, 開削, 平1	Ⅲ期
56	- 3	A - 3	0号土堆	"	"	"	"	"	ホルンフェルス	中1(底), 平1(底)	Ⅲ期
57	- 1	A - 4	12号溝	1 层	"	"	7.1	"	シラバ岩	破壊した三角形の角と剥離れ1層使用, 平2	"
58	- 23	B - 4	15号溝	1 层	95.8	72.8	36.6	136	シラバ岩	平1, 剥離, 平2, 平3	"
59	- 26	H - 2	15号溝	1 层	39.0	42.0	16.0	21	シラバ岩	平1, 剥離並に巻き	"
60	"	15号溝	"	"	"	"	"	"	シラバ岩	平1(剥離)	"
61	- 2	F - 2	33号溝	1 层	(50.0)	15.4	"	"	シラバ岩	"	"
62	- 3	A - 6	3号溝	"	"	"	"	"	シラバ岩	"	"
63	- 27	A - 5	"	3 层	55.6	51.4	16.5	25	"	内2, 岩片を利用	"
64	- 1	A - H - 1	H	第	(84.5)	21.7	9.3	(20)	シラバ岩	平1, (底)	不明
65	- 1	C - 2	未記	"	(49.6)	(47.3)	17.4	(50)	ホルンフェルス	三角形, 開削, 平1, 黑色付岩物	"
66	- 2	C - 2	未記	"	"	(42.4)	"	"	シラバ岩	中1(上端), 平1	"

第7表 砥石観察表(形態不明)

No	地 区	遺 構	層 位	石 質	下限	No	地 区	遺 構	層 位	石 質	下限
67	F-5	3号住居		砂 岩	平安	78	B-2	16号溝		細粒砂岩	Ⅳ期
68	E-3	29号溝	最下層	礫 灰 岩	日期	79	A-7·8	1号溝	1層	"	Ⅳ期
69	E-4	11号溝				80	F-5	25号溝		中粒砂岩	"
70	F-4	"	1層		"	81	B-4	9号井戸	2層	細粒砂岩	Ⅲ期
71	B-6	3号井戸	8下層	細粒砂岩	"	82	"	"	7層	中粒砂岩	"
72	A-5	9号溝		シルト岩	"	83	B-1	17号井戸		スレート	不明
73	A-3·4	12号溝		ホルンフェルス	Ⅳ期	84	E-4	ビット		礫灰岩?	"
74	A-4	"	最上層	シルト岩	"	85	B-2		II層	スレート	"
75	B-4	"	埋土上部	細粒砂岩	"	86	"		"	礫灰岩	"
76	"	"	"	中粒砂岩	"	87	B-7		"		"
77	B-2	15号溝	最上層	細粒砂岩	"	88	F-8			中粒砂岩	"

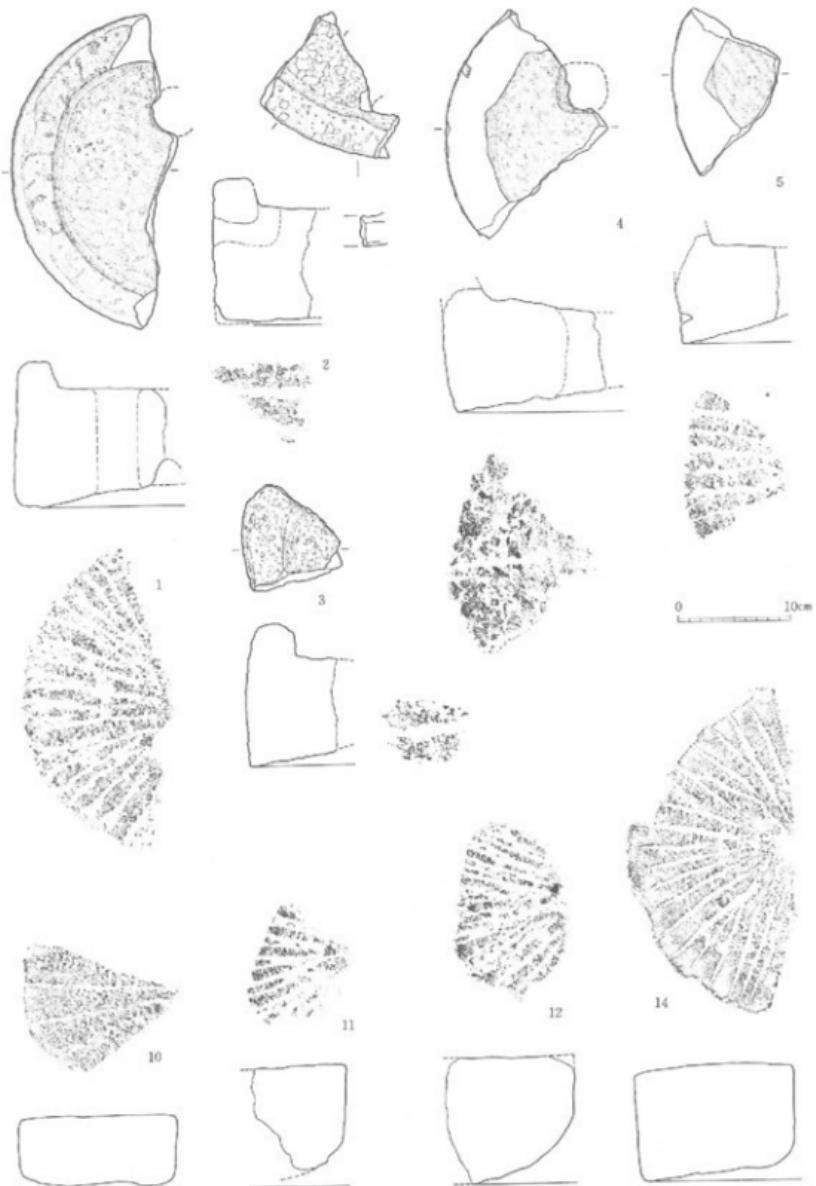
砥石・礫石器の実測図表現法



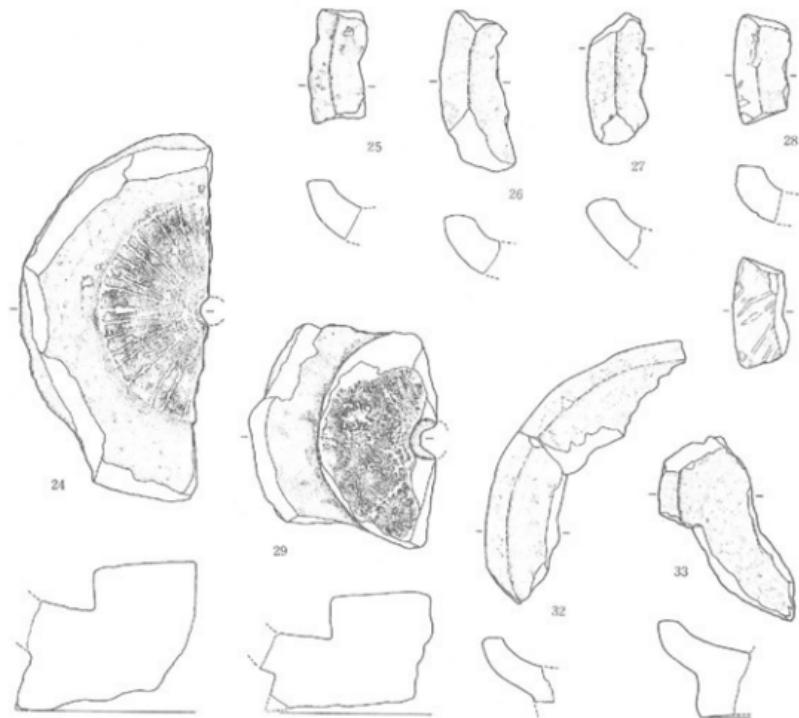
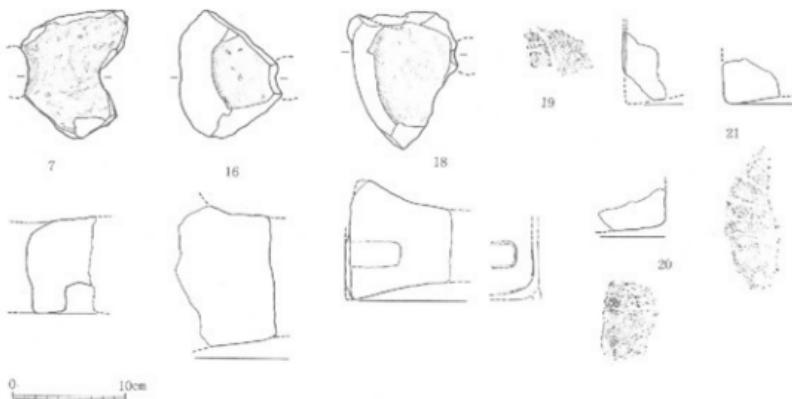
石臼 (第85図・86図、図版22-2-3)

石臼には粉挽き臼と茶臼があり、三輪 (1978 a、 b) に詳しい。今回の発掘では粉挽き臼の上臼9、下臼6、茶臼の上臼8、下臼10の計33個体分が出土した。すべて破片である。I期を下限とする茶臼1点 (No. 18)、3期を下限とする茶臼1点 (No. 20)、5期を下限とする茶臼1点、粉挽き臼2点の他は、すべて4期を下限とする遺構から出土している。今泉のI期は12世紀～13世紀中葉に定められており、石臼としてはかなり古い出土例となる (三輪 1978 b、PP.30-31参照)。

B-2区14号土壤では、粉挽き臼5点、茶臼3点が一括して廃棄された状況で出土した。こ



第85図 粉挽き曰



第86図 粉挽き臼(?)、茶臼

第8表 粉挽き臼・茶臼観察表

粉挽き・上臼

半数以上

No	地区	造 構	層 位	直 径 D 高 H + * b	上 S 分 厚 * S × 温	下 S 分 厚 * S × 温	供給口 a × b	石 质	残存率	備 考	下 領
1	B-2	14号土塊		(310) 129 28 23			不明	35×?	安山岩	%	側面内に放射状の溝 側面に斜めのノミ痕
2	*	*		(350) 131 28 24			a	-	a	%	側面に斜めのノミ痕 側面に斜めの溝
3	B-4	12号清	透土土部	(218) 127 41 33			a	-	(安山岩)	%	側面に斜めの溝
4	A-7	1号清	1号	(260) (93) (36)			a	45×45	安山岩	%	側面に放射状の溝
5	F-2	27号井戸	埋土上部	(220) (85) (30)			12.5 * 2.5	?	a	%	側面に斜めのノミ痕 側面に斜めの溝
6	A-6	1号清		(82)			小	明	a	*	側面に斜めのノミ痕 側面に斜めの溝
7	F-8	18号清					溝無?	-	a	%	側面に斜めの溝
8	E-7	1号	1号	(262) 182 39 27			不明	-	a	%	側面に斜めの溝
9	F-2	3号土塊		(264) (83) (30)			a	-	a	%	側面に斜めのノミ痕 側面に斜めの溝

粉挽き・下臼

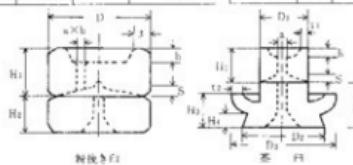
No	地区	造 構	層 位	直 径 D 高 H + * b	上 S 分 厚 * S × 温	下 S 分 厚 * S × 温	石 质	残存率	備 考	下 領	
10	B-2	16号清		(226) 63 16			不明	安山岩	%	臼底が鉛錆	
11	*	15号清	透土上部				分厚有り	*	%	芯棒からえぐりに放射状の溝	
12	*	14号土塊		294 114			不明	*	%		
13	*	*		(288) 116+6			a	-	%		
14	E-3	且	且	301 104	12	6×5	*	%	臼底上に溝無 芯棒からえぐりに放射状の溝	?	
15	F-4-5	26号清		(270)			18.5×3	*	小片	側面に斜めのノミ痕	削-V層

茶・上臼

No	地区	造 構	層 位	直 径 D 高 H + * b	上 S 分 厚 * S × 温	下 S 分 厚 * S × 温	石 质	残存率	備 考	下 領
16	A-4	12号清	1層	(117) a			溝無	安山岩	%	上側に斜めび 側面まで斜め
17	F-2	31号清		(208)	32		-	-	-	
18	B-4	10号井戸	透土中段	(220) 106	25 10	溝無	安山岩	%	上側底のくぼみでよく 側面に斜め	1層
19	A-6	且	且				-	小片	後子孔に鉛錆	?
20	F-4	14号清					不明	*	臼底よく磨成	削-V層
21	F-4-5	26号清	1層	(178)			分厚有り	*	*	削-V層
22	B-2	14号土塊	透土下部	(186)			不明	*	内へ突けていくなってい る	*
23	B-1	17号井戸	透土中段				*	*	底凹	?

茶・下臼

No	地区	造 構	層 位	直 径 D 高 H + * b	上 S 分 厚 * S × 温	下 S 分 厚 * S × 温	石 质	残存率	備 考	下 領	
24	B-2	14号土塊		182 (320) 134 52			8×(2.3×5)	安山岩	%	えぐりに放射状の溝 側面よく磨成	
25	*	*		(402)			-	*	小片	*	
26	B-1	17号井戸	透土上部	(300)	28		-	-	-	*	
27	B-4	12号清	*	(300)	28		-	-	-	*	
28	A-8	1号清	*	(266)	23		-	*	受盤外側に放射状の溝	V層	
29	F-5	26号清	透土下部	178	32		不明	*	%	側面に放射状の溝 臼底よく磨成	削-V層
30	F-4-5	*	1層				17	-	小片	削-V層	
31	*	*	*				-	*	*	*	
32	B-4	12号清	透土上部	(264)	18		-	*	2カ底合	削-V層	
33	B-2	14号土塊		(326)(304)	87 39 19		-	*	*	底面に放射状の溝	*



測定法は「横 (1978. 6.)」によく。
 ● 1次測定が無いので未補充を 2 とした。(1) 内は外
 壁の高さから算定したもので両面の差を含む。
 ● 2 (1) 内は上端矢高の測定位置を含む。
 ● 3 (1) 内は欠出した時に最初の割れ目を計測。
 ● 4 (1) 不明: 取扱は行か? 底の有無が不明。の意。
 ● 5 (1) は底面部分が焼成しない。
 ● 6 S は下臼の突出部。
 ● 7 は底と一致。

の他では、26号溝がやや多い。表面に黒色の付着物が見られるものが多い。破損面にも付着している場合が多いが、性格は不明である。火を受けたものとはやや異なる感がある。

三輪によれば、地方によって独特の形態・口のパターン、石材等が見られ、特徴的なものについては、産地同定・流通範囲の追跡が可能であるという。このような作業は考古学的には、まだあまり進められてないが、試みるべき課題である。宮城県内では、まだ充分な資料の集成が行われておらず、報告例も他との比較が可能なようなデータの提示をしていない。今後、このような作業を進めていくためには、規格的な計測方法によるデータの提示が望まれるので、三輪(1978a, b)の示した計測方法を、ほぼそのまま採用した。ただし、発掘品ではどうしても破片が多くなるので、より細かい部分についても、できるだけ計測値を採ってみた。供給口、芯棒孔、挽き手孔の残るもの、えぐりの残りの良い物等はすべて図示しており、計測できない項目、図上で計測可能な項目は、表に含めてないものもある。ものくばりが確認されたものはない。観察表の不備については、今後、経験的に修正されるのが良いと思う。近隣地域でこのようなデータの提示をしているものに、福島県伊達郡の梁川城の報告がある(福島県教委1981)。

破片が多く、法量や目のパターンについて、はっきりした傾向はつかめないが、全体にえぐりが大きく、供給口や芯棒孔～えぐりに放射状に広がる溝状のノミ痕を残すものが見られる(図版22-3)。側面を縦方向の浅いノミ痕がめぐるものも数例ある。供給口と挽手孔のつながる例(No 2)、「下白面が傾斜している例」(No 10)、上臼側壁がかなり内傾する例(No 3)が各1点ある。石材はほとんど安山岩が使われている。No 3は発泡の良い多孔質で硬質の安山岩を用い、他と質感が異っている。

現段階では今泉城出土の石臼の規格性等について、はっきり論することはできない。製作法についても今回は充分観察しきれなかった。I期を下限とするような古い石臼については、今後の類例を待ちたい。

大形礫石器

これは一般的な名称ではないが、大形の礫を素材として、使用痕や加工痕を残すものを、ここに一括した。すべて破片で完全な形状を知り得ず、残されている部分の特徴から、とりあえずI～VI類に分類したものであり、同じ類として分類したものが、実際に同じ種類のものだったかどうかはわからない。

I類(第87図1・2 図版22-9・10)

推定で直径20～25cm、厚さ3～5cm程度の楕円形で偏平な礫を素材とし、表面に磨痕を残すと思われるものをI類とした。表面に皮膜状の黒色物質が付着している。破損面にも付着して

いる場合があり、性格は不明である。磨痕が確認できないが形態的に同じものは、これに含めた。13点出土している。

II類（第87図3・4 第88図5 図版22-11・12）

大きさはI類とほぼ同じだが、表裏両面が平坦で平行しているものをII類とした。縁辺の形状は破損しているため、ほとんど知り得ない。I類同様、黒色の付着物が覆っているものが多い。13点出土している。

III類（第89図8・9 図版22-5・6）

多孔質で、レンガ状の平坦な面を残すもの。磨痕はあまり明瞭でない。3点出土。

IV類（第88図7 図版22-7）

台上の石で、滑らかな凸状の磨面を持ち、反対面にも若干の磨痕がある。中川氏より固定式の砥石ではないか、と御指摘を受けた。図示した1点の他に、これに類すると思われる破片が1点ある。

V類（第88図6 図版22-4）

石鉢や松明台と称されるものの破片かと思われる。第88図6は、縄文時代の石皿とも考えられる。4点出土。

VI類

厚さ10~20cm位の台状の石と思われる破片で、磨面が複数のものもある。5点出土している。

以上、便宜的に分類したが、他に形態は不明だが、大形砾石器の破片かと思われるものが31点ある。この種の石製品については、今後類例や完形品の発掘に注意したい。

硯（第89図12）

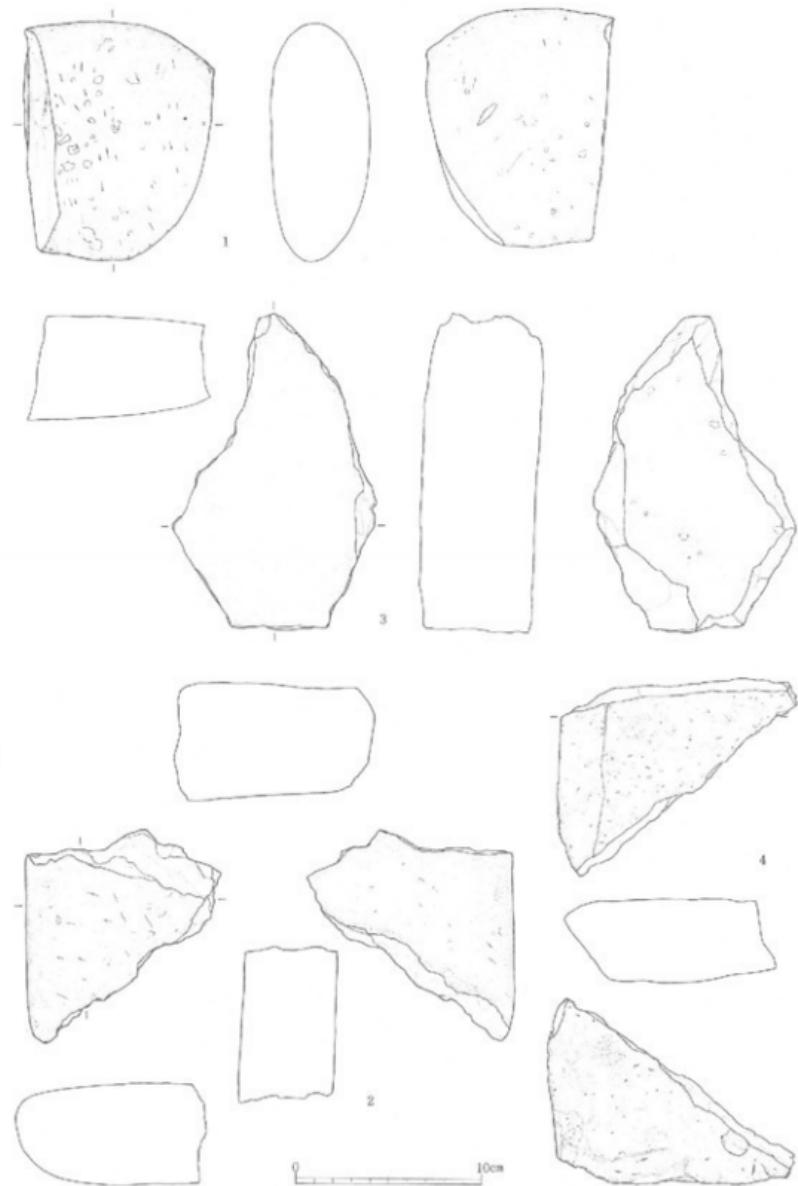
11号溝の底から1点出土している。

スレート片（第89図11 図版21-13）

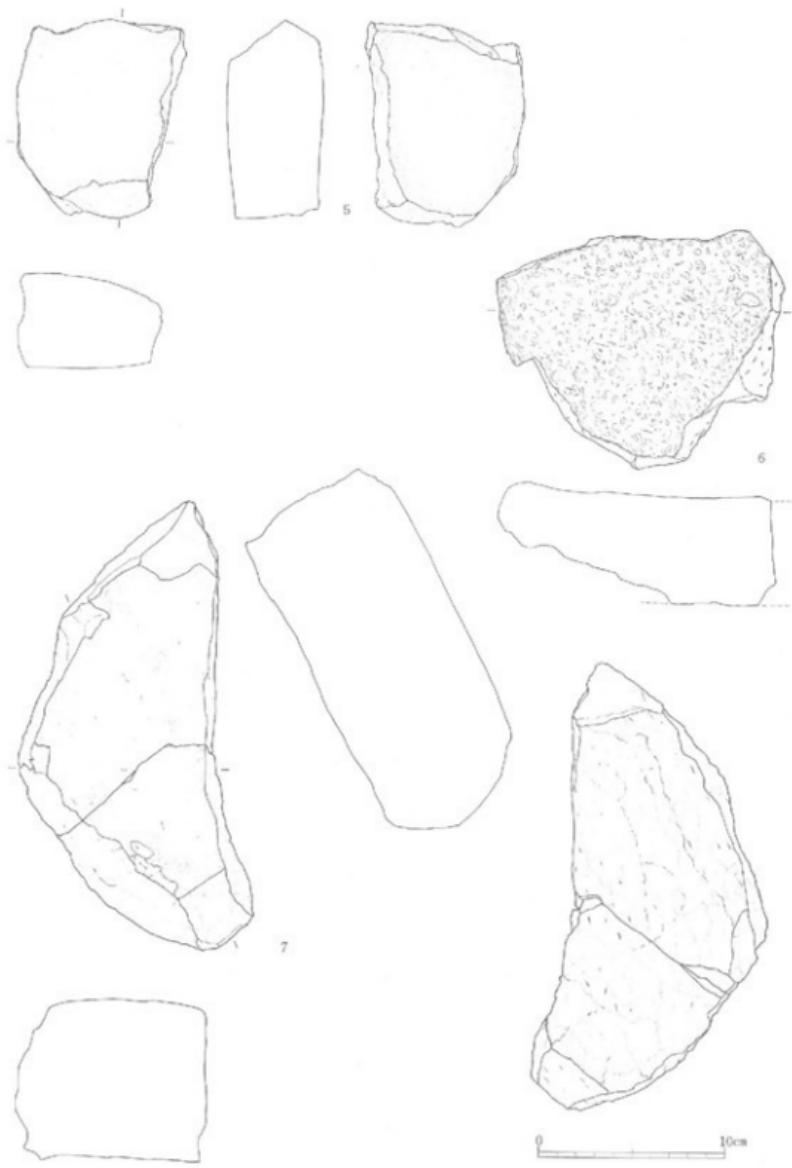
大きなものは一辺20cmを越えるものまで、大小26のスレート片が出土している。うち、磨面や擦痕が認められるもの12点、擦切痕のあるもの3点、磨面と擦切痕の両方を有するもの1点、格子目状の刻線をもつもの1点がある。刻線は細く浅い線で、各々の線は一気に引かれず、何度かずつに分けて引かれている。線はa面でははっきりしているが、b面では非常に弱い。性格は不明である。

珪化木（第89図10 図版22-8）

16点出土している。うち、おそらく流水の作用で全体が磨滅した長さ10~15cm位になると思われるものが7点ある。その中の図示した1点には、明瞭な表面と鈍い擦痕が認められる。何



第87図 大型石器 I類(1・2)、II類(3・4)



第88図 大型礫石器II類(5)、IV類(7)、V類(6)



第89図 大型砾石器Ⅲ類(8・9)、使用痕有る珪化木(10)、刻線のあるスレート片(11)、現(12)

第9表 大形礫石器観察表

No	回数	地区	遺構	部位	石質	備考	下限
1	A-6	8号溝		安山岩	黑色付着物		平安
2	B-3	14号溝		閃灰岩	" (破損面にも)		I期
3	E-3	29号溝	2層	玄武岩	" (" ") 2点接合		Ⅱ期
4	A-3	12号溝	埋土中位	安山岩	" (" ")		Ⅲ期
5	"	"	"	中粒砂岩	" (" ")		"
6	B-2	11号溝		灰紋岩	" (" ")		"
7	B-5	"		凝灰岩	黑色付着物		"
8	E-1	"	"	"	"		"
9	E-4	"		泥岩	" (破損面にも) 加熱・はしけ、2点接合		"
10	F-4	"	2層	"	" (" ")		"
11	B-2	15号溝		安山岩	"		Ⅳ期
12	A-8	1号溝底		中粒砂岩	" (破損面にも)		Ⅴ期
13	E-2	29号溝	1層	安山岩	" (" ")		Ⅵ期
14	F-3	"	"	"			"
15	A-5	12号溝	2層	凝灰岩	黑色付着物		Ⅶ期
16	"	"	1層	安山岩			"
17	-3	"	"	"	黑色付着物 (破損面にも)		"
18	F-4	"	"	"	" (" ")		"
19	-4	B-4	12号溝	"	" (" ")		Ⅷ期
20	E-2	31号溝	1層	"	黑色付着物		"
21	-5	A-6	1号溝	"	" (破損面にも)		Ⅸ期
22	A-7	"	1層	安山岩	加熱?		"
23	"	"	"	中粒砂岩	黑色付着物、加熱?		"
24	B-4	"	1層	安山岩	加熱?		不明
25	不明	不明		安山岩	"		"
26	B-4	11号溝		"			Ⅹ期
27	-8	A-8	2号溝	上面	凝灰岩	加熱?	Ⅺ期
28	-9	B-4	12号溝		安山岩	黑色付着物 (破損面にも)	"
29	-7	F-2	31号溝	1層	凝灰岩	固定砥石か。2点接合	Ⅻ期
30	B-8	"	1層	安山岩	固定砥石か。		不明
31	"	11号溝	1層	石英安山岩	黑色付着物		Ⅹ期
32	-6	B-2	14号上端	埋土下部	安山岩	石墨か?	Ⅺ期
33	B-4	12号溝		安山岩			"
34	E-2	31号溝	1層	"	黑色付着物 (破損面にも) 内面よく磨滅		"
35	E-8	21号中端	埋土上部	中粒砂岩			平安
36	A-2	15号井戸		中粒砂岩	黑色付着物、加熱? 5点接合		Ⅱ期
37	"	11号溝		安山岩			Ⅲ期
38	B-2	14号下端	埋土下部	"			Ⅳ期
39	"	16号溝		中粒砂岩	加熱?		"

かに使用されたものだろう。また、朱色の斑状の付着物が一部に認められるものが1点ある。

使用と関係したものかどうかはわからない。

板状の石

砂岩・安山岩等の厚10mm程度の板状の石の破片が31点出土している。加工痕・使用痕は認められない。

軽石片

軽石片が7点出土している。加工痕・使用痕は認められない。

(8) 木製品

木製品はI・II区から合計905点出土している。ほろぼろとなって個体数の数えられないものも存在することから、総計は1,000点を越えることは確実である。このうち、堀と考えられる溝(11号・21号・29号溝)からの出土数が最も多く、336点で全体の34%を占める。木製品の種

類では、加工痕をもつ木片が最も多く294点、次いで曲物類136点、自然木116点、削片78点、切片63点等である。他には竹製品や漆器が目立つ。

ここでは、民具研究の分類を基本として概説したい。

1. 履物

履物には、下駄・草履・田下駄が出上している。このうち田下駄については後述する。

(1) 下駄

さて、下駄には有歯と無歯のものがあり、本遺跡では前者のみである。有歯下駄はさらに、連歯・差歫に細分される。

本遺跡出土のものは、合計7点出土し、連歯のものが5点、差歫2点である。第90図1～5は連歯下駄である。小判形あるいは楕円形で小型のものが多い。同図6・7は差歫下駄の破片である。6は足駄であろうか。この6・7は陰卯か陰卯のものか不明である。成人女子の下駄幅は3寸～3.4寸、7～9歳女児用は2寸8分との指摘（瀬田鉄男：1982）があり、また、この指摘にある出土下駄の形態を考慮すれば、本遺跡出土の下駄は、1～3は子供用、4～7は成人用のものと考えられる。また、6を除いて女性用の可能性が高い。鼻緒穴は、径や位置がやや不揃いであり、樹種や木取り方法も不統一である。

(2) 草履

鎌倉市諏訪東遺跡（鎌倉考古学研究所：1981）では、この種の木製品にワラの付着や鼻緒のついたものが出土していることから、草履の芯と考えている。

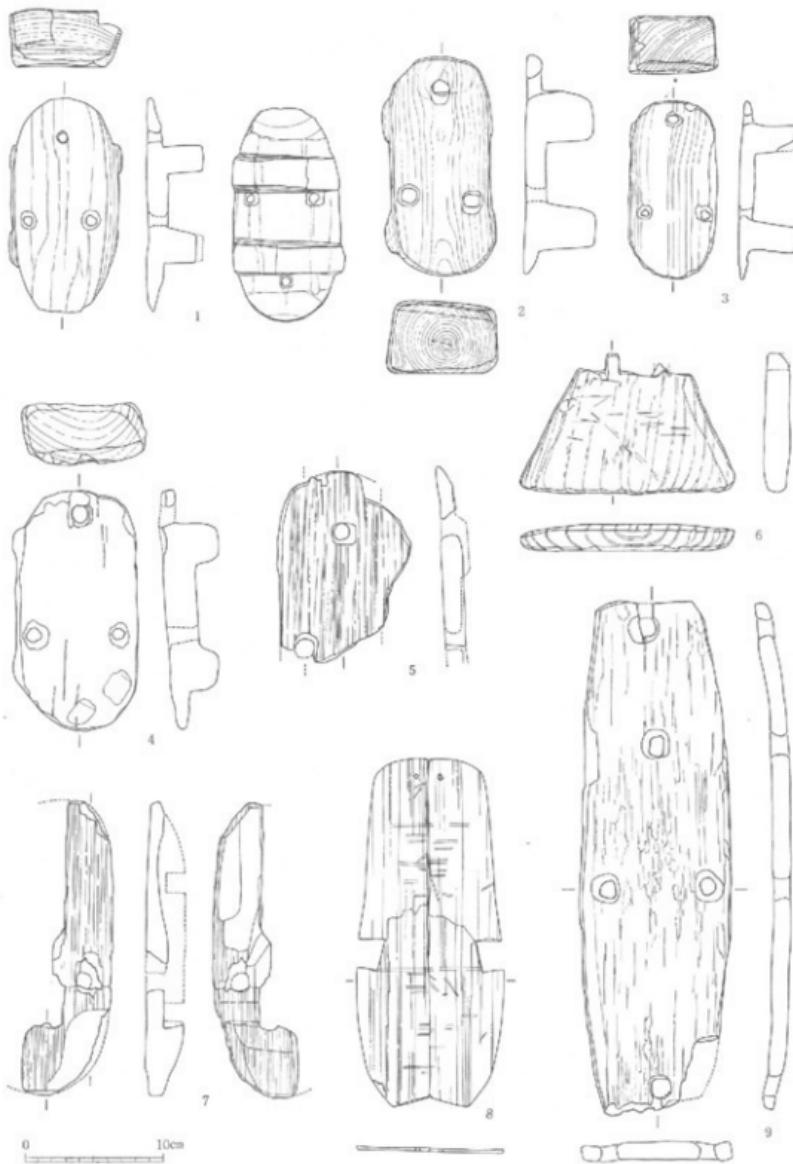
第90図8は、現在本遺跡では唯一の出土品であり、草履の芯になる板材と考えられる。県内では、高清水町観音沢遺跡（加藤・阿部：1980）に出土例がある。

2. 桶類

桶類には曲物・刳物・結物の3種類があり、曲物は古くから存在し、結桶はおよそ鎌倉後期以後に出現したようである（宮本常一：1981）。第93図9はV期の井戸から出土したもので、唯一全体のわかるものである。樽（側板）は10枚で構成されている。箆（竹）が三段はめてあったが、取り上げ時には腐敗してしまった。この桶は出土状況から考えて水汲み用の小桶、あるいは釣瓶と考えられる。

底板

同図10～13も9と同様の桶の底板と考えられる。13は底板の内面と考えられる面に無数の傷



第90図 木製品(1)

第10表 木製品(I)観察表

固形	グリット	道 構	層 級	種類	木板	木板	時期	査定番号
1	B-4	9号井戸	標準下部 北東壁付近	下 風 (子供用)	板目	初期	松材、板厚15.3mm、幅7.7mm、高さ4.1mm、右厚さ1.5mm、裏面、脚が少し傾いた楕円形で底の一辺は丸み。右側の板縫合は横筋丸に傾いてある。板縫合は強度0.6~0.7の内れて、右側に対して表面に空むけている。側は厚さ1.8mmと左側下方が少し広がっている。	390
2	F-4	11号溝	"	下 風 (子供用?)	板目	中期	セヤキ材、板厚15.3mm、幅7.7mm、高さ4.0mm、右厚さ1.5mm、裏面、脚が少し傾いた楕円形で底の一辺は丸み。右側の板縫合は横筋丸に傾いてある。板縫合は強度0.6~0.7の内れて、右側に対して表面に空むけしている。側は厚さ1.8mmと左側下方が少し広がっている。	368
3	E-4	"	上層	下 風 (子供用)	板目	中期	セヤキ材、板厚15.3mm、幅7.7mm、高さ4.0mm、右厚さ1.5mm、裏面、脚が少し傾いた楕円形で底の一辺は丸み。右側の板縫合は横筋丸に傾いてある。板縫合は強度0.6~0.7の内れて、右側に対して表面に空むけしている。側は厚さ1.8mmと左側下方が少し広がっている。	389
4	B-5	"	上層	下 風	板目	中期	セヤキ材、板厚15.3mm、幅7.7mm、高さ4.0mm、右厚さ1.5mm、裏面、脚が少し傾いた楕円形で底の一辺は丸み。右側の板縫合は横筋丸に傾いてある。板縫合は強度0.6~0.7の内れて、右側に対して表面に空むけしている。側は厚さ1.8mmと左側下方が少し広がっている。	391
5	B-4	"	壁上	下 風	板目	中期	セヤキ材、板厚15.3mm、幅7.7mm、高さ4.0mm、右厚さ1.5mm、裏面、脚が少し傾いた楕円形で底の一辺は丸み。右側の板縫合は横筋丸に傾いてある。板縫合は強度0.6~0.7の内れて、右側に対して表面に空むけしている。側は厚さ1.8mmと左側下方が少し広がっている。	382
6	I区	裏塗 (11号溝?)	"	下 風(前)	板目	中期?	裏面材、裏面下塗りの面、厚さ8.2mm、下塗1.5mm、裏塗0.5mmを含む10mmの厚さ。右側の板縫合に丸み突起を2つ持つ。全縫合2段とも並んでおり、傷がある。	393
7	E-4	11号溝	壁上	下 風(古部)	板目	中期	セヤキ材、裏面下塗りの面。厚さ8.2mm、下塗1.5mm、裏塗0.5mmを含む10mmの厚さ。右側の板縫合に丸み突起を2つ持つ。全縫合2段とも並んでおり、傷がある。	395
8	B-4	11号溝(南溝)	3層上面	平 層	板目	中期	裏面材、裏面下塗りの面。厚さ8.2mm、下塗1.5mm、裏塗0.5mmを含む10mmの厚さ。右側の板縫合に丸み突起を2つ持つ。全縫合2段とも並んでおり、傷がある。	393
9	A-7	2号井戸	2段目上部井戸 黒色柄	下 風	板目	中期?	裏面材、裏面下塗りの面。厚さ8.2mm、下塗1.5mm、裏塗0.5mmを含む10mmの厚さ。右側の板縫合に丸み突起を2つ持つ。全縫合2段とも並んでおり、傷がある。	395

跡があり、9~12にはこのような傷がないことから、用途に差があるのであろうか。同図14・15は前述のものと異なり、直径が60cm前後と大きく、木釘穴の位置も異なる。おそらく、盤や半台のようなものであろう。10~15については、一応桶類の底板と考えた。これらは10を除いて、いずれも縁部に木釘穴を有する点で共通している。ただ、曲物か結構か判断できない。

曲物側板

ここでは便宜上、厚さ0.5cm以上で鉤引の線を内面全面にもつものや、厚さが薄いものでも幅(高さ)が約10cmを越すものを桶類として扱った。しかし、桶類の基準は、今後さらに検討する必要がある。

曲物側板には、厚さ0.2~0.3cmの薄いものと、厚さ0.5~0.6cmの厚いものがある。前者には、とじ目の内側にのみ鉤引の切り込み線が認められるものがある(第91図4)。後者には鉤引による切り込み線(平行のものと格子のものの2種類あり)が内面(一部外間につくものも存在する)にみられる。

第91図2は曲物の箇(木釘穴あり)。同図3~6は側板である。3は内外黒塗塗り、4・6はとじ皮やとじ穴が認められる。鉤引は、いずれも間隔が不揃いであるが、およそ0.6cm~2.0cmに納まる。5は外間に格子、内間に平行の鉤引がみられる数少ない例である。6の外間にもそれらしき痕跡を留めている。

剝物

剝物はわずか2点出土している。これらも大小の差はあるが、桶類として扱った。

第91図1は直径42.8cmと比較的大型である。作りは粗雑で、内面の一部に削痕を留める。本例は半台や手洗い桶の大きさに近いが用途は不明である。第95図1は直径15.8cmと極めて小型で、内外面に黒漆（？）が塗られている。製作工程を推定しにくいのであるが、おそらく剣物の小柄の一種と考えられる。用途は不明であるが、あるいは湯桶のようなものであろうか。これらはいずれも、鎌倉時代に属すると考えられる井戸から出土したもので、曲物が主体を占める中にあって、桶類の変遷を考える時、剣物は興味ある存在といえよう。

3. 柄杓

全体を予想できるものはわずか2点で、他は底板や側板だけのものが多い。このうち、幅（高さ）が約10cm以下の柄杓と考えられる側板については割愛した。

第92図1は、ほぼ完全な形で出土した唯一のものである。底板内面は手斧のような工具による2方向の削痕が認められる。これは後述する底板についても同様の傾向を示している。側板は2重に巻き上げ、とじ皮（櫻）でとしている。このとじ皮は、表が長く、裏は短くなっている。最下位のものだけ位置をややずらしてあり、最後に一回外側に出して、とじ目から再び内に入れてとじ終わる。柄は先端を細く削り出し、先端から約11cmの部位に止め穴が認められる。同図2は曲物部分のみであるが、柄の一部が残存している。本遺跡では最も大きい柄杓である。とじ方は柄を跨いで反対にもう一所とじ目があり、前述の1と大きく異なる。とじ方の最終段階は、1と全く同様の方法である。ところでこの2には、とじ皮のある前後の曲物の内側にのみ縦引による切り込み線が認められる。これと同様の例が、第91図4にみられる。このような例は、とじ皮の装着に際して、滑り止めの役割を果しているのであろうか。

底板

底板の直径はおよそ3~4寸に集中する。

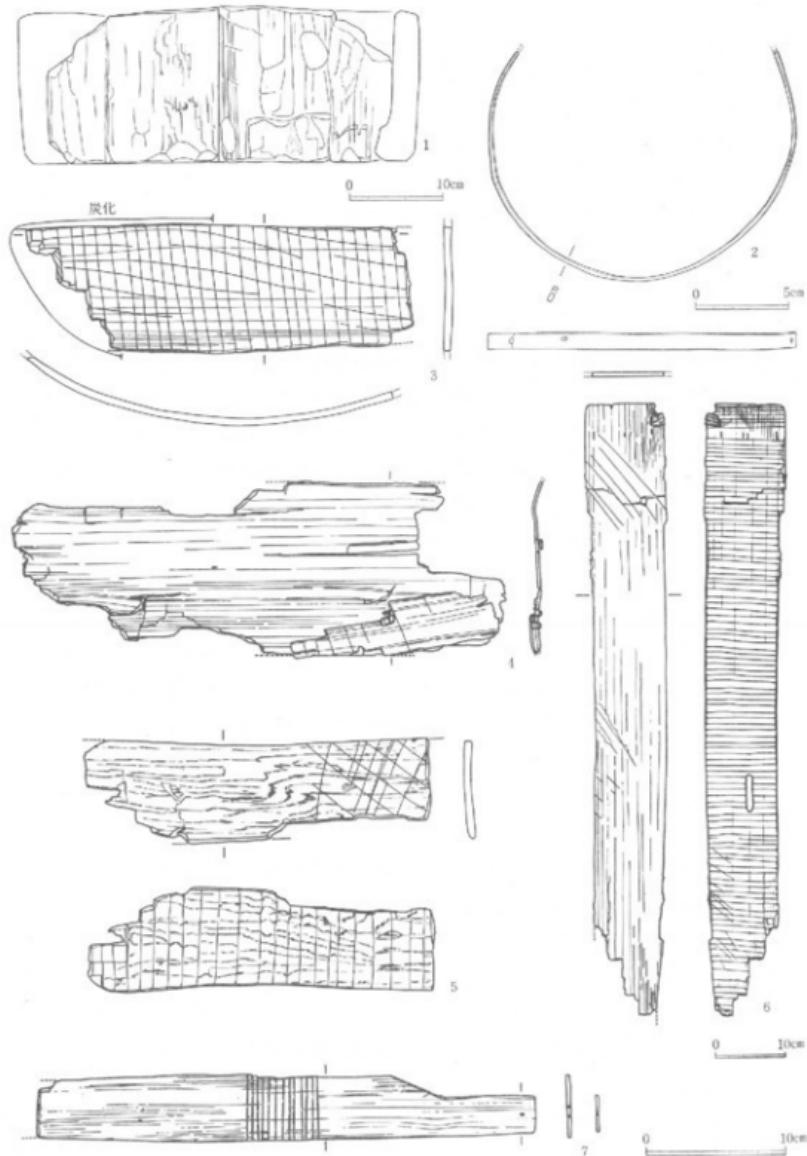
第92図3~8は柄杓の底板と考えられる。4・5には貫通孔が認められるが、これは性格不明で虫食いの跡であろうか。1~7には底板に木釘穴が認められないが、8には木釘穴が3ヶ所認められる。すでに述べた桶類に木釘穴が存在したことから、柄杓ではなく、小桶の可能性も考えられる。

柄

第93図16・17は柄杓の柄であろう。特に17は細身で面取りが丁寧である。16はほぼ完形品、17は欠損品である。

4. 折敷

本遺跡で確認できる折敷は、いずれも曲物である。足の付く例は現在確認できない。



第91図 木製品(2) 1%、2%、6%

第11表 木製品(2)観察表

登録	グリント	出 収	形	材	取 手	寸	取 手	時 期	註	登録番号
1	A-7	1号井戸 のレール	木板	1面切 り	縦(側面)	板	直	期	厚さ2.0mm、幅さ10mm、内溝開きも80×100mmあり。端 部が削り落とし。	73
2	A-3	12号井戸下盤	木	2面切 り	横	板	直	期	厚さ2.0mm、幅さ15~25mm、内溝孔5個あり。	136
3	B-4	11号井	木	2面	曲物の側板	板	直	期	厚さ0.5mm、内溝開きは80mmで2つある。側面に削 り込み溝が2つ入り、側面が削り落とし状態である。外側の一 方には2つ穴がある。	222
4	B-6	21号井	木	2面	曲物の側板	板	直	期	厚さ0.5mm、内溝開きは80mmで2つある。側面に削 り込み溝が2つ入り、側面が削り落とし状態である。外側の一 方には2つ穴がある。	24
5	B-4	10号井戸 (2-4層)	木	2面	板	直	期	厚さ0.5mm、内溝開きは80mmで2つある。側面に削 り込み溝が2つ入り、外側は斜めに交叉する2つで35mm の間隔がある。	31	
6	B-6	4号井戸	木	2面	曲物の側板	板	直	期	厚さ0.5mm、内溝開きは80mmで2つある。側面に削 り込み溝が2つ入り、外側は斜めに交叉する2つで35mm の間隔がある。	272
7	B-4	11号井	木	2面	曲物の側板	板	直	期	厚さ0.5mm、内溝開きは80mmで2つある。側面に削 り込み溝が2つ入り、外側は斜めに交叉する2つで35mm の間隔がある。	19

第91図7、第95図2は一定の間隔に釘引による切り込み線がみられ、折敷の側板と考えられる。釘引のみられる部位は、おそらくコーナー部分になるものと考えられる。釘引は平行のものと平行のものに格子目を加えたものの2種類が認められる。

第95図6・7・9は折敷の底板である。このうち7は八角形になる角折敷であろう。全体の大きさを推定できるものではなく、唯一6は一辺が26.3cmで8寸を越す「大角」(古泉弘:1974)に属するものであることがわかる。7や9は一部に加工痕を留める。これらの折敷は、いずれもおよそ鎌倉時代に属するものである。

5. 箕

第94図18は21号溝より出土したもので唯一のものである。編み方はまさに笊編み(1本越え・1本潜り・1本送り)で、縫糸は約0.2cm、経糸は0.4~0.9cm幅である。III期の笊(竹製)と考えられる。

6. 面桶

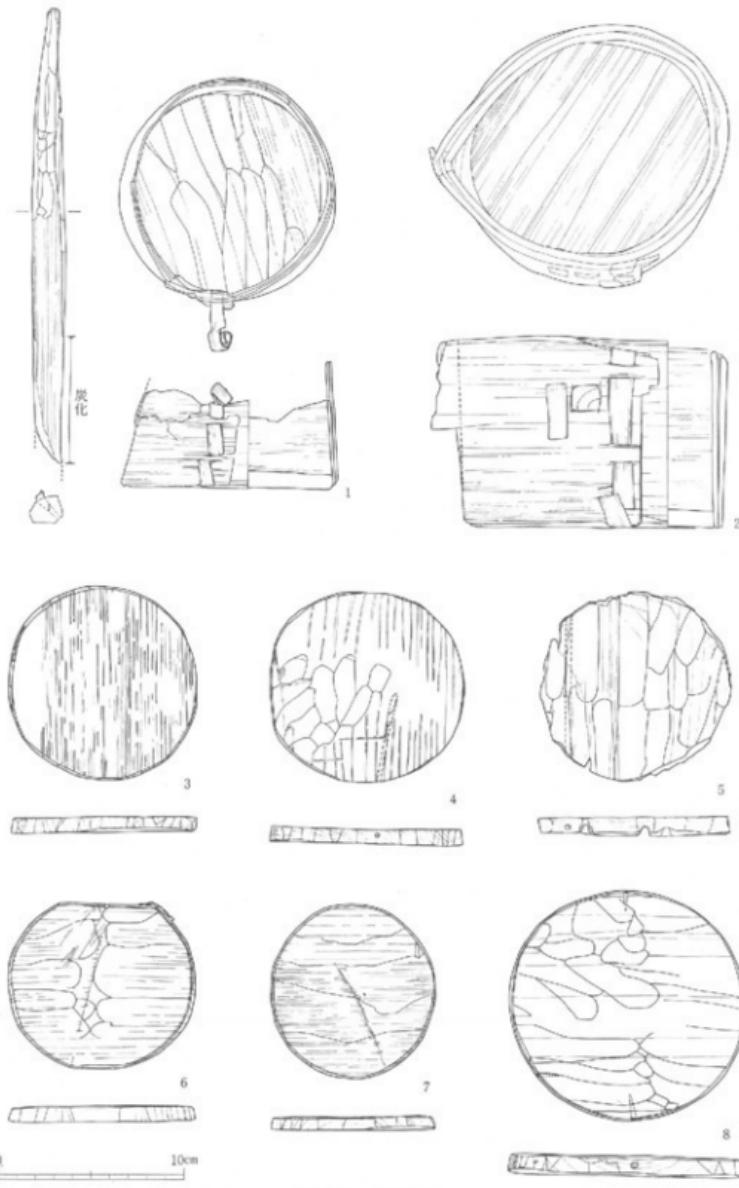
曲物のうち、弁当箱として用いるものに面桶があり、一般に丸型のものをワッパ、楕円形のものをメンバ等と呼称する。

第95図8は面桶のうち、メンバ等と呼ばれる楕円形のものである。ただ甲板か底板か判断できない。木釘穴と考えられる穴が2ヶ組で、2ヶ所に認められる。

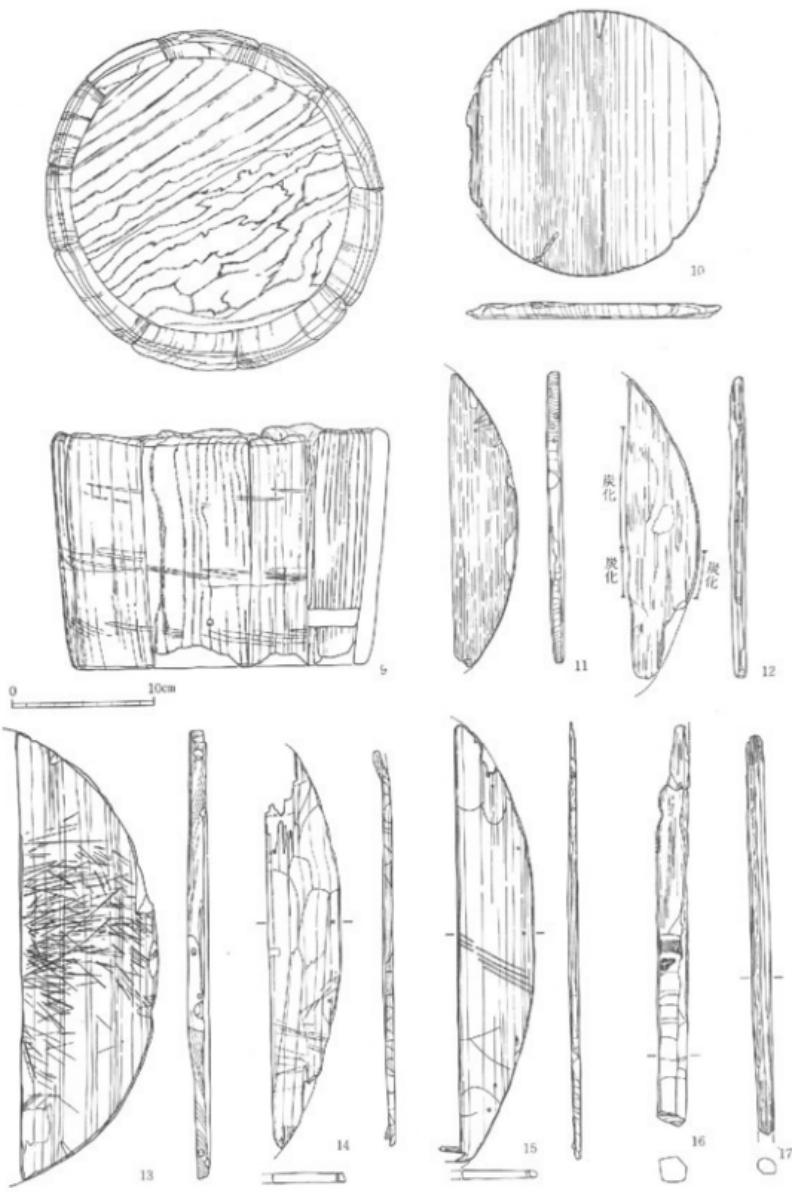
7. 箸

箸および箸の可能性のある木製品は合計6本出土している。しかし、1膳という単位で数えられるものはない。I期~III期の遺構に伴って出土しているが、II期に属するものが多い。いずれも完形品ではなく、折れたために捨てられたものであろう。

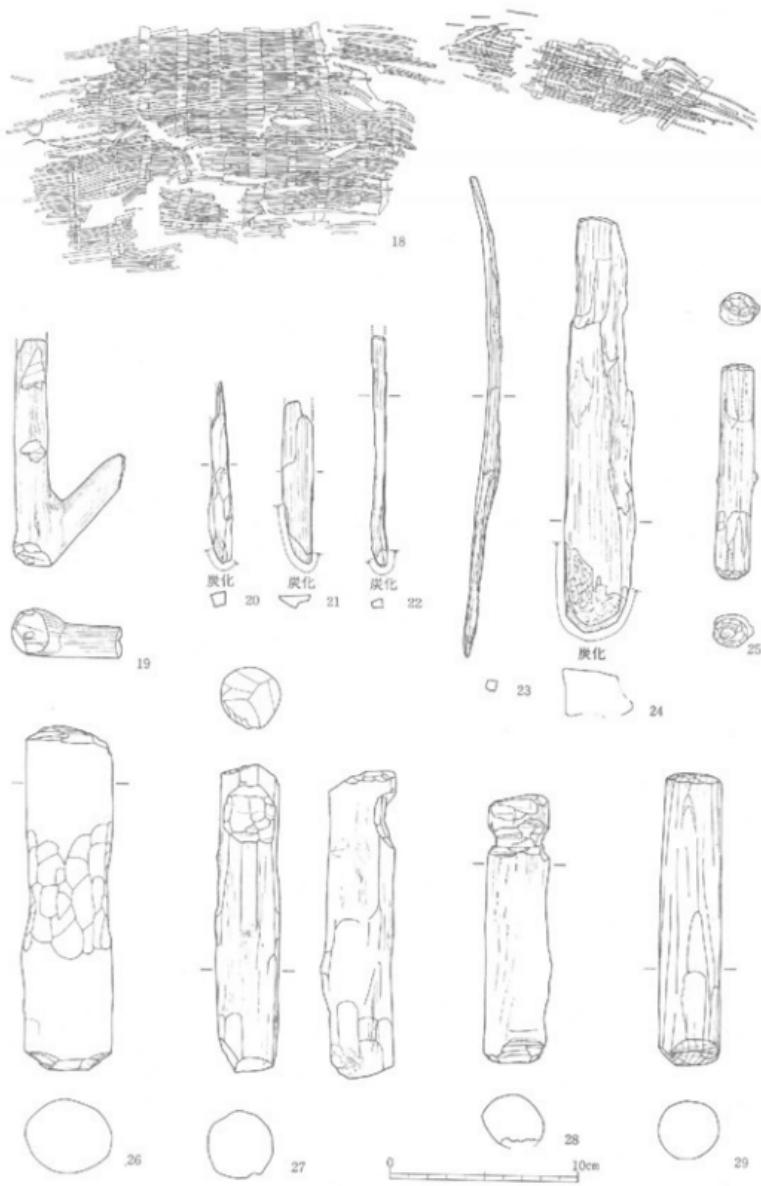
第95図3~5は比較的保存のよいものである。いずれも先端を細く削り出しておらず、面取りも比較的丁寧に行なわれている。



第92図 木製品(3)



第93図 木製品(4)



第94図 木製品(5)

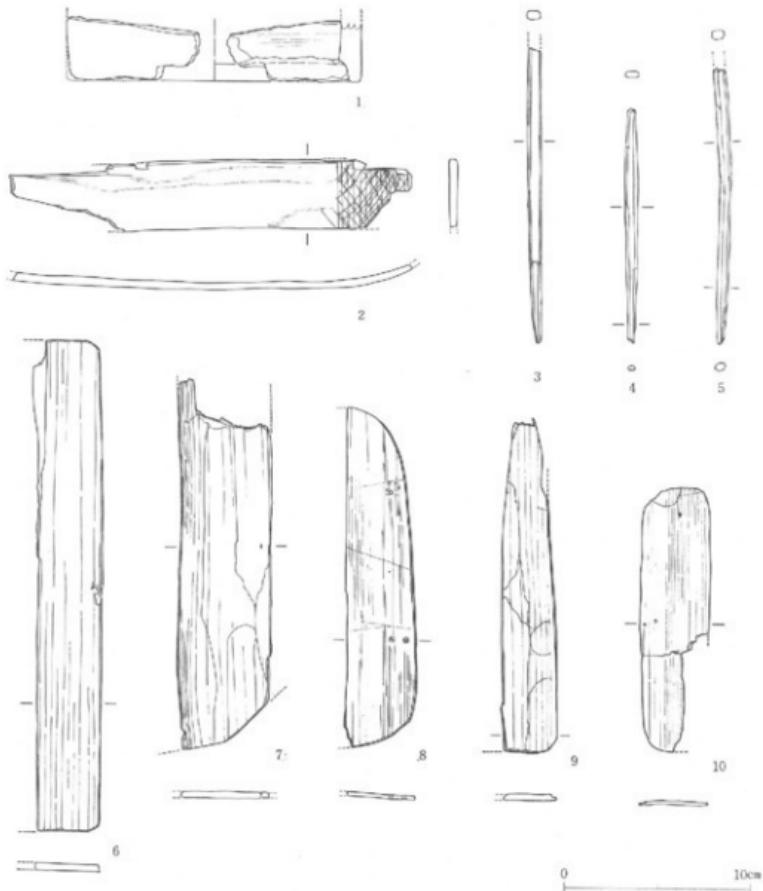
第12表 木製品(3-5)観察表

回数	グリード	直角	斜	曲	板	木	漆	漆器	名	参考番号	
3	E-4	11号溝	2層	板	板	板	漆	漆器	明治24.4.9. 梵3.3cm. 先端に直い溝があり頭になってしまおり、前方は尖頭に彫りてある。頭部のある先端部にはくぼみがある。中央付近に貫通孔があり頭部から下へ向いてある。幅約15cm. 長さ約22cmにまで上方は尖頭で、中間付近で一辺彫刻あり。頭部が最も高く立っている。」と記載あり。	269	
					板	板	板	板	成形: 幅約18~20mm. 内側に凹状。外側に凸状。凹状部に直い溝がある。		
2	A-1	16号溝	6層	板	板	板	口	1.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。一部削除された形である。	261	
					板	板	口	2.36	頭部: 幅約10~12mm. 内側に直い溝がある。外側に衝突部がある。		
3	A-4	第六彫縫ベルト	縫合上	面	物	漆板	漆	口	3.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。一部削除された形である。	260
4	E-4	11号溝	1層	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	248	
5	E-4	11号油テクス	内	土	*	板	口	3.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	257	
6	E-4	11号油ベルト	縫合上	*	*	板	口	3.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	258	
7	E-4	11号油ベルト	縫合上	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	256	
8	B-4	11号溝	2層	*	*	板	口	3.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	89	
9	E-7	19号カット	*	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	100	
10	B-5	7号油	中間埋込	板	成	板	口	1.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	249	
11	F-8	21号溝	1層	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	257	
12	F-4	11号油(油面)	No.10	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	253	
13	F-7	23号溝	ドカラ2番目の黒色	*	*	板	口	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	255	
14	E-3	29号溝	油	盤	底	底	漆板	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	254	
15	E-2	29号溝	*	*	*	*	板	口	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	252	
16	E-4	11号溝	1層油①	神	木	木	漆板	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	112	
17	B-5	7号油	漆板	漆	漆	漆	漆	漆	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	79	
18	E-7	19号溝	2層	油	油	油	漆	漆	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	440	
19	A-7	3号外彫	2段目上の油	口	0.36	2.36	2.36	2.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	329	
20	H-6	3号外彫	油	板	漆	漆	漆	漆	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	91	
21	B-6	3号外彫	油	板	漆	漆	漆	漆	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	82	
22	A-1	16号油	6層	*	*	*	*	1.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	213	
23	F-7	23号溝	23号油	*	*	*	*	2.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	74	
24	F-4	11号溝(油面)	No.2	*	*	*	*	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	146	
25	F-7	33号溝	3層1.5倍	丁目	木	木	漆	漆	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	149	
26	F-8	33号溝	下から2番目の黒色	つらのこ	*	*	板	口	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	56	
27	A-5	11号油	2層油	神	木	木	漆板	*	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	89	
28	F-7	21号溝	3層上面	*	*	*	*	3.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	70	
29	B-3	9号油	グラフ(層3層)	神	木	木	漆板	4.36	頭部: 幅約10~12mm. 前後部に直い溝があり頭部とともに下方に2~3mmの彫り込みが残っている。頭部は彫り込みがある。	69	

8. 漆器

漆器は、出土数が比較的多く、挽物26点、板物1点で、他にすでに述べた曲物や剖物が1点ずつあり、また、漆のみ(いざれも赤漆)となったものも4点ある。

漆器は壇と考えられる11号溝が多く、その中でも橋脚の検出されたE-4・F-4区が13点



回数	グリッド	通	標	層	付	種	基	木取り	時	期	標	考	立地番号
1	A-1	16号井戸		下層		小	種		1 稲	昭和15.5cm. 厚さ1.1cm. 内部表面は滑らかで、黒い物質がみられる。年輪			15
2	B-4	9号井戸		7層		新級(鉄板)	板	目	2 稲	2.丸穴を鋸り込んで、内部に注入する。	(幅:径さ21.5mm. 厚さ3.7mm. 深さ0.4mm. 一辺に縦に斜めに幅0.1~0.3mmの細かい凹		29
3	*	*	*	*	*	合		*	*	丸穴を鋸り、ようじに小さな丸面あり。			226
4	F-5	22号井戸		壁上部					1 稲	(残)長さ14.3cm. 幅0.6×0.3cm. 2一面に縫合あり。			136
5	A-2	15号井戸		堆土					2 稲?	長さ26.3cm. 厚さ2.0cm. 丸穴で沿の中央付近に貫通孔と思われる小穴あり。			225
6	B-8	1号土壤柱		筒下部		折	軸	目	1 稲	厚さ0.35cm. 両丸穴で両側に斜めあり。貫通孔1個あり。			65
7	F-6	22号井戸		壁上部					2 稲?	直徑16mm. 厚さ1.5cm. 幅0.6cm. 直角部は斜め対角. 貫通孔4個。2個ずつ2面側にある。			136
8	*	*	*	*	*	メンノリ(學院)	*	*	*	厚さ0.3cm. 丸穴1個あり。			*
9	B-4	9号井戸		6層		折	軸	*	2 稲	厚さ0.3cm. 両丸穴で一方の面に斜めあり。			221
10	F-6	22号井戸		堆土下部		サンバ?	*	*	1 稲	長さ14.2cm. 幅0.25m. 厚さ3.0cm. 平面は極円形. 貫通孔3個。			136

第95図 木製品(6)

で特に多い。また同じII号溝でB-4区・B-5区の1号橋跡付近からも6点と多い。他は溝や井戸からわずかずつ出土している。

これらを製作技術から分類すると（Ⅲ区を含む）、曲物1点・矧物1点・板物1点・挽物27点・漆のみ4点であり、また時期別にみると（Ⅲ区を含む）古代に属するものではなく、I期1点、II期8点、II期～III期初1点、III期17点、IV期1点、V期1点である。I期やII期のものは塗塗りの薄いものがある。

椀

本遺跡出土の椀は、いずれも横木取り、ロクロ挽きである。合計27点（Ⅲ区を含む）である。

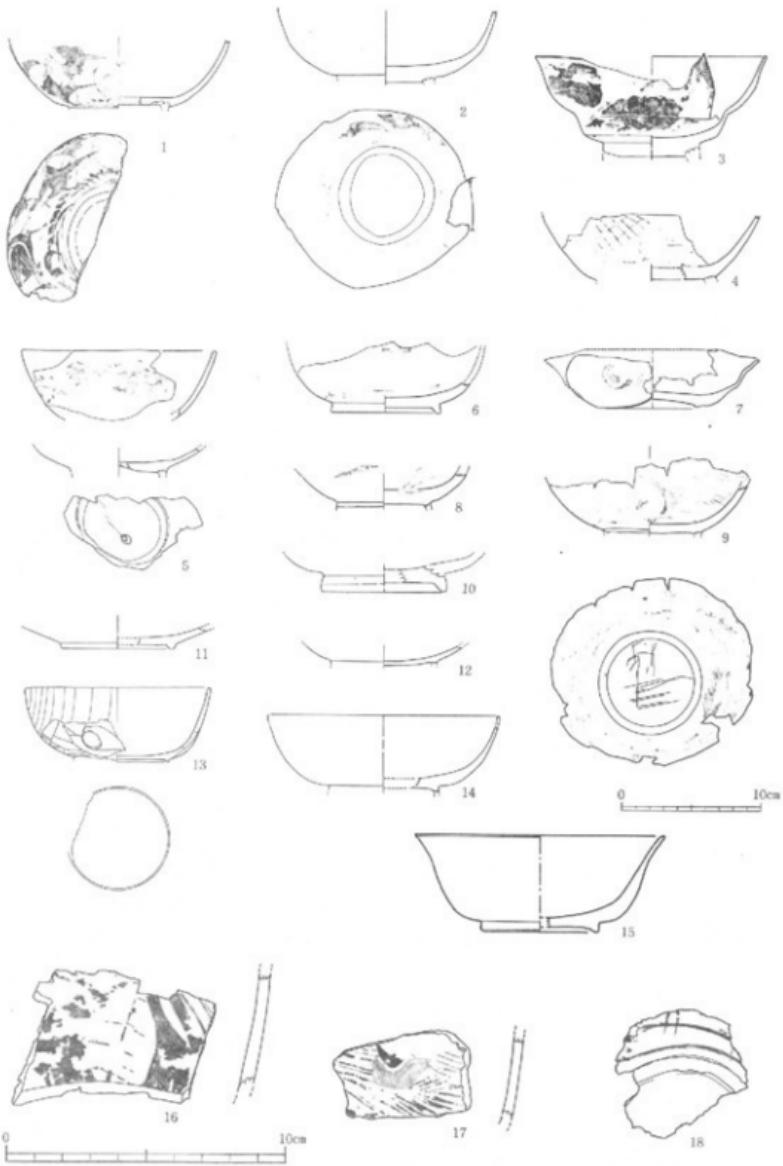
これらの椀には、器厚が薄く、体部の立ち上がりのゆるいものと高台脇の器厚が厚く、腰が張り、体部は急激に立ち上がるものの大きさ2種類がある。この2つのタイプは、混在しているようで、必ずしも年代差を示すものではないようである。しかし、後者は年代が下がるにつれて、多くなる傾向がありそうである。また、形態の差は生産地の違いによる可能性も考えられよう。いずれにしろ、今後の資料の増加を待ちたい。

本遺跡では、朱漆によって文様を描くものが多く、漆の色調の差や文様の有無によって、下記のようになる。

外面	内面	文様の有無	数
1. 黒	赤	—	3 (文様の確認できないものを含む)
2. 黒	赤	朱(赤)	14
3. 赤	赤	—	1 (VI期)
4. 黒	黒	—	5
5. 黒	黒	朱	1

これを見ると、2が最も多い。このような組合せの差は何に起因するのか明確ではないが、1～3は祝い事や接客用等の「ハレ」の食器、4・5は不幸な出来事や仏前等に使用する「ケ」の食器と考えることも可能かもしれない。椀の多くはブナ材を使用している（第27表）。

第96図1～15、17、18は漆器椀である。椀の法量は歪みが著しく、必ずしも正確ではないが、口径は15を除いて、13～16cm、底径6～8cm、高さ5～7cmに集中する。3は体部に段をもつ柏文（？）椀で葉脈は針書きによって表現されている。5は同一個体で歪みが著しく、底部に穿孔がある。今回の漆器椀で最も注目されるものに13がある。これはロクロ挽きの後、高台脇を削り（その際、高台の一部まで削っている）、器厚を薄くし、直径1.5cmの孔を穿っている。さらに内外面に薄い黒漆を塗って仕上げている。これは孔に注口が取り付けられていたものと考えられ、銚子や湯桶のような用途として使用されたものと推定される。なお底部に小孔が認められるが、性格不明である。おそらく、虫食いの穴であろう。15は薬物入れか酒杯の用途が推測されるが、性格不明である。



第96図 木製品(7) 15%
Fig. 96 Wooden products (7) 15%

第13表 木製品(7)観察表

登録番号	特徴	所蔵	本取り	寸法	形態	基準	品種
414	内面朱漆、外側に朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.2cm、高さ7.0cm。口縁部は欠損している。	B-4	11号漆
401	内面朱漆、外側に朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.0cm、口縁部は欠損している。全体的に丸んでいる。	B-4	11号漆
403	内面朱漆、外側に朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.0cm、口縁部は欠損している。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	B-4	11号漆
402	内面朱漆、外側に朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径8.0cm、高さ7.3cm。両面相手欠けています。	B-4	11号漆
412	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径14.0cm、底径9.0cm。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆(北漆)
410	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.0cm、底径6.6cm。内面はうるみ色の漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆
416	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径13.4cm、底径6.6~7.0cm。全体的に丸んでいる。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆(南漆)
415	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.0cm、底径6.6cm。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆テラス
409 (アマ)	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.1cm、底径6.6cm。内面はうるみ色の漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆
408	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。	漆器 柄	無木	II期	鉢径8.4cm、底径6.6cm。内面はうるみ色の漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆
417	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。	漆器 柄	無木	II期	鉢径8.4cm、底径6.6cm。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	11号漆ペルト
404	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径7.9cm、底径6.6cm。内面はうるみ色の漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-4	25号漆
418	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	II期	鉢径8.0cm、口縁部下に11.3cm。底径5.5cm。内面漆耳、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	B-6	4号井口
407	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	I期	鉢径7.9cm、底径6.6cm。内面は朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれています。花唐草文様がある。	E-6	25号井口
419	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	I期	鉢径7.9cm、底径5.5cm。内・外表面共に墨跡、朱色が残る。	E-7	25号漆
420	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	I期	鉢径7.9cm、底径5.5cm。内・外表面共に墨跡、朱色が残る。	E-4	14号漆
421	内面朱漆、外側は朱漆地に白粉が塗かれている。花唐草文様がある。	漆器 柄	無木	I期	鉢径7.9cm、底径5.5cm。内・外表面共に墨跡、朱色が残る。	E-4	11号漆

定される。16は器厚が厚く均一である。これは重箱や箱體等の板物の破片と考えられる。

なお、昭和54年度調査時に検出された37号土壙より出土した高台内に文様をもつ漆器は、沢口滋氏の御教示によれば、いずれも特注品の可能性が考えられる。これらの椀は内外面ともに朱漆塗り（高台内は黒漆地に朱漆文様）で、今回の調査成果から考えてⅣ期に属するものと考えられる。今回の椀1点と合わせてⅣ期の漆器は、いずれも内外面とともに、朱漆塗りの漆器碗である点で注目されよう。

9. 自在鉤

団炉裏に關しては、いつごろから出現したかは定かではないが、平安時代の住居跡には、床面中央付近に焼土を伴う浅い土壙が存在するものがある。この種の造構は火の使用に際して、用途の分化を考える場合には極めて重要な資料となろう。しかし、団炉裏の用具となると不明

な点が多い。古代や中世の絵巻物を見ると、囲炉裏が描かれているものが少なくないが、「福富草紙」「慕帰絵」等いずれも五徳が使用されている。

第94図19は、小枝を利用した自在鉤と考えられる。本例は2号井戸跡（Ⅱ期）から出土している点を考慮すれば、水汲み用に使用された可能性もある。類例を待ちたい。

10. 燃料（薪）

意識的に木を割き、ほほ一定の大きさに加工したものを薪と推定した。これらは先端が焼けているものが多い。また、自然木でも先端が焼けているものは、中世の遺構に伴う焼土が全く隙無であり、直接火災に遭遇した状況が認められないことを考慮すれば、燃料あるいは照明用として利用されたものであろう。

第94図20~24は薪（図中の矢印は炭化範囲を示す）と考えられる。前述した絵巻物等には、例如裏に放射状に配列した薪を見ることができる。

11. 農具

本遺跡より出土した木製品のうち、農具はわずか2点である。

第90図9は田下駄の足板である。長さは37cmで、田下駄としては比較的小型に属し、種刈用棒形田下駄であろうか（中村たかを：1981）。

第100図6は鋤である。現存長は69cmで、柄および風呂の一部を欠く。本例は直線的な一本作りで、いわゆる櫛状の鋤と呼ばれるもの（中村：1981）である。1号溝底より、手燭台とともに出土した。

12. 諸職用具

諸職用具は、大工道具や紡織具等の職人の道具類を含む、ここでは一括して扱う。

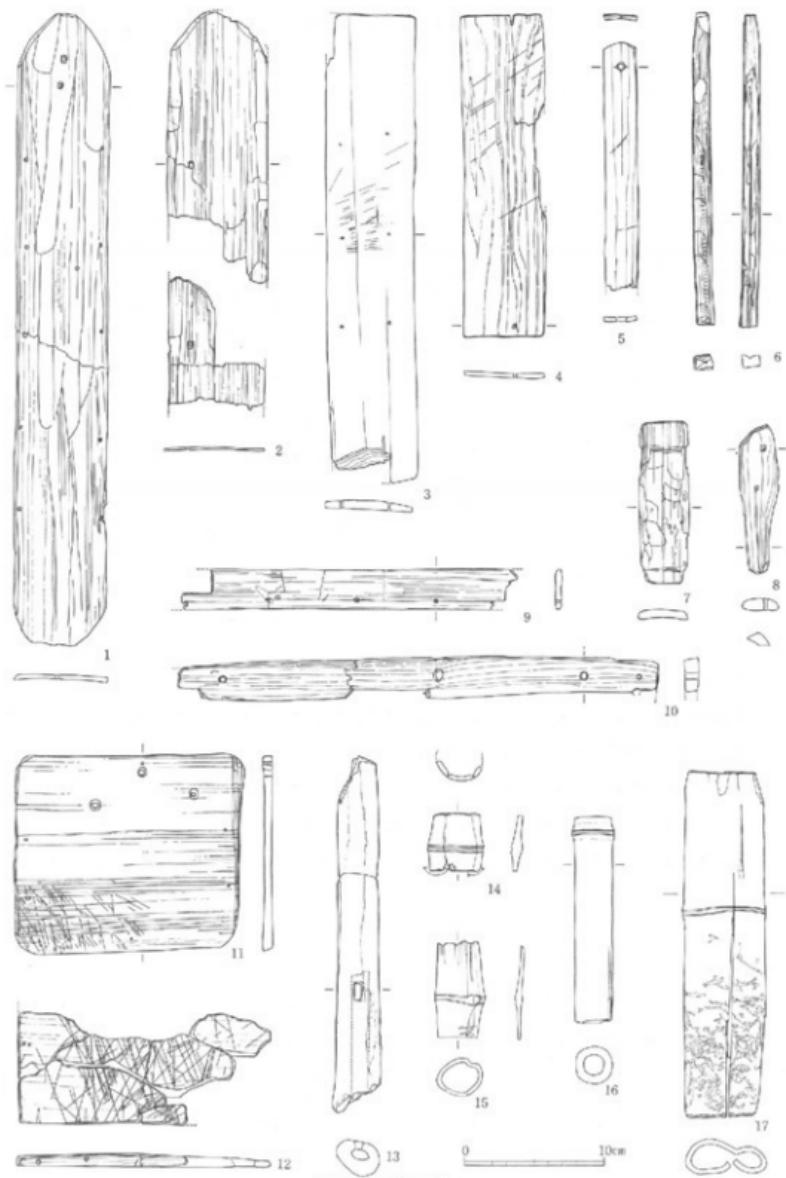
本遺跡では用途を推定しにくいものが多い。

第94図25は工具の柄と考えられる。両端の切口には1ヶ所ずつ穴が認められ、金属器が刺し込まれていたものと考えられる。

同図26は両端を切断した棒状のものであるが、中央部を加工して凹部を作り出している。おそらく、つちのこと考えられる。

同図29は図の上端の切断面は丸味をもつ。表面は軽く面取りが施される。おそらく、檜木と考えてよいであろう。調理具と考えられるが、ここで扱った。

第97図6は比較的丁寧な面取りが施され、片面に凹みをもつ棒状のもので、工具の柄ではないかと考えられる。先端の尖らない点で柄杓とは区別されるものと考えられる。同図13は柄穴



第97図 木製品(8)

第14表 木製品(8)観察表

図版	グリット	通 種	解 位	種 別	木取り	時 期	施 穴		登録番号
							横	縦	
1	E-2	29号通	咸	有孔板木製品	柱目	Ⅰ	長さ40.0cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部に大きめの直孔(Φ3.0cm)が2個ある。側面に小さな穴(直径Φ1.5cm)が2つ(打込み孔？)、貯孔1つあり。はしご等の構造で、側面には斜めの溝がある。一方の面に削痕があり、合板を糊で貼り付けていた。		224
2	A-3	10号土塙	4 層	*	柱目	Ⅰ(中期)	長さ40.0cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部に大きめの直孔(Φ3.0cm)が2個ある。側面に小さな穴(直径Φ1.5cm)が2つ(打込み孔？)、貯孔1つあり。はしご等の構造で、側面には斜めの溝がある。一方の面に削痕があり、合板を糊で貼り付けていた。		225
3	B-6	3号井戸	8層下部	*	板目	Ⅱ(後期)	長さ33.4cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部に直孔(Φ3.0cm)が2個あり。一方の面に削痕があり、合板を糊で貼り付けていた。		434
4	B-8	1号土塙	最下層(6層)	*	板目	Ⅰ	長さ33.0cm、厚さ約3mm。先端部2個あり。1つは直孔(Φ3.0cm)、もう1つは斜めの溝である。一方の面に削痕があり、合板を糊で貼り付けていた。		90
5	F-8	21号通	3 層	木 板	柱目	Ⅲ(後期)	長さ42.7cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部2個(直孔)の他に、先端部に斜めの溝がある。		290
6	F-4	11号通	3 层	棒状木製品	柱目	Ⅲ	長さ22.2cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。2つの面に溝があり、側面はV字形。小さな斜めの溝がある。		35
7	A-3	14号井戸		板状木製品	柱目	Ⅲ(後期)	長さ11.0cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部に斜めの溝がある。		137
8	F-2	21号通	2 层	有孔板木製品	柱目	Ⅲ(後期)	長さ10.7cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部2個あり。1つは斜めの溝がある。		61
9	B-4	11号通	*	*	柱目	Ⅲ	長さ24.3cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。先端部2個あり。1つは斜めの溝がある。		85
10	*	9号井戸	中端土塙	*	板目	Ⅲ(後期)	長さ24.3cm、厚さ約1.0cm。直通孔2個あり。大きな斜めの溝がある。直通孔と並ぶ2個の孔が1つ側面に開いている。		438
11	B-6	3号井戸	8 层 由加原古墳	船 馬	柱目	Ⅲ(後期)	長さ44.7cm、幅16.4cm、厚さ約2mm。側面の右方から直通孔(Φ3.0cm)が2個ある。側面に小さな直通孔(Φ3.0cm)が2つ(打込み孔？)、貯孔1つある。左側面に斜めの溝がある。		261
12	A-5	11号通	セラミックベルト 1 層	舟形板木製品	柱目	Ⅲ(後期)	長さ8.7cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。側面に斜めの溝があり、6片に組み立てている。		87
13	B-5	*	2 层	舟形板木製品	*	*	長さ8.2cm、幅6.6cm、厚さ約3mm。側面に斜めの溝があり、6片に組み立てている。		355
14	E-4	66号土塙	埋土中位	盃形?	Ⅲ(後期?)	長さ14.0cm、直径2.6cm。表面を側面に沿って切削してある。大きめの穴が2箇所ある。		230	
15	II区	11号通	1 層	*	柱目	Ⅲ(後期)	長さ14.0cm、直径2.6cm。表面を側面に沿って切削してある。大きめの穴が2箇所ある。		228
16	A-7	2号井戸	三段目上段付近 筋地粘土	切削のある竹	柱目	Ⅲ	長さ14.0cm、直径2.6cm。表面を側面に沿って切削してある。大きめの穴が2箇所ある。		229
17	E-4	11号通	3 层	切削のある竹	*	Ⅲ(後期)	長さ24.0cm、幅6.6cm。両端は切削し、一方の端には細かい削痕が残っている。頭を向けてある。頭を向けてあると削れてしまう可能性がある。		210

が穿たれた工具あるいは武器の柄と考えられる。柄穴に直交する止め穴がある。

第100図10は両端を切断して、中央に柄穴が穿たれた木製品である。これは木槌の槌部あるいは鉤などの柄の把手が考えられるが、6.6cmと太く握りにくい点を考慮すれば、前者の可能性が強い。同図11は楔状を呈する木製品である。先端を欠くがほぼ完形品である。形状どおり、楔と考えられよう。同図12~15は小杭として分類した木製品である。先端を削って鋭角にしている。14は基部に2ヶ所穿孔が認められる。これらは一応道具類として扱ったが、建築部材とも考える。

13. 絵馬

第97図11は穴の位置等から考えて絵馬と考えられる。縁辺部の小孔は木釘穴で、おそらく、練板を取り付けたものと考えられる。また、三角形に配した穴は紐穴であろう。赤外線カメラによる観察では、墨書は認められず、平川南氏より彩色の絵馬ではなかったかとの御教示をいただいた。この絵馬は2号井戸(Ⅱ期)より出土し、出土絵馬としては山形県遺伝跡(8世紀末)、(藤田・渡辺:1982)に次いで2遺跡目であろう。

14. 木簡

木簡は5点（第98図1～5）出土している。解説文等は後述する平川氏の論文を参照されたい。これらの木簡は、仙台市内では初めての発見となるものである。中世の木簡としては、東北では初めてであり、特に物忌札については東日本では類例を知らない。

いずれも11号溝（内堀）から出土し、およそ南北朝時代（Ⅲ期）に属するものと考えられる。1号はA-5区、2号はE-4区と単独で出土しているが、物忌札はA-5区より一括出土している。おそらく、同時に使用・破棄されたものと考えられる。1号木簡は欠損品であって、解説文の意を十分に理解できないが、あるいは、3～5号木簡（物忌札）と関連するものかもしれない。1号・2号は欠損品であり、また3号は片面を失っているが、4号・5号と同様の尾印・その他が書かれていたものと思われる。

「卦内風土記」名取郡今泉村の条には、かつて熊野神社とともに、牛頭天王社が存在していたことを伝えている。創建年代は不明であるが、おそらく中世のものと考えられ、物忌札とともに民間信仰として、陰陽道がこの地にも浸透していたことが知られ、興味深い。

15. 建築部材

用途不明のものが多いが、杭・橋脚・柱材等がある。建築部材として扱ってよいかどうか判断できないものもあり、その数を確定できないが、約50点以上ある。

井枡材

第99図1～3は2号井戸から出土した杭形のもので、出土状況から地下の井枡材と考えられる。同図5も27号井戸からの出土で、他の井枡材と一緒に出土している点で、地下の井枡材であろう。同図7も地下の井枡材と考えられる。7は96.8cmの長さをもつ点から、井枡の辺の長さは1mを起すものであろう。

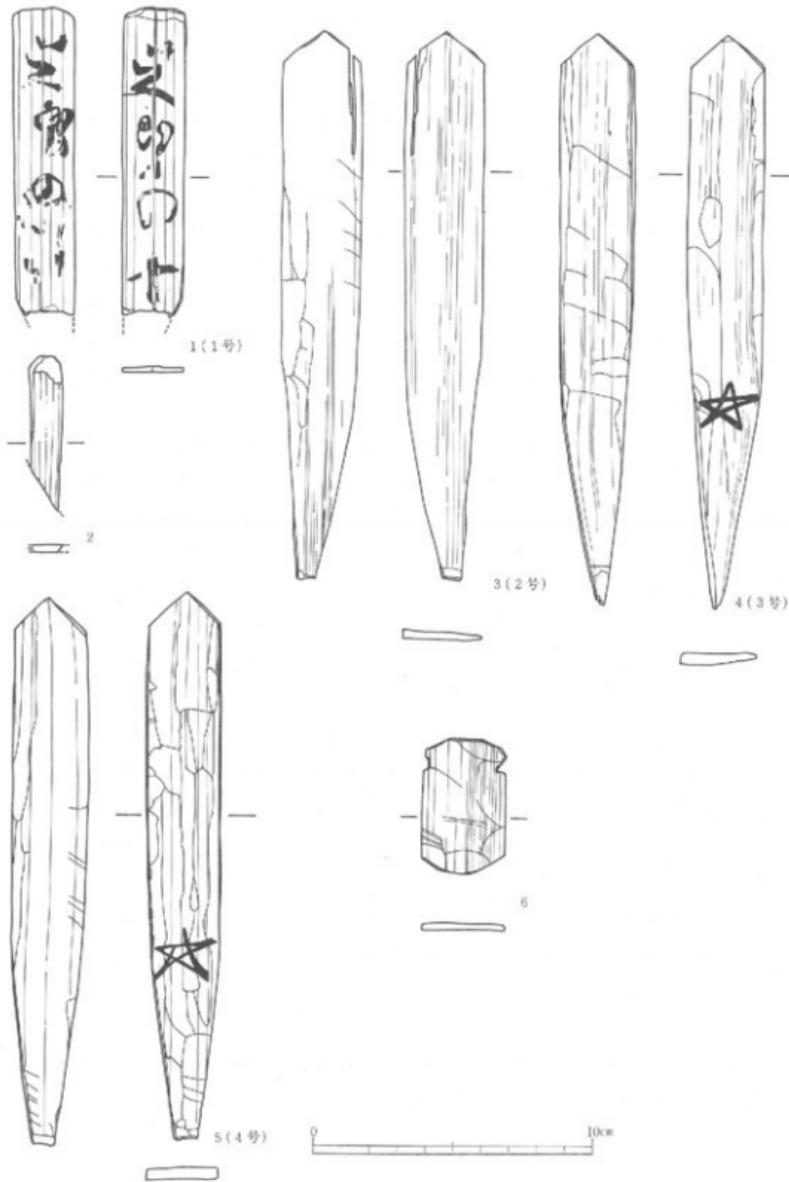
地下の井枡材の出土は、Bタイプとした小型井戸で、I～II期のものにやや多い傾向がある。また、地上の井枡材は、今回の調査では確認できない。

杭

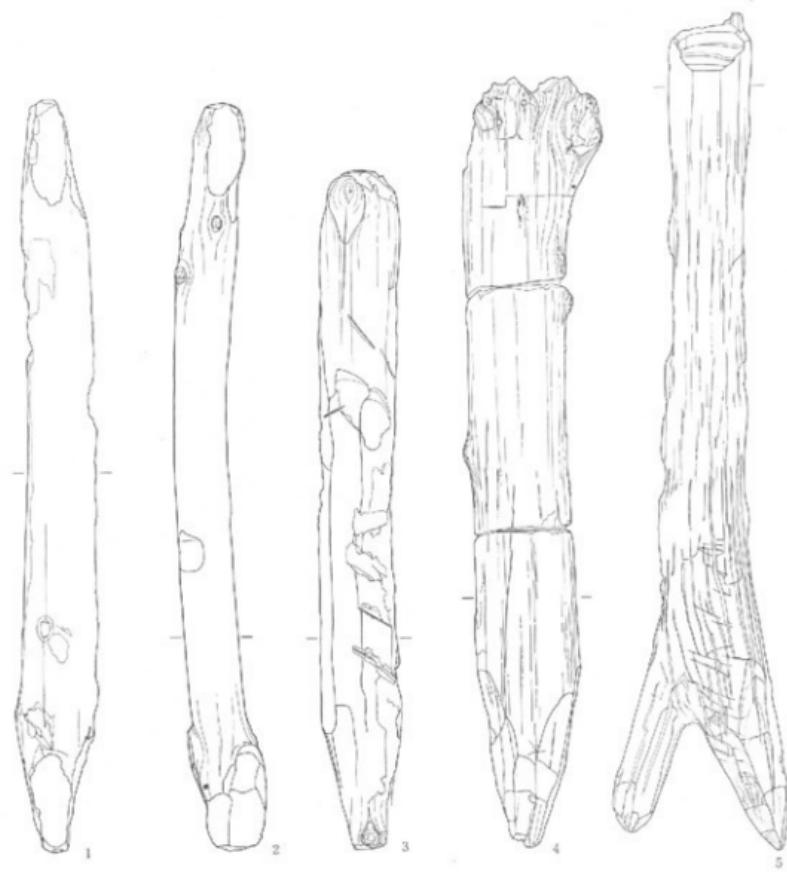
第99図4、第100図8・9は杭である。8は1号溝の底に垂直に打ち込まれていたものである。9は面取りが施された杭である。いずれも用途不明である。

橋脚材

11号溝E-4区より橋跡が検出され、橋脚は10ヶ所存在したと考えられる。このうち、橋脚

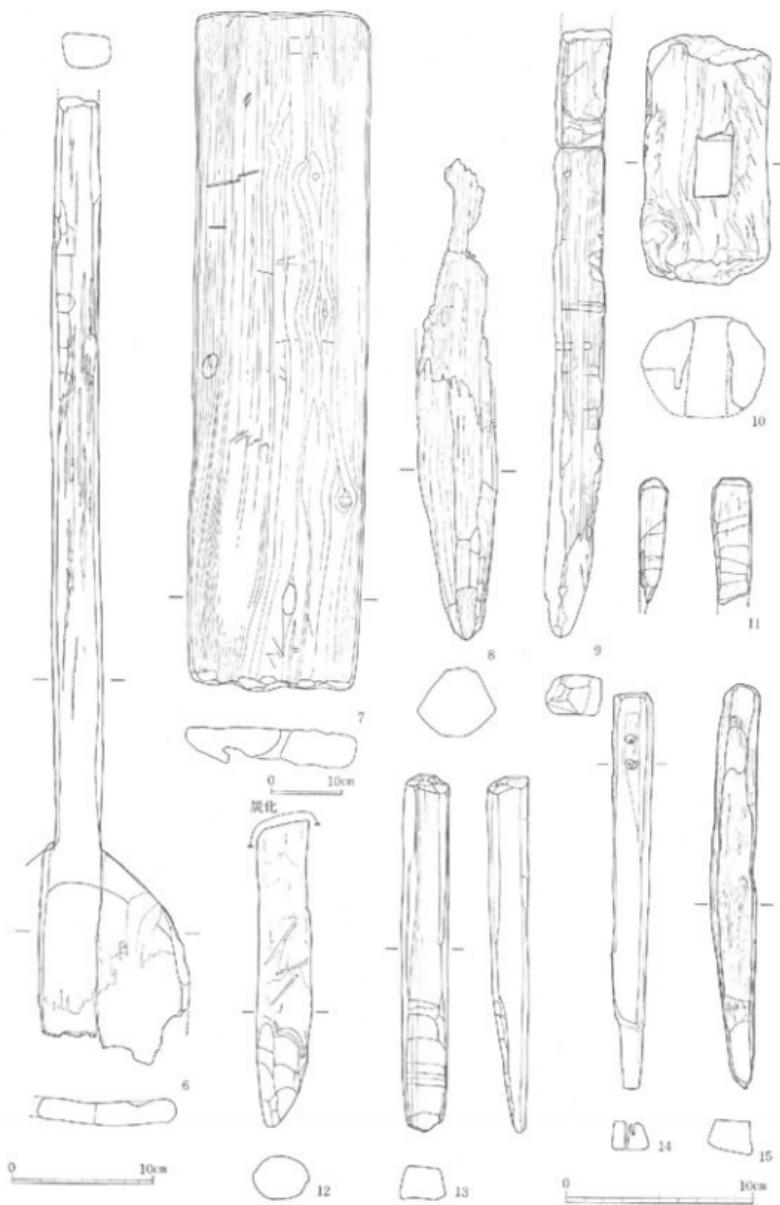


第98図 木製品(9)



0 20cm

第99図 木製品⑩



第100図 木製品⑩ 6・8・9は $\frac{1}{4}$ 7は $\frac{1}{2}$ 10～15は $\frac{1}{2}$

材は7本（図示したものは5本）出土した。

第101図1～5が橋脚材である。1～4は自然木の先端を加工したものであるが、5だけは粗雑な面取りがなされている。II期～III期にかけて使用されたものであろう。

16. 竹製品

製品・加工痕をもつものを一括して扱う。竹製品は総数64点あり、そのうち製品と考えられるものは、わずか4点である。破損・変形したものが多く、その用途は推定しにくい。

第97図14・15は節が抜かれており、蓋置（茶道具の一種）のようなものであろうか。同図16・17は節の残っているもので、用途は不明である。16については、把手や柄のようなものかもしれない。

17. 用途不明木製品

(1) 枝状木製品

第94図27・28は、先端付近に一部または、全周に抉りがある木製品である。

(2) 板状木製品

第95図10は、楕円形を呈する薄い有孔板状木製品である。曲物の一部かもしれない。第97図1～4・9・10・12はいずれも有孔板状木製品である。1・3ははは等間隔に並列して木釘穴がみられ、用途の類似性があるものと考えられる。1は完形品である。4・9には折畳の底板や側板の可能性もある。

(3) 木札

板状木製品のうち、一端に意識的に頭部を作り出しているものを木札とした。この木札と考えられるものは、わずか2点である。

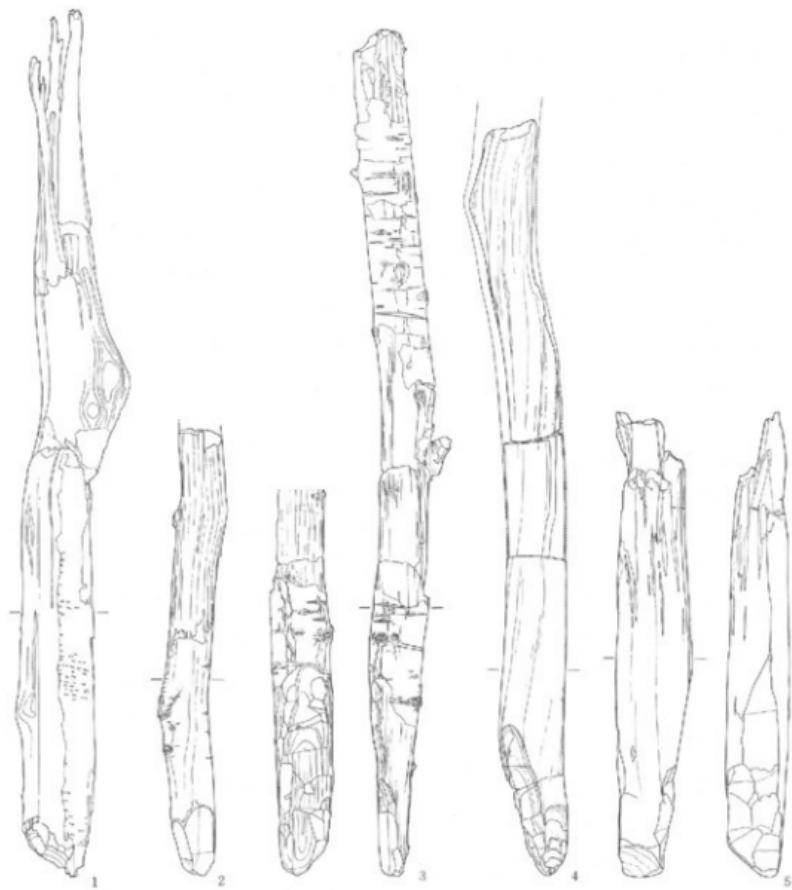
第97図5は山形に頭部を削り出した有孔の木札である。欠損品。第98図6は両端を丸味の強い山形に削り出し、そのうちの一端に抉りを入れた完形品である。表面には加工痕が残る。

(4) その他

第97図7は一端を削り残し、頭部状のものを作り出す板状木製品である。表面には加工痕が認められる。同図8は2ヶ所に木釘穴をもつ板状木製品である。葛西城址（宍戸武昭：1976）出土の人形の足に類似するが定かではない。

以上、木製品を概観してきたが、観察不足の感は否めない。また強引に分類したものもある。今後さらに検討していきたいと考えている。

最後に木製品の中で焼けているものについて若干ふれてみたい。木製品は総数約1,000点出土し、このうち、焼けているものは、全体の6.4%である。極めて出土率が低い。焼け跡の認めら



0 20cm

第101図 木製品⑮ 橋脚材

第15表 木製品(9)観察表

試験	グリット	遺構	層位	種類	木取り	時期	備考		登録番号
							高さ	幅	
1	A-5	11号溝	2 層	1号木脚	柱	日	10cm	(例) 高さ 11.0cm、幅 2.3cm、厚さ 0.3cm 下端丸形、右面左方に削痕がある。	397
2	E-4	11号溝 テラス	x	木脚	x	x	厚さ 0.25cm	尖端している。斜めの削痕面がある。取上番号6② 料理不能	267
3	A-5	11号溝	x	3号木脚	x	x	長さ 10.0cm、幅 2.0cm、厚さ 0.3cm 上端を山形に削り、下端も尖らせている。片側は削痕があり一方は削離され削痕を失っている。右面丸形。	398	
4	x	x	x	2号木脚	x	x	長さ 20.4cm、幅 2.5cm、厚さ 0.3cm 上端を山形に削り下端も尖らせている。	399	
5	x	x	x	4号木脚	x	x	長さ 19.4cm、幅 2.5cm、厚さ 0.3cm 上端を山形に削り、下端も尖らせている。右面丸形。	400	
6	A-7	2号溝 レベール 400-195	x	黑色木脚	丸	x	長さ 4.9cm、幅 2.9cm、厚さ 0.25cm 右端を削り丸くなっている。一方面に丸みのある作りがある。片面に削痕がある。	265	

第16表 木製品(鉗、井枠材、杭、木棺?、契?、小坑)観察表

試験	グリット	遺構	層位	種類	木取り	時期	備考		登録番号
							高さ	幅	
1	A-7	2号溝 井枠材 近辺付近	x	井枠材	-	日	高さ 67.0cm、直径 6.0cm、洞内に4面の削痕あり。左の側面は平らである。	296	
2	A-7	x	x	x	x	x	長さ 67.0cm、直径 4.8cm、洞内に削痕あり、少し尖らっている。右側が薄い。焼化粧が付く。	292	
3	A-7	x	x	鐵鋸子付	x	x	高さ 60.7cm、幅 6.0cm、先端に削痕あり、頭にならせる。地方は削痕を見られない。深い側面。	291	
4	B-5	11号溝 北岸	x	-	日	日	長さ 60.6cm、直徑 8.7cm、先端に削痕あり、地方は尖端。	430	
5	E-2	27号溝	x	-	日	日	長さ 74.0cm、直徑 6.0cm、先端は右側からの削痕があるが尖っていない。右側は、常に分かれ削痕あり。左側は丸みがあり、一方は尖らずで、左側は丸みある。二面に分かれている付近に削痕あり。	289	
6	A-7	1号溝	池	板	x	x	全長 69.0cm、約の高さ 52.3cm、幅約 2.5cm、尻側の尖端 1.7cm。底端と柄は 1本手前、裏面の一部に物の跡がある。表面は丸みがあり、右側部が多數なり。	287	
7	B-6	4号溝口 井枠材	7号 井	井枠材	x	日	全長 96.8cm、幅 2.5cm、厚さ 5.0cm、洞内に削痕あり。右側は尖端。左側は丸みあり。右側角丸く尖らしている。	247	
8	A-7	1号溝 灰	灰	灰	-	日	長さ 34.4cm、幅 5.8cm、先端に削痕あり、地方は尖端。右側が薄い。	433	
9	B-4	9号溝 中國土壁	x	鐵鋸子	日	日	長さ 43.5cm、幅 3.6cm、先端に上端の削痕あり。右側は尖端。表面は方形。	438	
10	E-4	11号溝 (北岸)	2層	木板?	-	日	長さ 13.4cm、直徑 6.0cm、先端とも尖る。中央に削穴あり。両側面に削痕と突起あり。	46	
11	H-2	11号溝 2層	x	板	板	日	全長 6.75cm、最大幅 2.1cm、最小幅 1.0cm、厚さは最厚部 5mm で左端から漸く平らである。完全に組立状態。	28	
12	F-8	22号溝 下から2番 井の土壁	x	小孔	-	日	長さ 16.0cm、直径 2.0cm、先端に削痕あり。右側は端より 0.3cm 削れています。	215	
13	E-4	11号溝 3層	x	-	日	長さ 19.1cm、幅 2.0cm、先端に上端の削痕あり。簡単な先端部を作る。右側は尖端。	37		
14	E-4	x	x	(木孔)	-	x	長さ 21.2cm、幅 2.0cm、先端に複数孔足と細孔、下の孔通孔の右端及び左端孔 1個あり。右の側面の下部に削痕があり、削離しているかも不明。	4	
15	E-4	x	x	小孔	-	x	長さ 21.6cm、幅 2.4cm、先端に5面の削痕あり。右側は圓形か? (粗) 削痕あり	4	

第17表 木 製 品 (橋脚)

遺構	グリット	遺構	位置	種類	木取り	時期	備考		登録番号
							高さ	幅	
1	II区	11号溝	北東部	板	柱	日-山	長さ 77.3cm、直徑 6.3cm、先端は削痕、右側はひび割れて崩れている。板半分に削痕あり。	442	
2	A-4	x	北東部	x	-	x	長さ 39cm、直徑 4cm、先端は2面の削痕。地方は尖端。中央部に削痕あり。クリ材。	337	
3	x	x	東部西側	x	-	x	長さ 75.6cm、直徑 3.2cm、先端は1面の削痕。地方は尖端。右側部に削痕あり。サクラ材。	338	
4	x	x	南部中央	x	-	x	長さ 67.4cm、直徑 5.5cm、先端は大きい削痕と少し削痕あり。上部は削痕半分に削んだたれ、大きさはあるな。クリ材。	339	
5	x	x	東部西側	の	柱	x	長さ 41.0cm、幅 6.3cm、先端は1面の削痕、地方はひび割れている。一方 剥の表面に小さな削痕。もう一方に小さな削痕あり。ブナ材。	341	

れるものは、薪や自然木が大半であって、至極当然である。整理開始当初は、後述するごとく幾度かの戦乱に遭遇したであろうと予想し、焼け跡の認められる木製品の出土率が高いと考えていたが、大きく裏切られる結果となった。

(9) 金属器

金属器は平安時代のもの（8点）も含めて、出土総数203点である。この中には鉄滓等の製品でないものも含まれる。種別に出土数の多いものをみると釘57点、古銭45点、鉄滓26点等であり、用途不明（37点）の製品も多い。また武器類は全体の約8%である。材質は鉄が最も多く、銅・真鍮・鉛がある。

1. 化粧具（鏡）

化粧具としては鏡一点がある。直角式中縁で中線単圓の蓬萊鏡（第104図13）である。全体の約1/3を欠損し、鈕は不明である。割れ方が不自然で故意に割った可能性が考えられる。文様は松竹が描かれ、下位には洲浜らしき文様が認められる。

蓬萊文の出現は平安時代後期以後と考えられ、また蓬萊文の完成はおよそ鎌倉時代以後と考えられ、室町時代には慶賀文様に発展するといわれる（中野政樹編：1969）。

したがって、本例の製作年代は、鎌倉時代中期以後（II期）とみてよいであろう。

2. 炊事用具（鍋）

炊事用具には鉄鍋が2点ある。

第103図5の口縁破片と第108図7の胴部破片である。7は口径が約40cm前後になるものと予想される。いずれも詳細は不明である。前者はIII期に、後者はI期に属する。

3. 嗜好品用具（煙管）

煙管はIII区の出土例を合わせても、わずか2点である。

第109図7は銅製の煙管の吸口である。吸口の内部には竹製羅宇の一部（3.5cm）が残存する。B-6区より出土したが、層位不明である。V期のものであろうか。吸口は段をもつのが特徴である。

4. 囲炉裏用具（暖房具）

圍炉裏用具には火箸がある。本遺跡では第105図4がその典型であろう。現存長が24.5cmで、火箸の長さは8寸前後あったものと考えられる。両端は細く尖っており、断面はH形を呈する。その他にも棒状鉄製品で火箸の可能性のあるものがある。第103図3、第105図14、第106図2・6、第109図2がそれに該当するものと考えられよう。断面形は円形と角形があり、所属年代は火箸の可能性のあるものも含めて考えてみた場合、III～IV期の遺構に集中し、それ以前の遺構に伴うものがない。

ところで、火箸は火鉢の出土等から考えて、必ずしも圍炉裏用具に限定することはできないが、便宜上ここで扱った。

5. 照明具

照明具には第102図5の燈明皿（手燭）がある。皿内部には仕切り板があり、その中央部には

凹みがある。おそらく、ここに芯を挟んだと考えられる。また、本例には短い把手がつく。これに類似する例に陸奥国分寺中門跡出土の鉄皿がある（伊東信雄：1971）。本例はIV期に属する。

6. 農具

農具には、第106図1の鎌がある。本例は片側の銷が取れず十分にその特徴を把握できない。峰幅は約0.2cm、平部と刃部に折曲ではなく、まだ刃は直線的であるがやや内弯する。込（仲子）には目釘穴はない。刃と込の角度は、約132°である。刃先には角はないものと考えられる。本例は、III期でも後半と考えられる。

7. 諸職道具

諸職道具のうち、その主体となるのは大工道具である。本道具類には釘・錐・鎚がある。

釘

釘はいわゆる和釘（57点）であって、断面はいずれも角形である。破損品が多いが、およそ4cm代、6cm代、7cm代に集中する。完形品をみると4.8cm、5.4cm、6.5cm、7.0cm、7.2cm、8.1cm、9.35cmの長さのものがあり、1.6～1.8寸、2.1～2.4寸、3.12寸と大きく3つのグループに大別できる。また、欠損品であるが1点だけ11.5cm（3.48寸）と大型のもの（第109図4）があり、用途が異なるものと考えられる。

釘は断面形が、ほぼ正方形を呈するものが大半であるが、全体の約5%は第105図3、第107図4のごとく、断面形が長方形を呈する偏平な釘がある。この種の釘も用途が異なるものであろう（この種の釘は船釘と類似する）。また、特異な釘として、第107図5に示したような一部が中空になるものがある。内部には炭粒子が若干入っていた（図版29、VI）。

本遺跡出土の釘は、頭が折れ曲がっているものが大半であるが、中には折れ曲っていないものもある。これは未使用の釘と考えられる。未使用の釘には、第102図1、2、第107図6等がある。

本遺跡ではI期の遺構に伴う釘が最も古く、しだいに増加するがIV期は極めて出土率が高く、全体の約42%を占める。前述の偏平なものや中空のもの、そして大型の釘は、いずれもIV期以後であり、釘の用途の拡大を示すものであろう。

錐

錐はその可能性のあるものを含めてもわずか2点である。

第105図13は錐の可能性をもつものである。基部は断面がほぼ正方形でしだいに細くなる。先端部付近は断面が円形に近く、先端となる。第106図3は完成品と考えられ、先端部は螺旋状に作り出されている。これらはいずれもIII期の遺構に伴って出土している。

銭

銭は4号掘立柱建物跡の南東コーナーの柱穴より1点出土している(第108図1)。この建物に使用されていたものであろう。長さは6.8cm(2.27寸)で、比較的小型に属するものと考えられる。この建物跡は、およそII~III期と考えられることから、本例もその時期のものであろう。

8. 古銭

本遺跡出土の古銭は合計45枚出土し、その内訳は中国銭が唐銭1枚・北宋銭24枚・南宋銭1枚・元銭1枚・明銭7枚である。日本銭は4枚出土している(第110図、第18表)。その他不明7枚である。出土状況をみると堀(11号溝・21号溝)が最も多い。この堀でも11号溝と21号溝では傾向が異なる。すなわち、11号溝では初鋳年が10~11世紀代のもののみであり、それに対して21号溝は、12~15世紀初めのものが多い。また他の遺構については、溝や土塁から出土するものが多く、意外に井戸跡から出土するものは少ない。日本銭(寛永通宝)は、いずれも1号・2号溝埋土1層より出土している。

古銭の出土はII期の遺構に伴うものの5枚(北宋銭)、以下III期18枚(北宋~明銭)、III~IV期4枚(北宋~明銭)、IV期4枚(明銭)、IV~V期5枚(明銭・日本銭)で、III期の出土例が最も多い。

II期以後、貨幣経済の発展によって年貢の代銭が行なわれ、その後、貿易制に移行したものであろう。

9. 計量具

計量具には17号井戸跡(IV期)出土の銅錘(権)がある。本例(第108図5)はひょうたん形で上部に穿孔のある小突起をもつ。また文様はなく、底面に盲孔がある。重量は120.1gである。中国の重量単位(岩本義雄:1981に詳しい)に換算した場合約77.48銖となり、すっきりしない、これを日本重量単位に換算した場合32.03匁(約32匁)となり、日本重量単位によって製作された可能性が高い。

江戸時代には守随氏(東国)・神氏(西国)が秤座の支配権を確立するが、特に守随氏はすでに、慶長19年に関東地方の秤独占権を得たことが知られる(林英夫:1973)。秤座の成立(衡制の統一)以前は各地方ごとに度量衡が定着していたようで、本例もそのような社会的背景のもとに制作されたものであろう。林氏の指摘によればひょうたん形の錘に「越前」「天下一」の二つの銘のあるものがあり、江戸時代以前のものと推測され、また、同形のもので無名のものは、中国製の可能性があるという(林:1973)。本例は中国製の可能性もあるが、前述した理由から国産品と理解したい。

10. 武器(加工具)

武器類には、刀類・刀装具・鉄鎗・鉄砲玉・その他がある。

刀類

刀類は刀2口である。第105図9は刀類の茎である。目釘穴や茎端ではなく、茎尻は張りの弱い

鞘尻である。茎は現存長18.6cmであるが、さらに続くものと考えられる。中川高氏より、長巻（薙刀）の茎ではないかとの御教示をいただいた。本例は15号溝（III期）より出土したものである。第109図8は短刀の刃身であろう。身幅は2.5cmであり、刃は平造りか切刃造りか判然としない。また、フクラもつくのかどうか判然としない。棟は直線的であるが刀先の方は不自然である。21号溝（III期）より出土したものである。

第105図6・12は刀子の茎である。特に12は大型のものと考えられる。第108図2・4も刀子の茎である。4は茎幅の差が大きい。第109図3はA-7区II層より出土したもので、最も残りの良い刀子である。刀長は約10cm前後になるものと考えられる。前述した平安時代のものも含めて、刀子は時代が下がるにしたがって、大型化する傾向がありそうである。第109図3等は小柄の可能性もある。

刀装具

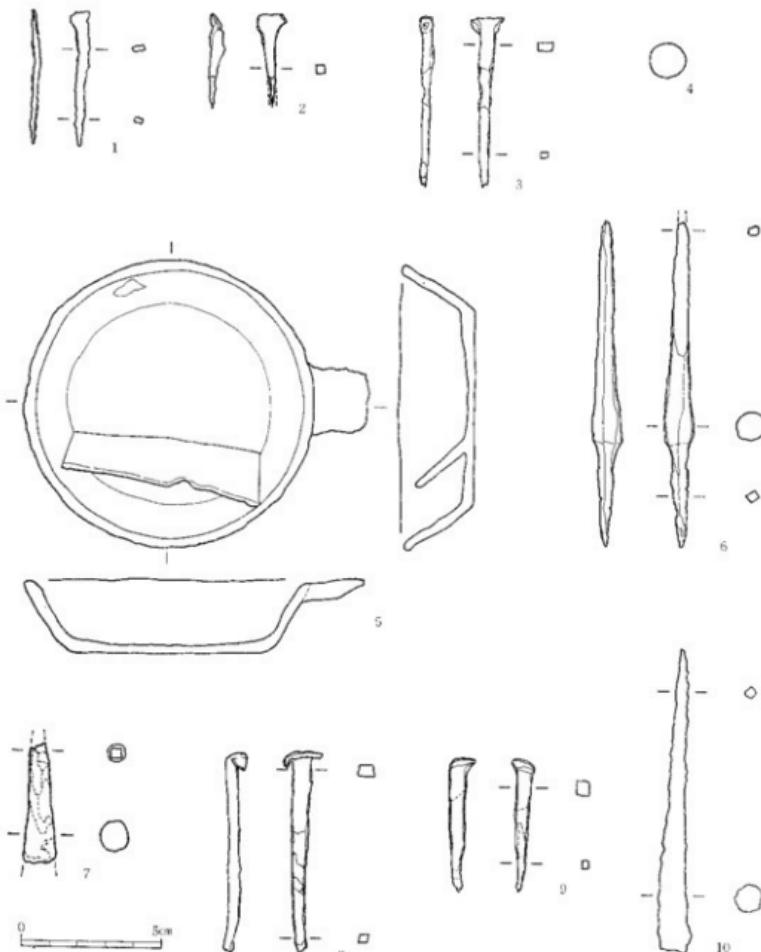
刀装具には、帯軸座金具・鮫皮・小柄横・鞘尻（あるいは柄頭）金具が、各一点ずつある。第103図11は縁辺に刻みのある帯軸座金具である。第105図8は銅製鮫皮で柄の装飾品である。第106図7は小柄横と考えられる銅製品である。本例は銅板を折り曲げて鞘状に製作されている。同図8は銅製の鞘尻あるいは柄頭の金具である。本例は完形品であるが鉢形は変形している。全縁辺は大小の弧の組合せによって形成され、表裏は対称形になるが左右は長さが異なる。長い方の一側縁には、先端部付近に目釘穴1ヶ所がみられる。これらの刀装具はいずれもIII期に属すると考えられるが、第106図7はIV期のものである。

鉄鎌

鉄鎌と考えられるものは5点出土している。これらの鎌は大きく2種のタイプに分けられる。すなわち、先細形と平根形である。さらに前者には茎をもつものと、茎がなく基部約1/3が中空になるものとに細分される。第102図6は先細形で茎をもつ鉄鎌である。全長11.6cmである。第102図7・10、第109図1は、先細形で基部が中空となる鉄鎌である。このうち、第102図7はほぼ完形に近く、全長10.85cmである。第109図1は平根形の鉄鎌である。このタイプは時代とともに多少の変化はあるが普遍的な形態である。先細形のものはIV期以後の遺構から、平根形はIII期の遺構からそれぞれ出土したものである。

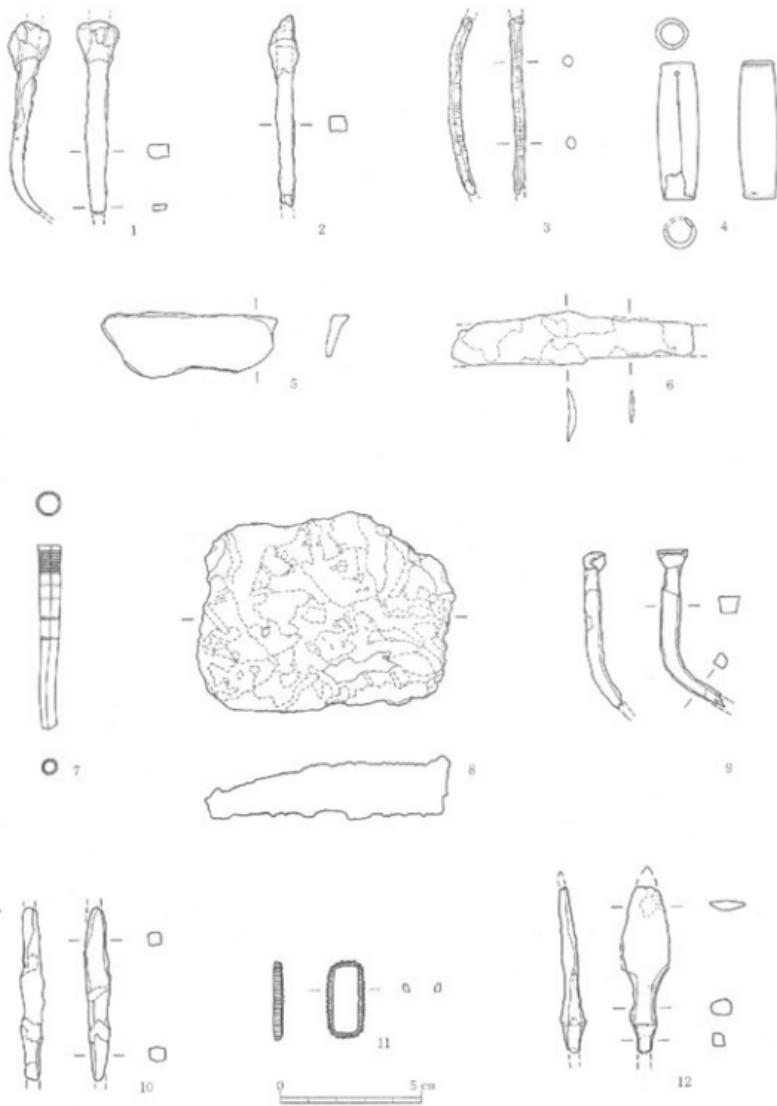
管状銅製品

管状銅製品は2点（第103図4、第105図11）出土している。いずれもIII期に属すると考えられる。この管状銅製品は、奈良春日大社若宮御料古神宝類中の牡丹文薄繪弓（12世紀）に類例がある（東京国立博物館：1976）。この弓の附につく胴輪が、本遺跡例と極めて良く類似しており、本遺跡の2例も弦の胴輪と考えてよいであろう。春日大社例は、合成弓ではなく丸木弓である。平安末期以後は合成弓が主流となるようであるが、本遺跡例は胴輪の存在から丸木弓を

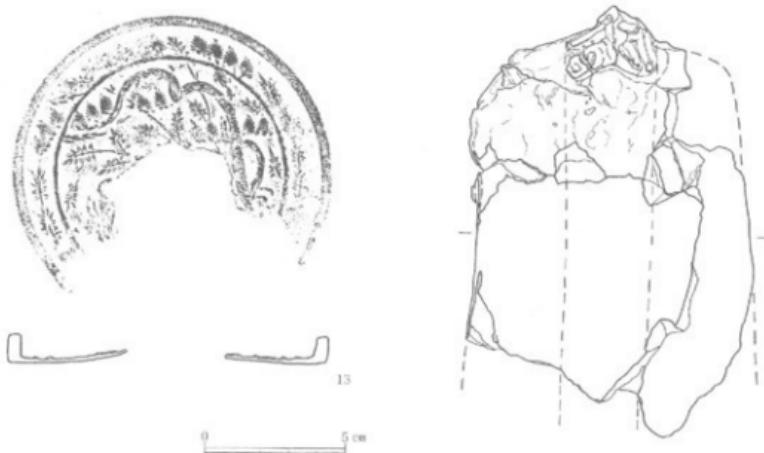


器種	寸法(ミリ)	通 緒	施 文	形 狀	材質	考 證	寸 法	考 證	備 考	登錄番号
1 A-4	19.9	1	無	直	銅	長筒形 (高)4.8	1.36	0.25	2.4 0.64	126-1
2 A-5	1.9	無	無	直(2.4直1.3)	銅	短筒形 (高)3.36	1.11	1.0	0.45 1.7 0.5	155
3 A-6	1.9	無	無	直(2.4直1.3)	銅	短筒形 (高)3.36	1.11	1.0	0.45 1.7 0.5	155-1
4 A-7	1.9	無	無	直(2.4直1.3)	銅	短筒形 (高)3.36	1.11	1.0	0.45 1.7 0.5	155-2
5	2.9	2	無	直	銅	中筒形 (高)10.2	2.6	0.05	26.0 0.05	2010
6 A-8	2	1x1.9	無	直	銅	短大筒形 (高)11.5	3.5	0.15	32.3 0.12	122
7 A-7A	2	3	無	直	銅	短大筒形 (高)11.5	3.5	0.15	32.3 0.12	122-1
8 A-7	0	1	無	直	銅	短大筒形 (高)17.15	1.26	0.7	0.45 9.2 1.2	122-2
9 A-8	2.9	無	無	直	銅	中筒形 (高)4.8	1.36	0.25	0.50 6.6 1.20	123
10 A-7	0	無	無	直	銅	短大筒形 (高)10.25	2.58	0.15	32.3 0.12	123

第102圖 1号・2号溝跡出土金属製品

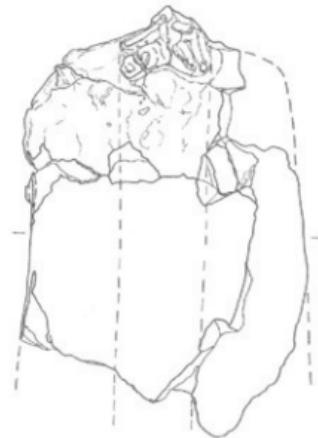


第103図 11号溝跡出土金属製品(I)



13

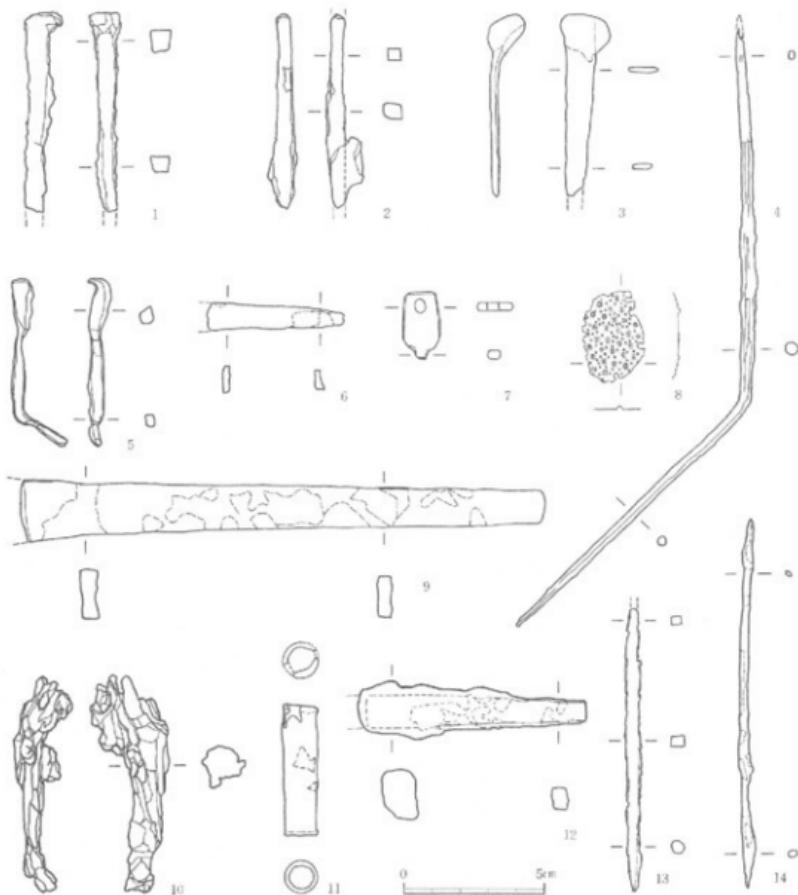
0 5 cm



14

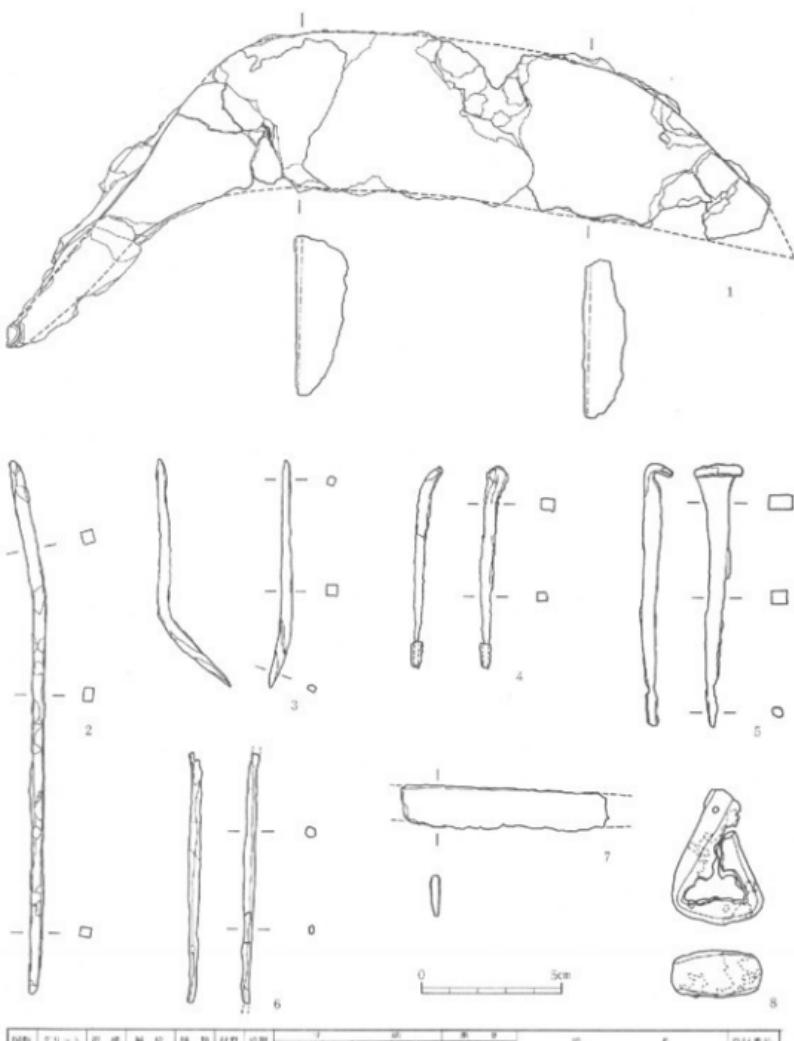
測定	アリット	通 度	通 度	通 度	通 度	通 度	寸 法			重 さ	備 考	目録号	
							長さ(cm)	(横)幅(cm)	厚さ(cm)				
1 " B-1	11号鏡	2	星	目	直	自刷(鏡)	7.1	2.6	1.45	1.4	2.3	101.30	
2 *	*	1	星	*	*	(鏡)	6.95	2.27	1.1	1.1	2.1	274-2	
3 A-3	*	*	*	六瓣?	*	(鏡)	6.35	2.1	0.5	0.4	3.6	前1.0 鏡の内側に六瓣形を刻して可弓鏡(可弓多瓣)の特徴が 見られる。	
4 B-5	*	2	星	日(陽)	圓	*	(鏡)	4.9	1.02	1.4	門幅 0.6 門幅 0.6 門幅 0.6	10.8	5.08 既んと薄なし。
5 IJK	*	1	星	圓(日)	鏡	*	(鏡)	6.2	—	2.4	0.7	30.2	前 5.4
6 B-4	*	*	不 明	*	*	(鏡)	6.5	2.61	1.9	0.25	10.3	鏡 2.8 外輪 0.6 内輪 0.6 鏡の内側に六瓣形を刻して可弓鏡(可弓多瓣)の特徴が 見られる。	
7 A-5	*	直行透	不 明	鏡	日(鏡)	*	6.6	2.38	1.6	0.65	—	4.4 前 1.7 青色分離。火器に付属する金具?	
8 H-5	*	2	星	共 通	鏡	日(鏡)	9.15	—	7.35	2.6	330.0	約 60.1 青色分離(ブライヒたれか?)	
9 E-3-4	*	3	星	鏡	*	日(鏡)	6.7	2.22	1.1	0.25	6.7	2.32 前面に微斜面、斜光反射	
10 F-4	11号素(北清)	藤	藤	藤	?	日(鏡)	6.2	2.05	0.5	0.85	4.4	前 1.2 青色分離	
11 HK	11号唐子ラ大部	Seri鑄	特・金乳	鏡	*	2.9	0.92	1.26(0.41)	0.35	2.2	約 0.4	布製生金具	
12 E-4	11号鑄	藤	藤	鏡	*	(鏡)	5.3	1.95	1.7	0.9	5.6	約 1.5 半楕円	
13 *	*	1	星	漆(漆)	鏡	*	(鏡)	1.3	—	—	103.5	漆 35.0 内輪 0.6 外輪 0.6 鏡の内側に六瓣形を刻して可弓鏡(可弓多瓣)の特徴が 見られる。	
14 P	*	*	*	山(山)(山)	—	*	(鏡)	13.4	—	0.8	85.0	約 22.7 内輪 0.6 外輪 0.6 鏡の内側に六瓣形を刻して可弓鏡(可弓多瓣)の特徴が 見られる。	

第104図 11号溝跡出土金属製品・土製品(2)



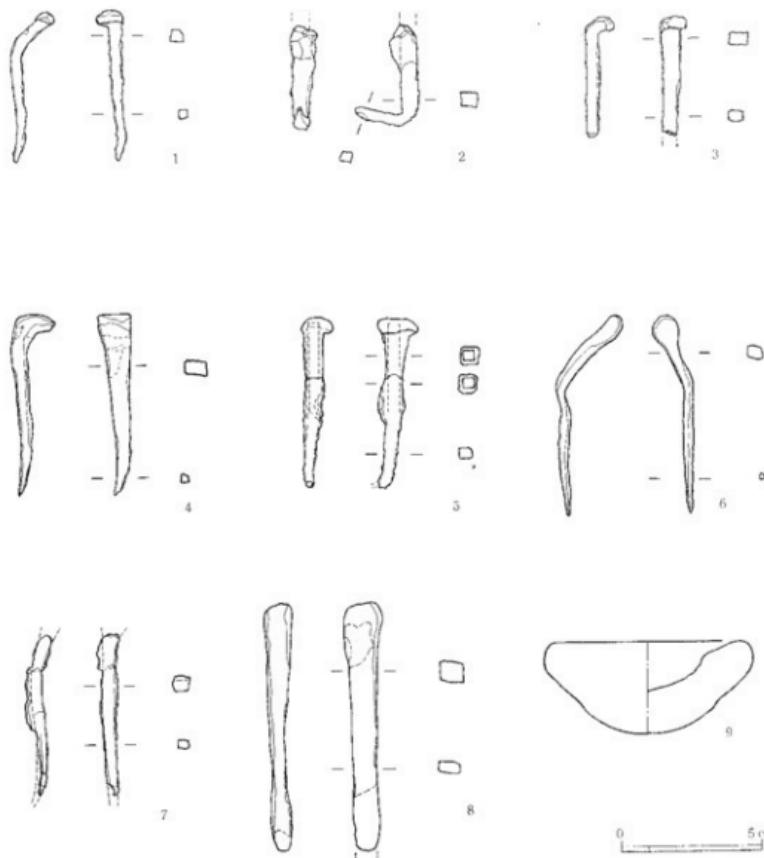
編 号	性 格	測 定	材 質	形 狀	目 的	期 期	長 さ (cm)	幅 (cm)	厚 (mm)	重 量 (g)	備 考	目 錄 番 号
1 12号	鉛 製	—	鉛	棒	鉛	新石器時代	7.52	0.34	1.1	1.5	新石器時代	241
2 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-1
3 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-2
4 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-3
5 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-4
6 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-5
7 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-6
8 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-7
9 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-8
10 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-9
11 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-10
12 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-11
13 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-12
14 —	—	—	—	棒	鉛	—	7.19	0.34	1.1	1.5	新石器時代	251-13

第105図 12号・14号・15号・16号満跡出土金属製品 7125



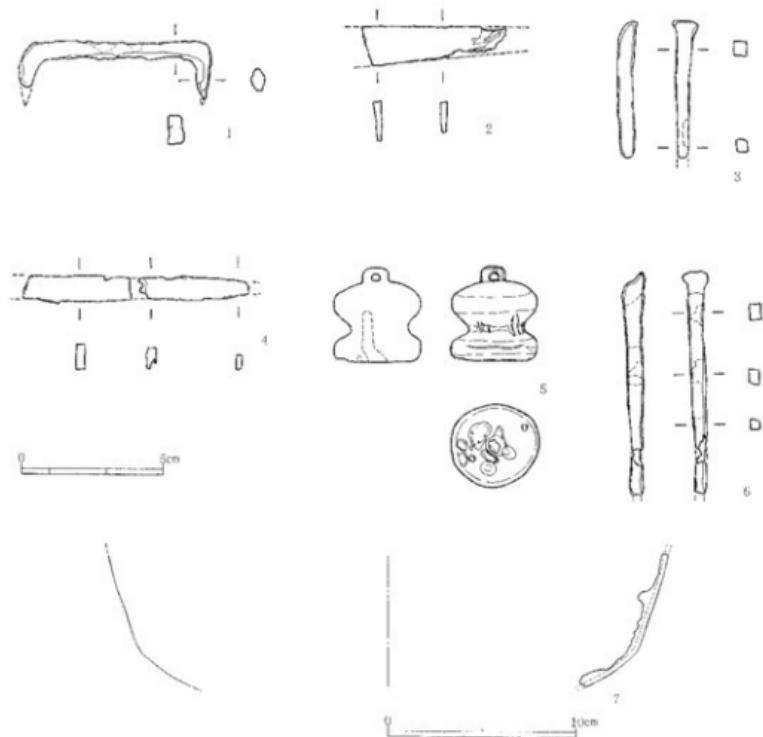
回数	マリット	品種	解説	種類	材質	時期	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)	寸法 (cm)
1	マリット	刀型鍔	1. 鋼	鍔	鉄	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
2	マリット	-	2. 高麗刀	鍔	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
3	マリット	-	3. 鋸	鋸	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
4	マリット	25号鍔	4. 鋸	鋸	銅	後期	7.2 (2.8)	2.8	0.45	4.4	19.1	2	1.4	19.1
5	マリット	-	5. 鋸	鋸	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
6	マリット	-	6. 鋸	鋸	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
7	マリット	-	7. 鋸	鋸	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0
8	マリット	26号鍔	8. 鍔	鍔	銅	後期	60.0 (6.0)	29.0	6.4	2.0	23.0	20.0	20.0	20.0

第106図 21号・26号・31号溝跡出土金属製品



第107図 I・II区土壤出土金属製品

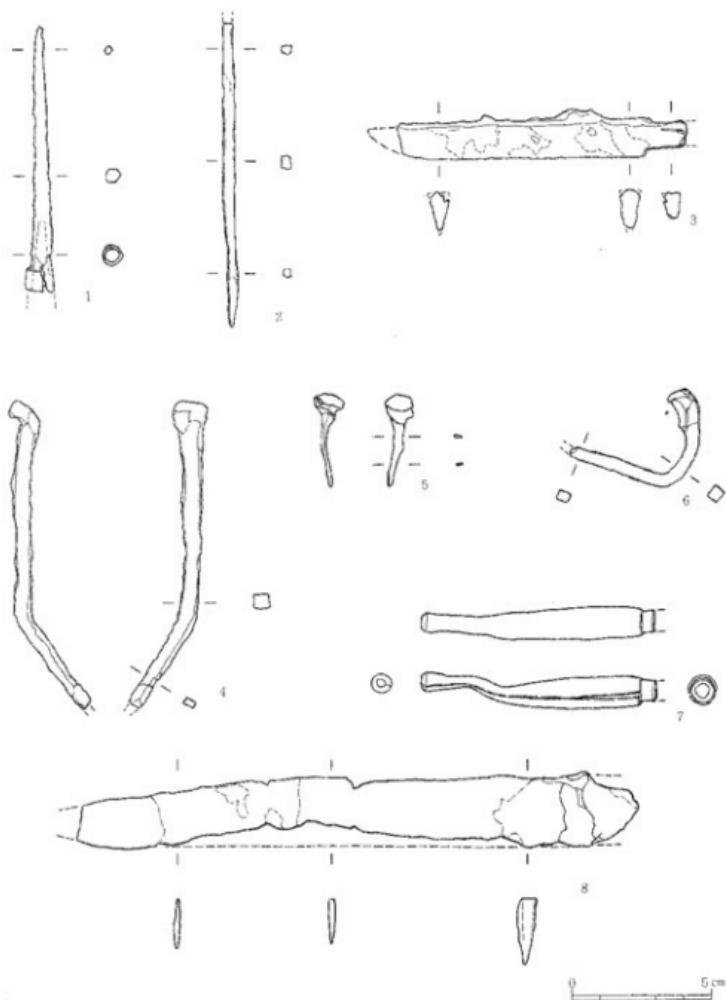
図号	材質	直 長	幅 厚	形 状	材 質	H.T.	E.I.	長 度	7		8		9		考	記述
									E. (mm)	D. (mm)	E. (mm)	D. (mm)	E. (mm)	D. (mm)		
1	銅-2 3.5分銅	鉛	正	1.5	1.5	N	M	(2) 5.4	1.26	0.53	2.5	1.7	0.72	—	—	
2	—	—	—	—	—	—	—	—	(15) 4.3	1.36	1.0	2.73	6.7	6.14	—	—
3	銅-2 1.5分銅	鉛	正	1.5	1.5	N	M	(15) 4.3	2.02	0.9	0.5	0.2	1.6	EM 1/9	—	
4	鉛-6 Zn 2.3%	鉛	正	1.5	1.5	N	M	(2) 5.5	2.13	1.2	—	17.1	0.13	—	—	
5	—	—	—	—	—	—	—	—	(18) 0.6	2	1.4	0.1	4.3	0.11	中空鉛筒、内側に鉛子(鉛子)が充てんする。	90-14
6	—	—	—	—	—	—	—	—	(2) 8.1	0.67	0.9	0.7	2.0	0.13	鉛筒	—
7	—	34.9分銅	鉛	上	鉛	—	—	—	(15) 3.73	1.3	0.8	—	3.0	0.6	鉛筒	—
8	鉛-6 42.5%鉛	鉛	正	1.5	1.5	N	M	(16) 6.2	0.34	1.4	1.0	20.7	5.37	鉛筒	—	
9	鉛-6 45.5%鉛	ラジウム鉛合金	正	—	—	N	M	(10) 4.6	—	—	—	—	—	—	—	



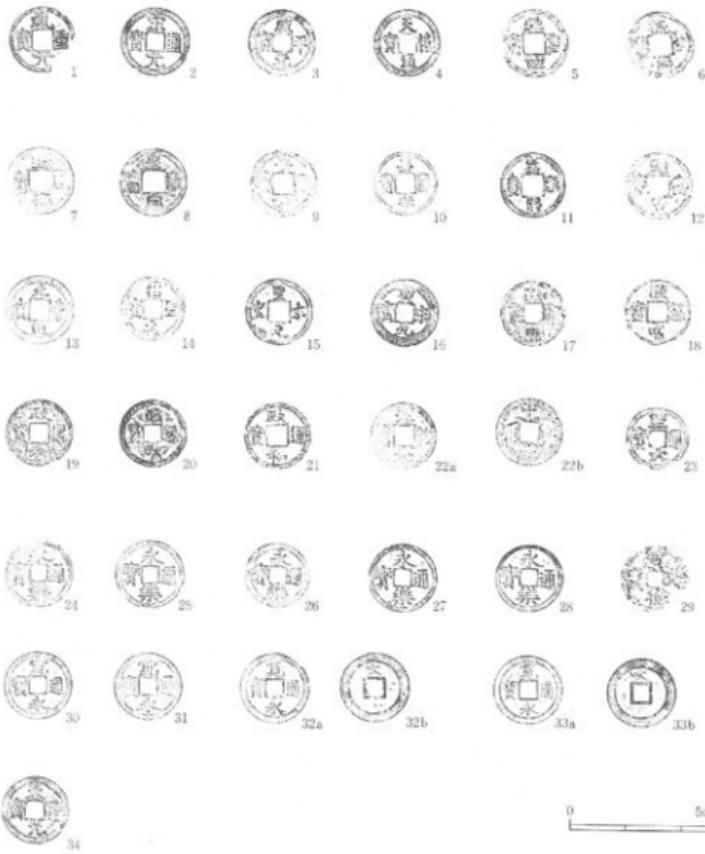
図版 番号	グリット	遺構	解剖位	種類	材質	時期	寸法			重さ (g)	備考	登録 番号
							長さ(cm) (枚)	幅(cm) (±)	厚さ(cm) (枚)			
1 B-7	4号櫛立柱 (通葉ゴーネー)	埋土	鉢	鉄	IV期	(後) 6.5	2.24	1.1	0.8	18.8	約5 cm(約6分)	971
2 E-8	15号櫛立柱 ピント2	底	刀子(茎)	"	"	(残) 5.1	1.68	1.4	0.25	6.0	1.6	732
3 "	16号櫛立柱 ピント6	埋土+1層	釘	"	"	(残) 4.85	1.6	0.9	0.55	6.9	1.84 未使用	994
4 "	"	埋土+2層	刀子(茎)?	"	"	(残) 7.7	2.54	1.0	0.35	2.7	0.72	736 鉢のため通常 にもろい。後 合出来ないか 同一個体。
5 B-1	17号井戸	6層	鉢	鉛	"	(完) 3.4	-	長径 3.1	幅径2.95	120.1	新32 鉢の脚跡、 じょうたん形。 鉛印なし	981
6 E-7	20号井戸	"	釘	鉄	"?	(完) 8.0	2.64	0.55	0.8	9.0	2.4 未使用	-
7 B-4	10号井戸	埋土下部	鉢	"	1期	(残) 10.0	-	鉢底径 13.2	(残) 1.1	-	-	443

第108図 I・II区櫛立柱建物跡・井戸跡・出土金属製品

7は34



第109図 21号溝、I・II区基本層位出土、表採金属製品



第110図 I・II区出土古銭

使用していた可能性がある。

鉄砲玉（第102図4）

鉄砲玉は1点出土している。1号溝の東側（A-7区）2層上面より出土したものである。鉛製である。本例は1号溝との関連があるものと考えられ、IV期のものであろう。

11. その他の金属製品

性格や用途不明のものは37点出土している。このうち、特徴的なもの4点を図示した。

第18表 I・II区出土古銭観察表

団体	族名	クリート	通号	基位	初見年(西暦)	時代	書体	國名	仕分番号
				目	紀元前年(西暦)			新舊	C
1	王族	F-7		31号	2年(759)	後		新	-25
2	宋越元家	B-2		1号	2年(759)	後		新	-25
3	成平元家	B-5	11号	盛	2年(759)	後		新	-32
4	大和通家	A-3	1号	井川	2年(759)	後		新	-8
5	大和通家	B-5	11号	通	2年(759)	後		新	-10
6	大和元家	B-2	15号	通	2年(759)	後		新	-4
7	大和元家	F-7	23号	通	2年(759)	後		新	-29
8	京宋通家	A-5	21号	通ベシト	2年(759)	後		新	-16
9	秦	B-5	17号	通	2年(759)	後		新	-27
10	秦	B-6	2号	通	2年(759)	後		新	-19
11	*	B-8	紅葉	ト	2年(759)	後		新	-36
12	配承元家	B-4	11号	通	2年(759)	後		新	-33
13	元	B-5	*	通	2年(759)	後		新	-14
14	昭平元家	B-6	10号	溝内一ト	2年(759)	後		新	-21
15	元	B-2	31号	通	2年(759)	後		新	-17
16	元	A-5	11号	通	2年(759)	後		新	-29
17	昭平元家	F-2	23号	通	2年(759)	後		新	-28
18	*	F-8	*	*	*	*	*	新	-32
19	政相通家	A-3	1号	井川	2年(759)	後		新	-7
20	*	A-8	30号	井川	2年(759)	後		新	-16
21	*	F-8	23号	通	2年(759)	後		新	-26
22	*	F-6	*	*	*	*	*	新	-30
23	長大通家	B-3	3号	溝内一ト	2年(759)	後		新	-41
24	元	B-2	1号	通	2年(759)	後		新	-31
25	*	A-7	1号	通	2年(759)	後		新	-20
26	*	B-2	14号	通	2年(759)	後		新	-1
27	*	B-6	34号	通	2年(759)	後		新	-5
28	*	*	*	*	*	*	*	新	-9
29	*	B-7	23号	井川	2年(759)	後		新	-24
30	宣德通家	B-7	23号	通	2年(759)	後		新	-44
31	宣德通家	B-7	23号	通	2年(759)	後		新	-45
32	宣德通家	A-6	2号	通	2年(759)	後		新	-46
33	*	*	*	*	*	*	*	新	-5
34	大(?)通家	B-2	45号	通	2年(759)	後		新	-11
35	大(?)通家	A-8	1号	通	2年(759)	後		新	-6
36	大(?)通家	A-6	11号	通	2年(759)	後		新	-13
37	*	B-2	10号	通	2年(759)	後		新	-8
38	*	F-6	93号	通	2年(759)	後		新	-30
39	*	A-2	13号	通	2年(759)	後		新	-22
40	*	A-5	*	*	*	*	*	新	-37

第103図6は鉄製品で、形状が刀子に類似するが、本来このような形であったのかは判断できない。断面は片側が弧状になる部分があることから刀子ではないと考えられる。

同図7は両端では口径が異なる管状銅製品である。本例は鋼板を管状に貼り合わせたもので、12条の沈線がある。この沈線は、口径の大きい方に向って間隔が狭くなっていく。箸(あるいは火箸)の金具にこれと類似するものがあるが定かではない。II期に属する。

第105図7は有孔銅製金具である。孔の反対側には小さな突起が認められる。15号溝より出土し、III期～IV期に属する。

第109図5は銅製の飾り鉢である。B-7区II層より出土した。時期や用途は不明である。

12. 鉄塊・鉄滓・銅滓

小鏡治に関するものとして鉄塊1点、鉄滓(鉱滓)23点、銅滓1点がある。

鉄塊

第103図8は鍛造直前段階の鉄塊と考えられる。9.15×7.15cmで、重量338.0gである。

鉄滓

鉄滓15点とコークス状の重量の軽い鉄滓（醋酸分）8点が出土している。特にII区からの出土品が多い。I期～IV期の各遺構から出土するが、特にIII・IV期の遺構出土のものが多い。遺構別の数量の差はほとんどないが、11号溝がやや多い。

銅滓

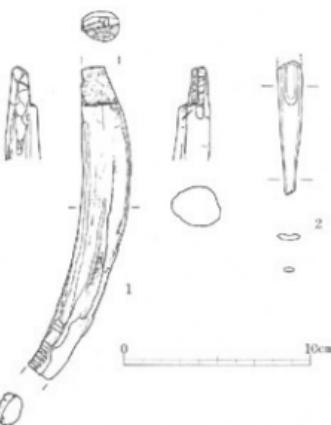
15号溝（III期）B-2区より1点出土している（第105図10）。重量42.9gである。

(10) 骨角器（第111図1・2）

1は21号溝（F-6区）溝底出土の鹿の角製の加工品であるが、性格不明である。長さ16.7cm、径は最大2.6cmである。先端部はカギ形に加工されている。形状は弓の弦に類似する。

2は14号井戸2層出土のイノシシの肺骨製の笄である。現在長7.3cm、最大幅1.2cmである。

その他に鹿角の枝角を切断したもの（図版34-11）がある。



(11) 植物遺存体

植物遺存体は、すべての遺構から採集したのではなく、遺存体の保存の良好な遺構を選んで採集した。その際、各時期別の変化が理解できるように配慮したが、I期の遺構からの採集は不十分であった。

サンプルは、水洗選別を行った後に、水洗を行なわないものと一緒に東北大農学部作物学研究室に同定を依頼した。後に、水洗選別したものは、表皮が欠落するなど同定しにくくなる結果となってしまった。したがって、土壤付着のまま同定を依頼する方が良いことがわかる。

植物遺存体の同定は、東北大農学部教授星川清親氏、同大学文部技官庄司駒男氏にお願いした。改めてお礼申し上げたい。

さて、植物遺存体の同定結果は、第19、20表に示したが、調査者として気付いた点を列記してみたい。

○どの時期（I～V期）にも、およそ、モモ・クルミ・稻（穀）・麦が出土する。

○確実な大麦の出現はIII期からである（ただし、I期の3号土壇からも大麦らしきものが出土している）。すでに、仙台周辺では山口遺跡の調査（佐藤洋：1981）などによって、平安

第111図 21号溝跡・14号井戸跡出土骨角器

第19表 植物遺存体同定結果一覧表(1)

遺伝名	遺構	層位	時期	種
1	B-5	7号井戸 壁 上	I 期	オナモ?、雜草?
2	F-6	23号井戸 8 層	#	桜、椎穂穂、茶色穂穂、炭化稻、稻、豆伴・粟、雜草種子、モモ その他
3	B-8	3号土壤 級下層	#	炭化米、大麦?
4	B-8	3号溝	#	炭化米、雜草種子?、モモ(1個・炭化)
5	B-3	13号井戸 8号井戸層	I期~II期	モモ
6	A-1	17号土壌 5 層	#	モモ(2個)
7	A-7	2号井戸 -	II 期	核段、黄色穂穂、稻ワラ、その他、炭化米、雜草種子?、豆類種子?
8	B-6	3号井戸 8 層	#	クルミ(1個・炭化)
9	B-6	4号井戸 7 層 下	#	モモ(1個)
10	B-4	9号井戸 (2-8層)	#	桜、黃化稻、麥桿・麥頭、雜草種子?
	#	# 4 層	#	モモ(1個)
	#	# 5 層	#	#(2個)
	#	# 7 層	#	#(3個)
11	A-2	15号井戸 壁 土	#	#(1個)
12	(B-5)	11号溝 痕	#	? (成片)
	E-4	# 筋下層	#	クルミ(1個)
	#	# 級下層及び 老の井戸	II期~III期	クルミ(2個)、モモ(1個)
13	A-3	12号井戸 壁 中・上	III期	#(1個・炭化)
14	(B-5)	11号溝 4 層	#	モモ(1個)
	B-4	# 11-14層	#	茶色穂穂、小麥、炭化大豆、炭化米、雜草種子か(食糧か?)、ハンノキ その他
	#			クルミ2個(うち1個炭化)、木片、結木?
F-4	# 北溝縫合面	III期(前半)	ヒョウタン・波・種子(茶色)、炭化米、その他、ソバ?、雜草種子、その他	
E-4	#	III 期	ヒョウタン・種子・波?、稻、炭化雜草種子、その他	
	#	壁土上部	#	クルミ(1個)
	E-4	# グライ層	#	クルミ(10個うち1個炭化)、モモ(2個)、その他(1個)
	#	壁土下部	#	クルミ(1個)、モモ(1個)、ヒョウタン種子・波、雜草種子、その他
15	B-4	12号溝	#	炭化穀穂、炭化米、炭化大豆
	#	# ベルト3層	#	炭化米穂、その他
	#	壁土下部	#	稻、炭化稻、茶色穂穂、米、炭化大豆、豆伴?、稻葉?、稻頭・稈?、雜草種子
16	F-6	21号溝 壁土上部	#	モモ(1個)
	#	# 10 層	#	雜草種子(2~3種類)
	#	# 壁土下部	#	炭化穀穂の籽、炭化米、炭化大豆、雜草種子(タデ、イヌビエ、カナフジタケ、オサセリ?)、モモ(2個)
17	F-4	27号溝 壁 土	#	クルミ(1個)
18	28号溝 1 層	#	アマ波斗(1個)、炭化米、大米・小麦?、その他	
19	B-2	16号溝 級下層	#	炭化米、大米・小麦?、稻穂・粟
20	B-2	31号溝 上 層	IV 期	クルミ、ヒョウタン種子波、雜草(ソバ状雜草?)
	#	# 2 層	III~IV期	大豆、炭化大豆、炭化麥穎、炭化米、大米、雜草種子、その他
	#	# 3 層	#	炭化米、その他の多穀(士芥、十大芥、七小芥、大豆)、クルミ
	#	# 壁土下部	III 期	クルミ(1個)
	#	# (グライ層)	#	クルミ(1個)
21	A-3	11号井戸 壁土下部	IV 期	稻穂、黄色穂穂、稻葉?、モモ(3個)
22	E-7	30号井戸	#	稻穂、荔枝・粟、雜草種子?

第20表 植物遺存体同定結果一覧表(2)

遺構名	遺構	層	付	期	種別
22	E-2 26号井戸			IV	米・稻・菊・桔梗・桜・桃・ソバ、炭化大豆、炭化小豆、炭化大麥、炭化米、茶色系殻、雜草
23	F-2 27号井戸	F	層	II	モモ(1個)
24	A-3 9号土壤	埋	上	II	モモ(1個)
25	B-2 14号土壤	5	層	II	炭化米、大麦、小麦、雜草種子、その他
		II		埋土(中位)	穀、穀穀、米穀、粟(稻の葉)
26	26号土壤	埋土 1 層		II	炭化米、大麦、大豆、雜草種子
		II		埋土 5 層	炭化米穀、その他、炭化部穀、大豆、大麦、小麦、雜草種子
27	1号溝			II	モモ(1個)
	A-7	II	上	層	IV期～V期 モモ(8個うち1個炭化)、クルミ(1個)
A-5、 7・8	II	3	層	IV	モモ(1個)、クルミ(2個)、その他
A-7	II	最下層		II	モモ(1個)
28	D-2 16号溝	埋土上部		II	クルミ(1個)
29	F-3 26号溝	1	層	II	炭化米、大麦、大豆、小豆?、エゴマ?
	II	2	層	II	炭化米、大麦、大豆、エゴマ?、雜草種子?
	II	3	層	II	炭化米、小麦、大麦
30	F-2 31号溝	1	層	II	炭化米、大豆、小麦?

時代後半には大麦・小麦の存在が確認されている。

- ソバ・ヒョウタンもⅣ期から出現するようである。
 - 大豆がⅢ～Ⅳ期、種蔭・アズキ・エゴマ?がⅣ期に出現している。このうち、大豆・アズキは前述した山口遺跡出土例があり、平安時代後半にはすでに出現している。
 - クリやドングリ類はⅤ期の井戸跡(Ⅲ区)から出土している。
 - 炭化したものは米が多く、他に大麦・大豆などがある。出土当初から炭化状態のものと、取り上げ後に色調が変化して、黄色や茶褐色に変化したものがある。
 - 調査時には、9号井戸から多量の草木類の出土があり、また、32号土壤の最下層からは、多量の炭化物が出土している。
- 以上、気付いた点を示したが、このうち、モモ・クルミ・ヒョウタンなどは城館の内外に植えられていたものであろう。ソバ・アズキ・大麦・小麦が出土することは、城館の内外に畑が存在していたことを証明するものであろう。

樹種同定結果について

樹種の同定については、尚絅女学院短期大学教授木村中外氏・東北大学植物園内藤俊彦氏に

お願いした。また、両氏の同定種以外のものは、奈良国立文化財研究所（埋文センター）光谷拓実氏に肉眼観察をお願いした。改めてお礼申し上げたい。

さて、漆器の樹種については、同定以前にブナ等の広葉樹を予想していたが、ほぼ同様の結果となった。現在の会津（福島）・川連（秋田）・鳴子（宮城）では、ブナ・トチ等の広葉樹を利用しており、中世段階の樹種の選択とほぼ同一と言える。また、同定の結果、現在の東北北部の能代春慶（秋田）・津軽（青森）では、主にヒバを利用していることを考慮すれば、本遺跡の漆器は、おそらく東北中部以南において製作された可能性が考えられよう。

また、光谷氏の観察結果では、橋脚・下駄には樹種の選択性はないようで、前者はクリ・サクラ・ケヤキ、後者はケヤキ・ヒノキ・キハダ・マツが使用されているようである。曲物は、スギが多いが、以外にヒノキ（底板）が使用されている例がある。また、木簡・物忌札はヒノキらしい。ところで、木村・内藤両氏の指摘では、ヒノキは福島以南から持ち込まれたと予想されているが、これは非常に興味ある問題である。当時の活発な商業活動を知る手がかりとなる。しかし、中世以前に当地方のヒノキの存在の有無を明確にしておく必要があろう。

(12) 動物遺存体

動物遺存体は、哺乳類が平箱3箱分、魚貝類がビニール袋（小）で17袋分出土した。実際の出土数はさらに増える。

これらは東北大学院生高橋理氏に同定をお願いした。改めてお礼申し上げたい。なお、同定結果は高橋氏報文を参照されたい。

遺存体は調査開始時の予想をはるかに上回る出土量であった。調査時の所見では、11号溝（II区）の橋脚付近から多く出土している（第45図）。魚骨はIII期の16号溝（B-2区）の出土のものに限られる。また、11号溝出土の貝類は、溝底の砂地より検出されたもので、食料にされたものではなく、堀に生息していた可能性が強い。

また、特に注目したいものは、33号土壙内のピットより出土した馬齒である。33号土壙は圓状で底面の硬い特徴をもつ。また、この土壙は20号掘立柱建物跡とほぼ同時期と考えられる。したがって、想像をたくましくすれば、33号土壙は20号掘立柱建物跡の付属施設と考えられ、馬齒の出土から、この建物には馬屋が付属していた可能性も考えられる。

第IV章 III区の調査

1. はじめに

III区の調査は、宅地開発に伴って試掘調査を行なった。すでに調査前に盛土がなされており、試掘トレンチは壁の崩壊が著しい。

さて、トレンチはA～Eトレンチの5ヶ所を設定した(第112・113図)。各トレンチは、A 1.5×3.5m、B 1.5×4.5m、C 1.5×4m、D 1.5×6m、E 7×13mである。すでに調査中に一部造成が開始されており、変則的なトレンチ設定となってしまった。

調査は、昭和56年5月6日から同年6月11日の約1ヶ月間行なった。この試掘調査ではA～Dトレンチは遺構の確認調査とし、Eトレンチは精査を行なうこととした。基本層序はすでに第II章2基本層序で扱っている(第4図)。

2. トレンチの状況(第112図)

ここでは、A～Dの各トレンチの状況を扱い、Eトレンチについては後述する。

(Aトレンチ) このトレンチでは、ピット(あるいは土壤)5個、南側では東西にのびる溝1条を確認した。

(Bトレンチ) このトレンチでは、ピット(あるいは土壤)4個、井戸と考えられるもの2基、東西に伸びる細い溝1条を確認した。

(Cトレンチ) このトレンチでは、中央部に土壘状の高まりとこれに西側で接する南北に伸びる溝1条を確認した。溝上部より無釉擂鉢が1点出土した。溝に重なるように現在でも小さな塙がある。

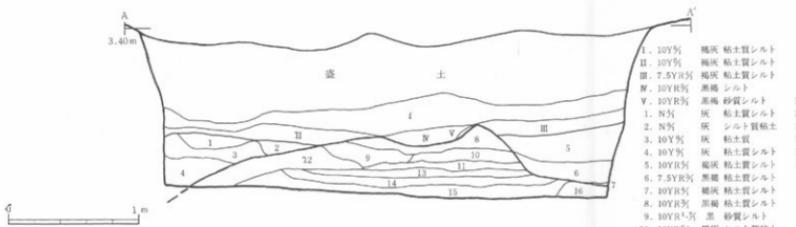
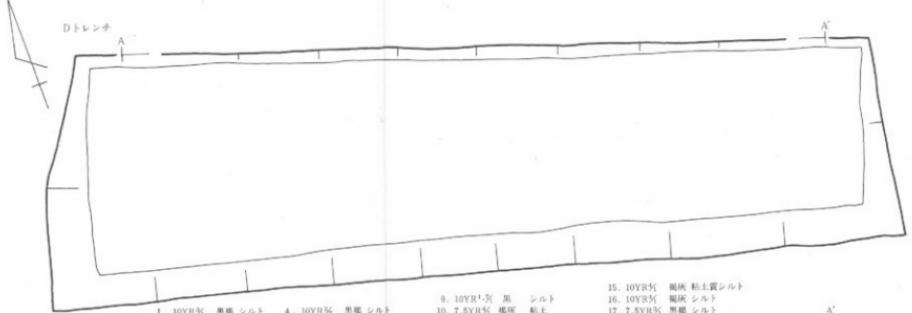
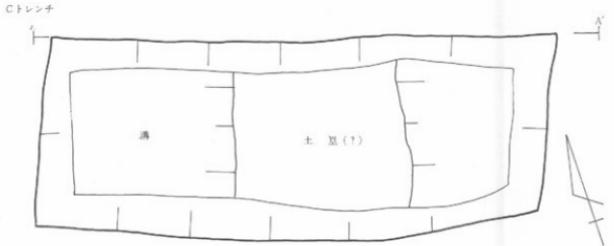
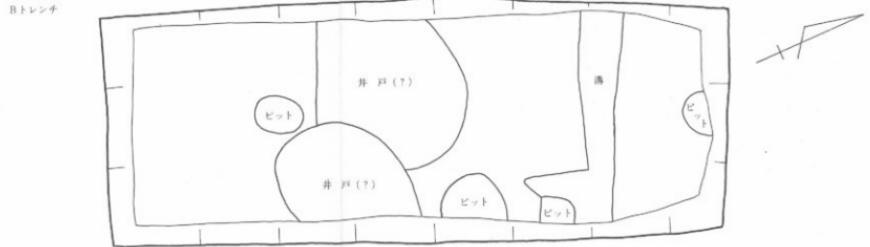
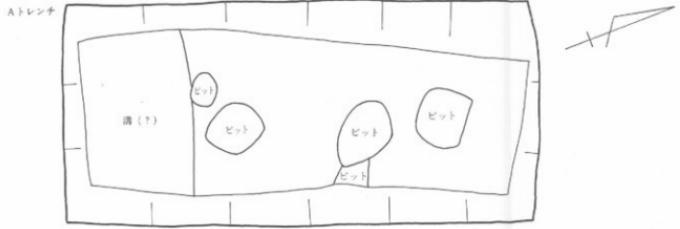
(Dトレンチ) このトレンチでは、何ら遺構は検出されていない。

3. Eトレンチの検出遺構(第113図)

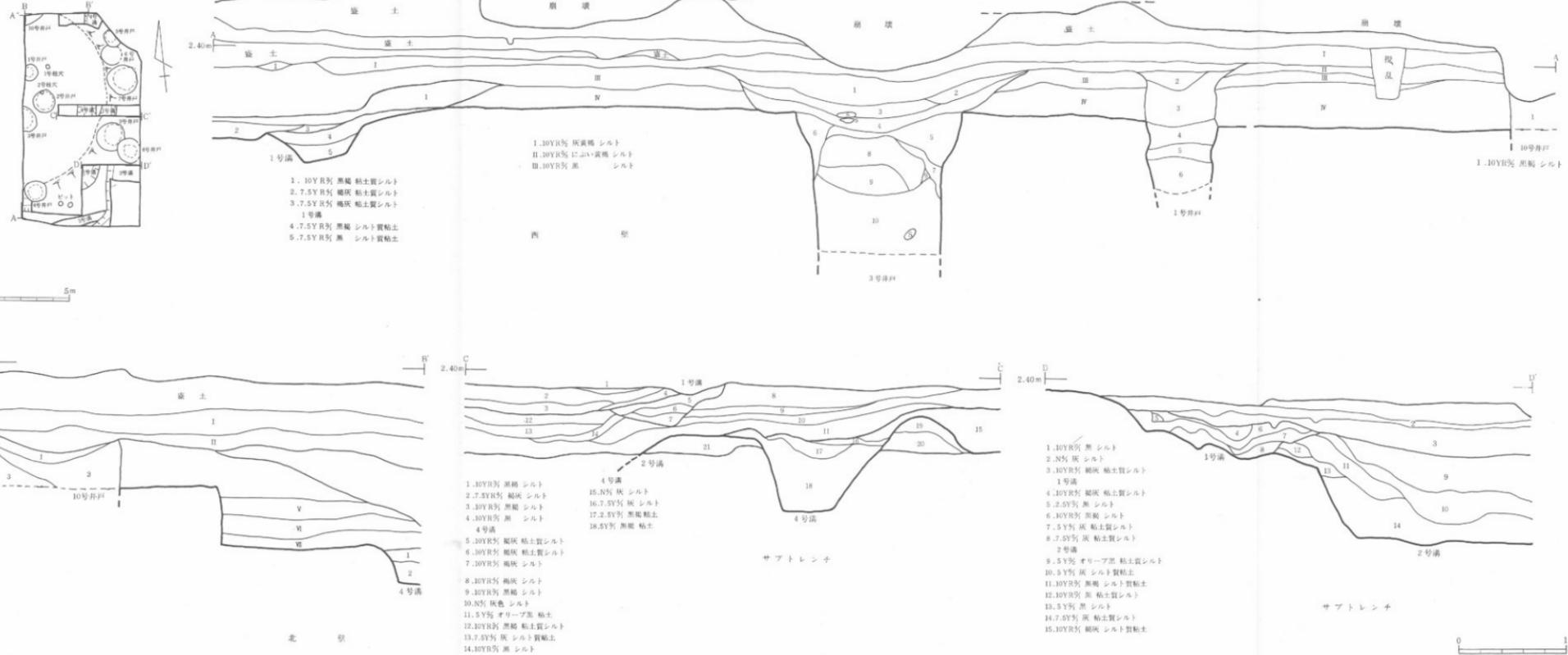
このトレンチでは、井戸跡10基、溝4条、柱穴2個、ピット2個が検出された。東側の2号溝があるためか、層位は東側に傾斜していく。各遺構の特徴は第25表に示した。

井戸跡

Eトレンチでは、I・II区より湧水が激しく、井戸跡は底まで十分な調査を行なうことができなかった。Eトレンチでは小型の井戸はほとんどなく、1号井戸跡(B類)だけである。2～10号井戸跡はC類・D類に属するものと考えられる。特に10号井戸跡は大型で直径はおそらく2mを起すものと予想される。遺物の出土状況は以下のようになる。



第112図 A・B・C・D トレンチ実測図



第113図 Eトレンチ造構配置図、Eトレンチ西壁・北壁・サブトレンチ実測図

1号……漆器	6号……唐津・肥前磁器・柏馬・上野目?など
2号……煙管、唐津、肥前磁器・上野目など	7号……遺物なし
3号……手塙皿(切込?)、徳利など	8号……木箱・漆器(板物)
4号……鉄軸鉢(向付)	9号……唐津・土師質土器・漆器
5号……肥前磁器(皿)	10号……遺物なし

これらの井戸跡の中で、出土遺物の内容から9号が最も古いと考えられ、Ⅳ期に属するものと考えられる。Ⅴ期に属すると考えられるものは、2号・3号・5号・6号がある。1号・4号・7号・8号・10号については、明確な時期決定はできないが、これらも、およそⅤ期の井戸跡と考えられる。Ⅵ期の井戸跡でも切込焼や上野目焼を出土するものは、後半と考えてよいであろう。

溝

溝は4条確認された。これらの溝は井戸跡よりも古い。各溝の特徴は第25表に示した。

1号溝

1号溝は円を描くように続く溝で、井戸跡の中で最も古いと考えられる9号井戸跡に切られる。溝中から唐津と考えられる碗の破片が出土していることから、Ⅳ期後半の年代が考えられる。この溝は、4条の溝のうち、切り合い関係からも新しいことが判明している。性格については不明である。

2号溝

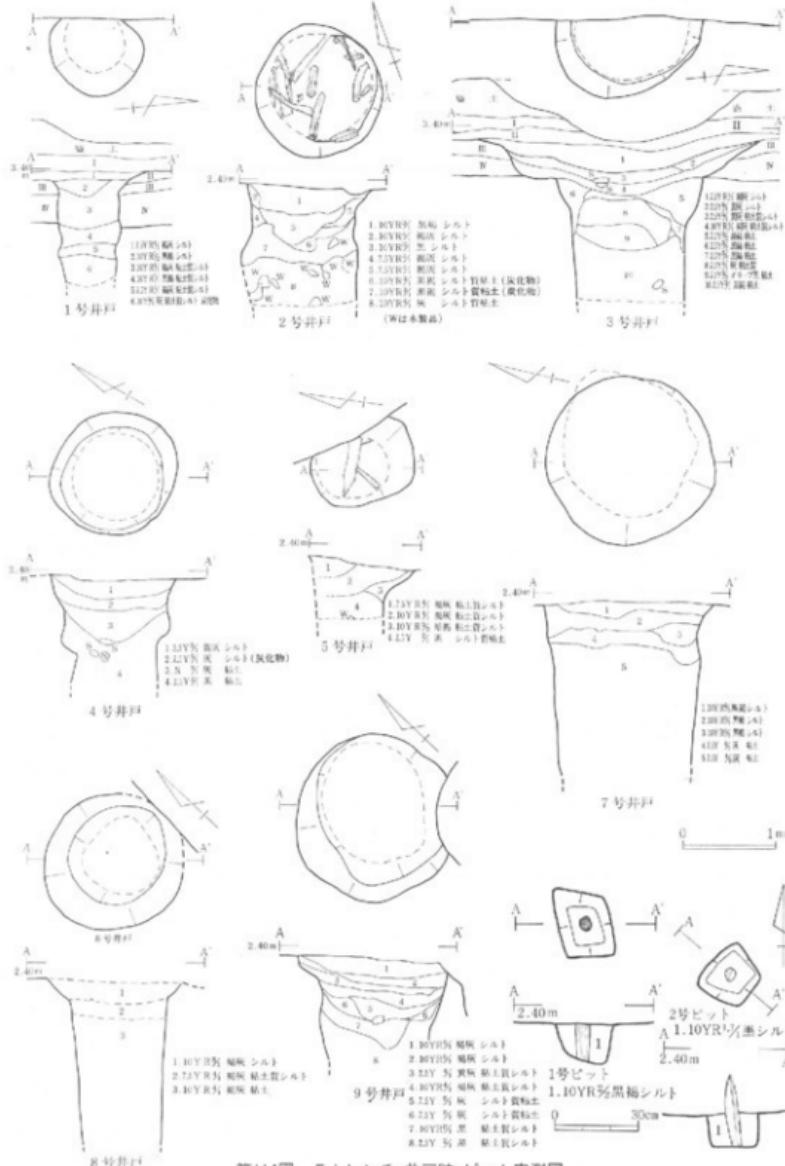
この溝はⅣ層上面で検出され、ごく一部だけの調査に留まつたので、その内容については不明な点が多い。深さは確認面から80cmを測る。切り合い関係から1号溝(Ⅳ期)以前の溝である。この溝は南北にのびる溝であるが、南端では西側に曲がることが確実である。I・II区と外堀のほぼ中間付近では南側が一段低くなることから、少なくともその付近まで伸びていることが予想される。中世のいずれかの時期の館を区画する堀であろう。遺物の出土はない。

3号溝

この溝も、ごく一部を確認したにすぎず、その内容は不明な点が多い。この溝は2号との切り合い関係があるが、ほぼ同時期か古いものと考えられる。遺物の出土はない。

4号溝

この溝は、サブトレンチ内でⅣ層上面より検出された南北に伸びる溝である。しかし、調査区南部では確認できない。したがって、1号溝の手前で止まるか、西側に伸びるものと予想される。遺物の出土はないが、層位的には、Eトレンチ内の遺構中最も古い中世の溝と考えられる。この溝の西側では、畔状の高まりが確認されている。



第114図 Eトレンチ・井戸跡・ピット実測図

柱穴・ビット

Eトレンチでは、中央よりやや北側で柱材を伴う柱穴が2個確認されている（第114図）。柱穴は約20×20cmの掘り方があり、いずれも直径約5cmの柱材が出土した。Ⅴ期の柱穴である。遺物の出土はない。ビットは南側で2個確認されている。いずれも直径20～30cmである。遺物の出土がなく時期も明確ではない。

4. 遺物

Ⅲ区出土遺物には、陶磁器・土師質土器・瓦質土器・金属製品・木製品などがある。大半はEトレンチの井戸跡よりの出土品である。

陶磁器

陶器

陶器は合計35点出土した。器種は碗・向付（？）・擂鉢・壺がある。

第115図1は9本単位の柄目をもつ擂鉢で、口唇部が外へ折れ曲がる。本例はI・II区出土の第64図5・7と極めて類似する。およそ16世紀～17世紀のものであろう。同図2は6本単位の柄目をもつ無輪擂鉢である。内面は焼成となり、胎土中に白針を含む。およそ16世紀～17世紀初めのものであろう。同図3は4本単位と考えられる柄目をもつ無輪擂鉢で、口縁部は緑帯をもつ。焼成は甘い。およそ江戸中期以後のものであろう。同図4は口唇部が折れ曲がる無輪の擂鉢と考えられる。外側は焼成である。胎土中には金雲母を含む。およそ16世紀～17世紀初めの県内産のものであろう。同図5は口縁部内外側に、オリーブ黒色の鉄釉がかけられた擂鉢である。柄目の単位は不明である。I・II区の第65図1・5と同一の生産地と考えられるが、產地は不明である。I・II区ではⅣ期の遺構に伴って出土していることから、16世紀～17世紀初めのものと考えられる。第116図4は内外側に鉄釉がかけられた小鉢あるいは向付と考えられる。底部は手切り瓶を留める。県内産のものであろうか。江戸時代のものであるが、詳細は不明である。同図5は灰オリーブ色の透明度の高い釉がかけられ、胴部上半は白色化粧土に浸している。疊付は露胎となり、砂粒の付着がみられる。およそ17世紀初めの唐津碗である。同図6は明オリーブ灰色の釉がかけられた小型の碗である。施釉部分と露胎部の境は、褐色に変化しており、上野日焼（宮城県岩出山町）と考えられる。およそ19世紀初めに前後する時期であろう。同図7も前述の6と同様、上野日焼の碗である。釉は明緑灰色を呈する。およそ19世紀初めのものと考えられる。その他に、唐津・相馬・上野目ではないかと考えられる碗、唐津・上野目（左に傾く飛鉈）の壺、產地不明の鉄釉擂鉢などがある。

磁器

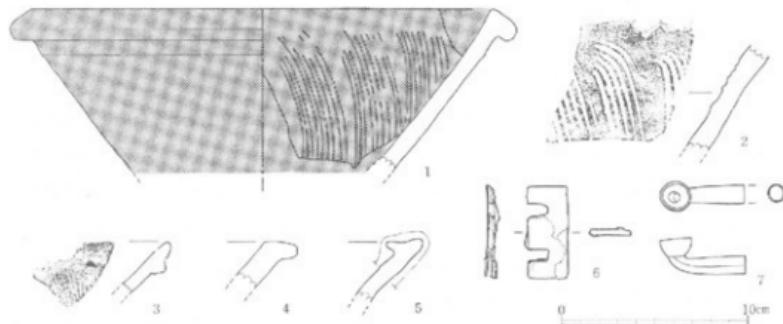
磁器は合計9点出土し、肥前・切込(?)等が出土している。

第116図1は型作りの手塙皿である。破損部分を半透明の接着剤(膠?)で接合している。切込に類似し、およそ19世紀初めの製品であろう。同図2は見込みに鹿の絵を描いた皿である。およそ17世紀後半の肥前の製品と考えられる。同図3は内面に菊花文を描く皿である。生産地は肥前かどうか判然としない。およそ19世紀以後のものであろう。同図8は染付徳利と考えられる。染付文様はどのようなものか不明である。施釉は外面だけで、内面は露胎となる。胎土は極めて特徴的で、白地に灰色の斑点が多い量にみられる。その他に肥前の碗・皿、切込(?)の碗等が出土している。

土師質土器

土師質土器は9号井戸から出土した1点だけである。

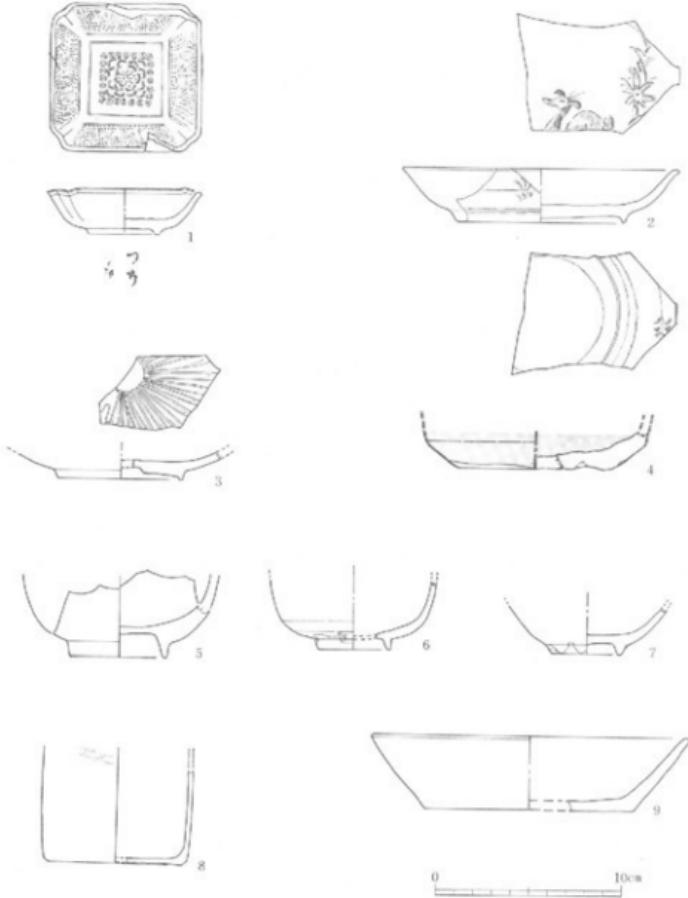
第116図9は外傾して立ち上がる皿で、口径に対して底径が大きい。他の遺物から判断して、江戸時代初め頃のものであろう。



団体	アリット	遺 墓	層 段	取上番号	種 類	形 狀	施 胎	施 釉	施 画	寸 法	備 考
1	Eドレンチ	9号井戸	埋 土		手 塗	盤 皿	施 胎	口縁~脚部	施 画	直 径 32.5mm 底 径 2.5mm	横目り本半仕
2	Cドレンチ	西側 井戸		32	?	?	?	口 縁	平 画	?	横目り本半仕
3	Eドレンチ	6号井戸	埋土上部	27	?	?	?	口 縁	?	?	?
4	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?	?
5	?	2号井戸	?	34	?	?	?	?	?	?	?

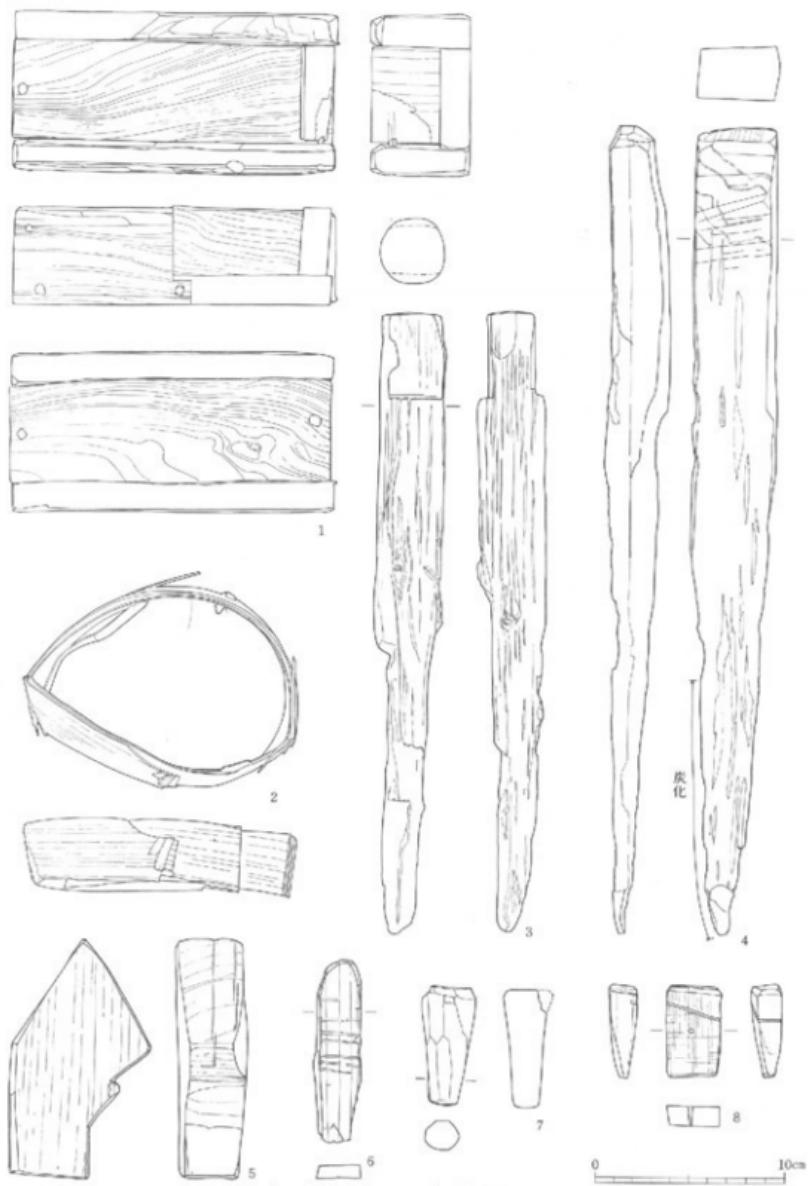
測定	アリット	遺 墓	層 段	種 類	材質	時期	寸 法		容 量		備 考	記録番号
							長径(mm)	短径(mm)	厚さ(mm)	容積(cc)		
5	Eドレンチ	西側 井戸	?	?	?	?	4.95	1.5	2.3	0.05	0.1	E12.42
7	?	2号井戸	?	?	?	?	4.50	1.37	?	?	E13.80	底下幅 70.0mm 底上幅 54.0mm 高さ 14.0mm 口径 50.0mm 底径 13.0mm

第115図 Eドレンチ出土陶器・金属製品



第116図 E レンチ出土陶磁器

度数	ブリット	基	底	柱	上部	縁	形	柄	位	底	特徴	社	備考
1	×	トド	3号鉢印	1層	14+17	残器	手取口	口縁一浅沿	不規	平底	透明強	透明玉子透明白磁質斜口付器。内面に「トド」の落款を有する。外側が丸みを帯び、口縁が丸みを帯びる。	
2	+	5号鉢印				*	直	×	直底	*	*	未入あり 文様 内裏 玉子透明白磁斜口付器	
3	*	試験				*	直	×	直底	*	*	未入あり 基部に発掘記号有り	内面に「試験」の文様及び直りこむ
4	*	4号鉢印		20	残器	口付開口	*	直	内	*	眞	眞白玉子透明白磁斜口付器	外側に工具跡(?)あり 真底 制動み切り
5	*	9号鉢印	3層			*	圓	腹膨一浅沿	直底	直底	透明白	透明白玉子透明白磁斜口付器	透明白玉子透明白磁斜口付器で、内側に工具跡(?)あり
6	*	6号鉢印	11层			*	×	×	上野目	平底	(同オーラー962.5G Y月)	未入あり 真底は暗緑に似る。	
7	*	×	*			*	×	×	×	(同様風 7.5V%)	未入あり		
8	*	3号鉢印		2	残器	透孔	×	不規	×	透明強	透明玉子透明白磁斜口付器	透明玉子透明白磁斜口付器で、内側に工具跡(?)あり	
9	*	9号鉢印		上野目上層		直	口縁一浅沿		*		大底 ロクロナテ 内裏 ロクロナテ 丸底斜口付器	丸底斜口付器で、内側に工具跡(?)あり	



第117図 Eトレーニチ出土木製品

瓦質土器

内外面を焼成した破片が1点出土している。器種は不明である。細片のため図示できない。

金属製品

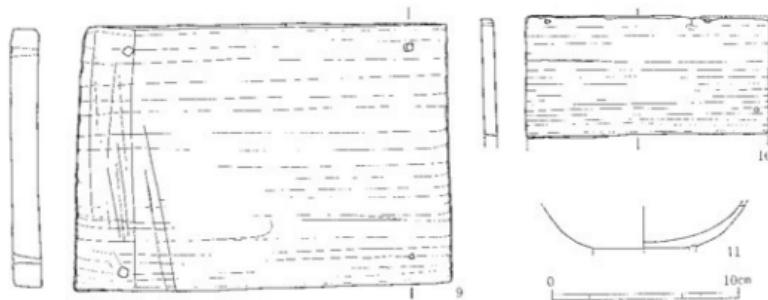
III区出土の金属器は、わずか2点の出土で、I・II区とは対照的である。

第115図6は「E」字型の鉄製品である。用途は不明である。およそ江戸時代あるいはそれ以後のものと考えられる。同図7は2号井戸出土の椎管の雁首である。真鍮製と考えられ、火皿部は大きい。

木製品

木製品は合計33点出土した。このうち、6号井戸とともに最も出土数(12点)が多い。種類は自然木が最も多く、次いで削片、切片など木片が多い。

第117図1は板目材を使用した木箱で、木釘で打ち止めている。用途は不明である。江戸時

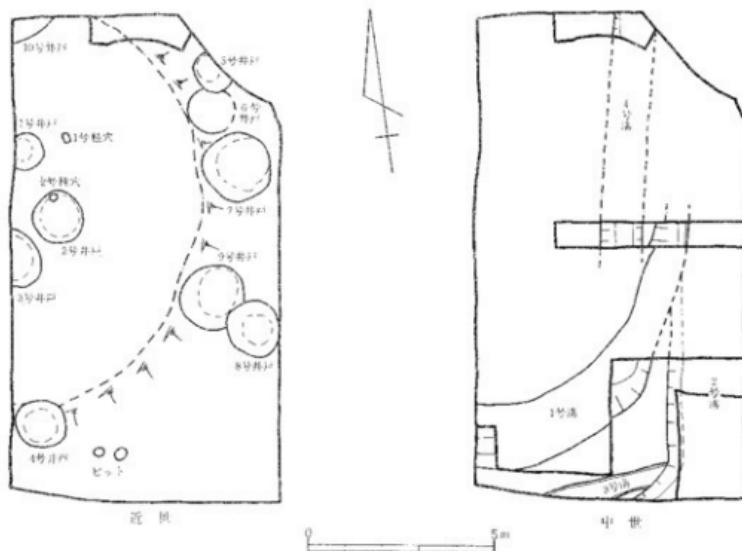


木 製 品 観 察 表

図版	アリット	通 番	基 本	材 种	木 取り	寸 長	備 考	写 真	
1	E	トレンチ	8号井戸	土上	板 目	Y	長さ17cm、幅2.5cm、厚さ2.5mm。幅2.5cm、厚さ3.5mm。幅2.5cm、厚さ3.5mm。 H1.5cmの内側に斜めに2個孔があり、側方に2個孔があり、それオホヒノ科が残っている。 一方の内側に斜めに2個孔があり、一方の側から抜いている。	2	
2			4号井戸	■	曲 物(骨格)	板 目	Y 略	直角約90°-120°、厚さ0.1-0.3mmの板2枚にまいてあり、端0.3mmと七九で止めている。	22
3			西 保	板			長さ35mm、幅達3mm。		4
4			2号井戸	■		Y	長さ45mm、幅4mm、厚さ2.5mm。先端より4箇所で接着している。側面あり。	3	
5			6号井戸	■	四 方 ?	板 目	Y 略	長さ12cm、幅7mm、厚さ3mm。側面側に斜め孔あり。	20
6			4号井戸	■	板 板木 製品	板 目	Y 略 ?	長さ9.8mm、幅2mm、厚さ0.3mm。側面に斜め孔。一方の面に斜め孔。	13
7			6号井戸	■	板		Y 略	長さ6cm、大面積2.8cm、小面積1.4cm。誤い方の大きさ側に丸みがある。全縁に削れあり。	27
8			6号井戸	■	板 ?	板 目		長さ9.7mm、幅2.7mm、厚さ1.3mm。斜め込みが目的込んでおり、厚さ0.3-1.2mmである。 中L字盲孔があり。	26
9			6号井戸	板 土	板状灰陶器	板 目		長さ20mm、幅24mm、厚さ1.3mm。片面に削れがある。裏面に方形の穴跡があり、1-2mmに左右2箇所。	1
10			8号井戸	■	板状灰陶器	■	Y	長さ12mm、幅2.6mm、厚さ1.1mmは鉛板。あり、裏面に斜め孔。黒色の表面。 内側に丸みがある。側面に斜め孔している。側面の内側に斜め孔。	21
11			1号井戸	■	漆 (樹脂)	漆 木		太径5.5cm、内面系赤(うみ色)、外側、外縁。漆が剥離している。ブナ	405

第118図 Eトレンチ出土木製品

代（V期）の遺物であろう。同図2は曲物の側板である。側板は2重に巻いている。1号溝（V期）を切る溝から出土していることからV期のものと考えられる。同図3・4は杭と考えられる木製品で、杭の頭部には3が削痕、4が凸形の加工痕がそれぞれ認められる。このうち、4はビットから出土したが柱材とは考え難い。先端部から火が焼けている。同図5は形が特異な板材で切片と考えられる。同図6は板状木製品で、頭部あるいは先端部と考えられる部分は梢円形を呈し、削痕が認められる。片面には側縁に直交する傷痕が7条認められる。用途不明。同図7・8はそれぞれ栓と楔（？）と考えられる。第118図9・10は有孔板状木製品で、孔には両者とも木釘の残片がある。9は何かの部材と考えられ、これ一つで完形品にはならないと考えられる。10は片面と木口面の一部に黒漆が塗られており、重箱や箱詰のような箱状のものの破片と考えられる。同図11は横木取りの漆器椀である。外面は黒漆、内面は赤漆（うるみ色）が塗られている。高台は低く、器厚は薄い。文様は認められない。



第119図 時期別遺構配置図

5. まとめ

田区の調査は不十分ながらも、貴重な発見があった。すなわち、Ⅳ期あるいはそれ以前の溝が検出され、特にCトレンチの土壌状の高まりを伴う溝、そして、Eトレンチの2号溝は注目される。これらはI・II区の1号溝あるいは21号溝とは平行関係を示すようである。Eトレンチの調査では、およそⅣ期を境として大きく2時期（第119図）の変遷を知ることができた。

また、その後（V期）に展開された井戸跡群も、当時の江戸時代の農村の実態を知る貴重な手がかりとなろう。今回の調査では、農村部においても陶磁器が豊富に供給されていたことが理解される。特に、後述するごとく、六郷崩廻は藩制初期には、相馬の武士が帰農したといわれ、今回の相馬焼の出土、あるいは昭和54年度の調査においても相馬焼が出土していることは両者の関係を知る上で注目されよう。

第21表 I・II区溝一覧表

溝名	山名地	利子面積(ア)	延長	最大	均形	備考
1号溝 1号溝	—	43	154	14.4	Ⅳ期	1号溝、1号溝を切る。西門地、東門地、南北通溝、南北通溝。
2号溝 2号溝	—	63	6	10.5	Ⅳ期	1号溝と平行して走る。南北通溝。
3号溝 3号溝	相馬	22	相馬 94	9.4	I期	9号溝に切られる。南北通溝。
4号溝 21(11)号溝	—	26	相馬 26	2.6	平安時代	1号溝、2号溝に切られる。南北通溝。
5号溝 —	—	60	—	—	—	1号溝、2号溝に切られる。元の竹林。
6号溝 22(30)号溝	—	21	22	—	平安時代	4号溝、6号溝に切られる。
7号溝 26号溝	相馬不可知	—	8	—	平安時代	6号溝に切られる。
8号溝 25(37)号溝	相馬不可知	—	84	—	平安時代	火成原あり。8号溝は建物に切られる。
9号溝 13号溝	—	130	69.5	—	日-山期	日-山期。
10号溝 14(17)号溝	—	285	11.5	—	Ⅳ期	9号溝に切られる。1号溝に切られる。西門地。
11号溝 7号溝	—	240	100.4	10.04	日-山期	1号溝、7号溝に切られる。元の竹林。
12号溝 北2北2 17号溝	北2北2 17号溝	210	10.5	1.05	日-山期	1号溝、7号溝に切られる。元の竹林。
13号溝 6号溝	—	379	63.7	—	Ⅳ期	1号溝、9号溝に切られる。
14号溝 8号溝	—	100	3.4	—	Ⅳ期	1号溝、8号溝に切られる。
15号溝 5号溝	—	78	2	—	Ⅳ期	1号溝、5号溝に切られる。
16号溝 4(31)号溝	—	24	1.8	—	Ⅳ期	1号溝、14号溝に切られる。毛皮販売の網。
17号溝 3号溝	—	380	25.6	—	Ⅳ期	1号溝、14号溝に切られる。毛皮販売の網。
18号溝 20号溝	—	130	10.5	—	平安時代	1号溝に切られる。
19号溝 29号溝	—	28	2.6	—	Ⅳ期	1号溝に切られる。
20号溝 21号溝	相馬不可知	—	—	—	Ⅳ期	21号溝に切られる。
21号溝 —	相馬不可知	72	54	—	日-山期	21号溝に切られる。元の竹林。
22号溝 41号溝	—	53	—	—	平安時代	15号溝に切られる。
23号溝 39号溝	相馬不可知	—	—	—	平安時代	15号溝に切られる。
24号溝 18号溝	—	55	20	—	Ⅳ期	21号溝に切れる。
25号溝 16号溝	—	87	—	—	Ⅳ期	21号溝に切れる。
26号溝 27号溝	—	154	35.8	—	Ⅳ期	20号溝に切られる。
27号溝 28号溝	—	100	49	—	日-山期	20号溝に切られる。
29号溝 30号溝	—	200	24	—	日-山期	20号溝に切られる。
30号溝 33号溝	—	146	99.6	—	Ⅳ期	20号溝に切られる。
31号溝 19号溝	—	175	121.8	—	相馬	22号溝に切られる。
32号溝 34号溝	—	105	95.5	—	平安時代	16号溝に切られる。
33号溝	—	35	—	—	平安時代	4号溝に切られる。

第22表 I・II区掘立柱建物跡一覧表

掘立柱建物名	間数	棟方向	方丈	東西幅(cm)	南北幅(cm)	柱式	玄關	備考
1号掘立柱建物 (3×?)	—	N約6°W	—	—	—	—	—	Ⅳ期 無柱あり。2号溝に切られる。
2号溝 2×(1)	東西?	N 16° S	—	—	998 13.2	側柱式?	—	日-山期 無柱あり。2号溝に切られる。
3号溝 2×2	東西	N 14° E	370	12.3	310 10.3	側柱式?	11.47	日-山期 2号溝に切られる。
4号溝 4×4	西北	N約11° S	350	18.3	610 20.5	側柱式	33.5	側柱式 無柱あり。2号溝に切られる。

5号斜立柱	3×4	東西	N約13°E	750	25	370	19	鋼鉄式	42.7	I期	内丸山、内丸山、内丸山、内丸山、内丸山	
6	x	3×4	南北	N約3°E	420	14	600	6.6	x	23.2	国境	
7	x	3×3	東西	N約4°E	580	19.3	430	14.3	x	24.9	一期	
8	x	3×3	東西	N約7°E	600	20	470	15.6	x	28.2	田原	
9	x	3×5	南北	12度西北	600	20	540	18	x	32.4	田原	
10	x	3×3	—	N約6°E	560	18	540	18	x	29.1	田原	
11	x	2×2	東西	N約7°E	—	—	340	11.3	—	—	B期	
12	x	2×2	東西	N約1°E	320	11	450	15	鋼鉄式	14.9	1期	
13	x	2×2	南北	N約3°E	364	17.1	390	13	x	14.2	x?	
14	x	2×2	東西	N約9°E	300	10	276	9.2	x	8.3	x?	
15	x	2×2	—	N約2°E(西)	510	10.3	234	7.8	x	7.2	x?	
16	x	2×2	南北	N約6°E	(260+111.6)	570	19	—	—	—	II期	
17	x	2×(1+3)	—	N約4°W	510	17	360	12	x	18.4	II期	
18	x	3×3	—	N約5°E	600	20	510	17	x	30.5	IV期	
19	x	2×4	南北	N約7°W	700	23.3	582	19.4	x	40.7	II-III期	
20	x	3×4	—	N約8°W	800	16.6	592	19.7	x	29.6	IV期	
21	x	2×2	東西	N約3°E(西)	(220+11.3)	274	7.8	x	11.9	II-III期		
22	x	2×3	x	南北	(240+11.3)	342	11.8	380	11.2	x	18.6	IV期
23	x	2×2	南北	N約12°E(西)	340	11.3	325	8.5	x	34.5	IV期	
24	x	2×2	東西	N約4°E	—	—	250	8.3	—	—	II期	
25	x	2×2	南北	N約6°E	172	3.7	160	5.1	鋼鉄式	2.7	1期	

() は概定

第23表 I・II区戸跡一覧表

戸名	旧名	位	直営	保証	保証	保証	保証	保証	保証	保証	保証
1号井戸	1号井戸	A.7	麻糬	220	100以上	E	日-一期	1号溝に切られる	—	—	—
2	x	2号井戸	A.7	97	—	B	日-二期	6号斜立柱	1号溝に切られる	—	—
3	x	1号井戸	B.6	140	—	C	日-III期	4号井戸を切る	—	—	—
4	x	2号井戸	B.6	187	—	C.1	日-二期	3号井戸、5号井戸に切られる	—	—	—
5	x	3号井戸	B.6	195	172	D	日-一期	丘-堆積	1号路跡上、8号斜立柱建物に切られる	—	—
6	x	1号土壠	A.5	200	99.6(23.2)	E	I期	9号溝に切られる	—	—	—
7	x	1号井戸	B.5	190	160(16.4)	E	I期	9号溝に切られる	—	—	—
8	x	2号井戸	A.4	105	164	A	日期	12号溝、54号土壠に切られる	—	—	—
9	x	1号井戸	H.4	264	208	D	日-一期	12号溝に切られる。発達窓の横	—	—	—
10	x	2号井戸	D.4	142	250	D	I期	12号溝、13号溝に切られる。常北森、東北森	—	—	—
11	x	2号井戸	A.3	206	213.1±	D?	—	13号溝を切る。	—	—	—
12	x	1号井戸	A.3	271	274	D	日期	木材、木製器具出、東北森、湖戸灰胎	—	—	—
13	x	1号土壠	B.2	260	276	C	II-一期	7号土壠、14号井戸に切られる	—	—	—
14	x	1号土壠	A.3	218	226	B	II-III期	9号土壠に切られる。8号土壠を切る	—	—	—
15	x	1号井戸	A.2	45	45(20.3)	B	I-II期	15号溝に切られる	—	—	—
16	x	1号井戸	A.1	122	78(14.8)	D	I-二期	16号溝に切られる	—	—	—
17	x	1号井戸	B.1	107.7±	不明	—	—	—	—	—	—
18	x	1号井戸	H.8	115	118	B	I期	21号溝、18号土壠を切る	—	—	—
19	x	1号井戸	E.7	315	280	C	V期	22号溝を切る。	—	—	—
20	x	2号井戸	F.6	176	226	C	II号	22号溝を切る。曹津網	—	—	—
21	x	1号井戸	F.7	213	230(23.2)	D	IV期	22号井戸、21号溝を切る。脚底井構半軒、志野向付	—	—	—
22	x	2号井戸	F.6	176	178(20.3)	D?	—	21号井戸に切られ。23号溝を切る。紫垂櫻林	—	—	—
23	x	2号土壠	K.6	143	143(14.3)	B	I期	33号土壠に切られ。39号土壠を切る	—	—	—
24	x	2号土壠	F.5	98	80以上	B	—	2号住居を認める	—	—	—
25	x	3号土壠	K.3	96	61(13.0)	B	I期前半	11号溝に切られる	—	—	—
26	x	1号井戸	E.2	147	112.0±	Cord	II期後半	16号溝、29号溝を切る	—	—	—
27	x	1号井戸	F.2	105	105(8.9)	C?	—	31号溝を切る	—	—	—
28	x	1号土壠	F.2	121	99(10.1)	A	平安時代	50号土壠を切る	—	—	—

() は概定

第24表 I・II区土壠一覧表

1号名	別名	位置	段数	直営	保証	保証	保証	保証	保証	保証	保証
1号土壠	1号土壠	1-B-E	3044.5±	1912.5	94	I期	C1	I	5号井戸、3号溝に切られ。3号土壠を切る	—	—
2	x	2号土壠	H-E	236	115	4F	1期	C2	I	5号井戸、1号土壠に切られる	—
3	x	10号井戸	B.5	49	—	—	C3	I	5号井戸、1号土壠に切られる。4号溝を切る。東北森	—	—
4	x	25号井戸	A.2	—	—	—	C4	I	2号井戸、6号溝に切られる。4号溝を切る。	—	—
5	x	1号土壠	A.4	180	80	24	直営	D	II	10号井戸に切られる	—

4-1	2号	E-2	95	85	23	平安-1期	A	B	13号茎葉切込	
7	1号	E-2	31	115	50	1期	X	X	平安-1期、13号茎葉切込	
8	1号	E-2	207	97	16	1期	A	X	1号茎葉切込	
9	< 4号	E-2	123	98	63	1期-2期	W	X	1号茎葉切込	
10	1号	E-2	--	--	--	中茎	A-E-B	平安	1号茎葉切込	
11	2号	E-2	100	90	--	中茎	A	X	1号茎葉切込	
12	1号	E-2	228	91	14	中茎	C	平安	1号茎葉切込	
13	3号	E-2	62	213.3	21	中茎	C	X	96.2号E-2山3、15号茎、16号茎切込	
14	1号	E-2	258	110	48	中茎	A-E-D	平安	1号茎葉切込	
15	3号	E-2	--	--	--	早茎?	H	X	1号茎葉切込	
16	3号	E-2	128	96	22	早茎?	H	X	1号茎葉切込	
17	< 1号	E-1	59	96	22	早茎?	H	X	1号茎葉切込	
18	< 1号	E-1	176(196)	96	60	早茎?	H	X	1号茎葉切込	
19	3号	E-2	77	65	26	中茎	H	X	1号茎葉切込	
20	< 2号	E-2	793.1J	57	12	中茎	H	X	1号茎葉切込	
21	< 1号	E-2	102	72	36	平安	H	X	1号茎葉切込	
22	1号	E-2	200	70	20	1期	D	X	21号茎葉切込	
23	2号	E-2	101	112	60(20)	1期	A	X	22号茎葉切込	
24	2号	E-2	176(139)	70(21)	60(21)	1期	C	X	22号茎葉切込	
25	< 4号	E-2	65	58	30	1期	C	X	22号茎葉切込	
26	1号	E-2	193	111	68	平安	C	X	21号茎葉切込	
27	2号	E-2	--	--	--	1期	A	X	21号茎葉切込	
28	< 4号	E-2	101	110	30	1期	C	X	22号茎葉切込	
29	< 1号	E-2	73	9	--	1期	C	X	22号茎葉切込	
30	< 5号	F-2	635.7	50	14	平安-1期	C	H	21号茎葉切込	
31	< 1号	F-2	89	84	48	平安	C	H	21号茎葉切込	
32	< 4号	F-2	400	37	20	1期	C	H	21号茎葉切込	
33	< 1号	F-2	354	172	30	1期	H	H	24号茎葉切込	
34	< 5号	F-2	350	47	58	1期	H	H	21号茎葉切込	
35	1号	E-2	103	74	32	1期	C	I	36号茎葉切込	
36	5号	E-2	76	86	41	1期	A	I	37号茎葉切込	
37	< 4号	E-2	82	87	20	1期	C	I	38号茎葉切込	
38	< 4号	E-2	185.5E	82	28	1期	C	I	37号土壌、38号土壤はこれら	
39	< 7号	E-2	206.219	111	21	1期	C	I	38号土壌、39号糞便はこれら	
40	< 4号	F-2	25	53	30	平安	H	I	38号土壌、39号糞便はこれら	
41	< 3号	F-2	170	85	14	1期	C	I	3号糞便、10号糞便にこれら	
42	< 1号	F-2	93	115	40	1期	C	I	26号糞便、30号糞便はこれら	
43	< 1号	F-2	116.1	71	23.3	1期	D?	H?	25号糞便、33号糞便はこれら	
44	< 2号	F-2	304	68	--	平安	D?	H?	33号糞便はこれら	
45	1号	E-4	45	21	29	1期	A-E-D	I?	26号糞便はこれら	
46	< 2号	E-4	67	93	51	1期	H	I	29号糞便切込	
47	< 1号	E-4	34	12	15	1期	H	I	糞便の可燃性あり、11号糞便にこれら	
48	< 2号	E-4	123	23	115	平安-1期	A-E-D	I	29号糞便にこれら	
49	< 1号	E-2	155.6	21	48	平安	A-E-D	I	11号糞便、30号糞便にこれら	
50	< 2号	E-2	108	98	24	平安-1期	C	I	1号糞便切込	
51	< 2号	E-2	85	74	16	平安	A	I	1号糞便切込	
52	< 1号	E-2	54	57	99	27	平安	D?	I	29号糞便にこれら

第25章 田区遺構一覽表

井戸名	測定地	深さ	タイプ	緯度	経度	参考
1 上 1024(標準) 下 664(標準)		110以上	B?	不明	Eトレス	深谷
2 上 1121(標準)		130以上	C?	￥緯 前半	?	唐津、肥前、筑後灘体、相馬?、上野貝
3 不明		170以上	C or D?	￥緯 後半	?	筑後灘、佐伯、切込? (千手川)
4 上 1327 下 941(標準)		115以上	C?	￥緯	?	筑後灘 (向付)
5 上 1123 下 1021(標準)		70以上	C or D?	￥緯 前半	?	肥前灘 (豐) 梶手
6 上 180 下 164		180以上	C?	?	?	
7 不明		当 初 不 明	?	￥緯 初期	?	相馬? 唐津、上野貝、筑込?、伊万里、唐津、筑後灘、加賀灘 (金云母)
8 J. 140 上 80(標準)		126以上	C?	￥緯	?	筑後 (稻)、本島
9 上 182 下 132		105以上	C	新期	?	古御賀、唐津、筑前
10 不明		90以上	不 明	不 明	?	

備 考			
品名	御 游き	時 節	
1	E-155 下 124	34 80	梅雨 ⁷
2	不明	80	日~日 晴 ⁸
3	56 42	34 80	無動聲算、内訌と外傷との関連
4	129 66	88	無動以前

第V章 考 察

I. 平安時代の土器について

(1) 土器の分類

本遺跡の平安時代に属する遺物は種類が豊富である。すなわち、土師器（壺・坏・高台坏・皿・耳皿・台付鉢）、須恵器（壺・壺・坏）、灰釉陶器（瓶・碗）、綠釉陶器（碗）、常滑鉢・瀬美鉢がある。このうち土師器には、いわゆる「赤焼土器」を含めて分類している。これは「上新田遺跡」における考察にしたがって分類し、土師器の類型分類で区別して扱っている。

土師器

壺 1類 ロクロ調整の認められないもの（極めて数は少ない）

- a. 器面調整に刷毛目が施されたもの。
- b. 器面調整は内外面ともにミガキが、内面はさらに黒色処理が施されたもの。

2類 ロクロ調整の認められるもの

- a1. ロクロ調整後、外面にヘラケズリが施された長胴形のもの。
- a2. a1と同様であるが、体部が球形状を呈するもの。
口径・高さともに、約20cm前後に集中し、その比率はほぼ1:1となり、極めて規格性に富んでいる。
- b. ロクロ調整後、外面はヘラケズリ、内面はミガキ・黒色処理が施されたもの（いわゆる内黒焼）。
長胴形のものはないようで、口径・高さの比率がほぼ1:1のものであろう。
- c1. いわゆる「赤焼土器」と考えられるもので、口縁部付近の破片のみで、全体の器形は定かではないが、おそらく長胴形になると考えられる。
- c2. いわゆる「赤焼土器」と考えられるもので、ロクロ調整が施される小型のもの。再調整は認められない。

坏：今回の調査では、すべて回転糸切り・無調整の坏で構成されている。

1類 ロクロ調整後、内面にミガキ・黒色処理が施されたもの。

- a. 体部が内窓ぎみに立ち上がるもの。
口径は13~17cmと比較的バラエティーに富む
- b. 体部が内窓ぎみに立ち上がり、口唇部付近がわずかに外反するもの（端反り口縁）。

- c. 体部がほぼ外傾しながら立ち上がるもの。
- aと同様、口径は13~16cmと比較的バラエティーに富む
- 本類にはロクロ調整後、体部外面に縦位のナデが認められるものが2点ある。
- このナデは調整として施されたものか判断できない。
- 2類 ロクロ調整後、内面にミガキが施されるが、黒色処理が認められないもの。
- 従来は、黒色処理が再加熱等で消失したと理解される傾向があった。しかし、それは個々の土器において証明される必要がある。本遺跡では、それを証明できるものが少ないため、独立して分類している。
- 器形のわかるものは、内彫ぎみに立ち上がり、口径13~14cmのものがある。
- 3類 ロクロ調整後、何ら調整の加えられないもの。
- 本類はいわゆる「赤焼土器」に属するものを主体とするが、須恵器と区別のつけにくいものも含めている。
- 底部破片が多く、全体を知り得るものは少ない。
- 口径は14cm前後、底径は4~6cmまであり、5cm代のものが多い。高さは3~4cm代のものがある。
- 4類 内外面ともにミガキ・黒色処理が施されているもの。
- 本類はロクロ調整後に、ミガキが施されているものと思われる。いずれも細片で図示し得るものはない。
- ここでは、本類を黒色土器と呼ぶことにする。

- 高台坏1類 坏部は調整後、内面ミガキ・黒色処理が施され、その後に、粘土貼り付けによる高台をもつもの。
- 本類は高台の形態にバラエティーがあり、また、高台の高さにも高低の差があるが、検討するほどの量的保障がないため、細分しなかった。
- 高台径も、およそ6~9cmと差が大きい。
- 2類 坏4類と同様のものであるが、これに高台がつくもの（黒色土器）。
- 本類は、細片で図示し得るものはなく、量も極めて少ない。
- Ⅲ 高さが3cm以下のもので、口径・高さの比率がおよそ1:4のもの。
- 本類には、図示できない破片が多く、また中世の土師質土器皿との区別がつけにくい。確実に平安時代に属すると考えられるものは、極めて少ない。本類は、いわゆる「赤焼土器に属するものが大半を占める。
- 図示し得るものは、わずか2点で、赤焼土器に属するもので口唇部付近が大きく外反

するものと、ロクロを使用せず手捏ねによるものがある。

耳皿 「赤焼土器」に属すると考えられる耳皿が1点ある。

台付鉢 「赤焼土器」属すると考えられるが、破片のみで全体を知り得るものがない。

陶器 平安時代に属する陶器には、灰釉・綠釉・渥美・常滑がある。これらはいずれも破片で量が少なく、全体を知り得るものはない。

渥美・常滑の製品は、ほぼ12世紀後半頃のものと考えられるが、中世の遺物の項で扱かうことにする。

〔灰釉陶器〕

碗や瓶の破片が出土しているが、その特徴を十分に理解できない。これらは平安時代後半の美濃・東海系の製品と考えられる。

〔綠釉陶器〕

碗の底部が1点のみである。

(2) 平安時代の遺構と土器群の様相

土器・陶器の特徴

本遺跡においては、おそらく中世以後の遺構群によって、若しく攪乱を受けている。したがって、細片が多く十分に土器を把握できないものが多い。このような状況下で、幸いにも21号土壙と1号住居跡貯蔵穴の出土土器は、極めて一括性が強い資料である。今回の調査では極めてバラエティーに富む遺物が出土しており、特に灰釉・綠釉も出土しているのだが、ほとんどこの時代の遺構に伴出しない感じがある。

土師器

〔謎〕 1a類・1b類とした謎は、いずれも一点ずつで、その特徴を十分に理解できないが、1b類は2b類との関連性をもつものと理解したい。なお、1a類はこの時代の遺構出土のものはない。2a₁類は口唇部の成形は手抜きのためか、かなり簡略化されている。この類型の土器は図化できたものは1点だけである。不明な点が多い。2a₂類はあまり類例のしられていない謎であろう。この類型を仮りに「今泉型」と理解すれば、およそ口径と高さの比率が等しく、ロクロ調整後

ヘラケズリを施すものである。この表は、体部の丸味が強く、器厚が薄い特徴をもち、規格性が強い。これに類似する例に、多賀城跡SE674井戸跡出土例があり、白鳥氏の分類によれば(白鳥良一: 1980)、F群上器(11~12世紀)に属する。また、仙台市安久東遺跡(上岐山武: 1980)第2号住居跡出土例に、本遺跡のものよりやや長胴の傾向があるが類似しているものがある。

この第2号住居跡は、灰釉陶器の年代から11世紀と理解されている。十分な比較検討を行っていないが、この「今泉型」表の分布は、現在仙台平野周辺にみられる。ここでは11世紀頃を想定しておきたい。2b類は、名取市清水遺跡(丹羽・小野寺・他: 1981)第ⅣA群に属する第89号住居例や色麻町上新田遺跡(小井川和大: 1981)第1・第8号住居跡などに類似が認められる。いずれも回転糸切り後に再調整が施される土師器环と共に伴っている。本遺跡では18号・21号土塙をみると回転糸切り無調整の土師器环と共に伴している。したがって、先の2遺跡よりはやや後出のものと考えられよう。清水遺跡例は平安時代前半と考えられている。2c₁類は赤褐色系の色調を呈する表で、口縁部が長く長胴形になるものである。「赤焼上器」の範囲に属するものと理解した。いずれも破片で出土数は少ない。南小泉遺跡(結城慎一: 1982)1号溝、多賀城跡(宮城県多賀城跡調査研究会: 1980)SD1221-B大溝第4層出土例などが、これに属するものであろう。2c₂類は「赤焼土器」の小型の表である。本遺跡では、2c₁類を含めて最も多く出土している。しかし、図示できるものは極めて少ない。

(坏) 1類はその特徴から3種類に細分した。特に1b類としたものは、時代が下がるにしたがって増加する傾向がある。本遺跡では十分にその傾向を指摘することができないが、先述の安久東遺跡第2号住居跡出土上器などは特に顕著である。口唇部の外反する坏は、坏3類としたものにも存在する。この問題については、すでに小笠原好彦氏によってこの種の坏あるいは皿は「灰釉陶器および緑釉陶器との関連によって生じたものとみるべきである」(小笠原好彦: 1976)と指摘されている。この指摘は頗る妥当すべきで、今後は灰釉陶器などの集落内における所有形態や、土師器环・皿類の比較が必要であると考える。2類は從来出土例も少なく、あまり問題にされなかった土師器环である。この類型の坏は内面にミガキが施されるが、黒色処理が施されない特徴に加えて、本遺跡ではおよそ赤褐色系の色調を呈している。この坏類の特徴を十分に把握できないが、いわゆる内黒坏と赤焼坏の調整技法の混亂あるいは簡略化と理解しておきたい。4類も細片ばかりで、その特徴を十分に把握できない。坏と高台付坏が出土しているが、皿は出土していないようである。

(皿) 皿は出土数が少ない。ロクロを使用するものと手捏ねがある。また、中世の上質土器皿と区別のつかないものが存在するが、およそ平安時代のものは砂粒を多く含む傾向がある。

これらは、いずれも平安時代後半から末期にかけてのものである。

須恵器

須恵器は出土量が少なく、細片がほとんどである。したがって、各器種別の特徴は不明な点が多い。ただし、甕は青黒色系の色調を呈し、十分に環元焼成されたものである。これに対し、壺は灰白色を呈するものばかりで、黒底のつくものも存在する。長頸甕は両色調を呈するものが存在する。こうした器種毎の色調の差をどう理解したらよいか問題のあるところである。器種毎に焼成窯が異なるのか、器種毎に異なる窯から供給されたものか、あるいは壺を赤焼土器の範囲に包括した方がよいのか決めがたい。

陶器

陶器には、灰釉・綠釉・涙美がある。灰釉陶器には、碗・瓶・水瓶がある。碗は10世紀後半の美濃の製品で年代が理解できるものでは最も古い。最も新しいものとしては、12世紀初めと考えられる常滑の水瓶がある。その他に瓶類の胴部破片があるが、須恵器と区別のつかないものや、鎌倉時代以後に属する可能性のあるものが存在し、明確ではない。これらは合計28点出土しているが、胎土の特徴等から3個体以上あるものと考えられる。前述の美濃の碗の内面には一部縦位沈線が認められ、陰刻花文碗(第37図3)かと考えられる。

綠釉陶器は、わずか碗1点である。明確な年代は不明であるが、およそ平安時代中期以後のものであろう。涙美の鉢は2号住居跡より出土したもので、12世紀のものである。このような事例はまず初めてのことであろう。

以上、土器・陶器の特徴と問題点を述べてきたが、高台付壺・台付鉢については特徴を認めず、ここではふれなかった。

造構の重複関係

平安時代の造構重複関係は以下のようになる。

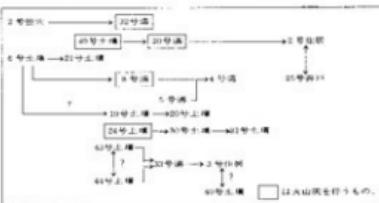
主な造構は次頁の重複図式が成り立つ。したがって、灰白色土を伴う造構を壺として、大きく3時期に分けることができる。この灰白色土は、多賀城跡や仙台市内のこの時期の遺跡などで確認されており、庄司貞雄・山田一郎尚氏によって降下火山灰であることが明らかにされた(庄司・山田:1979)。また、火山灰の降下年代は、およそ10世紀前半と考えられている(白鳥:1980)。さて、本遺跡の灰白色土は、後述することなく庄司・山田尚氏の分析によって、県内に分布する他の火山灰と同一起源の火山灰であることが判明している。

第26表 主要遺構出土土器共伴關係

	土器部 環				上器部 積				頂部				その他の			
	1a	1b	2a1	2a2	2b	2c1	2c2	3a	3b	3c	4	5	6	7	8	9
10号土壙								1								
18号土壙		1							2			1	1			
21号土壙			3	1				1	1							
49号土壙									2			4				
35号用器										1		4				
1号施設																
2号施設			3		1	1	1	2	1?	2			2			
3号施設											3			1	1	
4号施設											1			1	1	1
5号施設											1					
6号施設											1					
24号酒		1?		3		1?					1	3	1			
25号酒								1				1				
30号酒								2			1	1	1			
32号酒								3	1		1					
35号酒								2		2	1					
38号酒											2			1		

まとめ

本遺跡の土師器壺には、底部切り離し後に再調整が施されるものがほとんどないことや、他の土器の特徴、そして遺構の重複関係から、およそ火山灰降下直前から半安時代末期まで展開された集落跡と理解される。遺構の重複



関係から 3 時間に、さらに遺物の特徴を加えると、以下のように変遷したと考えられる。

今期 水山脈降下以前で水山脈を構わない時期（2号窓穴、6号・18号・21号上槽）

時期 水山灰降下以前で埋土に水山灰を埋う時期（8号・30号・33号溝 49号土壤）

C期 永山町降下以後で平安末期以前の時期（1号・3号住居跡・4号溝）

D期（含白城I期前半） 未上そ平宏末期（?是侏尾迹 25是共日迹）

主顎器類は以下のように変遷したものと考えられる

A期：癥：1a類，2a類；2b類：好

B期 3例 2a類(?)、2b類、2c類 1例 1a類、1b類(?)、2類

C期：細胞分裂期；M期：有絲分裂期；G₁期：DNA合成前期；G₂期：DNA合成后期。

D期 四 液體鉆 壓縮水漿

この他の類型や高台付枕、台付鉢、そして須恵器については、出土数が少なく十分に検討できない。柱型壺については、本遺跡では只期以後に出現するようである。

A期はおよそ9世紀末～10世紀初頭、B期はおよそ10世紀前半、C期は10世紀後半～11世紀、D期はほぼ12世紀に相当するものと考えられる。この年代観はなお十分な検討が必要であり、今後の課題としておきたい。いずれにしても、ほぼ平安時代を通して展開された集落の様相を知ることことができた。また、引き結んで周期的でいく庄内の比較をなすものであろう。集落の構造

については他の機会を待ちたい。

2. 今泉城跡出土の陶磁器について

本遺跡から出土した陶磁器類は、平安時代のものも含めると768点である。I・II区では、平安時代の灰釉陶器30点（美濃1点）、縁釉1点、I期以後は渥美26点、常滑134点、瀬戸52点、県内産無釉陶器258点（東北窯及び類似品210点、白針を含むもの45点、金雲母を含むもの3点）、产地不明無釉陶器55点、IV期以後は美濃33点（志野10点、風志野2点、志野織部9点、黄瀬戸11点、御深井釉1点）、常滑2点、瀬戸（灰釉）1点、戸長里？1点、備前？5点、唐津12点、不明施釉陶器36点、肥前（磁器）35点、切込（磁器）2点である。中国製品は41点で、その内訳は青磁30点、白磁4点、天目1点、染付6点である。III区では、およそIV期以後のもので、陶器35点、磁器9点である。その内訳は唐津5点、相馬20点、上野目3点、肥前磁器6点、切込2点、不明8点（1点は磁器）である。このうち相馬と上野目の区別のつきにくいものがあるが、可能性の強い方に流入して集計した。

ここでは、I・II区のI～V期の出土品について概観してみたい。

I・II区の日本製品と中国製品の出土比率は、I期以前のものとIII区の出土品を除いた場合、それぞれ、94.1%と5.9%となる。この比率は東北地方の日本海側と大きく異なる。日本海側では中国製品が日本製品の2倍近い値を示している（佐々木達夫：1981）。I・II区の出土品693点で、日本製品の内訳（I～V期）は、渥美約3.8%、常滑約19.6%、瀬戸約7.6%、県内産無釉陶器37.2%、美濃約4.8%、唐津約1.7%、備前（？）0.7%、肥前磁器約5.1%、切込約0.3%、中国製品約5.9%、不明無釉陶器約8%、不明施釉陶器約5.2%である（第120図）。

次に陶磁器類の変遷についてみることにする（第121図）。

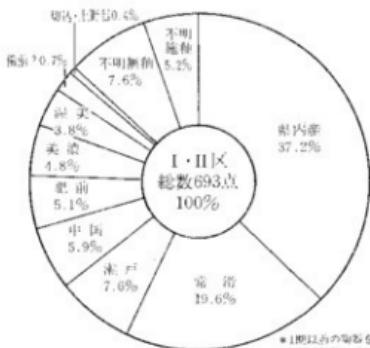
平安時代に東海地方を中心とした灰釉陶器が搬入され、平安時代末期以後は渥美・常滑・瀬戸の製品に変わらるようになるが量的には少ない。鎌倉時代中期以後（II期）には、館の成立に伴って多量の陶磁器が出土している。特に常滑や県内産の無釉陶器が多いと言えよう。これらは、武士の移住に伴う現象と考えられ、また、県内産陶器は武士（在地領主）などの需要に答えるべく地元に成立したものと考えられる。また、中国製品もおよそこの時期から搬入され始めたものであろう。この時期には、瀬戸の製品がほとんど出土しなくなる。III期には、常滑や県内産陶器が減少し、この時期の後半には再び瀬戸製品が増加していく。また、前時期に引き続き中国製品が少量存在する。III期からIV期の転換期には、ほとんど遺物は出土しなくなる。

IV期には美濃製品を主体として再び陶磁器の出土数が増加する。備前（？）はIV期の遺構に伴う伝世品であろう。備前の製品という見方が正しいとすれば、備前焼の編年（間壁忠彦：1977）と考えられ、最も流通が拡大した時期と一致する。また、この時期には、中国の染付

が出現し、青磁は著しく減少する。山形県米沢市の戸長里窯の類似品と考えられる播鉢1点がある。戸長里窯製との見方が正しいとすれば、この時期の伊達氏の動向と無関係ではないと考えられる。しかし、産地についての即断はさけておきたい。Ⅳ期終末からⅤ期にかけては、肥前磁器が搬入される。Ⅴ期には肥前とともに、相馬・切込・上野目が搬入され、およそ幕末まで続く。仙台では藩窯となつた堤焼があるが、本遺跡からは出土していない。また、明治以後の出土品も現在ない。

3. 県内産無釉陶器について

まず、中世の無釉陶器については、その特徴から県内産の製品が多いであろうとの予測を立て、直接生産地において標本を採集し、あるいは東北歴史資料館の



- *上期以下の割合を除く。
- *[†]有形無形は△長さ、及む南北地方差と想定されたるものも含む。

第120図 陶磁器類产地別組成

第二部分

所蔵品の観察を行った。また、同資料館の藤沼邦彦氏の御好意で、直接資料を借用することができた。改めてお礼申し上げたい。観察し得たものは、東北窯、品ノ浦窯、多高田窯、熊狩窯、水沼窯であり、これらの資料のうち、特に胎土に着目し観察を行った。その結果、県内産陶器の特徴は、おおむね下記のとおりである。

1. 東北窯

1. 胎土の色調は、鉄分（？）が多いためか、他の県内産の製品に比較した場合、青黒いものが多い。
 2. 胎土中に白色砂礫（長石？）が目立つ。この特徴は、現在まで確認されている他の県内窯製品ないものであり、東北窯製品の判定に最も有効であると考えられる。ただし、東北窯製品のすべてにある特徴ではない。
 3. 器面調整は大半がナデであるが、刷毛目のものも少量ある。
 4. あめ状に溶けた白色（半透明）の吹き出し、褐色の吹き出しが認められるものが存在するが、後者は少ない。
 5. 耐火度が強いためか、灰被りで自然化しているものが少ない。（高温焼成の場合は、胎土の長石、鉄などが表面に吹き出て溶けている。4と共に通す）
 6. 明黄褐色の焼成の甘い製品は、胎土がサンドウィッチ状に、色調の差を生じるものがある。
2. 伊豆沼窯群（品ノ浦・熊狩）
1. 耐火度が低いため、胎土の表面に光沢をもちやすく灰被りやすい。
 2. 胎土は東北窯と比較した場合、砂っぽく、石英等が溶けず残るものが目立つ。
 3. 品ノ浦の製品には、割れ口が^開開面を見せるものがある。

3. 多高田窯

1. 焼成のよいものは、胎土が東北窯・伊豆沼窯群に比べ白っぽく、自然釉も多いものもある。
2. 胎土が白っぽいものは、おそらく鉄分が少ないためであろう。
3. 断面を観察すると、黒色粒（鉄分？）が霜降り状を呈するものがある。
4. 伊豆沼窯群のものと同様、砂っぽい。

また、水沼窯の製品は、県北の熊狩窯や多高田窯等よりも、県南の東北窯の胎土に類似しているとの印象を受けたが、なお不明である。なお、福島県の毘沙門窯の製品等も実見する機会を得たが、十分に理解するに至らなかった。以上、現在確認されている県内を中心とする中世の窯址群の製品の特徴を観察してきたが、なお不十分であることは否めない。

ところで、これらの窯址群と本遺跡の出土品を比較した結果、東北窯の製品、あるいは類似品が最も多いことが判明した。また観察・比較の結果、新に從来知られていなかった、胎土の特徴をもつ2つのグループの存在を確認することができた。

4. [胎土に白針を含むグループ]

表題のごとく、胎土中に白色針状物質を含むことが、特徴といえる。また、表面に光沢をもつものがあり、澤美的製品のごとく細砂質で、鉄分(?)・石英などを含む。この第4グループは、出土量が少なく、器形や年代についてはなお不明な点が多い。

現在までに、焼・擂鉢の器種が判明している。年代については、II期あるいはIII期の遺構に伴って出土する比較的硬質の窯、III～VI期の遺構に伴って出土する軟質の擂鉢(焼成のものも存在する)・焼(?)があり、ほぼ遺構の年代と一致するものであろう。

生産地は不明であるが、胎土中に白色針状物質を含む特徴が手掛かりとなろう。従来、筆者が指摘してきた白色針状物質(佐藤洋: 1981)は、主に名取川中流域から下流域の遺跡において、縄文～平安の土器胎土にみられる特徴である。したがって、この第4グループの生産地は、名取川流域、あるいは仙台周辺のどこかに存在するのではないかと予想される。

5. 金雲母を多量に胎土に含むグループ

全体的に砂質で、白色粒子(長石?)を含み、特に金雲母を多量に含むことを特徴とする、第62図10に示すごとく、口縁部形態が極めて特徴的であり、出土数が少ないが、いずれもⅣ期の遺構より出土している。したがって、中世末～近世初め頃のものであろうか。生産地は全く不明である。

こうした分類を元に、生産地を各実測図中の注記表に示したが、なお東北窯の製品と思われるが判定できなかったものや、従来県内産の特徴とは異なる新たな特徴をもつもので、その特徴をグルーピングできないものも存在する。また、東北大學の芹沢長介氏に、山形県米沢市に所在する戸長里窯の製品に類似すると御教示いただいた出土品もあるが、断定するに至っていない。

ところで、従来知られている多高田窯や、伊豆沼窯址群の製品と判定できるものはないようである。逆に、東北窯の製品と考えられるものや、それに類似するものが圧倒的優位を占めている。したがって、速断はできないが、仙台周辺は、おそらく東北窯等を中心とする製品の流通圏内にあったのではなかろうか。この問題は、他の遺跡の調査を待って、さらに検討されなければならない。

年代については、県内産の無釉陶器に関する藤沼氏の指摘があり、およそ鎌倉中期から後期

といわれている。本遺跡では、これらの陶器とともに、年代の判明する遺物に常滑の製が存在する。この常滑の製品は、赤羽一郎氏の編年で、第3段階とされるものばかりである。したがって、先の藤沼氏の年代を追認する形となった。

今回は新に、従来知られていた窯の製品とは異なった2つのグループを抽出することができた。県内には、まだ未発見の窯があるものと考えられる。

また、これらの窯跡がどのような社会的背景のもとに消長したのか不明な点が多い。この点については、生産地である多高田窯は志田郡に、伊豆沼古窯は東原郡に、そして東北窯はかつての刈田郡に属し、これらの諸郡はいずれも、鎌倉後半には北条氏の所領だった可能性のあるところである（小林・大石編：1978）。また、消費地である今泉城は名取郡に属し、この名取郡も北条氏の所領である。このような共通点は、おそらく偶然ではなく、中世窯業の成立に、北条氏あるいは、北条氏と関連する地元の領主層が関与していたことを推測させる。

生産地の問題、消費地の問題、そして流通・社会的背景など、まだまだ残された課題が多い。

4. 今泉城をめぐって

今泉城を含む仙台市六郷地区は、古代の陸奥国内においては、比較的早い時期に設置された名取郡内の地域である。¹¹

統日本紀 天平神護二(766)年十二月三十日の条に

陸奥国人正六上名取公龍麻呂賜姓名取朝臣

とあり、少なくとも766年以前には名取郡が設置されていたことが理解される。しかも、最近の都山遺跡の調査によって、この遺跡が官衙跡と推定されるに至り（特に「名取」の刻線文字のあるものと、畿内系・関東系の坏類が出土している）、またその創建年代が7世紀後半まで遡りうるものと考えられる。しかし、今泉城跡の2度の調査においては7・8世紀の遺構や遺物は皆無に近い。

また、和名類聚抄に名取郡の地名として「井上」の名がみえ、これは現在の仙台市井土（井土浜）ではないかとの指摘もある。旧藩時代に見える今泉村の東側に隣接する二木村には、

□LIIII口土地名有是則□□上國ノ口□□縁丸□□□□正則ト名家リ□□□大長ニ

年空海法師ニ帰依シ灰練仏像ヲ給リ守本尊ト崇敬シ今ニ伝承所持セリ（二木家系譜）

とあり、二木家初代二木正則以来の系譜が示されている。¹²「二木家系譜」がどれほどの信憑性があるかは定かではないが、少なくとも名取川北岸の六郷地区では平安時代以後には継続的な集落が形成されたものと考えられる。本遺跡の調査結果では、それ以前にも集落が営まれた形

跡があるが極めて断続的である。

2

12世紀の末期には、源賴朝と平泉藤原氏による奥州合戦が起こり、その最初の戦いが阿津賀山の戦いである。阿津賀山は現在の福島県伊達郡にあり、ちょうど福島・宮城の県境付近で戦いが行なわれている。『吾妻鏡』文治五（1189）年八月七日の条には、

加之於苅田郡、又構城郭、名取広瀬両河引大繩橋、泰衡者陣千国分原鞆橋
とあり、藤原泰衡は名取川・広瀬川に橋をつくり、鞆橋（仙台市鶴岡といわれる）に陣取っていたといわれる。また、同八月十二日には、頼朝は多賀国府に入ったとある。この時の戦いで今泉付近がどのような状況にあったかは知るすべがないが、この戦いにまきこまれていたことは想像されるところで、また、『吾妻鏡』文治五年五月二日の条には

戊子、囚人佐藤庄司、名取郡司、熊野別当は厚免を蒙りて名本所に帰ると云々
とあり、名取郡司・熊野別当が平泉側について参戦したことがある。この合戦の論功行賞で陸奥国内では、鳴西・伊沢・千葉・北条・三浦・和田などの御家人が支配者となって登場する。入間田宣夫によれば、奥羽の住人がそのまま地頭として留まったものはほとんどなく、また、例外的な場合でも、領主層はなんらかの新旧交代があったという¹²。現在の仙台市は、かつての名取郡・宮城郡に属しており、郡地頭職は転々と交替している。このうち仙台周辺には、国分胤通（千葉常胤の五男）が宮城郡国分庄（三十三郷）および名取郡に四千余貫の地（国分系図）、また結城朝光が名取郡内に所領を給与されている（白河古事考）。そして伊沢家景（のちの留守氏）が大河兼任の乱（文治六年）後、陸奥国留守職となり、宮城郡高用名地頭職が与えられた。今泉城を含む名取郡は、「最初、和田義盛に与えられたが、建保元（1213）年和田合戦の後、三浦義村に替えられ、宝治合戦によって三浦氏が滅亡すると北条時頼の所領となつた」¹³のである。鎌倉時代の中期以後には、村・郷内にも地頭職が成立していたようで、本遺跡の館の成立もこのころであろうと考えられる。とすれば、鎌倉時代の住人は村あるいは郷の地頭クラスの人間であり、本遺跡は地頭クラスの館であろうとの推論が成り立つ。

鎌倉後期には、北条氏の所領が全国にひろがり、比較的早い時期に所領となったところでは、政所（郡）→地頭代（村・郷）といった支配方式が採用された。陸奥国では、遠田・名取などでこの方式が採用されたという¹⁴。現在の名取市上余田字大徳に「政所」という地名が残っており、これはその間の事情を物語るものであろうか。ここには、元徳三（1331）年の板碑があり、また星敏跡があったと伝えている¹⁵。また、鎌倉末期には、津軽の曾我氏が名取郡土師塚郷・四郎丸郷（若四郎名・おたかせ村）の地頭を兼ねていた。

『石巻奇藤文書』には、

（地頭）
下 平光広 （花押）

司令早為陸奥國名取上師塚郷地頭代職事

右人、依歎功之賞可為彼職狀如件 以下

宝治元年七月十八日

とあり、また

曾我大郎光高重ね乙
房丸謹言上

欲早任重代相伝知行被成下安堵國宣備龜鏡

津軽平賀郡内岩橋大平賀沼村々并奥州名取郡四郎丸郷

内若四郎名等全所領彌拙合戦忠勤事（中略）

右岩橋大平賀村々者重代相伝所領知行干今無相違（中略）

次四郎丸郷内若四郎名者、今荒一廃田地、雖為數々年

畠地、光高曾祖父宝治合戦歎功所領隨一也、而當

知行干今無相違（後略）

とある。このうち、土師塚郷は現在の仙台市藤塚と考えられ、名取川北岸の河口付近に位置している。また、四郎丸郷は仙台市四郎丸付近と考えられている。いずれにしろ、名取郡内における曾我氏の所領は、名取川両岸の河口およびその周辺にあったと考えられ、隣接する今泉城と何らかの関係があったのであろう。

3

鎌倉幕府が倒れ、建武新政が始まると、新たな奥州支配が始まる。すでに後醍醐天皇は、元弘三（1333）年に北畠顕家を陸奥守に任せている。このころには、北条氏余党である北奥羽の領主層が抵抗を続け、仙台周辺の武士（留守氏・国分氏など）も顕家の軍に従って参戦している。国分氏（第六世盛胤）はこの戦いの歎功の賞として、建武三（1336）年名取郡の内、飯田・日辺・今泉を賜ったという。

建武三年正月源顕家ノ軍ニ從ヒテ各所ニ転轄シテ武功ヲ擢テ

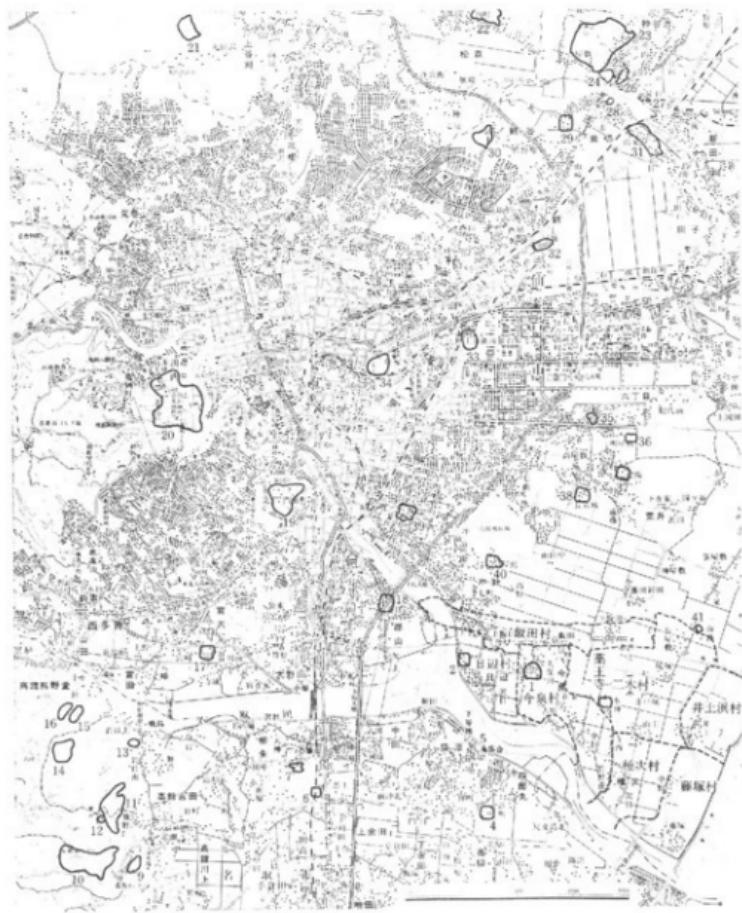
同年二月七日奥州国分莊名取郡ノ内飯田・日辺・今泉ノ邑ヲ

賜ハル（国分氏系図）

とある。したがって、逆に鎌倉時代の飯田・日辺・今泉は北条氏の所領だった可能性を考えられる。

しかし、留守氏・国分氏とも足利氏（北朝）に転じて戦うようになる。また、正平五（1350）年には、足利尊氏・直義の間に内紛があり、奥州探題の吉良貞定・畠山高國らも二派に分れて戦うことになる（岩切城合戦）。この時、国分氏は吉良方に、留守氏は畠山方にについたが、吉良方が勝利を認め、国分氏は勢力を増大させ、留守氏は没落したとされる（鈴目記録）。

また栗野氏は、もと越中国栗野庄の住人で、鎌倉時代には、伊達郡・信夫郡に所領をもって



- | | | | | | |
|--------------|----------|---------------|---------|-----------|--------------|
| 1. 今泉城跡 | 磯原文 - 江戸 | 15. 小船(古内侍)跡 | 中世 | 28. 今須道跡 | 平安 - 中世 |
| 2. 日向船跡 | 室町 | 16. 鳴鹿城跡 | 中世 | 29. 鳴鹿船跡 | 中世 |
| 3. 木曾船跡 | 中世末 | 17. 宮内御船跡 | 室町 | 30. 無聲船跡 | 中世 |
| 4. 四郎大船跡 | 鎌倉 | 18. 北日高城跡 | 室町 - 江戸 | 31. 鳥ノ耳道跡 | 古墳 - 平安 - 中世 |
| 5. 萩合郡香山堂板跡群 | 中世 | 19. 戎ヶ崎城跡 | 中世 | 32. 小城船跡 | 中世 |
| 6. 前田船跡 | 中世 | 20. 仙石城跡 | 江戸 | 33. 南ノ日城跡 | 中世 |
| 7. 安久東道跡 | 古代 - 江戸 | 21. 長命猿跡 | 集落 | 34. 国分稻荷跡 | 中世 |
| 8. 伊豆野原城跡群 | 中世 | 22. 桂森城跡 | 中世 | 35. 忠恕御船跡 | 古代 - 明治 |
| 9. 桑名郡船跡 | 中世 | 23. 高森城跡(誓願切) | 中世 | 36. 道浦御道跡 | 中世 |
| 10. 大船山跡 | 中世 | 24. 東光寺等跡 | 中世 | 37. 船井船跡 | 中世 |
| 11. 高船神社 | 中世 | 同前城跡等跡 | 中世 | 38. 長崎御船跡 | 中世 |
| 12. 野熊御所跡 | 中 - 晩世 | 25. 地藏院坂城跡 | 中世 | 39. 若林城跡 | (中), 近世 |
| 13. 猪野村跡 | 中世 | 26. 石河前道路 | 古代 - 近世 | 40. 沖野城跡 | 中世 |
| 14. 猪野大船跡 | 中世 | 27. 河口ノ渡跡群 | 中世 | 41. 同前御道跡 | 中 - 近世 |

第122図 中・近世遺跡分布 破綻は明治17年以前の村

いたが、栗野重直藤三郎の時に北朝について奥州名取荘（名取郡）に二千余戸を賜わり、康永二（1343）年に名取郡根岸城に移住した。のちの寛正年中（1460～66）には同郡北日城に移っている。

さて、北朝方の内紛後、南朝方が勢力をもり返し、国府周辺では再び南朝・北朝の戦いが活発に行なわれている。これらの戦いの一つに広瀬川の戦いがある。『白河文書』觀応三（1351）年十月二十九日吉良貞家状に

結城參河守朝常申恩賞事、申状一通謹令進覽候、去年宇津峯宮
伊達飛彈前司、田村庄司一族及宮城郡山村宮以下凶徒、寄一來名取
都之時、差一進代官結城又七兵衛尉井軍勢、同十一月廿二日、
於同郡広瀬川、致軍忠之冠、郎徒被庇候（後略）

とある。

ところで、この頃の国分氏の動静をみると、前述したように北朝方につき、また、北朝方の内紛時には、勝大将である吉良方に属していた。しかし、その後理由は不明であるが、国分寺郷の所領が没収され、相馬氏の所領になったという。『相馬文書』には、

陸奥國宮城郡国分寺半分二箇等諸内 國分院路守井地頭職事、為八幡介景朝跡之替所宛行也、
早守先例可致沙汰之状如件

貞治二年七月十一日

相馬讚岐守殿

正平十（1355）年以降、奥州は足利方の支配下となり元中九（1392）年には南北朝は統一される。

今泉城跡より検出された15号溝や31号溝は、およそその時期ころのもので、14世紀終末～15世紀前半（Ⅲ期後半）の所産と考えられる。つまり、11号・21号溝がほぼその機能を果たさなくなったり段階で、新に構築された溝であり、館を区画する掘と考えられる。この15号・31号溝は、Ⅳ期には埋没が完了している。

4

仙台周辺では、南北朝時代に一時没落した留守氏が本領を安堵され、また、国分氏も一部所領を没収されたが、両者とも再び勢力を拡大していった。室町時代には、伊達氏の勢力圏がしだいに北上し、戦国期には仙台周辺も伊達氏の勢力下に入っている。国分氏は応仁・文明頃伊達氏と戦い、文明四（1472）年に和睦している。また、留守氏は、すでに永和三（1377）年に伊達氏と一揆契約（伊達家文書）を結び、文明のころには伊達氏から入嗣して臣従化している。そして、栗野氏も文明年中には、伊達成宗と戦い服属している。しかし、これらの諸領主は、伊達氏の臣下になったのではなく、独立領主として地位を保っており、しだいに大名化してい

くのである。戦国末期には、先の栗野氏は国分氏の家臣となっている（国分文書）。ところで、今泉村にはいくつかの寺社が存在しているが、このうち宝泉寺は大永三（1523）年に、円乗寺は元亀二（1571）年に開山したという。宝泉寺は『封内風土記』によれば、

今泉邑（中略）如意山寶泉寺 曹洞宗 本都宮沢宗禪寺末寺伝云、後柏原帝大永三年宗禪寺第四世海印舜和尚開山（後略）

とある。この中の宗禪寺は、名取郡根岸村宮沢（現仙台市根岸町）にあり、文安（1444）年に開山といわれ、ちょうど栗野氏が初めて名取郡に所領を賜った翌年になる。すなわち、前述したごとく、康永二（1443）年に名取郡に所領をもらい、根岸城（現茂ヶ崎城）に移住し、寛正年中に同郡北目城に移っている。のちの元和二（1616）年に宗禪寺は、北目城主栗野大膳大夫國重の菩提寺となっている。したがって、戦国期以来、宗禪寺は栗野氏との関連が極めて強いと考えられよう。この宗禪寺の末寺である宝泉寺も、栗野氏と何らかの関連があったという推測が可能であろう。

国分氏の領地は、三十三ヶ村あったといわれるが、今泉村などの名取川下流域北岸の六郷地区の村は含まれていない。したがって、国分氏が六郷周辺の領地を家臣である栗野氏に与えたもの、とは考えられないであろうか。『封内風土記』によれば、

（前略）茂ヶ崎 在根岸邑 古墓也 名跡志日 後小松帝 応永中
栗野大膳^{姓不}者 領名取郡北方三十三郷 居此城

とあり、また、「仙台領古城書立之覚」茂ヶ崎城の項には、

右城主栗野大膳但名取郡北方三十三郷之築頭之由申伝候

とある。名取郡北方三十三郷には、今泉村など六郷の村々が含まれている。また、今泉城の南東には小在家という地名があり、中世における今泉城の在家の名残りであろう。この小在家には、現在でも栗野姓を名のる人が多い。

一方、「仙台領古城書立之覚」にある今泉城主須田玄蕃は、上述のことなどを考慮すれば、栗野氏あるいは国分氏の家臣であると考えられよう。特に前者の可能性が強い。この点については、すでに飯沼氏も、須田玄蕃は「国分氏或は其の一門の家中ではなかったか」と指摘している^四。今泉城は、先の『仙台領古城書立之覚』『仙台領古城書上』のいずれにも栗野氏関係の城の中に記載されていることから、栗野氏との関連が強いと考えられ、このことは前述の指摘の傍證となろう。

『仙台領古城書立之覚』には、

今泉村
今泉城 東西二十六間 南北四十五間
右城主須田玄蕃ト申者百年前迄居住仕候 西ニ掘形有リ

四重之土手有り

とある。『仙台領古城書立之覚』は享保十三(1728)年の写本であり、その原本は、延宝五(1677)年に幕府に提出した『仙台領古城書上』と考えられる。したがって、「百年前迄」の記述は1577年となり、須田玄蕃はおよそ天正年間以前に住んでいたことになろう。また、先の宝泉寺(あるいは円乗寺)は須田氏の氏寺的性格をもつものと考えられないだろうか。

天正年間の国分氏の動向をみると、伊達晴宗の五男彦九郎政重(國分第十七世盛重)が家督をついでいる。こののち、国分氏には政重をめぐって、家中騒動が起きている(伊達家治家記録・伊達文書)。また、国分系図には、

慶長元年三月、故アリテ國分城ヲ没落ス

とあり、このころには国分氏は滅亡し、その一部は伊達政宗の家臣になっている。

一方、栗野氏の動向をみると、大崎合戦(天正十六年、伊達政宗と宮城県北の大崎地方を領地としていた大崎氏との戦い)に参戦し、大任を果している。したがって、領地も安堵されたものと考えられる。

天正十七~十八(1589~90)年には、伊達政宗の所領は宮城県の南半に及んでいる⁽⁹⁾。豊臣秀吉の小田原征伐後に安堵された所領の中に、名取・宮城の名がみえる。今回の調査では、1号溝(館に伴う掘と考えられる)など今泉城Ⅳ期の遺構群が、およそこの時期に相当する。この1号溝からは、数多くの桃山~江戸初期の陶磁器が出土している。須田玄蕃が天正年間ころまで住んでいたとすれば、1号溝が江戸初期ころまで機能していたと考えられることから、須田玄蕃以後もこの館に武士が住んでいたことが推測される。しかし、須田氏なのか、栗野氏あるいは伊達氏の家臣なのか、にわかに決めがたい。

5

伊達政宗は、慶長六(1601)年に仙台城を普請し、北目城から移っている。その後、仙台藩では六郷地区などで盛んに新田開発が行なわれている。飯沼氏によれば⁽¹⁰⁾、慶長年間頃に郷六(現在の宮城町郷六)の住人である佐藤出雲家友が二木村三本塚に堀農し、開発を行ったという(佐藤家系譜)。また、『政宗君治家記引證記』慶長十六(1611)年十月二十八日の条には、

一、十月廿八日己刻、大地裏、津波入候ニ御分領中ニ而人千七百

八十三人、牛馬八十五疋死ト也

とあり、この時、名取川の河口付近の村は相当な被害にあっている。元和(1615~)頃には、福島県の相馬地方の相沢・大友・柴崎等の武士が荒所開発に当たったという。現在の今泉城跡及びその周辺には、大友・遠藤姓の人が多く、六郷地区内では現在でも相沢・大友姓が多くみられるのも、先の理由によるためであろう。一方、今泉城跡の北東に位置する下飯田は、寛永二(1625)年に留守家水沢城主宗利が小野新右衛門常勝に開墾を命じ、また、その後水沢に居住

する家臣42名を飯田村・今泉村等に帰農させている。災害の復旧や仙台藩の財政の建直しのために、荒所や新田開発が盛んに行われ、おそらく17世紀前半ころ（元和～寛永）までには、純農村に変貌したものと考えられる（一応17世紀前半以後をV期として扱っている）。ところで、前述した下飯田にある薬王寺から板碑が発見され、この碑は正安元（1299）年の「胎藏界大日如来」をあらわしたものであるという。飯沼氏によれば、下飯田は藩政期の新田部落であり、この板碑は元来今泉村にあったと考えられると指摘している^①。そうであるならば、この板碑は今泉城II期に成立した館跡と関連するものであろう。

さて、江戸時代になると、名取川や木曳堀を利用した水運交通が盛んに利用されるようになり、名取川の水量の豊富さと相まって、馬渡船・半駄船・高瀬船が航行した。現在の仙台市四郎丸落合、日辻駄賃場は船着場だといわれている。このことは、中世にも水運が利用されていたことを推測させる。今泉城跡出土の多数の陶磁器類等は、こうした水運を利用してたらされたものであろうか。

なお文末ではあるが、県立図書館吉岡一男氏に協力いただき、また文献では特に、大石直正他『中世奥羽の世界』、仙台市史3・8、飯沼勇義『六郷部落の歴史的考察(1)・(2)』に負うところが大である。改めて感謝申し上げたい。

注

- (1)江戸時代以前は、日辻村・飯田村・今泉村・二木村・藤塚村等に分かれていたが、明治に入って統合され六郷村となった。現在では仙台市の一部となっている。
- (2)飯沼勇義 1900 「六郷部落の歴史的考察(1)」「宮城県の歴史と地理」 国書刊行
- (3) 同 上
- (4)入間田宣夫 1978 「鎌倉幕府と奥羽両国」『中世奥羽の世界』 P78 東京大学出版会
- (5) 同 上
- (6) 同 上
- (7)名取市 『名取市史』
- (8)飯沼勇義 1900 「六郷部落の歴史的考察(2)」「宮城県の歴史と地理」
- (9)小林清治 1959 『伊達政宗』人物叢書28 吉川弘文館
- (10)(2)と同じ
- (11)(8)と同じ

5. 遺跡の構成 一まとめにかえて一

今泉城跡は、縄文時代後期から江戸時代という極めて長期にわたる複合遺跡である。したが

って「今泉城」という遺跡名は適当ではない。しかし、この遺跡を最も特徴づけるものに中世の城館跡の存在があり、すでに古く仙台市の遺跡台帳にも「今泉城跡」として登録されている。ここではそれにしたがった。

縄文時代 さて、本遺跡の成立は縄文時代に遡る。この遺跡は、仙台市内における縄文時代の遺跡では、現在最も標高の低い遺跡であり、当該期の集落の領域に組み込まれたものと判断される。この傾向は続く晩期においても同様である。

弥生時代 その後、弥生時代中期（樹形圓式期）には、再び本遺跡にも生活の営みが開始された。しかし、遺構は前回の調査において、土壙・ピット各1基が確認されている程度で、なお不明な点が多い。おそらく、生活の中心は他に存在するのであろう。

古墳時代 古墳時代前半には遠見塚古墳を頂点として、仙台平野にも1つの地域社会が形成され、顕在化するとみてよいであろう。本遺跡では、塩釜式期～南小泉式期の遺物が出土し、前回の調査では、堅穴遺構や土壙が検出されている。この時期の居住者たちは、前述の地域社会の構成員として位置付けられよう。しかし、集落の構造については不明である。

平安時代（第123図） その後、平安時代の初め頃までは、空白期間が続くようである。律令社会となって、新田の開発も活発になったと考えられる。本遺跡の北方には仙台東効条里跡があり、最近の調査では山口遺跡・地下鉄関係の各遺跡（現在整理中）では、水田跡の存在が確認されている。本遺跡の北西側にも、地形図等を観察すると条里跡の痕跡らしきものを見ることができる。集落の構造がしだいに明確になるのはこの時代からである。西側（昭和54年度調査）で、2×4間の建物跡が、東側では堅穴住居跡が分布し、その間に数条の溝がある。継続的に集落が営まれるのは、しだいに律令体制に矛盾が生じ、崩壊しつつあった中期以後であろう。陸奥国では、10世紀後半から11世紀後半にかけて、武士たちが下向し、郡司や国衛の在庁官人などとなって上着したといわれ、伊具十郎平永衡や亘理權太夫藤原経清などが該当するという（大石直正：1978）。こうした武士たちがしだいに私領を拡大してくる。この時期には、灰釉陶器（陰刻花文碗？）や綠釉陶器が所有されており、前述の武士や在地領主層の居住地の性格をもつ集落の可能性が考えられる。また、3号住居跡としたものは、小鍛冶工房の可能性もあり、工房だとすれば、この時期の農民が鍛冶工房を所有できたのかどうかも問題となるところであろう。遺跡の性格については今後の類例を待ちたい。

I期（123図） 平安時代末期（D期）から、館の成立以前（鎌倉時代中期）までをI期とした。すなわち、12世紀から13世紀中頃となろう。この時期には2号住居跡や25号井戸跡が含まれる前半（12世紀）と8号・9号溝、6号・7号・10号井戸跡などや、また、I区の南側に分布する建物跡群（12～15号）などで構成される後半（13世紀中頃以前）に大別できよう。

遺物としては、渥美の鉢・甕、常滑の水瓶・鉢・三筋壺、瀬戸灰釉瓶子等がある。これらの

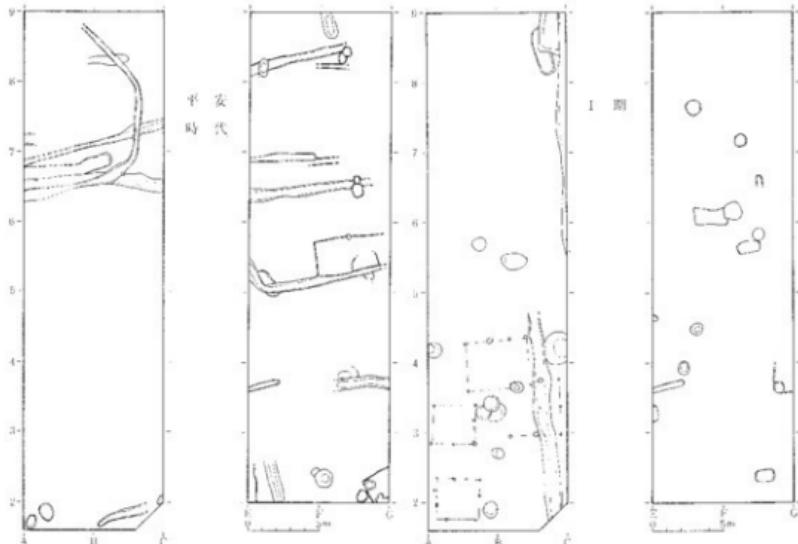
遺物は、この時期の一般的な所有形態を示すものなのか、比較資料がなく判断できない。今後の調査事例を待つほかはないが、前時期と同様の性格をもつ集落が、継続的に営まれたものと理解したい。また、その後の城館を成立させる条件、あるいは基盤がしだいに整ったと考えてよいであろう。

II期（第124図） 11号・21号溝（堀）で区画される館の成立をもってII期の開始とした。この堀の底や最下層から常滑縞年のIII期に属する甕や、県内産の陶器が出土すること、また、I期後半の造構の中に、常滑や県内産の陶器が出土するものがあり、遅くとも鎌倉時代中期以後には成立したと考えられる。

II区では29号溝から11号溝へ改築していることから、さらに、少なくとも2時期の変遷が考えられよう。29号溝を埋め立てた後に、II区の11号溝には橋が架けられる。I区では堀の外（南）にいくつかの井戸跡が存在し、周囲の畑や水田に利用されたものであろうか。また、堀の内側（北）には、5号（A₄型）、11号等の建物跡、3号～5号井戸跡、22号・24号・26号（C₁・D型）等で構成される。

ところで、この時期には外堀が存在するのかどうか、確認されておらず不明である。前回調査した調査区の北側から堀が2条検出され、年代も今回の堀とはほぼ一致するものと思われる。

2条のうちのどちらに対応するものか不明であるが、南北の規模はおよそ22～27間と考えられ



第123図 各期の遺構変遷（I・II区）

る。現段階では、前述の規模程度の単郭の方形館と理解しておきたい。

III期（第124図） II期に引き続き11号・21号溝によって区画される城館が存続する。出土遺物や国分氏の所領となったという文献記録から、およそ南北朝時代の初頭頃に開始年代を求める。この時期には、C₂型やD₃型の建物が出現する。遺物としては木製品の出土が最も多く、物忌札や木簡、漆器梱などが注目されよう。陶器では県内産の陶器等から、後半には瀬戸の製品へと転換するようである。また、I区の堀（11号溝）から多量の礫が発見され、この時期の埋土に包含されていた。この礫が飛躍（つぶて）であるとすれば、南北朝の動乱期を象徴するかのごとくである。

さて、この時期の後半には、前述の堀がほぼ埋没を完了し、代って15号・31号溝が構築される。おそらく、新たな館が成立したのであろう。31号溝の構底より15世紀の青磁が出土している。この時期の後半の遺構は、まだ、判然としないが、9号（D₃型）・10号（D₂型）の建物跡がある。

前述の溝はIV期に埋没が完了する。

IV期（第124図） IV期は1号溝の成立をもってその開始とした。この溝は前回昭和54年度の調査では、さらに西側に伸びており、館を区画する堀と理解される。

遺構には、18号（A₃型）・20号（D₁or D₄型）建物跡や17号・18号・21号井戸跡、14号・32号土壤等がある。遺物では、美濃（黄瀬戸・志野・志野織部）、唐津、中国製染付・青磁、備前と考えられる壺（当時の伝世品か）があり、また、土師質土器皿も多い。石臼がこの時期に多いことも注目される。大豆・小豆等の出土と関連するものであろうか。IV期の繩張りがどのようなものか不明であるが、從来、外堀とされたものは、この時期のものかもしれない。江戸時代の記録によれば、東西三十六間、南北四十五間で、四重の土塁があったと記されているが、その内容は明らかではない。須田玄蕃なる人物が居住していたのはこの時期であろう。

V期（第124図） IV期の城館が消滅し、しだいに農村に変貌する時期をV期の開始とした。IV期からV期への画期は、一国一城令の施行あるいは仙台藩の荒地開発が盛んに行なわれ、大規模な検地が行なわれた元和～寛永年間と考えられる。したがって、V期の開始年代はおよそ17世紀前半と理解したい。さて、この時期の遺構はI・II区では19号井戸跡に限られる。16号建物跡も考えられるが、明らかではない。I・II区とは対称的にIII区Eトレントでは多くの井戸跡や柱穴が検出されている。また、前回の調査区の16号溝や10号井戸跡がある。



第124図 各期の造構変遷 (I・II区) (時期を特定できないものは複数の時期に示したもの)

まとめ

- 今回の調査で明らかになったのは以下のとおりである。
- すでに縄文時代から江戸時代の複合遺跡であることが知られていたが、中・近世の実体がより明確となった。
 - 中・近世の陶磁器や木製品、金属製品等の内容がより明確となり、遺構の変遷がかなり理解できるようになった。特に陶磁器では、東北地方の日本海側の事例との比較が可能となり、大きな成果となった。
 - 仙台市では始めての発見となった木簡、また東日本では例をみない中世の物忌札等貴重な遺物が検出できた。
 - 東北地方の古代から中世への展開を知る貴重な遺構や遺物の検出は、特に注目される事例となろう。

第VI章 付 章

I. 今泉城跡の木簡について

国立歴史民俗博物館 平川 南

第1号

〔是か〕

・□房の□□×

〔是か〕〔+か〕

・□房の□×

長さ (11.0cm) ×幅 (2.2cm) ×厚さ (0.3cm)

11号溝埋土下部出土。下端は欠損している。柱目材

第2号

(アカ)(ヒカ) ラ ウン ケン

・□□  急々如律令

長さ (19.6cm) ×幅 (2.7cm) 厚さ (0.2cm)

11号溝埋土下部出土。形状は、上端を山形に削り、下端も尖らせている。片面は剥離され

木簡の面を失っている。柾目材

第3号

(火) □□□□☆

・□□急々如律令

長さ (20.4cm) × 幅 (2.7cm) × 厚さ (0.3cm)

11号溝埋土下部出土。形状は第2号木簡とはほぼ同じ。柾目材

第4号

・□□☆

(梵字大日如來)

・天□□急々如律令

長さ (19.4cm) × 幅 (2.5cm) × 厚さ (0.3cm)

11号溝埋土下部出土。形状は第2号・第3号木簡とはほぼ同じ。柾目材

考察

「急々如律令」は、もともと中国で公文書の末に付された法律用語で、「急速に律令の如く」施行するように命じた言葉であったが、魏晉時代に道教が呪符として取りいれたとされている。我が國へは古代に呪句の1つとして、入ってきた。当初は陰陽道と深く結びつき、中央や地方官衙およびその周辺で専ら用いられていたが、中世に入ると、広範に普及し、民間信仰の中に根づいたのである。

頭部を山形に削り、下端を尖らせた形状と慣用の呪句「急々如律令」の存在から、第2・3・4号木簡の3点はいずれも呪符木簡と判断できる。

第2号木簡の「急々如律令」の上文の5字は□・□・ラ・ウン・ケンとされ、広く用いられる胎藏5字の真言であり、諸尊に普通する真言である。一般に七難即滅、七福即生を希う胎大日真言として各方面で用いられるという。

第3・4号木簡は五行押点と「急々如律令」の呪句がみえる。おそらく、この2点の呪符は天刑星の信仰に関するものであろうか。天刑星は諸々の疫鬼を食らい、摧邪の主として信仰を得た星で、その効験が意識されて呪符によく見られるものである。

近年、全国各地における中世の遺跡の発掘調査で、数多くの呪符木簡が出土して、注目されている。これらは古代にはじまった呪符木簡が中世に盛行したことをものがたっている。今泉

城跡の祝符木簡もこうした傾向に合致するもので、当地方における中世の信仰生活を解明する上で貴重な資料といえるのであろう。

(註) 水野正好「八萬四千六百五十四神主祝符の説り」(『古代研究』18, 1979)

2. 今泉城跡から出土した木製品の素材

尚絅女学院短期大学保育科 木村 中外

東北大学理学部附属植物園 内藤 俊彦

埋蔵文化財の発掘によって、数多くの木製品が出土されている。これらの木製品の素材に、どんな植物が利用されているかが、解明されることによって、その遺跡の周辺の植生や植物相あるいは、物資の移動経路など、その当時の生活環境について、何らかの情報提供ができるれば、今後の調査研究に役立つものと思われる。そこで、仙台市南東部の今泉城遺跡から出土した、木製品のいくつかについて、素材に利用された植物が、何んであるかを調べてみた。

調査方法

調査は、遺跡出土品の中から、第27表に示したものを選んだ。貴重な出土品の価値を損わないように、顕微鏡観察の材料として耐えうる、1cm角くらいの出土品の細片を選んで、資料とした。資料は埋没していたために、もろくなってしまい、スライシング・ミクロトームで、切片を作成できなかったので、実体顕微鏡下で、カミソリ刃を用いて、手で切片を作成した。切片は木材の横断面、放射断面および接線断面の3方向を作成し、顕微鏡下で観察をして、植物名の判定を行なった。

調査結果および考察

第27表 木製品の素材名

出土品名	遺構名	出土区	古文番号	年代	素材名	備考
杓の柄	11号溝	E-4	259	南北朝～室町初	ヒノキ	
杓の本体	11号溝	E-4	260	〃	ヒノキ	
漆器(板物)	21号溝	F-7	413	〃	ケヤキ	
漆器 梱	11号溝	E-4	409	鎌倉後半	ブナ	
漆器 梱	1号井戸	III区	405	江戸	ブナ	
漆器 板	11号溝	E-4	410	南北朝～室町初	ブナ	
漆器 板	29号溝	E-3	404	鎌倉後半	ブナ	
漆器 梱	27号井戸	F-2	411	桃山～江戸初	ブナ	
漆器 梱	11号溝	B-5	403	南北朝～室町初	ブナ	
漆器 梱	11号溝	F-4	416	〃	ケヤキ	
右孔板状木製品	11号溝	A-5	87	室町前半	ケヤキ	
漆器 梱	23号井戸	F-6	407	鎌倉前半	ケヤキ	
印下駄	2号井戸	A-7	396	鎌倉後半	クリ	

材の性質および現在の利用面から考えて、イヌブナではなくブナとした。

調査対象とした出土品は、第27表のように杓、漆器柄、漆器板物、有孔板状木製品および田下駄の5種類である。これらの5つの製品のうち、杓はヒノキで製作されており、現在利用されている材料と同じである。漆器に用いられた材料は、ブナおよびケヤキであった。この材料も現在漆器類の本地として、用いられているものである。ブナ材については、材の性質や現在の利用状況から、ブナとの判定を下した。田下駄の材料はクリであった。クリは現在、土台、杭や家具材として利用されている。特に、乾湿の変化に対して、耐性があるので、土台や杭に多く利用されており、湿気の多い水田の田下駄として、利用されていることは、興味あることである。

材料として利用されているヒノキ、ブナ、ケヤキおよびクリの4種のうち、ブナ、ケヤキおよびクリの自然分布は、宮城県内にもあるので、材料の収集については、県内からの産出は可能である。しかし、ヒノキについては、自然分布は福島県南部のいわき市以南であり、その分布も関東地方以北では、きわめて少ない(第125図)。また、ヒノキは林業上の主要樹種であり、現在宮城県内にも植栽されているが、ヒノキの植栽が宮城県内で、行なわれるようになったのは、明治以後であるという。このような状況から、杓に用いられたヒノキは、材料を中部地方以西から運搬して、宮城県内で製作したか、製品としての杓として、今泉城に持ち込んだかのいずれかであろう。

これら出土製品の材料が、明らかになってくることによって、人々の動きやその周辺の植生状況などについても、論究できるようになるものと思っている。

文献

倉田 恒：1971、原色日本
林業樹木図鑑 第1巻、44、
232



第125図 ヒノキの自然分布(倉田: 1971)

3. 今泉城跡出土の動物遺存体

東北大学文学部院生 高橋 理

今泉城跡においてはかなりの量の動物遺存体が、溝・井戸・土壙から出土している。それらは哺乳類3種・魚類4種・貝類5種に及んでおり、保存状態は貝類を除いては比較的良好である。最も多いのはニホンジカであり、ウマがそれに次ぐ。表28に遺構毎の時期別の出土状況を示した。殆どがII期及びIII期に属し、この時期に盛んに捕獲されたことが推測される。

1. 出土状況

(1) ニホンジカ

角・四肢骨が殆どで、脊椎骨は全く出土せず頭骨も前頭骨の一部が2点、下顎骨の一部が1点出土しているにすぎない。角・四肢骨には人為的な加工痕を残している例が多い。

(2) ウマ

歯(臼歯)の出土が最も多い。その他にはほぼ完全な上顎骨・肩甲骨・上腕骨・前腕骨・中手骨の一部が出土している。上顎骨についてその計測値を次に示しておく。(単位mm)

上顎骨一口蓋部長340.0 歯列長(P^2-M^2) 160.0

また中手骨に人為的な加工痕が残存していることが注目される。

(3) イノシシ

シカやウマに比較して非常に少ない。隕骨を加工したと推測される井が1点出土している。保存されることの少い寛骨(腸・坐骨)が出土しているのが注目される。

(4) 魚類・貝類

魚類遺存体について同定できたものはメバル・ウナギ・スズキ・サケ科魚類である。すべて16号溝から出土している。出土量は多くない。

貝類はイシガイ・マシジミなど淡水産貝類が大部分で、これらは溝内に生息していた可能性もある。ヒメエゾボラは鹹水産貝類である。

2. 性・死亡年齢推定

性・死亡年齢推定を行うことができる的是シカ・イノシシであるが、推定に必要な部位は少ない。以下にその結果を示す。なおシカの性・死亡年齢推定法は大泰司他(1980)による。

11号溝(II区)

II期 ニホンジカ 下顎骨:下顎高a23.1、前臼歯列長PL37.9、下顎高指数a/PL60.95よりメス。

第1前臼歯臼歯率0.38より6~6.5歳 (単位はmm)

III期 ニホンジカ 中手骨:骨端部が齶着せず消失しているため幼獣

29号溝

II期 ニホンジカ 中手骨:骨端部が齶着せず消失しているため幼獣

31号溝

Ⅲ期 イノシシ 下顎骨:伴出した犬歯の大きさよりオス。臼歯の咬耗状態より成獣。

13号溝

Ⅲ期 ニホンジカ 下顎第三大臼歯:磨滅指数7あるいは未萌芽で、1歳8ヶ月前後。

3. 加工痕

シカの骨に加工が施された例が多い。21号溝出土の角は1点は切りとった角の枝を加工しているか未成品であろうか。他の1点は落角で上半分が切りとられている。完成した角器及びその使用目的については不明である。14号井戸出土の前頭骨のように明らかに角を切り取った痕跡を残している例もある。脛骨、中手・中足骨などは骨端部に鋭い刃物でそぎ落したような痕があり、骨自体を利用したというより解体、肉・皮の採取などの際の痕とみることができる。ただし11号溝(II区)出土の脛骨は全体に敲打が加えられ、さらに両端に抉りが入り明らかに骨自体に加工をしている。イノシシの膝骨製の笄は研磨して整形したと推測される。また21号溝出土のウマの中手骨の遠位端に3ヶ所の切り込みがあるが加工目的は不明である。

4.まとめ

第28表に示したように動物遺存体はII~IV期に集中しており、この時期に盛んに捕獲されたことがわかる。この場合、狩猟の選択性ということが考えられるが2で調べたようにシカに関しては幼・成獣の別なく捕獲されたとも考えられるが資料が少ないために、これが当時の狩猟そのものを反映していると断定することは危険である。性については不明である。またシカについて、脊椎骨は全く出土せず角・四肢骨に限られ、四肢骨に残る加工痕は解体あるいは肉・皮を採取したことと推測されることから捕獲された後他の場所で解体され、必要な部分だけが遺跡内に持ち込まれたとも考えられる。角も盛んに利用されていることから、いずれにしてもシカは当時の重要な動物資源であったろう。動物資源としてはシカに匹敵すると思われるイノシシの出土は非常に少なかった。イノシシは現在東北地方には殆ど生息していないが、13世紀頃にはすでに相当少なくなっていたことも考えられる。ウマは、上顎骨の計測値からいく分小型と思われる。当時、相当価値があったと考えられるウマの中手骨に残っていた加工痕の意味については今後の類例の増加を待ちたい。

第28表 動物遺存体出土表

遺構 \ 時期	I期	II期	III期	IV期	
11号溝 (II区)	←	シカ基節骨(1)脛骨(2.0) 下顎骨(1.0)肩甲骨(0.1) → イノシシ距骨(1.0)踵骨(1.0)	シカ前頭骨(1)肩甲骨(4.0) 脛骨(1.1)踵骨(1.0) ↑ 中足骨(1)基節骨(1) イノシシ下顎骨(1.0)		

11号溝 (H区)	ウマ臼齒(1) ヒメエゾボラ(1) イシガイ(2)カラスガイ(1)	ウマ上顎骨(1)肩甲骨(0.1) ウマ前腕骨(1.0)
21号溝	シカ角(2)上腕骨(0.1)胫 胫骨(0.1) ウマ中手骨(1)	ウマ臼齒(1)ウマ中手骨(1)
29号溝	シカ肩甲骨(0.1)中手骨(1)	
31号溝		イノシシ下顎骨(1.0) 腸・坐骨(1.0)
13号溝		シカ第三大臼齒(1.0)
16号溝		メバル前上顎骨(0.1)椎骨 サケ科歯骨(1)椎骨 ウナギ椎骨スズキ椎骨
16号井戸	?	→ {ネズミ頭骨(2)肩甲骨(1.0) マジミ(1) カラスガイ(2)}
15号井戸 (A-2)	シカ大腸骨(1.0)	
14号井戸 (A-3)		シカ前頭骨一部(1)
11号井戸 (A-3)		← → ウマ臼齒(1)
13号井戸 (A-3)		← → イノシシ肺骨(1)(井)
1号井戸 (A-7)		← → シカ膝骨(0.1)
10号井戸 (B-4)	シカ上腕骨(1.0)	
1号土壙 (B-8)	ウマ上腕骨(0.1)	
33号土壙 (F-6)		ウマ臼齒(1)

註：表中の()内の数字は左右の出土数を示す。ただし数字が1つの場合は左右の区別がつかないことを表わす。

矢印はそれがのびている時期にまで属する可能性のあることを示す。

参考文献：遺跡出土ニホンジカの下顎骨による性別・年齢・死亡季節推定法 大泰司紀之

考古学と自然科学 第13号 P.P.51~73 1980

4. 今泉城遺跡の灰白色火山灰

東北大学農学部 庄子 貞雄
山田 一郎

今泉城遺跡の灰白色火山灰の分析結果を表29と表30に示した。なお、比較のため多賀城跡の泥炭中の灰白色火山灰の結果を示した。実験方法と火山ガラスの形態については山田・庄子(1980)を参照されたい。

重鉱物含量は6%と低く、その組成はシソ輝石が大半で、次いで磁鐵鉱が22%、普通輝石が8%、角閃石が7%である。

軽鉱物組成は無色火山ガラスが63%と大部分で、長石が27%である。

火山ガラスの形態はスponジ状が最も多く次いで顆粒状が多い。その他少量の纖維状と扁平状のガラスが認められる。

以上の結果は、多賀城跡の泥炭中の灰白色火山灰とはほぼ同様の結果であり、宮城県一帯に認められる灰白色火山灰と同一のものとみてさしつかえない。

山田一郎・庄子貞雄：宮城県内に分布する灰白色火山灰について、宮城県多賀城跡調査研究所
年報1979, 97~102(1980)

表29. 重鉱物組成(0.1~0.2mm、比重2.9以上、粒数%)

	シソ輝石	普通輝石	角 閃 石	磁 鐵 鉱	重鉱物含量 (重量%)
今泉城	63	8	7	22	6
多賀城	70	16	1	12	2

表30. 軽鉱物組成(0.1~0.2mm、比重2.9以下、粒数%)

	無 色 火 山 ガ ラ ス				長 石	風 化 粒
	スponジ状	纖 維 状	扁 平 状	顆 粒 状		
今泉城	36	2	1	33	27	
多賀城	69	2		17	11	1

引用文献

- 赤羽一郎 1977 「雲滑 知多島古墓群」 『世界陶磁全集3 日本中世』 PP.208~214 (小学館)
- 伊東信雄 1955 「岩切城址発見の柱穴群」 『仙台郷土研究』第6巻3号
- 』 1961 「第五章五・鉄皿」 『陸奥国分寺跡』 P.105 (河北文化事業団)
- 岩本義雄 1981 「第1章2(5) 金属製品」 『尾八幡調査報告書』 PP.78~79 (尾八幡調査委員会)
- 上田秀夫 1982 「14~16世紀の青磁碗の分類について」 『虹基陶磁研究』No.2 PP.55~70 (貿易陶磁研究会)
- 太田博太郎 1971 「新訂 国説日本住宅史」 (朝陽社)
- 小野原好基 1976 「東北における平安時代の土器についての一、二の問題」 『東北考古学の話題』 PP.407~422 (東出版 家業社)
- 小倉 健 1972 「二、論文三編」 『増補 東北の民家』 P.341 (相模書院)
- 加藤 阿部 1980 「(3)報告式道跡」 東北新幹線関係道跡調査報告書 N° 宮城県教育委員会
- 北区鎌倉学園内道跡発掘調査団 1980 「光明寺表道跡」 (北区鎌倉学園内道跡発掘調査団、東京都北区教育委員会)
- 小井川和夫 1981 「(2)上新田道跡」 『若狭源氏塚・上新田道跡』 宮城県文化財調査報告書第78号 PP.3~112
- 小泉 弘 1974 「附-7 木製品」 『青戸・萬西城址調査報告書』 萬西城址調査会 PP.89~90
- 後藤秀一 1979 「第五章五・青白・四石・唐石」 『竹下型山道跡』 PP.167~171 (七飯町教育委員会)
- 別井嗣之助 1981 「『から日木史』 P.40 (越山閣)
- 佐々木達夫 1981 「道跡出土陶器群の研究…北日本中央地盤跡を中心にして」 『金沢大学文学部論集 史學特稿』第2号 PP.1~48
- 井河良彦 1981 「図録 日本の甲冑・武具事典」 (柏書房)
- 佐藤常山編 1966 「日本の美術6 刀剣」 (宝文堂)
- 佐藤洋 1981 「第1章(3) 古墳時代の蓋罐と遺物」 『山田道跡発掘調査報告書』 仙台市文化財調査報告書第30集 PP.218~219
- 宍戸武昭 1976 「青-8 木製品」 『青戸・萬西城址調査報告書』 萬西城址調査会 P.60
- 庄子直雄・山田一郎 1980 「宮城県に分布する灰白色大山灰について」 「多賀城跡一帯と54年度発掘調査概報」 宮城県多賀城跡調査研究所年報1979 PP.97~102
- 湘南鉄道 1982 「青・鐵定及び分類 付-2」 『一ノ瀬バース開催記念文化財調査報告書II』 一戸町教育委員会 PP.311
- 白鳥島一 1980 「多賀城跡出土器の変遷」 宮城県多賀城跡調査研究所「研究記要」 第1 PP.1~38
- 芹沢長介・根岸洋・阿子島香 1981 「実験使用研究とその可能性」 (東北大学使用実験研究ナムによる研究報告 その4) 『考古学と自然科學』第14号 PP.87~87
- 仙台市教育委員会 1976 「仙台市中田安久東道跡発掘調査報告書」 仙台市文化財調査報告書第10集
- 仙台市教育委員会 1980 「今泉城跡一堀抱溝在報告書」 仙台市文化財調査報告書第24集
- 東京国立博物館 1976 「日本の武器・武具」
- 土岐山武 1980 「(1)安久東道跡」 『東北新幹線関係道跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第72集 PP.3~112
- 中沢厚 1981 「つぶて」 ものと人間の文化史44 (法政大学出版社)
- 中村たかを 1981 「日本の民具」 弘文堂 P.136~P.165
- 中村政樹編 1960 「日本の美術42 和鏡」 (宝文堂)
- 丹羽茂・小野寺祥一郎他 1981 「(1)清水道跡」 『東北新幹線関係道跡調査報告書V』 宮城県文化財調査報告書第77集 PP.3~540
- 能登志雄・中村章男 1967 「妙合」 『地形・表面地質・土じょう 地古5万分の1』 土地分類基本調査 PP.1~25 (経済企画庁)

- 林英夫 1973 「行座」 PP.33、39、261など。（吉川弘文館）
- 福島県教育委員会 1981 「福島城跡一二ノ丸土積発掘調査報告」 福島県文化財調査報告書第94集
- 森道邦雄 1977 「宮城県出土の中世陶器について」 「東北歴史資料研究紀要」第3巻PP.21~60
- 岡壁忠彦 1977 「備前」 「世界陶磁全集3 日本中世」 PP.297~304（小学館）
- 宮城県多賀城跡調査研究所 1981 「多賀城跡」 宮城県多賀城跡調査研究年報1980
- 宮本常一 1981 「絵巻物に見る日本庶民生活誌」 （中公新書）
- 三輪茂雄 1978a 「臼」 ものと人間の文化史85（法政大学出版局）
- e 1978b 「石臼探熱」 （産業技術センター）
- 村松直次郎 1973 「大工道具の歴史」 （岩波新書）
- 森耕助 1982 「14~16世紀の白磁の分類と編年」 「貿易陶磁研究」No.2 PP.47~54（貿易陶磁研究会）
- 安田丈志 1978 「仙台城周辺における後水期の地形変化・海水準変動と人類の居住」 「上栗沢遺跡 東北自動車道調査報告書」 1. 宮城県文化財調査報告書第52集 PP.517~594
- 結城信一 1982 「南小泉遺跡」 仙台市文化財調査報告書第35集
- 藤田石宣・渡辺謙二 1982 「山形県川西町 道伝遺跡 第2次重要遺跡認定調査概報」 （川西町教育委員会）

参考文献

- 秋田芳夫・谷川耀一編 1983 「日本の鉄① みちのく豪農の里 東北・北海道」 （集英社）
- 朝倉廣二・田邊洋子 1982 「暮らしの中の鉄と暮らし」 日本人の生活と文化7（ぎょうせい）
- 岩井宏實 1978 「無物の増殖」 「大阪市立博物館研究紀要」第10号 PP.1~32（大阪市立博物館）
- 大三輪能彦監修 1981 「掘り出された鍾乳」 新見戸の鍾乳洞跡と遺物展・開録』（鍾乳考古学研究所）
- 黒川直樹・前田布次校注 1974 「増訂 工芸大辞典」 東洋文庫254（平凡社）
- 瀬田鉄雄 1973 「はきもの」 ものと人間の文化史8（法政大学出版局）
- G.K.研究所・山口昌作 1978 「毛役の道具たち 国城・古所道具の歴史」 （紫田書店）
- 猪俣謙 1982 「暮らしの中の木器」 日本人の生活と文化5（ぎょうせい）
- 地学固体研究会仙台支部編 1980 「新編 仙台の地学」 （きた出版社）
- 東京国立博物館編 1978 「日本出土の中国陶磁」 （東京美術）
- 吉川庄作・竹寺紀明 1979 「やきもののデザイン3 故郷の説文解」 古美術の裏42（岩崎美術社）
- 水戸市立図書館 1979 「解説 中世官室家文書」
- 満岡忠也・他編 1980 「日本やきものの集成3 湘州・美濃・飛騨」 （平凡社）
- 〃 1981 「日本やきものの集成1 北海道・東北・関東」 （平凡社）
- 宮本馨太郎 1973 「めし・みそ・はし・わん」 民俗大典双書76（岩崎美術社）
- 〃 編 1979 「刀司録 民具の基礎知識」 （柏書房）
- 平井聖也編 1981 「日本城郭大系 別巻II」 （新人物往来社）

編集後記

仙台市の中・近世の調査・整理を本格的に行なったことは初めてのことであり、アルバイトの人々には、大変御迷惑をかけてしまった。また、多くの研究者の方々の御指導・御協力をいただいた。改めてお礼申し上げたい。ところで、担当者が浅学のため、事実誤認や強引な用途や年代の推定等々危惧するものである。読者の御批評を願って是正していただきたい。（さ）

今泉城跡全景
(昭和30年撮影)



今泉城跡近景〔II区付近〕



I区全景（南より）



II区全景（南より）



I号住居跡全景（西より）



I号住居跡貯藏穴

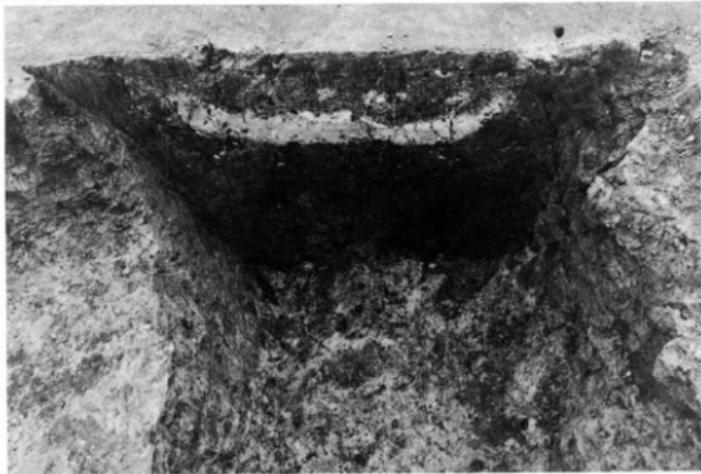


2号住居跡全景（西より）



8号溝断面（1区）

B - 6区西壁



28号井戸跡全景（南より）



図版3 桁出造構（平安時代）

11号・29号溝（掘）全景
(II区西より)



9号・11号溝（掘）全景
(I区西より)



11号溝断面 (I区東より)



11号・29号溝（掘）
(II区・南より)



29号溝断面（南より）
(E・F-3区)



15号・16号溝全景（西より）





21号溝全景（北より）



21号溝断面
(F-B区北壁)



25号・26号溝全景（西より）





1



2



3



4



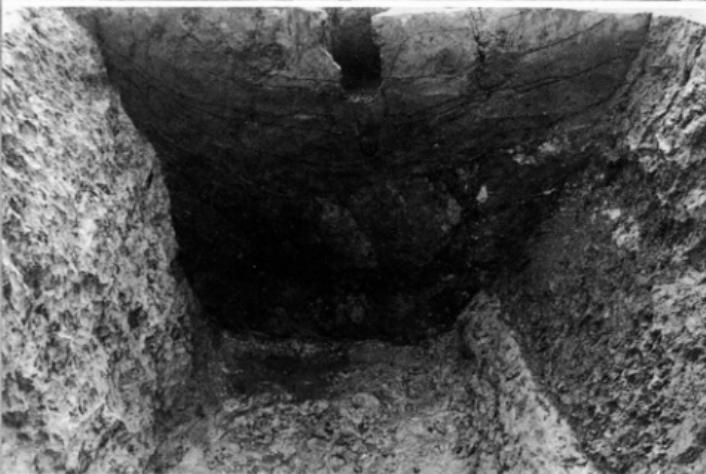
1号溝全景（北より）

31号溝全景（西より）

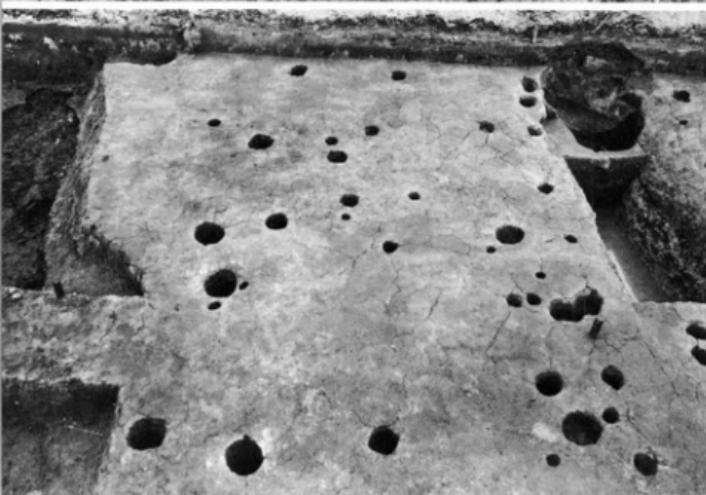


31号溝断面（東より）

F - 2 区西壁



21号・22号据立柱建物跡全景
(西より)



15号井戸跡全景（南より）



4号・5号井戸跡全景（北より）



9号井戸跡全景（北より）



12号井戸跡遺物出土状況
(県内産陶器)

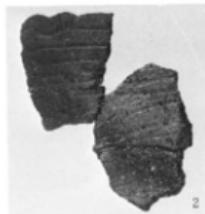
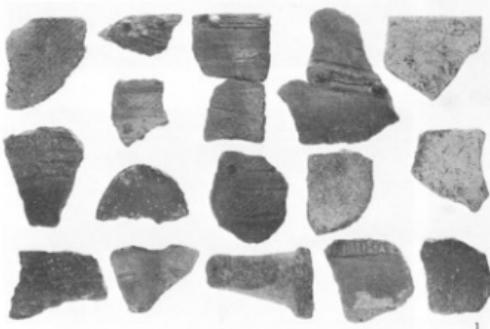


26号井戸跡全景 (東より)



7号井戸跡全景 (北より)





6



5



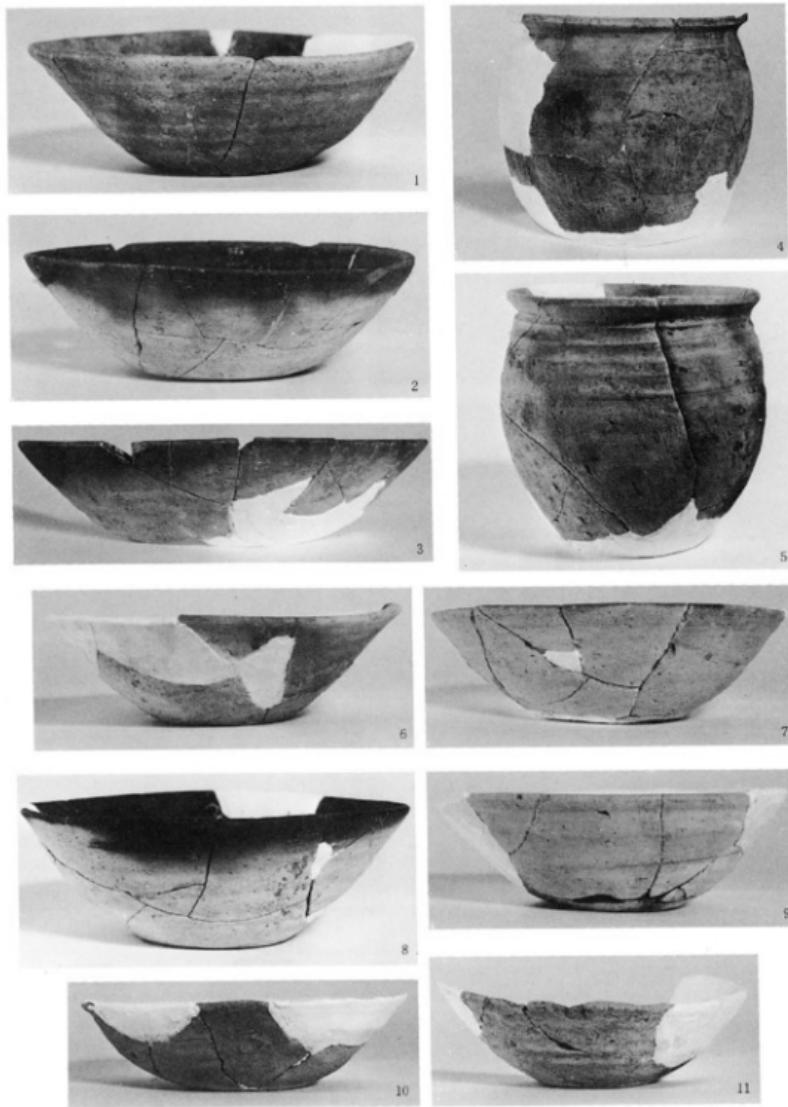
7

图版II 築文・弥生時代出土遺物

1. 築文後期、2・3. 築文晚期、4. 弥生中期壺(15号塗出土) 5. 弥生中期壺(B-3区出土) 6・7. 弥生中期

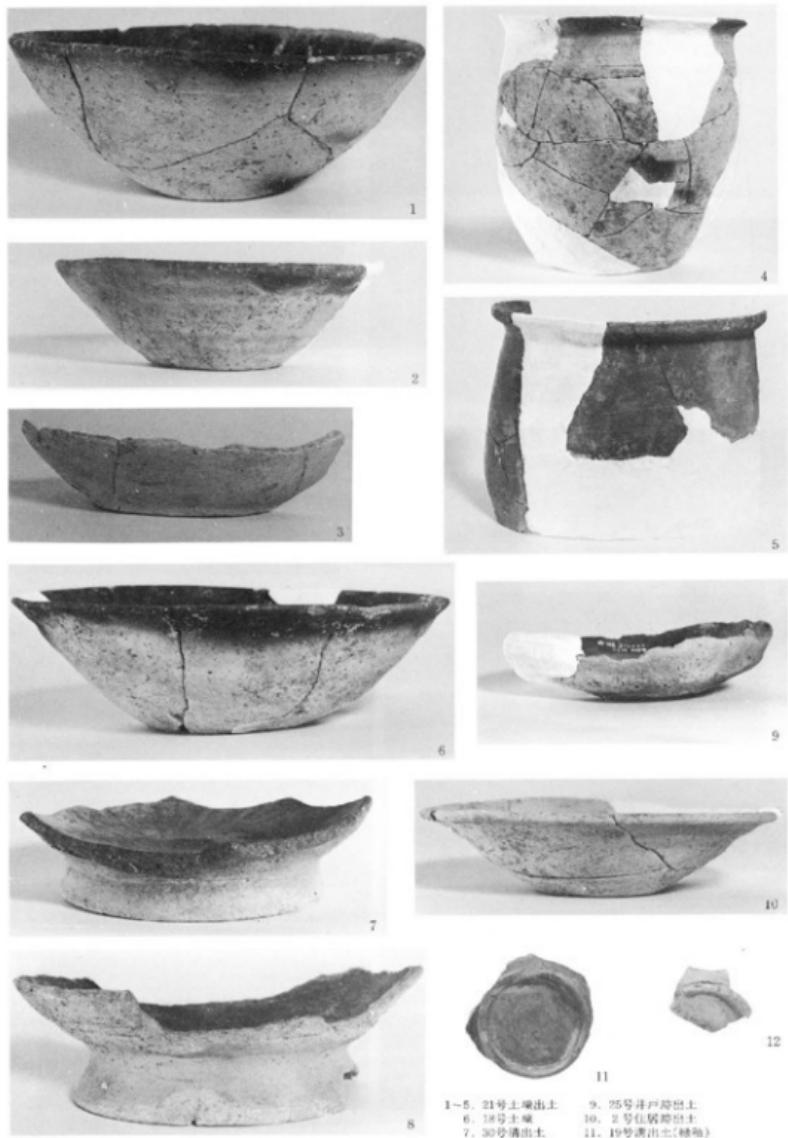


図版12 古墳時代出土遺物

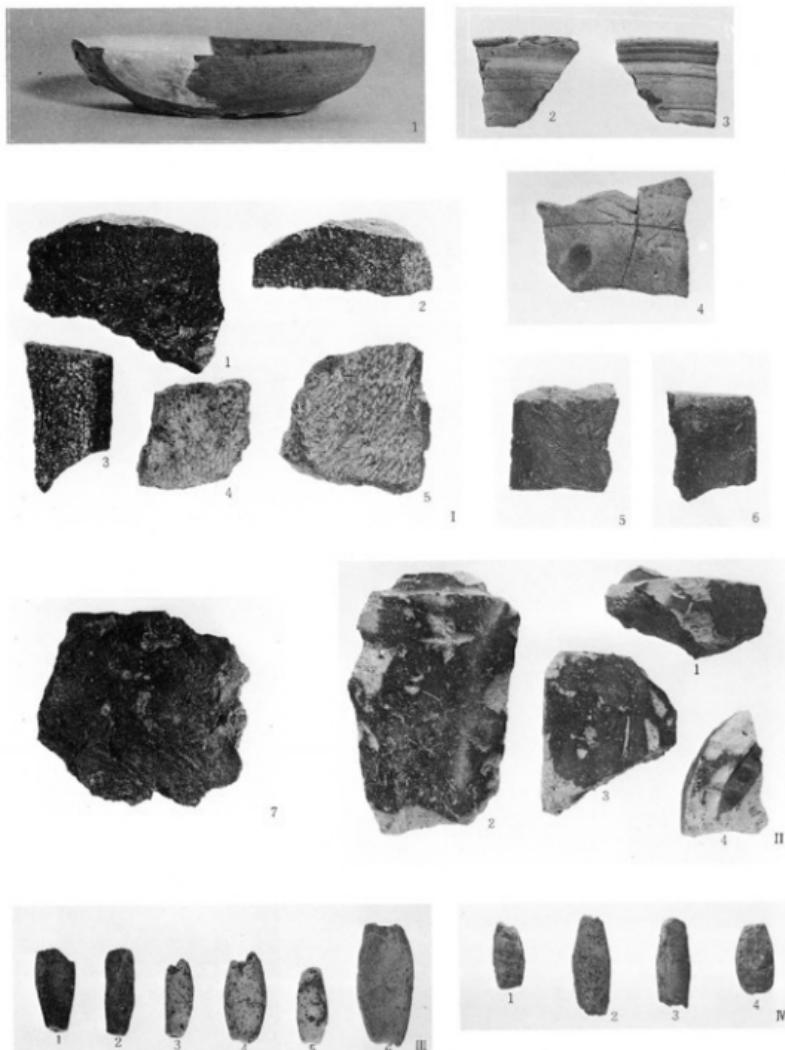


1~7. 1号住居跡出土 10. 11号窯出土
8. 49号土堆出土 11. 2層出土(F-2区)
9. 34号窯

図版13 平安時代出土遺物(土器)



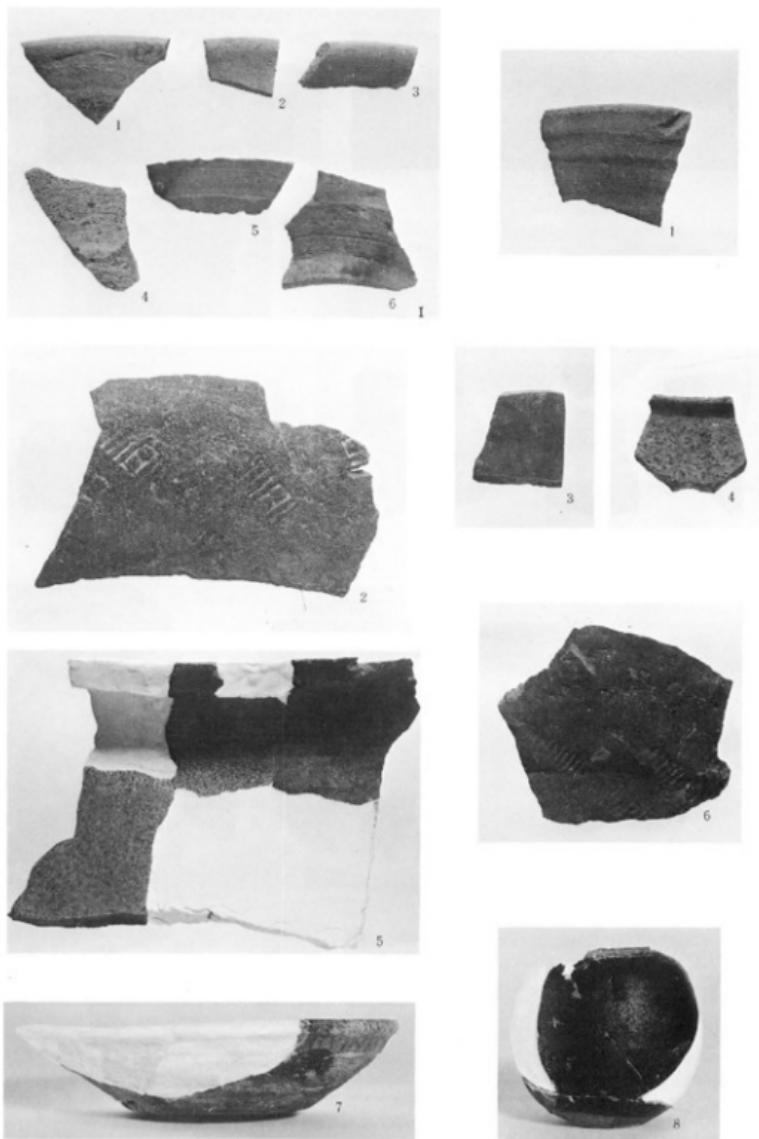
図版14 平安時代出土遺物(土器・陶器)



I. 2.21M、2.28M(最下層)、3.11M(最下層)、4. II・III層(B-2)、5.11井、6.11M(底)、7.11M
 II. {1. 1M、2.18井、3. 2M、4. 1M}
 III. {1.16M、2.33M、3. 2堅・32M、4. III層、5.11M、6.11M(最下層)}
 IV. {1. 2堅、2-3.29M、4. 28井(底)}

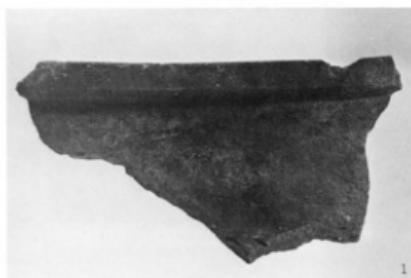
M: 滝 路
 D: 土 壤
 井: 井口跡
 堅: 堅穴遺構
 住: 住居跡

図版15 土器器、瓦、土錘

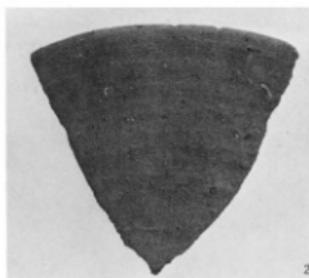


图版16 陶磁器(1)

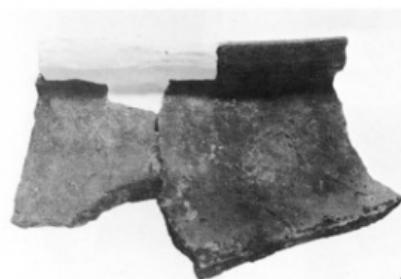
1. 11M(底) 2. 2住 3. II层(B-1) 4. 22井 5. 11M 6. 3M
1. 2住 2. 11M 3-4. 14M 5. 11M(底),13M,9M 6. 26D 7-8. 11M



1



2



3



4



5



6

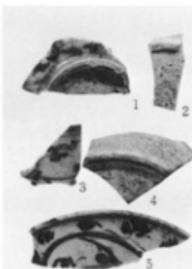
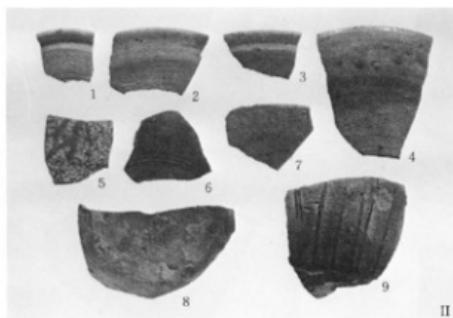
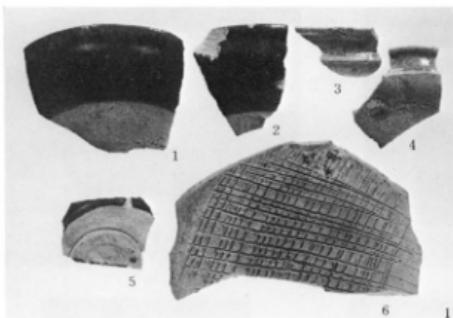


7

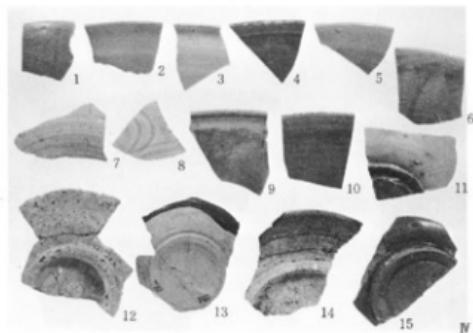


8

图版17 陶磁器(2)
1·2. 21M 3. 11M·21M 4. 表様 5. 12M·14M 6. 32D 7. 21M 8. 8井



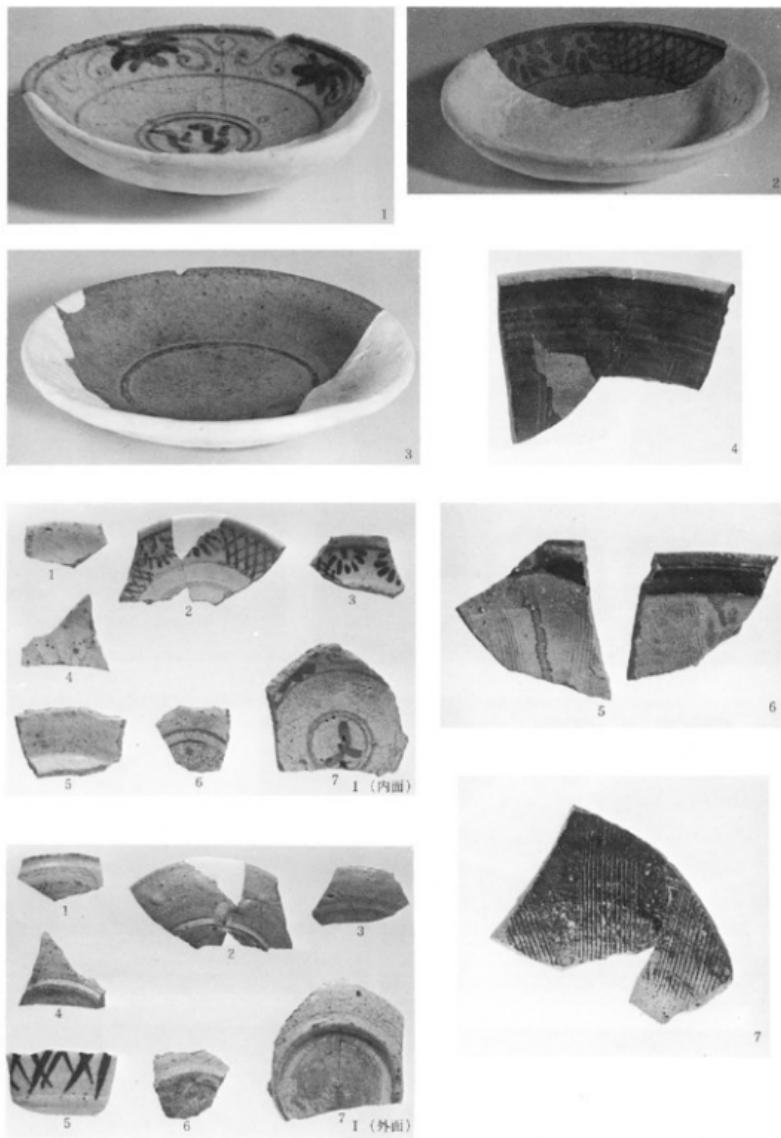
III (外面)



III (里面)

图版18 陶磁器(3)

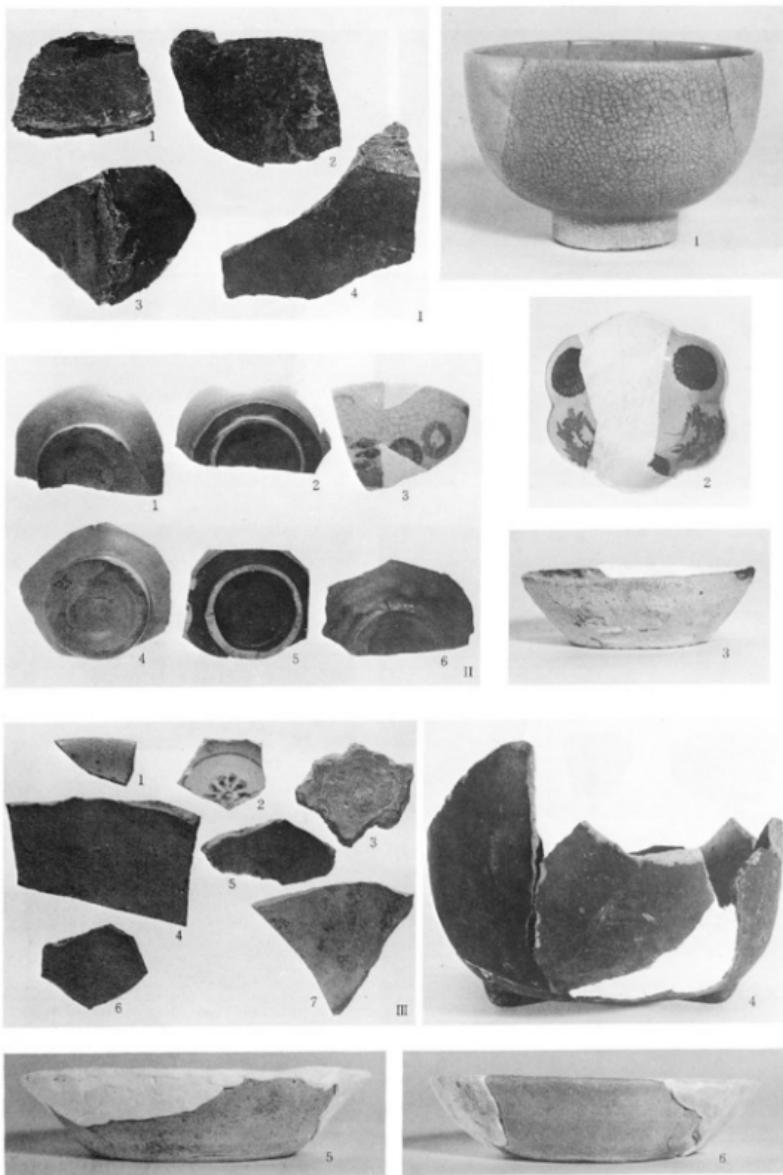
1. 2. 21M、I (1-6. 21M 2. 12井 3. 9 M 4. 12井 5. 23井 6. II层(B-1)
 7. 去探 8. II层下(B-5) 9. II层下(B-8)
 III (1. 31M 2. 表探 3. 26M 4. 1 M 5. 15M IV 1. 31M 2. 1 D 3. No15Pit(B-7) 4. 3井
 5. 22井 6. 15M 7. 14M 8. 9 11M 10. 9井(B-4) 11. III层(B-5)
 12. 1M·2M 13. II层上 14. 21井(F-7) 15. II层下(F-8))



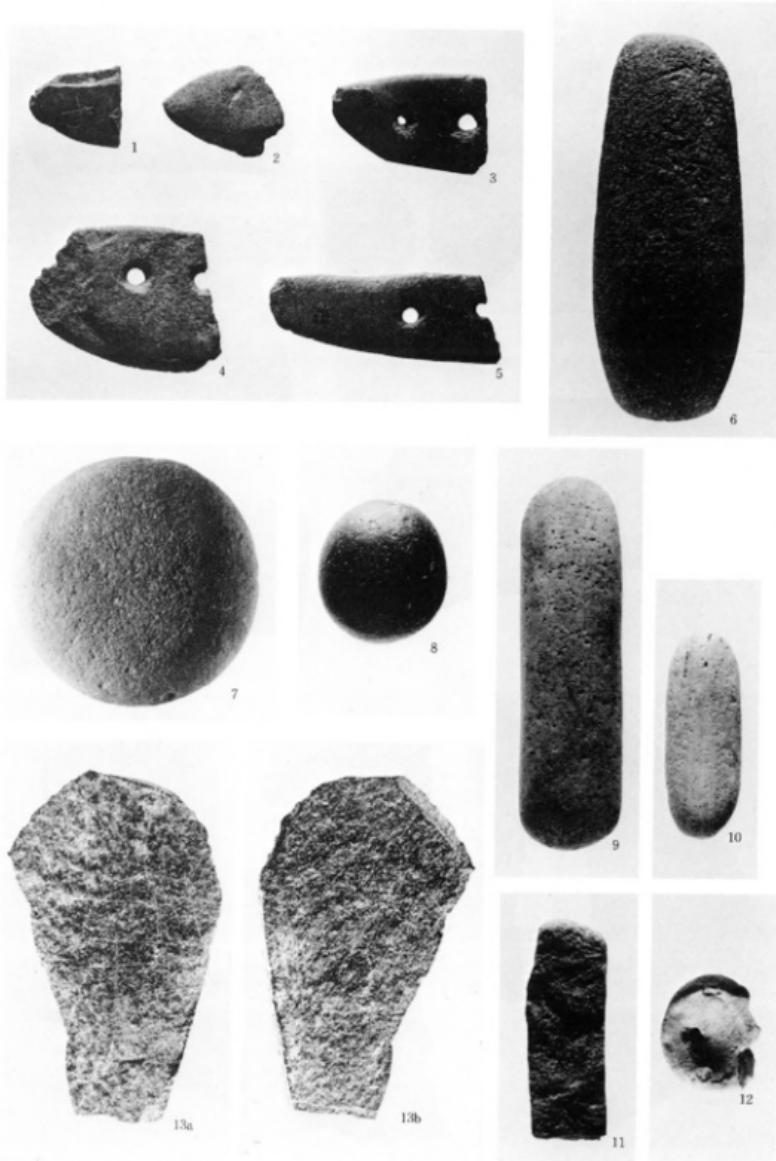
図版19 陶磁器(4)

1. 25M、2. 21井、3~7. 1M

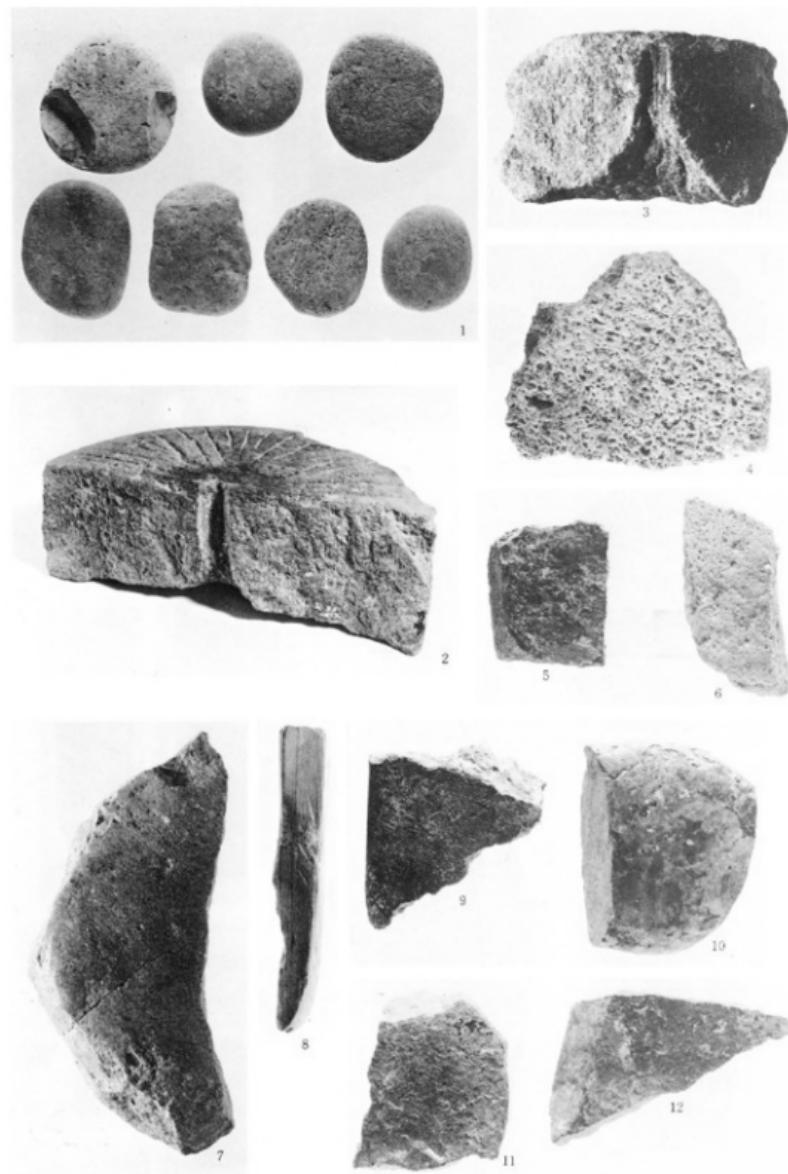
1. (I. II層(A-3)、2. 1M・15M・16M、3. II層(B-6)、4. II層(E-8)、5. 21井、6. 11井、7. 33D)



圖版20 土質質土器、陶磁器(5)
 I. 1M、II. 1M、III. (1. 26D 2. 20井 3. II層(E-3)
 4. 21井 5. II層(F-4) 6. 26D 7. II層下(B-8)) 1~6. 1M



図版21 石製品(1)
石包丁(1~5)、大型蛤刃石斧(6)、砾石器(7~12) 刻線のあるスレート(13a, b)



図版22 石製品(2)

11号溝出土器の一部(使用痕無)(1)、粉抜き臼・下臼(2・3)

大形礫石器 I類(9・10)、II類(11・12)、III類(5・6)、IV類(7)、V類(4)、使用痕有る珪化木(8)



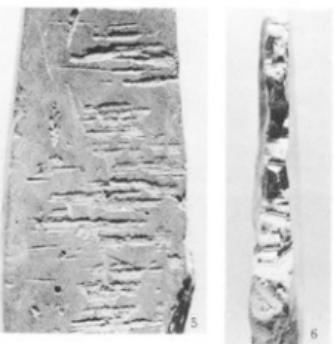
1



2



3



5

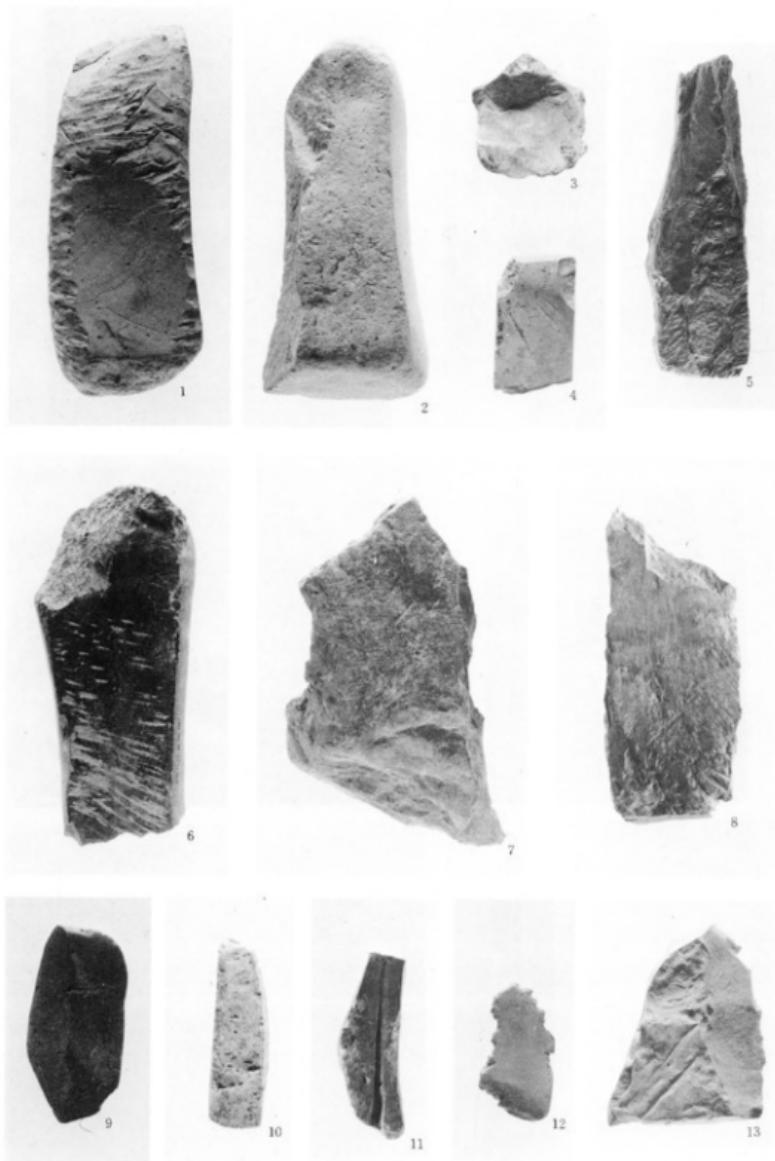


6

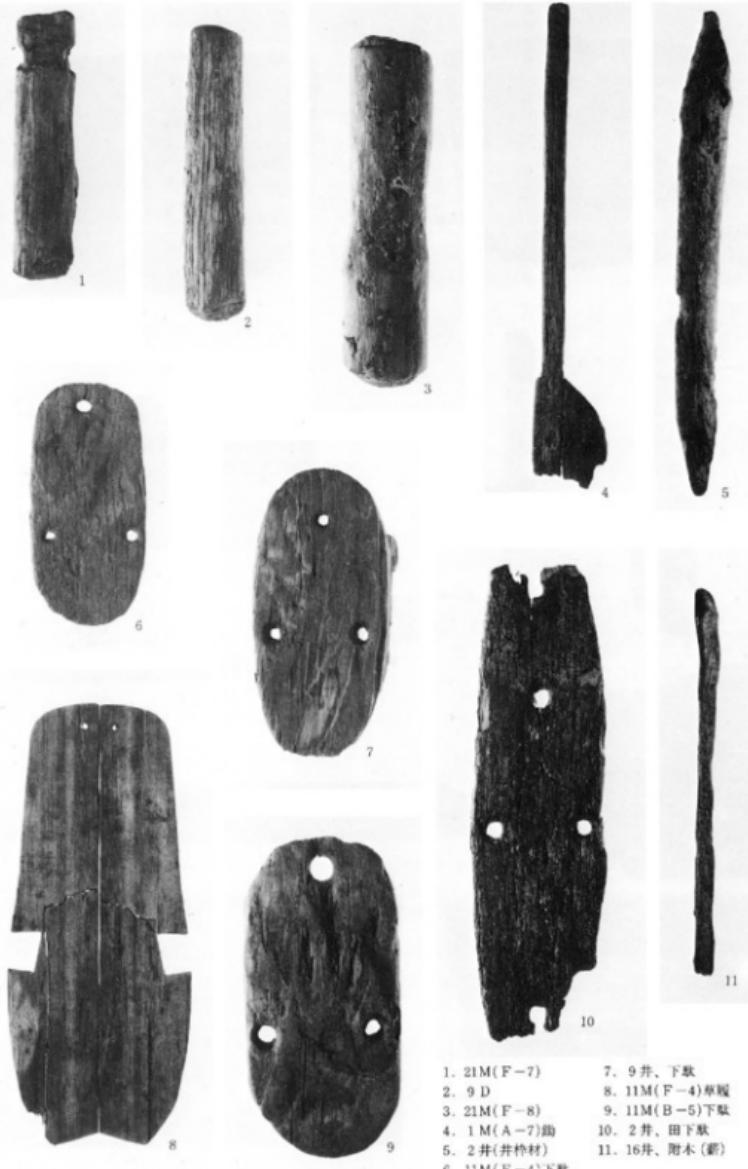


7

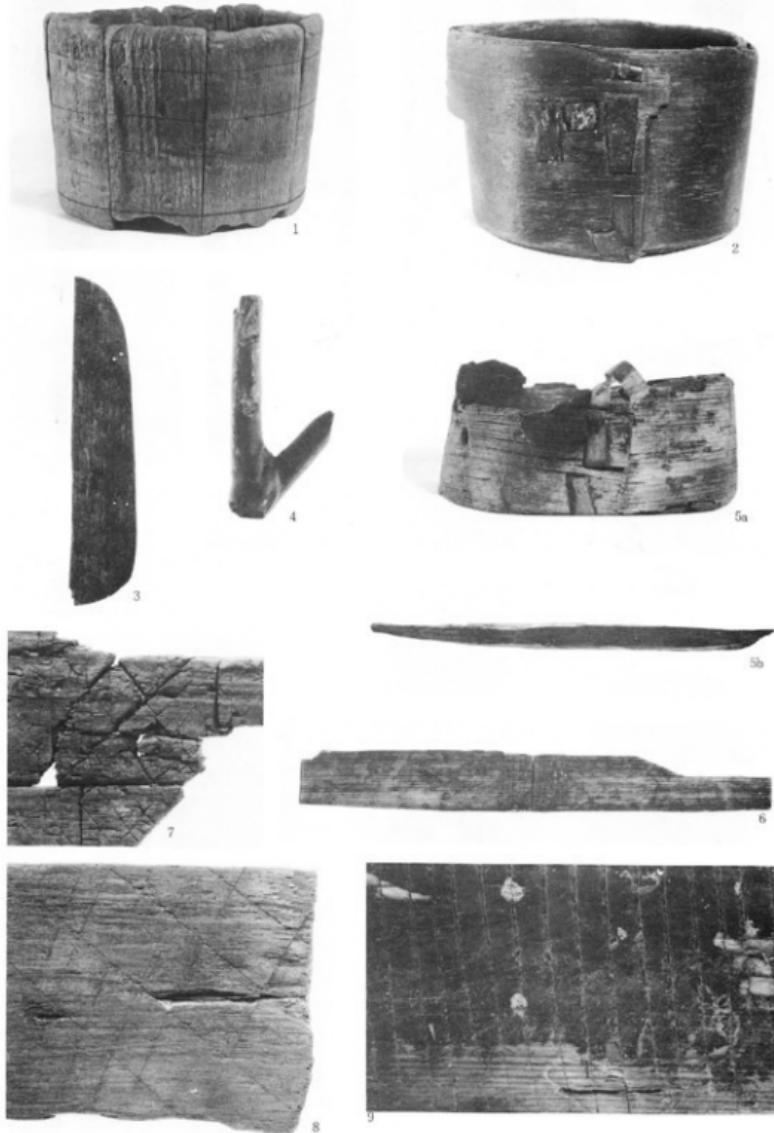
図版23 石製品(3)
礫石器の使用痕(1・2)、砾石の使用・加工(?)痕(3.5 No.4、6 No.1、7 No.25)



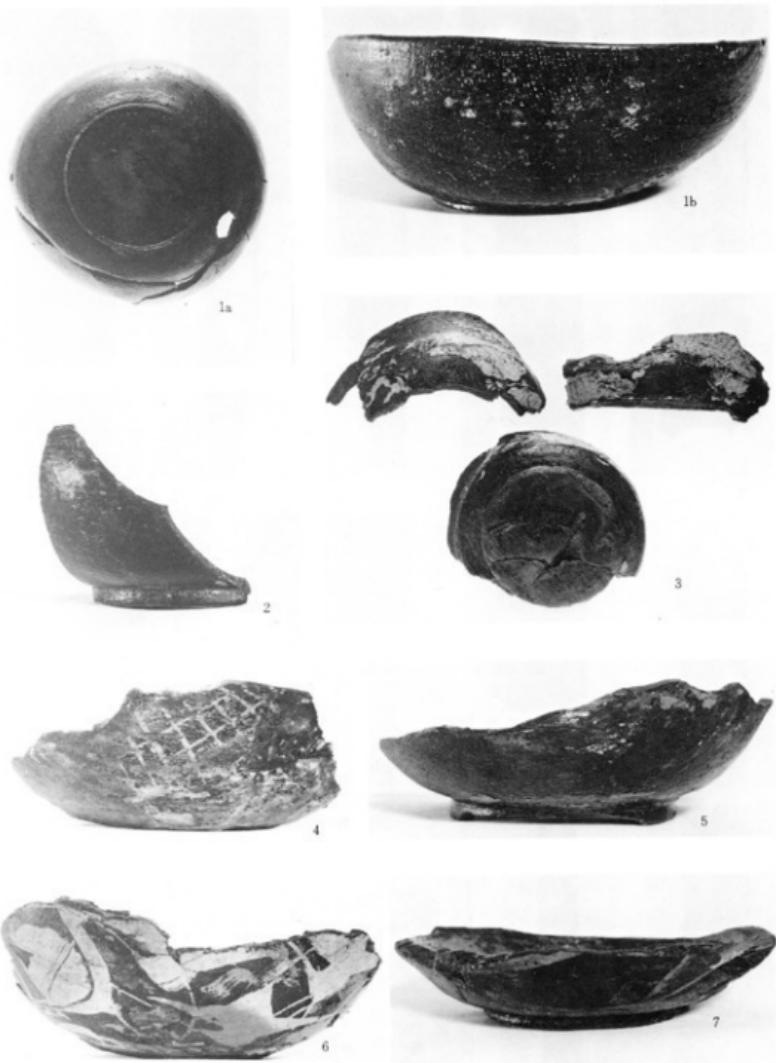
圖版24 石製品(4)
 砺石 I類(1)、II類(4)、III類(2、5~8)、IV類(9~10)、V類(11)、VI類(3~12+13)



図版25 木製品(I)、履物・その他

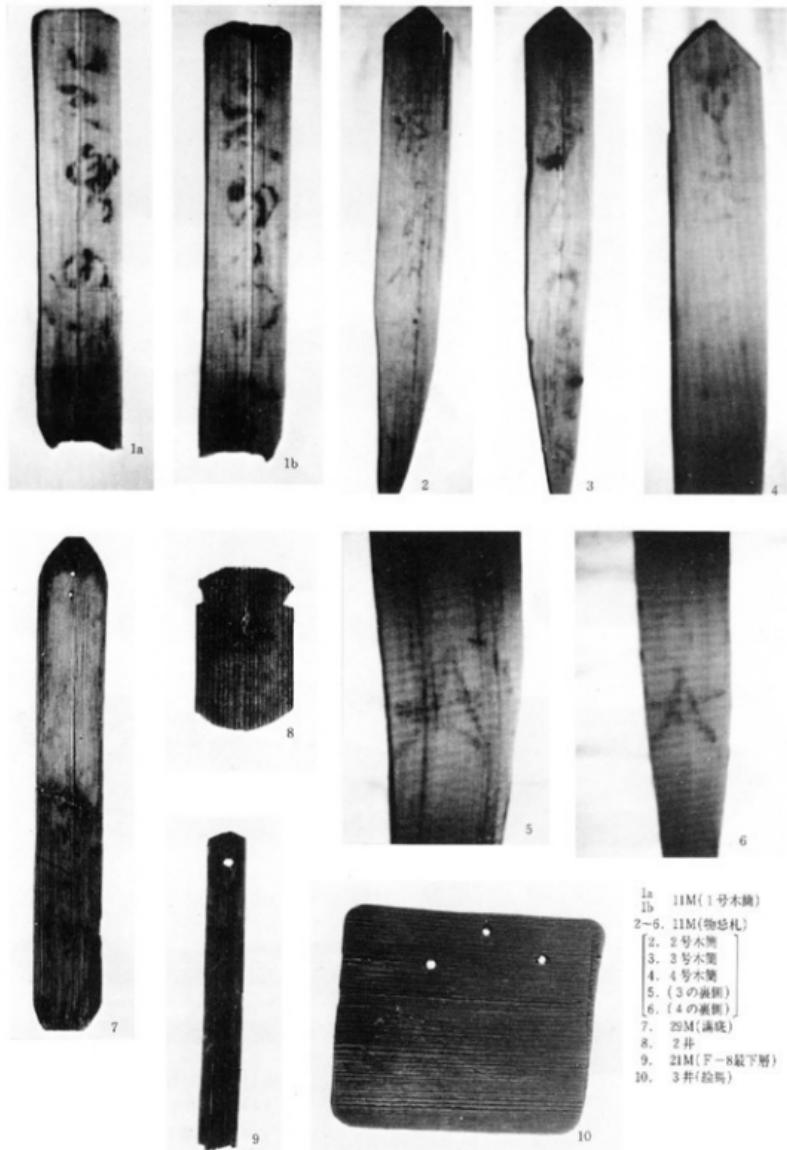


図版26 木製品(2)
1. 19井、2. 16井、3. 23井、4. 2井、5a,b 11M、6. 11M、7. 9井、8. 10井、9. 11M

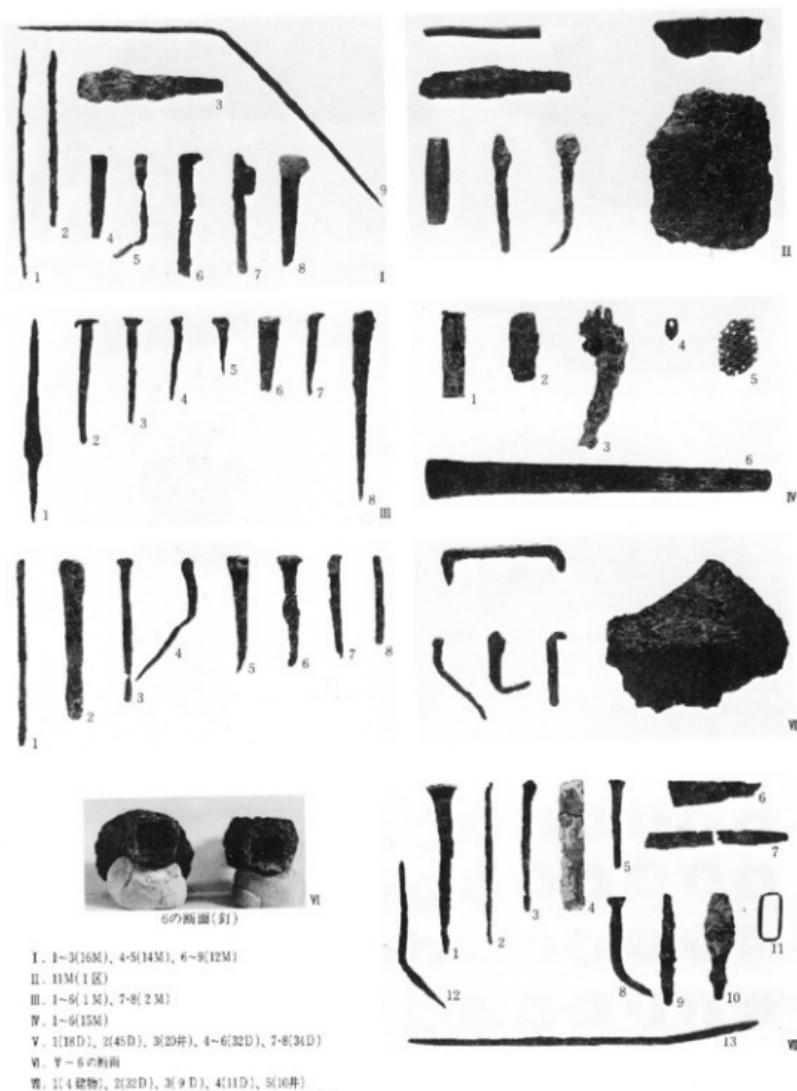


1 a (4井)体部有孔
1 b
2. 21M(F-7)最下層
3~7. 11M

図版27 木製品(3)、漆器



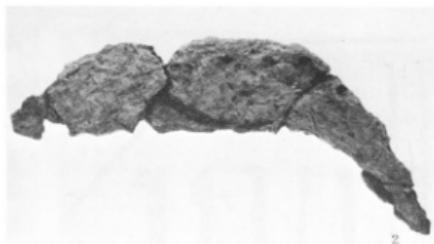
図版28 木製品(4)、木簡・物忌札・その他



図版29 金属製品(I)



1a



2



1b



3



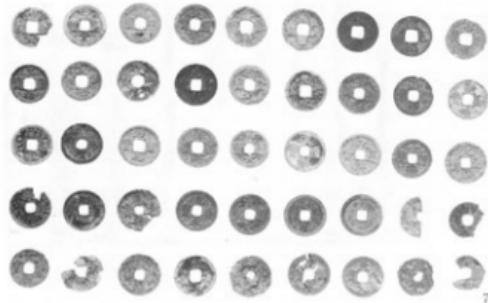
6



4



5



7

1a. 1M(手滿合)

1b. 21M(鍼)

3. 21M(刀)

4. 17升(銅鏡)

5. 31M(刀裝具)

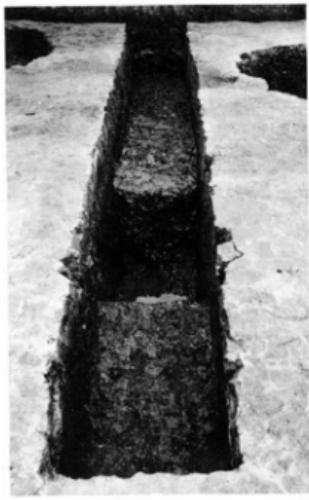
6. 11M(銅鏡)

7. 各遺構出土古錢

圖版30 金屬製品(2)



1



2



3

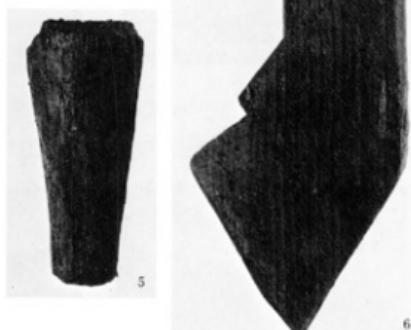
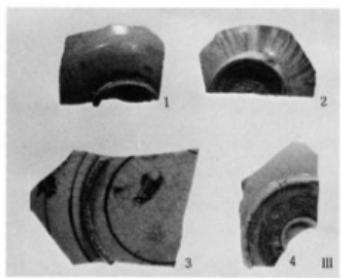
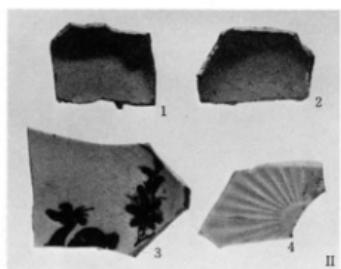
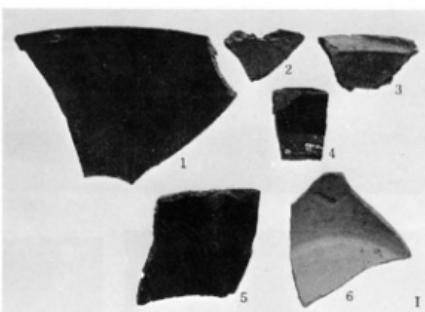
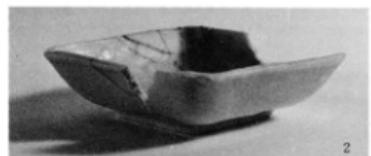
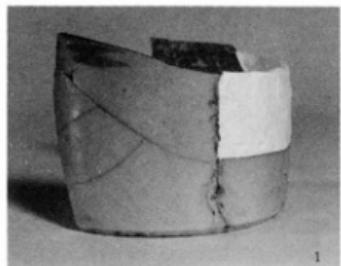


4

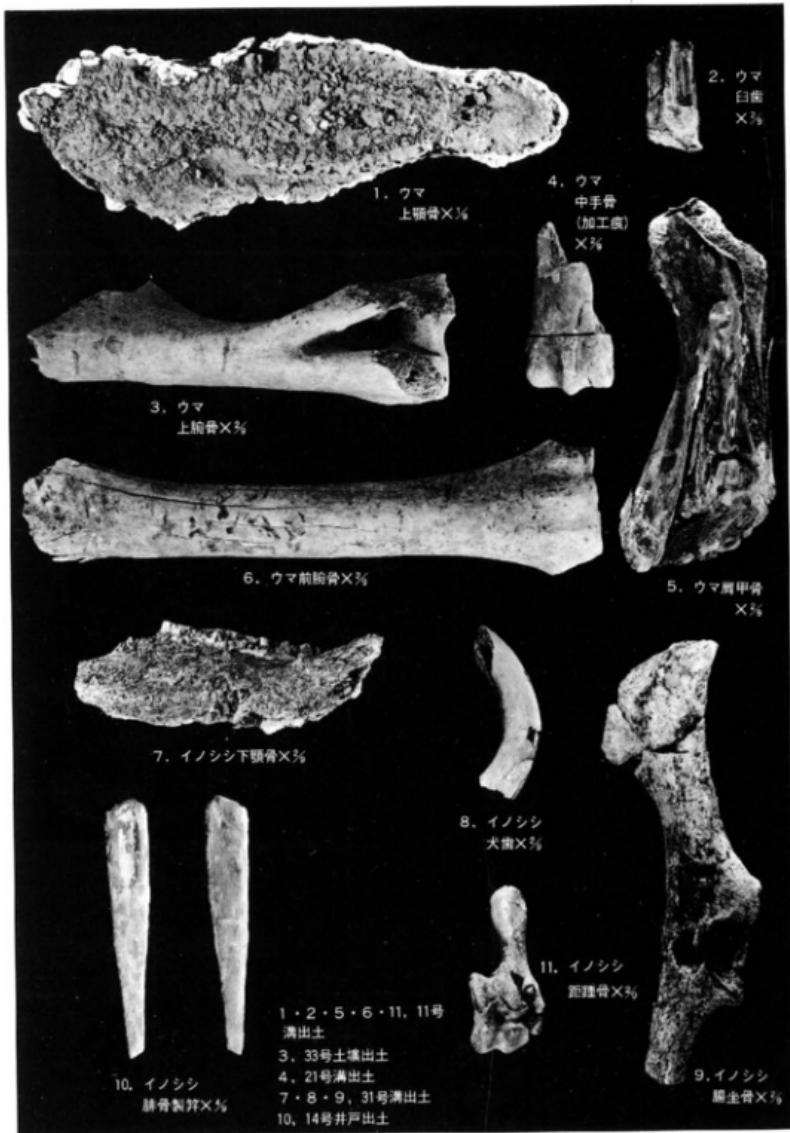
五トレンチ

1. 五トレンチ全貌
2. 中央サブトレンチ全貌（2号・3号溝）
3. 1号井戸跡
4. 5号井戸跡

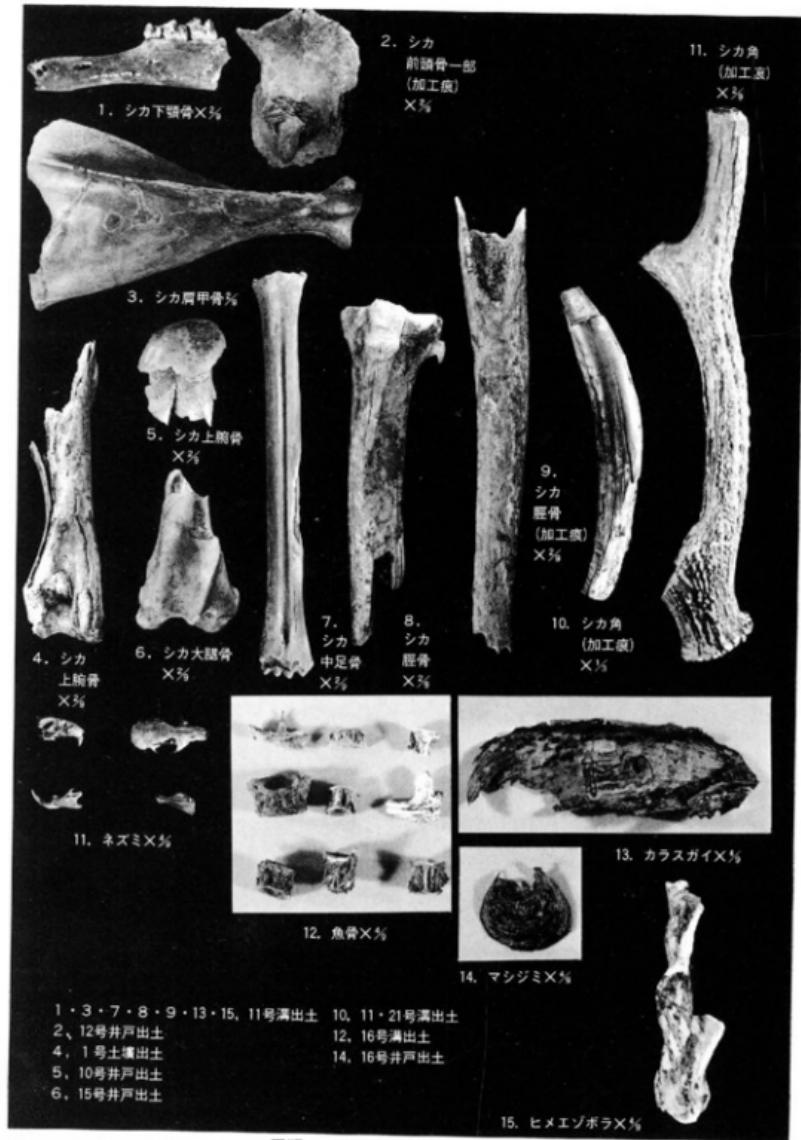
図版31 III区検出遺構



図版32 III区出土遺物
1. 3井(Eトレス) 2. 3井(Eトレス) 3. 9井(Eトレス) 4. 8井(Eトレス) 5. 6井(Eトレス) 6. 6井(Eトレス)
7. 11. 9井(Eトレス) 2. 西割削(Cトレス) 3. 6井(Eトレス) 4. 2井(Eトレス) 5. 西割削(Cトレス) 6. 9井(Eトレス)
II・III. 1. 6井(Eトレス) 2. 6井(Eトレス) 3. 5井(Eトレス) 4. 試座(Eトレス)



図版33 I・II区出土骨角器(1)



図版34 I・II区出土骨角器 (2)

職員録

仙台文化財調査報告書刊行目録

社会教育課

課長 水野昌一
主幹 早坂春一

文化財管理係

係長 大沢隆夫
主任 山口宏
〃 渡辺洋一

文化財調査係

係長(兼) 早坂春一
教諭 佐藤隆
〃 渡辺忠彦

〃 佐藤裕

〃 加藤正範

七事 田中則一
〃 結城慎一

〃 成瀬茂民

教諭 齋治民士
事務官 佐藤みどり

〃 木村浩二

〃 藤原信哉

〃 佐藤彦洋

〃 金森安孝

〃 佐藤甲二

〃 丁番哲司

〃 吉岡恭平

〃 渡部弘明

〃 主兵光湖

〃 広野裕彦

〃 長島栄一

〃 船井裕

派遣職員
嘱託 鈴木実

- 第1集 天然記念物笠置山セコイア化石林調査報告書(昭和39年4月)
 第2集 仙台城(昭和42年3月)
 第3集 仙台市荒浜善光寺横穴古墳群調査報告書(昭和43年3月)
 第4集 史跡陳奥山分寺跡環境整備並びに調査報告書(昭和44年3月)
 第5集 仙台市南小泉法領塚古墳調査報告書(昭和47年8月)
 第6集 仙台市荒巻五本松周辺発掘調査報告書(昭和48年10月)
 第7集 仙台市向山荒石山横穴群発掘調査報告書(昭和49年3月)
 第8集 仙台市根岸町宗宮横穴群発掘調査報告書(昭和49年5月)
 第9集 仙台市根岸町宗宮横穴群発掘調査報告書(昭和51年3月)
 第10集 仙台市中田町佐久東遺跡発掘調査概報(昭和51年3月)
 第11集 史跡遠見塚古墳環境整備予備調査概報(昭和51年3月)
 第12集 史跡遠見塚古墳環境整備第二次予備調査概報(昭和52年3月)
 第13集 南小泉遺跡 観音堂跡調査報告書(昭和53年3月)
 第14集 東遺跡発掘調査報告書(昭和54年3月)
 史跡遠見塚古墳昭和53年度環境整備予備調査概報(昭和54年3月)
 第15集 六反田遺跡発掘調査(第2・3次)のあらまし(昭和54年3月)
 第16集 北里敷道路(昭和54年3月)
 第17集 江川遺跡発掘調査報告書(昭和55年3月)
 第18集 仙台市地下鉄線分布調査報告書(昭和55年3月)
 第19集 史跡遠見塚古墳昭和54年度環境整備予備調査概報(昭和55年3月)
 第20集 仙台市開港場跡調査報告書(昭和55年3月)
 第21集 仙台市開港場跡調査報告書(昭和55年3月)
 第22集 説ヶ峯(昭和55年3月)
 第23集 年報1(昭和55年3月)
 第24集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和55年8月)
 第25集 三神峯跡発掘調査報告書(昭和55年12月)
 第26集 史跡遠見塚古墳昭和55年度環境整備予備調査概報(昭和56年3月)
 第27集 史跡陳奥山分寺跡昭和55年度発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第28集 年報2(昭和56年3月)
 第29集 那山遺跡I・昭和55年度発掘調査概報I(昭和56年3月)
 第30集 山田上ノ古道跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第31集 仙台市闘闘闘跡発掘調査報告書II(昭和56年3月)
 第32集 鴻ノ東遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第33集 山口遺跡発掘調査報告書(昭和56年3月)
 第34集 六反田遺跡発掘調査報告書(昭和56年12月)
 第35集 南小泉遺跡・都市計画街路建設工事関係第1次調査報告(昭和57年3月)
 第36集 北前須路発掘調査報告書(昭和57年3月)
 第37集 仙台平野の虎跡群I・昭和56年度発掘調査報告書I(昭和57年3月)
 第38集 那山遺跡II・昭和56年度発掘調査報告書II(昭和57年3月)
 第39集 高沢遺跡発掘調査報告書(昭和57年3月)
 第40集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告I(昭和57年3月)
 第41集 年報3(昭和57年3月)
 第42集 那山遺跡・宅地造成に伴う緊急発掘調査(昭和57年3月)
 第43集 萩遺跡(昭和57年8月)
 第44集 清ノ里遺跡発掘調査報告書(昭和57年12月)
 第45集 茂庭・茂庭住宅・宅地造成工事地内遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第46集 那山遺跡III・昭和57年度発掘調査報告(昭和58年3月)
 第47集 仙台平野の遺跡群II・昭和57年度発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第48集 史跡遠見塚古墳昭和57年度環境整備予備調査概報(昭和58年3月)
 第49集 仙台市文化財分布調査報告I(昭和58年3月)
 第50集 岩切地区遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第51集 仙台市文化財分布地図(昭和58年3月)
 第52集 南小泉遺跡I・青葉女子学園移転新館・本地内調査報告(昭和58年3月)
 第53集 中田・畠中遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第54集 指明社遺跡発掘調査報告書(昭和58年3月)
 第55集 仙台市高速鉄道関係遺跡調査報告II(昭和58年3月)
 第56集 年報4(昭和58年3月)
 第57集 今泉城跡発掘調査報告書(昭和58年3月)

仙台市文化財調査報告書第58集

昭和57年度

今 泉 城 跡

昭和58年3月

発行 仙台市教育委員会

仙台市国分町3-7-1

仙台市教育委員会社会教育課

印刷 株式会社 東北プリント

仙台市立町24-24 TEL63-1166

